

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#)>はじめに

はじめに ～学習状況調査を生かした授業改善までのプロセス～

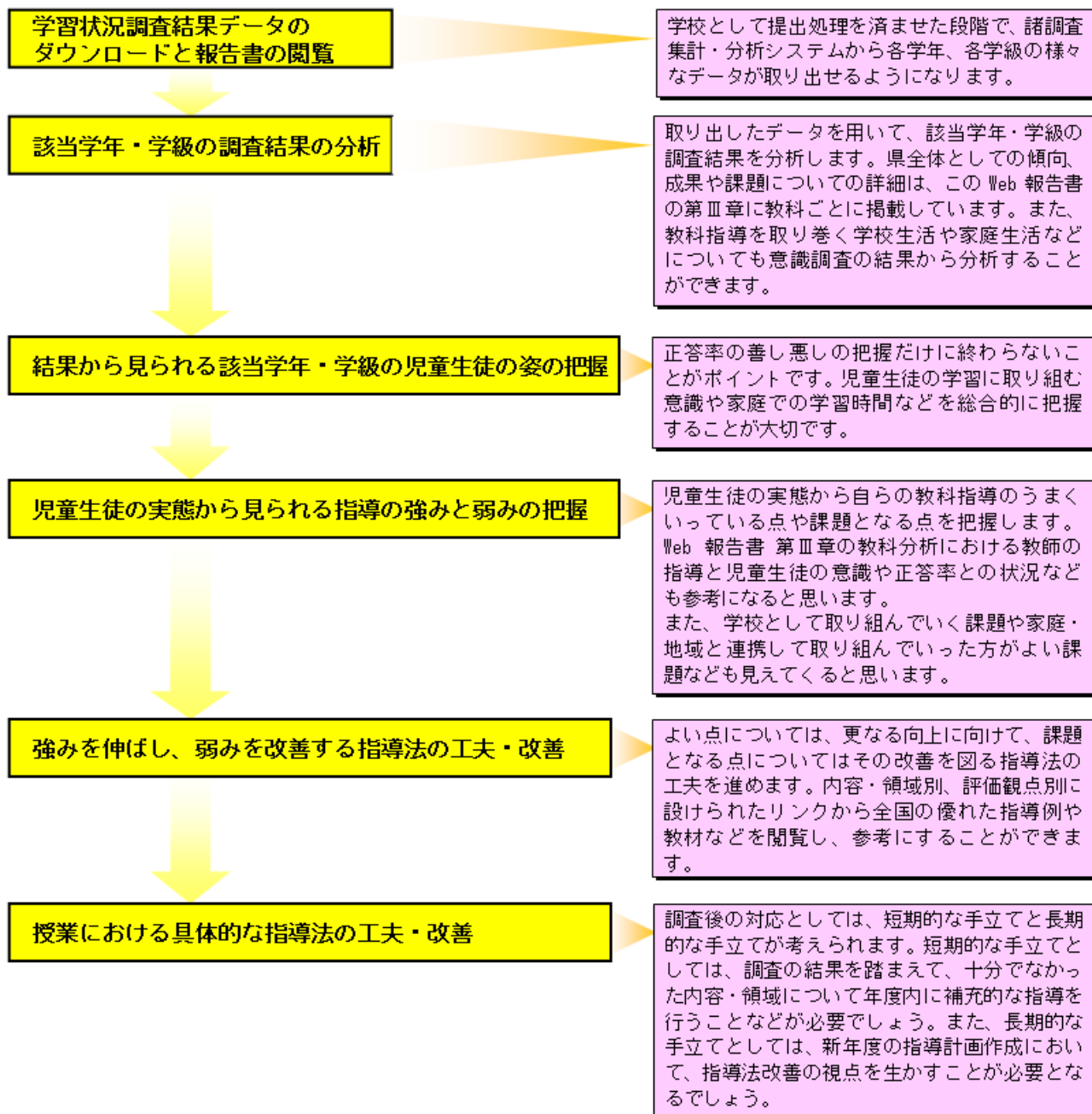
1 学習状況調査Web報告書公開の趣旨

佐賀県では、平成14年度から小・中学校学習状況調査を抽出調査で実施し、佐賀県の学力に関する課題の把握に努めてきた。平成18年度からは県全体の把握に加えて、各学校の教師が児童生徒一人一人の学習状況や学習・生活に対する意識等の実態を具体的に把握し、改善を図ることができるように、全数調査を実施してきた。また、調査結果をできるだけ学校現場の教師が生かしやすいように返却することに努めてきた。平成19年度より調査報告書をWeb発信することにより、より多くの教師が必要に応じて、必要な部分を活用できるようにした。また、平成21年度より調査時期を4月に変更することにより、年度中の早い時期に調査結果を各学校に返却できるようにした。平成23年度は、4月18日・19日に調査を実施した。6月14日には県正答率を公表し、個票をダウンロードできるようにした。各学校の調査結果を自動的にグラフ化する分析ツールについては、6月20日に公開した。

Web報告書では、佐賀県における今回の調査の結果概要や小学校・中学校の各教科における学習状況について詳細に分析し、学習指導及び児童生徒の学校生活・家庭生活の見直しに向けての示唆となるように努めた。各学校における児童生徒の学習状況や生活状況を把握し、よさや課題を見付け出してほしい。更に、解決の一つのアイデアとして、Web報告書の関係ページを学校全体で活用していただくことを期待する。よさや課題はそれぞれの地域や学校によって異なる。また、学校においても学年・学級、更には児童生徒の一人一人によさもあれば、課題を抱えている場合もあるであろう。教師がよさや課題に目を向けて指導を行っていくためにも、このWeb報告書を積極的に活用していただきたい。

2 学習状況調査を生かした授業改善までのプロセス

学習状況調査結果の公表から授業改善までのプロセス PDCA サイクルの Check Action から新たな Plan へ



上の図は「学習状況調査結果の公表から授業改善までのプロセス」を図式化したものである。多くの学校において、すでに調査結果の分析が進んでいるものと推察される。分析を進めていく中で、今年度中に早急に手立てを取ることが必要な短期的課題や、次年度の教育課程編成や年間の指導計画作成に当たって考慮すべき長期的課題などが見付かるであろう。今年度内に見極めと具体的なアクションを起こしていただきたい。

また、小学校であれば、調査対象である第5・6学年だけのこととして捉えるのではなくて、中学年、低学年での指導はどうであったかというような視点をもって取り組むことが大切である。中学校であれば、第2学年での結果が最終学年である3年生でどのようになっているのかという視点をもって、義務教育修了までの指導の在り方について考えることも必要であろう。更には、小学校第6学年から中学校第1学年というつながりの部分についても、校区内での連携を図ることを期待する。大切なことは、教師一人一人の取り組みとともに、学校や地域が組織的、継続的に取り組みを進めることにあるのではないだろうか。

3 報告書の概要と活用に向けて

第Ⅰ章は「調査の概要」についてまとめている。児童生徒意識調査と教師意識調査における設問の意図やカテゴリについても説明をしているので、各学校での分析の参考にしていきたい。また、平成19年度から導入した到達基準の設定と到達基準との比較による調査結果の分析方法についてもまとめている。各学校における目標設定の参考にしていきたい。

第Ⅱ章は、「調査結果の概要」についてまとめている。各教科の県正答率、評価の観点別正答率など県全体の傾向を把握することができるようになっている。各学校の調査結果を重ねてみることで、各学校のよさや課題が見えてくるであろう。また、児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(主に子どもの学校生活・家庭生活の様子が概観できる)、佐賀県の学習者像(学習に対する意識や取り組む態度などが概観できる)、教師意識調査から見た佐賀県の教師像(教師の指導の様子や指導に対する意識などが概観できる)をまとめている。

第Ⅲ章は、「各教科の調査結果の分析」についてまとめている。各教科における学習と指導の状況や成果と課題、更には、具体的な設問を取り上げての指導法改善の視点などをまとめているので、参考になる点については、指導に生かしていきたい。

第Ⅳ章は、「意識調査の結果の分析」についてまとめている。「児童生徒意識調査」については、児童生徒の学校生活・家庭生活など学習を取り巻く生活の状況について分析している。正答率等との関連が見られる部分については、その結果を記載している。学校生活におけるよさや課題の把握を進める上での参考になるであろう。また、家庭への協力を依頼する場合においても参考となるデータが得られるであろう。「教師意識調査」については、教師の意識と正答率等との関連について記載している。複数の教科に関係する内容や総合的な学習の時間の取り組み、学校組織マネジメントに関わることなどについてまとめている。グラフなども示しているので、各学校の状況と照らし合わせながら、読んでいただき、参考になる点については指導に生かしていきたい。

第Ⅴ章は、「自校データの分析と活用」についてまとめている。根拠に基づく学校改善に関わって、自校の調査結果を活用する視点について述べている。

4 授業改善のヒント

まずは、一人一人の教師が、自分の目の前にいる児童生徒の様子を思い浮かべながら、報告書を読んでいただきたい。「自分の学校の子どもはどうか?」とか「自分が指導している子どもたちはちゃんとできているのか?」など思ったことについて、諸調査集計・分析システムからデータをダウンロードして、調べてみてはどうだろうか。そこで見付かったよさや課題について、「もっと伸ばしてあげたい」「何とか改善を図りたい」ことについて、報告書の中の提言などをヒントにしながら、よりよい指導方法を自校の学習環境や自分の授業に取り入れることが授業改善の第一歩であろう。

しかしながら、個々の教師の取り組みだけでは、学校全体としての改善には至らないことが多い。一人の教師が6年間(中学校では3年間)を通して指導するというはまれであるし、中規模以上の学校では、学級集団も毎年変わるのが一般的である。系統的、継続的な指導を進めていくためには、どうしても学校としての共通理解・共通実践が必要であろう。また、様々な取り組みが行われてはいても、取り組みの教育的な意義や取り組む際の留意点などを指導する側の全ての教師が認識していなければ、数年で形骸化してしまうこともある。

問題を解決するためには、調査の結果や、日々の指導から得た経験知の中から、自校の課題となることを、全ての教師が共通に認識することが第一歩であろう。学校内での校内研修や教科部会において、システムから得たデータや報告書における提言などを参考に、自校の児童生徒について考えてみるのが大切であろう。

よさについては、自校の成果として保護者や地域に対してもアピールすることができるし、更に伸ばすための手立てを考えていけば、ますますよい結果をもたらすであろう。課題については、改善に向けて、何らかの共通実践が必要であろう。どのような実践が望ましいかということについては、報告書の中でも多岐にわたって、提言をしている。これらを参考にしつつ、目の前の児童生徒のことをしっかりとイメージして、必要な実践内容を導き出していただきたい。その際、関係する全ての教師が、継続的に共通実践できる内容であることをしっかりと確認することが大切であろう。

課題となることは、国語、算数(数学)、理科、社会、英語の教科だけに関わることではない場合もあろう。調査の対象とはなっていない教科においても、授業の進め方や宿題の出し方、学習形態の工夫など共通に取り組むべきことが多くある。関係教科だけの課題とせずに、学校全体として取り組むことが大切であろう。

教科指導における課題だけでなく、学校生活に関わることや家庭生活に関わることについても課題は見付かるであろう。課題の解決に向けては、生徒会(児童会)担当や養護教諭などが中心となって、手立てを考えていくことや、保護者会などを通して保護者に協力を求めていくことなども考えられる。この際もシステムから得たデータや報告書の資料などが有効に活用できるであろう。

採点・入力と多くの教師の尽力によって実施された学習状況調査だが、得たデータには無限の可能性がある。教師一人一人のアイデアや学校の創意工夫によって、授業改善・学校改善が実現し、佐賀県の児童生徒によりよい指導がなされることを望みたい。

最終更新日: 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > I 調査の概要

I 調査の概要

1 調査の趣旨

- ① 小学校及び中学校学習指導要領に示されている目標や内容の実現状況を把握する。
 - ② 各市町教育委員会や指導を担当する教師が、児童生徒一人一人の学習状況について実態を把握する。
 - ③ 児童生徒の学習に対する意識や態度及び生活習慣、教師の指導方法などについて実態を把握する。
 - ④ これらの調査結果を活用することにより、各学校が、授業における指導方法や学校、家庭、地域における学習環境の改善に役立てる。
- 以上のことを目的として、県全体での児童生徒への全数調査により、教科に関する調査と質問紙による意識調査を実施する。併せて、対象学年・対象教科を指導する教職員へのWeb上での意識調査を実施する。

2 調査の対象

(1) 調査対象

[児童生徒]

県内の公立小学校第5・6学年の児童全員、公立中学校第1・2・3学年の生徒全員を対象とする。県立中学校及び特別支援学校の小学部・中学部に在籍する児童生徒も対象とする。ただし、特別支援学校及び小・中学校の特別支援学級に在籍している児童生徒の中で、対象教科に係る当該学年の学習指導要領に基づく目標・内容等の指導を受けていない児童生徒については対象としない。

[教職員]

上記の調査対象児童生徒のうち、平成22年度に小学校第4・5・6学年、中学校第1・2学年を担当した教職員。ただし、平成22年5月以降に採用された講師については対象としない。

(2) 調査対象学校数及び調査対象人数

[児童生徒]

小学校	167校	第5学年	8,410人
		第6学年	8,506人
中学校	95校	第1学年(県立学校を含む)	8,197人
		第2学年(県立学校を含む)	8,213人
		第3学年(県立学校を含む)	8,144人
特別支援学校	6校	小学部第5学年	4人
		小学部第6学年	4人
		中学部第1学年	5人
		中学部第2学年	10人
		中学部第3学年	9人
		計	41,502人

[教職員]

小学校	第5学年(平成22年度 小学校第4学年担当)	457人
	第6学年(平成22年度 小学校第5学年担当)	515人
中学校	第1学年(平成22年度 小学校第6学年担当)	511人
	第2学年(平成22年度 中学校第1学年担当)	677人
	第3学年(平成22年度 中学校第2学年担当)	659人

3 調査の実施方法

(1) 調査実施日及び実施教科

	平成23年4月18日(月)	平成23年4月19日(火)
小学校第5学年	社会・理科	国語・算数
小学校第6学年	社会・理科	国語・算数
中学校第1学年	社会・理科	国語・数学(算数)
中学校第2学年	社会・理科・英語	国語・数学
中学校第3学年	社会・理科・英語	国語・数学

※ 児童生徒意識調査については別途時間を設けて実施

※ 教師意識調査については平成22年度末に別途時間を設けて実施

※ 中学校第1学年数学の調査問題については、小学校第6学年の学習範囲を中心に出题しているため、内容は算数となる。

(2) 調査時間

ア 教科ペーパーテスト

小学校 各教科とも45分 各学校で時間を設定して実施

中学校 各教科とも50分 各学校で時間を設定して実施

イ 児童生徒共通意識調査

小学校・中学校とも20～30分程度、各学校で時間を設定して実施

ウ 教師意識調査

10～20分程度、各学校で随時実施

4 調査結果の処理

(1) 採点・入力

学習状況調査(ペーパーテスト)については、各学校において採点を行い、教育センター諸調査集計・分析システムを利用して、Web上から採点結果を入力する。教師意識調査・児童生徒に対する意識調査についても、同様にその回答状況をWeb上から入力する。

(2) 集計・分析

集計作業により教科ごとの設問別正答率、内容・領域別正答率、評価の観点別正答率を求め、本県において設定した到達基準(第7節を参照)との比較により、その実現状況を測る。また、意識調査の回答状況と正答率の相関に着目した分析を行う。その際、各学校における指導の状況を数値化するために学校スコア(※3参照)を算出して分析に用いる。

これらの集計結果を基に、各教科における傾向及び成果と課題を明らかにし、今後の指導に向けての提言を行う。なお、分析については、教育センターにおいて行う。

5 調査結果の返却方法

(1) 集計・分析システムによる返却

調査対象となった各学校に対しては、諸調査集計分析システムを介して、当該校の調査結果を返却するとともに、今後の指導法改善に生かすことができる情報を提供する。調査結果個票は、各学校を通して、児童生徒に返却する。

(2) 調査報告書による返却

調査結果から見られる県全体の傾向、各教科における成果と課題、これからの指導に向けての提言などをまとめた調査報告書を、諸調査集計分析システム等を介して、県内の各学校及び関係機関に配信する。

(1) 教科ペーパー
テスト

ア 実施教科

小学校第5・6学年は国語、社会、算数、理科の4教科

中学校第1学年は国語、社会、数学(算数)、理科の4教科

中学校第2・3学年は国語、社会、数学、理科、英語の5教科

※ 中学校第1学年数学の調査問題については、小学校第6学年の学習範囲を中心に出题しているため、内容は算数となる。

イ 調査問題

県が独自に作成した問題によって構成する。

※ 小学6年と中学3年の国語、算数・数学については、東日本大震災の影響等を考慮し、全国学力・学習状況調査の実施が見送られたことから、平成19年度から平成22年度の全国調査問題を再編して県独自の調査問題を作成し、佐賀県の調査として実施した。

「活用」に関する問題について

本県学習状況調査においては、全国学力・学習状況調査解説資料において示されている次の2つの出題範囲・内容のうち、〔主として「活用」〕に関わる問題作成の枠組みを基にして、各教科の「活用」に関する問題を作成している。

・〔主として「知識」〕…国語A、算数・数学A

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能など

・〔主として「活用」〕…国語B、算数・数学B

知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容など

ウ 出題範囲

前学年で学習した内容を中心に出题する。

(2) 児童生徒意識
調査

ア 意識調査の目的

本県児童生徒の学校生活・学習動機・学習活動やそれを取り巻く生活習慣・家族関係・地域における生活などについて広く調査し、その実態を把握する。学習に関わっては、更に詳細に各教科の学習に対する意識や学習に臨む態度の実態を把握する。また、それらが児童生徒の正答率(※1参照)とどのように関わっているのかということ、及び教師の指導理念や指導法についての意識が児童生徒の学習に対する意識や態度にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。

イ 調査方法

児童生徒を対象とした質問紙法による調査を行う。

ウ 質問項目の構成

(ア) 学校生活

(イ) 学習動機

(ウ) 学習活動(教科全般)

(エ) 学習活動(各教科)

(オ) 家庭学習

(カ) 生活習慣等

質問項目とそれぞれの設問との関係は以下の表のとおりである。

質問項目		小学校 [全45問]	中学校 [全48問]
(7) 学校生活		1・2・3・4	1・2・3・4
(イ) 学習動機		5・18(ア・イ・ウ・エ)・20 (ア・イ・ウ・エ)・35・36	5・18(ア・イ・ウ・エ・オ)・20(ア・イ・ウ・エ・オ)・38・39 ※18(オ)・20(オ)は中2・3のみ
(ウ) 学習活動 (教科全般)		15・16・17	15・16・17
(エ) 学習活動 (各教科)	国語	19ア・22・23・24・25	19ア・22・23・24・25
	社会	19イ・26・27・28	19イ・26・27・28
	算数 数学	19ウ・29・30・31	19ウ・29・30・31
	理科	19エ・32・33・34	19エ・32・33・34
	英語		19オ・35・36・37 ※中2・3のみ
(オ) 家庭学習		6・7・8・9・10・11・ 12・13・14	6・7・8・9・10・11・ 12・13・14
(カ) 生活習慣等		21・37・38・39・40・41・ 42・43・44・45	21・40・41・42・43・44・ 45・46・47・48

エ 質問の意図

(7) 学校生活

学校生活の楽しさ、好きな授業の有無などについて問うことにより、児童生徒の学校生活の実態を把握する。

(イ) 学習動機

勉強に対する興味や有用性、将来の夢や目標の有無について問うことにより、学習動機の高さについての実態を把握する。

(ウ) 学習活動(教科全般)

自分の考えを発表する機会や児童生徒の間で話し合う活動の頻度、自分の考えの表現に対する抵抗感について問うことにより、児童生徒の学習活動全般の実態について把握する。

(エ) 学習活動(各教科)

各教科の内容の理解度についての自己評価、各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての児童生徒の興味・関心・意欲・態度について問うことにより、それぞれの教科についての学習活動の実態について把握する。

(オ) 家庭学習

授業以外の勉強時間や勉強の内容、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学習方法全般について問うことにより、児童生徒の家庭学習の実態について把握する。

(カ) 生活習慣等

読書時間、テレビやゲームなどの時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、地域における行事などへの参加の頻度などについて問うことにより、児童生徒の家庭における生活習慣の実態について把握する。

(3) 教師意識調査

ア 教師意識調査の目的

本県教師の指導理念や指導法についての意識、日々の授業における指導の実際を把握することを目的とする。また、それらが児童生徒の正答率とどのように関わっているのかを明らかにすることを目的とする。

イ 調査方法

調査対象学年を指導している教職員を対象とした質問紙法(教職員ポータルを介してWeb上から該当者が直接入力する方法)による調査を行う。

ウ 質問項目の構成

カテゴリ	小学校	中学校
(ア) 家庭学習への関与状況	設問2～6	設問2～6
(イ) 学習環境の活用	設問7～10	設問7～10
(ウ) 教科等全般における指導法の工夫	設問11～19	設問11～19
(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫	設問20～29	設問20～31
(オ) 教師の指導観	設問30～33	設問32～35
(カ) 学校組織マネジメントに対する意識	設問34～36	設問36～38

エ 質問の意図

(ア) 家庭学習への関与状況

宿題を出している頻度ならびに出している宿題の質(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を把握する。

(イ) 学習環境の活用

授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度とその活用内容を把握する。

(ウ) 教科等全般における指導法の工夫

発展的な課題を取り入れた授業の実施状況、理解が十分でない児童生徒に対する授業外での対応状況、書いて表現する活動や話し合い活動を取り入れた授業の実施(教科の授業・総合的な学習の時間)、身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導、学習方法についての指導状況、学習形態の工夫、目標や評価規準を明確にした授業の実施について問うことにより、発展的学習・補足的指導・表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習方法の指導、学習形態の工夫、目標を明確にした指導などの状況を把握する。

(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫

国語における言語活動、読書指導、社会における調査学習を生かした発表・討論、算数・数学における算数(数学)的活動、問題解決的な学習、理科における見通しをもった観察や実験とそのまとめ、英語におけるコミュニケーション能力を高める指導や書く活動などについて問うことにより、各教科の特性に応じた指導法の工夫の状況を把握する。

(オ) 教師の指導観

教師の指導行動を主に、課題達成の意識、集団維持の意識の2点から問うことにより、教師の指導観と正答率に及ぼす影響を分析する。

(カ) 学校組織マネジメントに対する意識

教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気について問うことにより、学校組織マネジメントが児童生徒の正答率や児童生徒の学習に対する意識に及ぼす影響を把握する。

(1) 調査結果の解釈に当たって

調査問題の作成に当たり、事前に設定した設問ごとの難易度に適合したものとなるよう、複数の委員が本県の児童生徒の実態を踏まえながら、指導に当たってきた経験に基づいて、問題内容を協議し、検討を重ねている。

問題の難易度は、調査した児童生徒のうち正答することが期待される者の人数の割合で示し、これを「期待正答率」と呼ぶ。本調査では、「期待正答率」として、各設問に「十分達成」「おおむね達成」という2つの基準値を設定している。

「おおむね達成」は、最低限これを上回る児童生徒が正答することが期待される人数の割合であり、下回っている場合は、学習内容の定着に課題があり、早急に改善の手立てが取られる必要があると考える。また、「十分達成」は、学習内容の定着が十分満足できると判断される基準であり、上回っている場合は、各地域・学校における取り組みの成果として評価できるものとする。

「期待正答率」を基にして算出した「到達基準」と調査結果の「正答率」を比較することにより、到達度を測ることができる。また、経年的な調査結果の比較により、定着に係る動向を知ることができる。各学校においては、調査結果に基づいて自校の取り組みを検証し、課題に応じた重点目標を設定し、解決に向けた指導の工夫・改善を図っていくことが期待される。

(2) 基準設定方法の選択

到達基準の設定に当たっては、1972年にエーベルが提唱した「エーベル法」に橋本重治が修正を加えて考案した「修正エーベル法(橋本エーベル法)」(※2参照)を基本的な考え方として採用する。採用の理由として、個々の小問の判断に基づく設定方法として理論的に優れている「エーベル法」をより簡略化して利用できるようにしたものであること、この方法は実際に「教研式標準学力検査CRT」などにも採用されていることなどが挙げられる。

(3) 設定方法の概要

各小問(著書の中では「アイテム」と表現)を、関連性と困難度のマトリックスにおいて分類する。関連性は、「基礎的・基本的」(後への関連性が高い目標を測る問題)と「発展的・応用的」(比較的高度で、後の学習への関連性がそれほど高くない目標を測る問題)の2区分とし、困難度は「平易」「普通」「困難」の3区分とする。(表1のとおり)ただし、基礎・基本に分類される困難な目標は現実的ではないので、除外する。全ての小問は、表1中の(A)(B)(C)(D)(E)のいずれかに割り振られる。

表1 修正エーベル法におけるアイテム分類表

	平易	普通	困難
基礎的・基本的	(A)	(B)	—
発展的・応用的	(C)	(D)	(E)

また、それぞれの分類欄ごとの期待正答率は表2のように定められている。

表2 修正エーベル法における五つの分類ごとの期待正答率表

	平易	普通	困難
基礎的・基本的	0. 85(85%) (A)	0. 80(80%) (B)	—
	0. 65(65%)	0. 60(60%)	
発展的・応用的	0. 75(75%) (C)	0. 70(70%) (D)	0. 65(65%) (E)
	0. 55(55%)	0. 50(50%)	0. 45(45%)

(注) 上の数字は「十分達成」、下の数字は「おおむね達成」の場合を示している。

この表に基づいて、到達基準が算出される。

(4) 設定に当たっての具体的な手続き

- ① 調査問題を小問単位で、評価観点別及び内容・領域別に分類する。
- ② 評価観点別(もしくは内容・領域別)に分類された小問を表1に沿って、(A)～(E)に振り分ける。「知識・理解」「技能」「言語事項」などの観点についての小問の多くは「基礎的・基本的」に属するが、一部に「発展的・応用的」に属するものもあると考えられる。また、「思考」「資料の解釈・利用能力」「観察・実験の能力」「読解力」などの観点については、「発展的・応用的」に属する小問が多いと考えられるが、一部「基礎的・基本的」に属するものも含まれることが考えられる。
- ③ 分類が終わったら、評価観点(もしくは内容・領域)ごとに分類表の各欄の小問数を確認する。
- ④ あらかじめ定められた期待正答率表(表2)の値を基にして、各評価観点(もしくは内容・領域)ごとに「十分達成」「おおむね達成」それぞれの到達基準を算出する。

表3 修正エーベル法による到達度基準の算出例

分類欄	小問数	十分達成		おおむね達成	
		期待正答率	小問数 ×期待正答率	期待正答率	小問数 ×期待正答率
(A)	4	0.85	3.40	0.65	2.60
(B)	3	0.80	2.40	0.60	1.80
(C)	2	0.75	1.50	0.55	1.10
(D)	2	0.70	1.40	0.50	1.00
(E)	1	0.65	0.65	0.45	0.45
合計	12	合計	9.35 (77.9%)	合計	6.95 (57.9%)

表3は、ある観点(もしくは内容・領域)において(A)～(E)に分類される小問がそれぞれ4問・3問・2問・2問・1問であった場合の計算例である。それぞれの期待正答率と小問数の積の合計から導き出した得点を全小問数で割った数値(合計欄の下に示している%)がこの観点(もしくは内容・領域)の到達基準ということになる。

(5) 本調査で設定した期待正答率表

本調査では、前に述べた理論を参考に、小学校と中学校の学習内容の違いなどを考慮して、次の表4と表5のように期待正答率を設定した。

表4 小学校における期待正答率表

	平易	普通	困難
基礎的・基本的	0.85(85%) (A) 0.65(65%)	0.80(80%) (B) 0.60(60%)	—
発展的・応用的	0.75(75%) (C) 0.55(55%)	0.70(70%) (D) 0.50(50%)	0.65(65%) (E) 0.45(45%)

表5 中学校における期待正答率表

	平易	普通	困難
基礎的・基本的	0.75(75%) (A) 0.55(55%)	0.70(70%) (B) 0.50(50%)	—
発展的・応用的	0.65(65%) (C) 0.45(45%)	0.60(60%) (D) 0.40(40%)	0.55(55%) (E) 0.35(35%)

(1) 到達基準を設定することの効用

従前、佐賀県小・中学校学習状況調査においては、国立教育政策研究所が平成15年度までに実施した教育課程実施状況調査の調査問題を使用して、その全国平均正答率を一つの指標として用いてきた。

国が公表した全国平均正答率はあくまでも設問ごとのものであって、評価の観点別、内容・領域別については公表されていなかった。そのため、評価の観点別、内容・領域別については、県が便宜的に、国が公表した設問ごとの全国平均正答率を束ねて算出した。また、平成15年度以前に実施された調査の結果との比較という点において、調査実施年の隔たりは年々大きくなっており、その信頼性や客観性についても課題があった。

平成19年度には調査問題の6～7割を、平成20年度より調査問題の全てを県が独自に作成し、設問ごと、評価の観点別、内容・領域別に到達基準を設定した。

本調査では、県があらかじめ設定した到達基準との比較において、県としての成果と課題を明確にすることができるとともに、各学校においても、到達基準との関係において、自校の学習指導の成果と課題を把握することが可能となっている。

県正答率との比較においては、常に県下の約半数の学校がそれを上回ることはなく、課題意識だけが先行することになるとともに、自校の結果が県正答率に比べよければ、全国の中の県の状態にかかわらず、安心してしまいう可能性もあった。

到達基準を設定することにより、県下の全ての学校が基準に到達できることも現実にも可能となる。また、結果が振わなかった点についても、県正答率をいいわけにすることなく、しっかりと自校の課題として把握できるようになった。

(2) 到達基準の「十分達成」と「おおむね達成」のラインについて

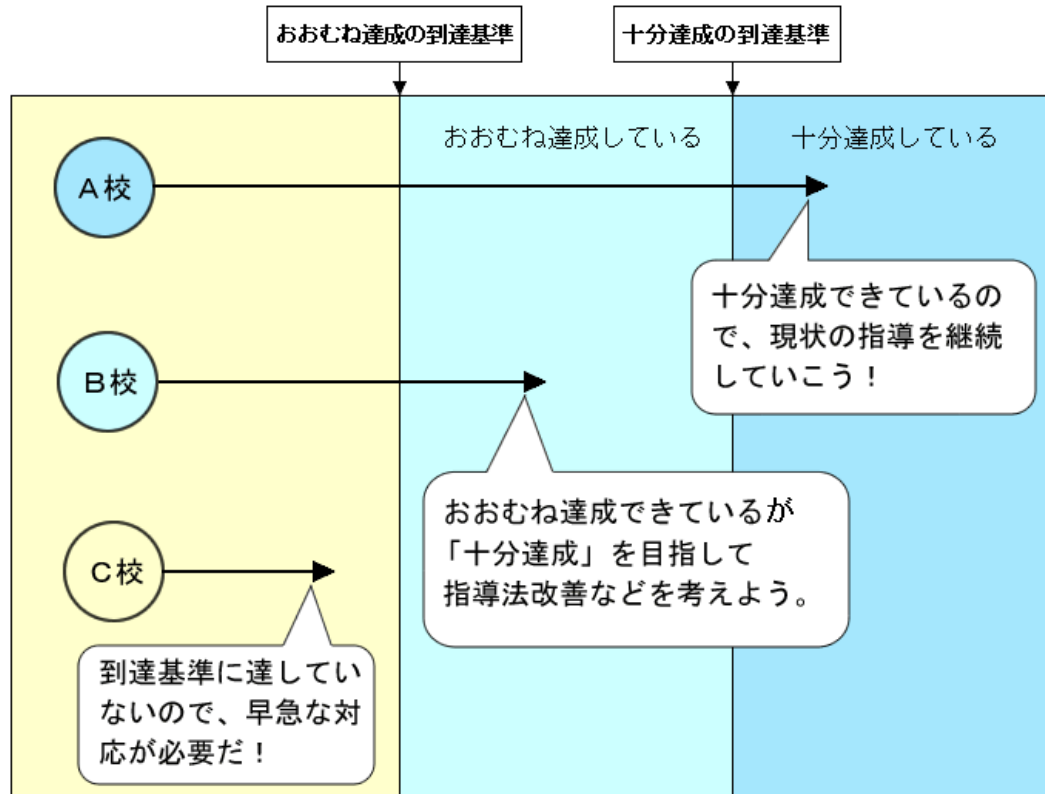
到達基準は、「おおむね達成」と「十分達成」の2つの分割点を設定することにより、各学校における到達の状況が明確となり、目標の設定が容易となった。

「おおむね達成」に到達していない教科や評価観点、内容・領域については、緊急の課題であり、早急の対応が望まれる。必要に応じて年度内の補足的な指導などを施した上で、新年度につなげる必要があるであろう。

「おおむね達成」には到達しているが、「十分達成」には到達していない教科や評価観点、内容・領域については、県が示す最低基準は達成していると考えられるが、更なる向上が望まれる。新年度の教育課程編成に関わって、指導法改善等に取り組むことが望ましい。

「十分達成」に到達している教科や評価観点・内容・領域については、現状の指導が効果的に働いていることの表われであり、十分に成果が見られると考えられる。現状の指導を継続して差し支えないであろう。

到達状況についてイメージ図



図の中では、便宜上、A校、B校、C校としているが、校内においては、A、B、Cを学級や一人一人の児童生徒とイメージして考えていただきたい。また、矢印(→)を教科正答率として捉えるだけでなく、教科内における特定の評価観点や内容・領域の正答率と考えることにより、分析の幅が広がるであろう。

以上のように、各学校、各学年、各教科の到達状況を把握し、今後の短期的、又は長期的なビジョンの中で、児童生徒への対応や教師による指導法改善が図られることを期待したい。

(3) 今後の指導に向けて

到達基準との比較により、各学校において、教科、学年、学級などにおける指導の実現状況を把握することができたら、その強みを更に伸ばし、弱みを克服するために、個々の教師が指導法の改善に取り組むこととなる。

諸調査集計・分析システムから自校及び県全体の結果を集計したデータ及び分析ツールがダウンロードできるようになっている。また、県全体の成果と課題、及びこれからの指導に向けては調査報告書の第三章において教科ごとにまとめている。授業改善に向けての提言については、各学校の現状と照らし合わせながら、参考となる点を活用していただきたい。

註

※1 正答率

正答率とは、学習の定着状況を示すために用いる、各設問における正答者数(準正答者数を含む)の解答者数に対する割合である。本報告書では、下記の方法で設問ごと正答率を算出している。

設問ごと正答率＝正答者数の合計÷(解答者数の合計－その他の数の合計)

県正答率	算出の方法
教科正答率	当該教科全ての設問を対象として、 各設問の正答数の合計÷(各設問の解答数の合計－各設問のその他の数の合計)
内容・領域別正答率	当該内容・領域に関わる設問を対象として、 各設問の正答数の合計÷(各設問の解答数の合計－各設問のその他の数の合計)
評価の観点別正答率	当該評価の観点に関わる設問を対象として、 各設問の正答数の合計÷(各設問の解答数の合計－各設問のその他の数の合計)

[→児童生徒意識調査へもどる](#)

※2 修正エーベル法

修正エーベル法(橋本エーベル法)の詳細については、下記の文献等を参考にいただきたい。

橋本 重治 『到達度評価の研究 その方法と技術』 1981年 図書文化社

橋本 重治 『続・到達度評価の研究 到達基準の設定の方法』 1983年 図書文化社

[→基準設定方法の選択へもどる](#)

※3 学校スコア

学校スコアとは、教師意識調査及び児童生徒意識調査の結果から、各学校における教師の指導や児童生徒の意識等に関する回答状況を数値化することを目的として、質問項目に対する回答選択肢ごとにポイントをつけて重み付けを行うことにより、独自に算出した値である。

(例) 宿題を出していますか。

- | | |
|----------------------|-----------|
| 1 多くの時間を出している | → 100ポイント |
| 2 どちらかといえば出している | → 66ポイント |
| 3 どちらかといえば出していない方が多い | → 33ポイント |
| 4 全く出していない | → 0ポイント |

各学校の教師、又は児童生徒の回答状況を上記のようなポイントに換算して、その学校の平均値を求めたものを学校スコアとして、分析に用いている。

[→集計・分析へもどる](#)

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要 > 全体の概要

II 調査結果の概要

教科ペーパーテスト及び児童生徒意識調査の概要

1 教科ペーパーテスト 全体の概要

- 県で設定した「到達基準」に対して「おおむね達成」の基準を上回ったものは、22教科中20教科であり、本県児童生徒の学習内容の習得状況は概ね良好である。
- このうち、「十分達成」の基準を上回ったものは、中学2年英語と中学3年国語であり、この2教科については、学習内容が十分習得されていた。
- 小学5、6年及び中学1年は、「十分達成」の基準を上回った教科はないが、全教科とも「おおむね達成」の基準を上回っている。
中学2、3年は「十分達成」の基準を上回っている教科がある一方で、特に中学2年では、数学、社会が「おおむね達成」を下回るなど、教科間のばらつきが大きかった。
- 昨年度と比べると、「十分達成」に対する割合が高くなったものは22教科中13教科、逆に、低くなったものは9教科であった。

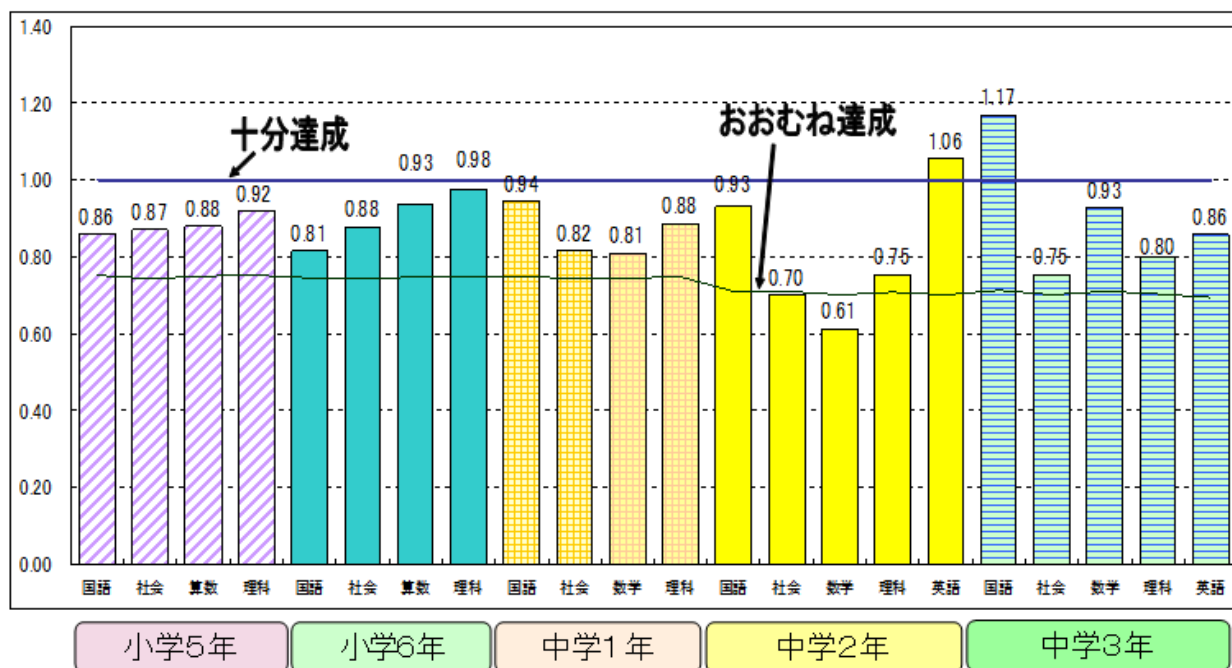
教科	平成22年度の到達状況				平成23年度の到達状況				経年比較
	県正答率(A)	到達基準		「十分達成」に対する割合(A/B)	県正答率(A)	到達基準		「十分達成」に対する割合(A/B)	
		十分達成(B)	おおむね達成			十分達成(B)	おおむね達成		
小5国語	66.0	79.4	59.4	0.83	69.0	80.4	60.4	0.86	↗
小5社会	78.7	78.0	58.0	※4 1.01	67.9	78.0	58.0	0.87	↘
小5算数	62.7	78.1	58.1	0.80	70.2	79.7	59.7	0.88	↗
小5理科	71.8	81.8	61.8	0.88	74.4	80.8	60.8	0.92	↗
小6国語	※1 76.7	※2 78.2	※2 58.2	0.98	64.2	※3 78.8	※3 58.8	0.81	↘
小6社会	67.7	77.6	57.6	0.87	68.2	77.7	57.7	0.88	↗
小6算数	※1 65.2	※2 77.4	※2 57.4	0.84	74.2	※3 79.4	※3 59.4	0.93	↗
小6理科	71.3	79.8	59.8	0.89	77.9	79.7	59.7	0.98	↗
中1国語	75.2	78.5	58.5	0.96	75.7	80.2	60.2	0.94	↘
中1社会	54.7	77.1	57.1	0.71	63.5	77.9	57.9	0.82	↗
中1数学	68.5	78.1	58.1	0.88	63.4	78.3	58.3	0.81	↘
中1理科	74.1	79.3	59.3	0.93	70.1	79.3	59.3	0.88	↘
中2国語	71.0	68.8	48.8	※4 1.03	64.5	69.2	49.2	0.93	↘
中2社会	53.7	67.9	47.9	0.79	48.4	69.0	49.0	0.70	↘
中2数学	48.9	65.2	45.2	0.75	41.0	66.9	46.9	0.61	↘
中2理科	48.8	66.4	46.4	0.73	51.5	68.3	48.3	0.75	↗
中2英語	60.1	67.0	47.0	0.90	70.5	66.7	46.7	※4 1.06	↗
中3国語	※1 70.9	※2 70.0	※2 50.0	※4 1.01	81.3	※3 69.5	※3 49.5	※4 1.17	↗
中3社会	48.0	67.1	47.1	0.72	50.5	67.0	47.0	0.75	↗
中3数学	※1 63.7	※2 70.0	※2 50.0	0.91	64.4	※3 69.3	※3 49.3	0.93	↗
中3理科	57.7	67.1	47.1	0.86	53.8	67.4	47.4	0.80	↘
中3英語	55.2	67.1	47.1	0.82	56.3	65.6	45.6	0.86	↗

- ※1 H22年度全国調査の小6国語・算数、中3国語・数学の県正答率については、県採点分析委員会による独自採点の集計結果である。
- ※2 H22年度全国調査の小6国語・算数、中3国語・数学についても、参考のために、便宜上、到達基準を設定している。
- ※3 H23年度調査の小6国語・算数、中3国語・数学については過去の全国調査問題を利用しているが、参考のために、便宜上、到達基準を設定している。
- ※4 網掛けについては「十分達成」に対する割合が1.0を上回っている教科を示している。

※到達基準は、十分達成/おおむね達成 のラインを示している → [到達基準の設定について](#)

県の各教科正答率の「十分達成」に対する割合をグラフに表すと次のようになる。「十分達成」を1.00としたときの、各教科正答率の比率を示している。「おおむね達成」の基準は各教科で若干異なる。

■各学年・教科正答率の「十分達成」に対する割合



2 教科ペーパーテスト 教科ごとの概要

① 国語

- ・ 小・中学校ともに、目的や意図に応じて相手の意図をつかみながら聞いたり、話の内容を的確に聞き分けたりするなど、話の内容を聞き取る力は身に付いてきている。
- ・ 小・中学校ともに、言語についての知識・理解・技能の定着については、良好な結果である。
- ・ 小・中学校ともに、相手や目的に応じて分かりやすく書くことや、取り上げた事実や事柄、課題についての自分の考えを明確にして書くことについては、課題が見られる。
- ・ 小・中学校ともに、読み取ったことを基に、自分の考えを書いたり、必要な情報を取り出して、それについての自分の意見をまとめたりすることについては、課題が見られる。

《指導改善のポイント》

- 小学校においては、条件に合わせて自分の考えを書いたり、文章や資料から読み取ったことを使って書いたりする学習活動の充実
- 中学校においては、複数の文章を読み比べたり、文章と図表を比べたりして、それに対する自分の考えをもたせ、目的や意図に応じて表現させるような学習活動の充実

② 社会

- ・ 小学校においては、「地域の生産や販売」「住みよいくらし」(5年)など自分たちの生活との結び付きを感じやすい内容については良好な結果であるが、「県の様子」(5年)、「国土の様子」(6年)など地理的な学習内容には課題が見られる。
- ・ 小学校においては、社会的事象や問題に対して、自分なりの考えや解決策を論述する力が身に付いてきている。
- ・ 中学校においては、資料を基に社会的事象の特色や事象間の関連を読み取りまとめる力が身に付いてきている。
- ・ 小・中学校ともに、歴史的分野には課題が見られ、特に明治時代以降の歴史に関する内容の理解が十分に身に付いていない。

《指導改善のポイント》

- 小学校においては、地理的分野における地図帳や地球儀の有効な活用、小・中学校においては、歴史的分野における児童生徒の興味・関心を高めるような資料提示の工夫など、知識・技能の確実な定着を図るための指導法の工夫
- 小・中学校においては、社会的事象や問題について説明・解釈・論述するような言語活動を更に充実させるなど、習得した知識・技能を活用する学習活動の工夫

③ 算数・数学

- ・ 小学校では、四則計算に関わる問題や比のきまりを使って未知数を求める問題など「数と計算」の内容・領域においては良好な結果である。
- ・ 小学校では、数直線や折れ線グラフに表すなど、数量の関係を表したり、調べたりする技能は身に付いてきている。
- ・ 中学校では、「数と式」の内容・領域においては、良好な結果である。
- ・ 中学校では、「資料の活用」など、学習指導要領の移行に伴って新しく学習する内容において課題が見られる。
- ・ 小・中学校ともに、問題解決の方法や考え方などを、ことばや式を使って説明することに課題が見られる。

《指導改善のポイント》

- 小・中学校においては、教材の特性や児童生徒の実態に応じて、知識・技能を身に付けさせることや思考力・判断力・表現力を育成することなど、授業のねらいを明確にした指導の工夫
- 小・中学校においては、課題解決の方法などを説明し伝え合うなど、言語活動に関わる算数的活動や数学的活動を位置付けた指導法の工夫

④ 理科

- ・ 小・中学校ともに、自然事象や観察・実験の操作などについての基礎的・基本的内容の理解は、良好な結果である。
- ・ 小学校では、特に小学5年生において、自然事象や実験方法についての解釈や理由を記述することに課題が見られる。
- ・ 中学校では、授業で学習した内容を発展させたり応用したりする力が十分に身に付いていない。
- ・ 中学校では、特に中学2年生においては、「大地の成り立ちと変化」の学習内容に課題が見られる。

《指導改善のポイント》

- 小学校においては、目的を明らかにした上で観察や実験を行わせ、観察や実験の結果を基に考察する場面で話し合い活動を行わせたり、導き出した自然事象の法則や規則性について、その根拠を説明させたりするなどの学習活動の工夫
- 中学校においては、基礎的・基本的な内容を様々な場面で活用させたり、実験や観察の結果を分析して自分の考えを表現させたりするなどの学習活動の工夫

⑤ 英語

- ・ 中学2年では、英語で話された内容から時間、場所、要件などの具体的な情報を正確に聞き取る力が身に付いてきている。
- ・ 中学3年では、語順や主語と動詞の関係などの文法事項が身に付いてきている。
- ・ 中学2年・3年ともに、「書くこと」の領域において、与えられたテーマについて3～4文程度のまとまった英文を書く力は身に付いてきている。しかしながら、無解答率が高いなどの課題もある。「書くこと」の力が身に付いている生徒とそうでない生徒に二極化する傾向が改善されてきている。

《指導改善のポイント》

- 自分の考えや気持ちを1～2文程度の英語で書くなど、日常的に書く活動を取り入れた指導法の工夫
- 教師と生徒、生徒同士のコミュニケーション活動やスピーチなどの自己表現活動の充実と、スピーチの後に質問したり、感想を述べたりするなどの4技能を関連付けた指導法の工夫

3 児童生徒意識調査の経年比較及び学年間比較

(経年比較は、小学6年と中学3年において、平成22年度全国学力・学習調査の児童生徒質問紙調査と平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査の児童生徒意識調査の同一設問で行った。)

- ・ 小・中学校ともに、「学校の授業の復習をしている」「苦手な教科の勉強をしている」児童生徒の割合が増えるなど、家庭学習に対する意欲が向上している。
- ・ 小・中学校ともに、「授業の内容はよく分かる」「算数(数学)の授業の内容はよく分かる」児童生徒が増えるなど、国語、算数・数学の授業の理解度は高まっており、学習内容に対する有用性を感じている児童生徒も増えている。
- ・ 読書が好きな児童生徒が増えており、1日あたりの読書時間や学校図書館・学校図書室や地域の図書館に行く頻度も増えている。
- ・ 小学校では、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりする時間は減っているが、中学校では、テレビゲーム(コンピュータゲーム、携帯式のゲームを含む)をする時間が増えている。

4 教科ペーパーテストと児童生徒意識調査の関連

教科ペーパーテストと児童生徒意識調査の関連分析

(ここでいう正答率は、各学年の全教科平均正答率を示す。)

- ・ 「学校での生活は楽しい」「学校では落ち着いて勉強できている」「好きな授業がある」と回答している児童生徒ほど、正答率が高い。
- ・ 「国語の授業で自分の考えを書くと、考えの理由が分かるように気を付けて書いている」「算数(数学)の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている」など、各教科の特性に応じた学習方法を意識して取り組んでいる児童生徒ほど、正答率が高い。
- ・ テレビゲーム(コンピュータゲーム、携帯式のゲームを含む)をする時間が長い児童生徒ほど、正答率は低い傾向にある。
- ・ 読書が好きな児童生徒、朝食を毎日とっている児童生徒、新聞やテレビなどのニュースに関心がある児童生徒ほど、正答率が高い。

《指導改善のポイント》

- 児童生徒が楽しく学校生活を送り、落ち着いて勉強に取り組むことができる環境の整備と「知的好奇心を喚起する楽しい授業」「だれもが分かる授業」「有用感をもつことができる授業」に向けての指導法の工夫改善
- 読書への取組、朝食摂取などの基本的な生活習慣の確立、新聞やテレビなどのニュースへの関心など、学校と家庭の連携による指導の工夫

最終更新日:2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(小学校第5学年) → [小学校第6学年](#) [中学校第1学年](#)

[中学校第2学年](#) [中学校第3学年](#)

学校生活 ←詳しいグラフは[ここ](#)をクリック

数値は、小数第1位で四捨五入している。

(「思う」「どちらかといえば、思う」を合わせた割合)

- 学校での生活は楽しい……………91%
- 学校では落ち着いて勉強できている……………88%
- 友だちに会うのは楽しい……………97%
- 好きな授業がある……………96%

学習動機 ←詳しいグラフは[ここ](#)をクリック

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 将来の夢や目標をもって……………90%
- 各教科の勉強は好きですか
 - ・ 国語……………63%
 - ・ 社会……………54%
 - ・ 算数……………67%
 - ・ 理科……………81%
 - ・ 総合的な学習の時間……………82%
- 各教科の学習は、社会にでたときに役に立つ
 - ・ 国語……………89%
 - ・ 社会……………89%
 - ・ 算数……………91%
 - ・ 理科……………81%
 - ・ 総合的な学習の時間……………83%



家庭学習 ←詳しいグラフは[ここ](#)をクリック

■ 学校の授業以外に勉強をする時間 (月から金曜日)

- 2時間以上、3時間より少ない……………15%
- 1時間以上、2時間より少ない……………32%
- 1時間より少ない……………41%
- 全くしない……………4%

■ 学校の授業以外に勉強をする時間 (土・日曜日)

- 2時間以上、3時間より少ない……………13%
- 1時間以上、2時間より少ない……………30%
- 1時間より少ない……………36%
- 全くしない……………11%

■ 学習塾で勉強をしていますか(家庭教師を含む)

- 学習塾に通っていない……………57%
- 学校の勉強より進んだ内容や、難しい内容を勉強している……………16%
- 学校の勉強でよく分からなかった内容を勉強している……………11%

(「している」「どちらかといえば、している」を合わせた割合)

- 自分で計画を立てて勉強している……………60%
- 学校の宿題をしている……………95%
- 学校の授業の予習をしている……………47%
- 学校の授業の復習をしている……………54%
- 苦手な教科の勉強をしている……………56%
- テストで間違えた問題について勉強をしている……………60%

学習活動 ←詳しいグラフは[ここ](#)をクリック

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 普段の授業で、自分の考えを発表する機会が与えられていると思う……………73%
- 普段の授業で、学級の友だちとの間で話し合う活動をよく行っていると思う……………79%

(「難しい」「どちらかといえば、難しい」を合わせた割合)

- 学校の授業などで、自分の考えを説明したり、文章に書いたりするのは難しい……………67%

生活習慣等 ←詳しいグラフは[ここ](#)をクリック

- 読書は好きだ……………83% (「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

■ 家や図書館で、ふだん1日あたりどれくらい読書しますか

- 30分以上、1時間より少ない……………25%
- 10分以上、30分より少ない……………26%
- 10分より少ない……………14%
- 全くしない……………12%

■ 昼休みや放課後、学校が休みの日に学校図書室や地域の図書館へどれくらい行きますか

- 週に1～3回……………23%
- 月に1～3回……………23%
- 年に数回程度……………20%
- ほとんど行かない……………24%

- 朝食を毎日食べている……………94% (「している」「どちらかといえば、している」を合わせた割合)

■ ふだん(月～金曜日)、何時頃に寝ますか

- 午後9時以降、10時より前……………47%
- 午後10時以降、11時より前……………30%
- 午後11時以降、午前0時より前……………8%

■ ふだん(月～金曜日)、1日にどれくらいの時間、テレビやビデオ、DVDを見たり、聞いたりしますか

- 3時間以上……………34%
- 2時間以上、3時間より少ない……………24%
- 1時間以上、2時間より少ない……………24%
- 1時間より少ない……………15%

■ ふだん(月～金曜日)、1日にどれくらいの時間、テレビゲームをしますか

- 2時間以上……………24%
- 1時間以上、2時間より少ない……………21%
- 1時間より少ない……………32%
- 全くしない……………23%

■ 家の手伝いをしていますか

- よくしている……………45%
- ときどきしている……………42%
- あまりしていない……………11%

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 新聞やテレビのニュースなどに興味がある……………85%
- 今住んでいる地域の行事に参加している……………75%

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(小学校第6学年) → [小学校第5学年](#) [中学校第1学年](#)
[中学校第2学年](#) [中学校第3学年](#)

学校生活 ←詳しいグラフはここをクリック

数値は、小数第1位で四捨五入している。

(「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」を合わせた割合)

- 学校での生活は楽しい……………92%
- 友だちに会うのは楽しい……………98%
- 学校では落ち着いて勉強できている……………88%
- 好きな授業がある……………96%

学習動機 ←詳しいグラフはここをクリック

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 将来の夢や目標をもっている……………85%
- 各教科の勉強は好きですか
 - 国語……………61%
 - 社会……………70%
 - 算数……………63%
 - 理科……………82%
 - 総合的な学習の時間……………85%
- 各教科の学習は、社会にでたときに役に立つ
 - 国語……………93%
 - 社会……………92%
 - 算数……………94%
 - 理科……………80%
 - 総合的な学習の時間……………84%

家庭学習 ←詳しいグラフはここをクリック

■ 学校の授業以外に勉強をする時間 (月から金曜日)

- 2時間以上、3時間より少ない……………15%
- 1時間以上、2時間より少ない……………35%
- 1時間より少ない……………40%
- 全くしない……………4%

■ 学校の授業以外に勉強をする時間 (土・日曜日)

- 2時間以上、3時間より少ない……………13%
- 1時間以上、2時間より少ない……………31%
- 1時間より少ない……………37%
- 全くしない……………10%

■ 学習塾で勉強をしていますか(家庭教師を含む)

- 学習塾に通っていない……………59%
- 学校の勉強より進んだ内容や、難しい内容を勉強している……………16%
- 学校の勉強でよく分からなかった内容を勉強している……………9%

(「している」「どちらかといえば、している」を合わせた割合)

- 自分で計画を立てて勉強している……………61%
- 学校の宿題をしている……………95%
- 学校の授業の予習をしている……………44%
- 学校の授業の復習をしている……………55%
- 苦手な教科の勉強をしている……………56%
- テストで間違えた問題について勉強をしている……………60%



学習活動 ←詳しいグラフはここをクリック

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 普段の授業で、自分の考えを発表する機会が与えられていると思う……………77%
- 普段の授業で、学級の友だちとの間で話し合う活動をよく行っていると思う……………82%

(「難しい」「どちらかといえば、難しい」を合わせた割合)

- 学校の授業などで、自分の考えを説明したり、文章に書いたりするのは難しい……………70%

生活習慣等 ←詳しいグラフはここをクリック

- 読書は好きだ……………79% (「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

■ 家や図書館で、ふだん1日あたりどれくらい読書しますか

- 30分以上、1時間より少ない……………25%
- 10分以上、30分より少ない……………27%
- 10分より少ない……………14%
- 全くしない……………14%

■ 昼休みや放課後、学校が休みの日に学校図書室や地域の図書館へどれくらい行きますか

- 週に1～3回……………24%
- 月に1～3回……………23%
- 年に数回程度……………20%
- ほとんど行かない……………24%

- 朝食を毎日食べている……………95% (「している」「どちらかといえば、している」を合わせた割合)

■ 普段(月～金曜日)、何時頃に寝ますか

- 午後9時以降、10時より前……………40%
- 午後10時以降、11時より前……………39%
- 午後11時以降、午前0時より前……………12%

■ 普段(月～金曜日)、1日にどれくらいの時間、テレビやビデオ、DVDを見たり、聞いたりしますか

- 3時間以上……………38%
- 2時間以上、3時間より少ない……………25%
- 1時間以上、2時間より少ない……………23%
- 1時間より少ない……………12%

■ 普段(月～金曜日)、1日にどれくらいの時間、テレビゲームをしますか

- 2時間以上……………22%
- 1時間以上、2時間より少ない……………22%
- 1時間より少ない……………34%
- 全くしない……………22%

■ 家の手伝いをしていますか

- よくしている……………42%
- ときどきしている……………44%
- あまりしていない……………12%

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 新聞やテレビのニュースなどに関心がある……………69%
- 今住んでいる地域の行事に参加している……………77%

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(中学校第1学年) → 小学校第5学年 小学校第6学年

中学校第2学年 中学校第3学年

学校生活 ←詳しいグラフはここをクリック

数値は、小数第1位で四捨五入している。

(「思う」「どちらかといえば、思う」を合わせた割合)

- 学校での生活は楽しい……………95%
- 友だちに会うのは楽しい……………99%
- 学校では落ち着いて勉強できている……………93%
- 好きな授業がある……………94%

学習動機 ←詳しいグラフはここをクリック

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 将来の夢や目標をもっている……………86%
- 各教科の勉強は好きですか
 - ・国語……………60%
 - ・社会……………61%
 - ・数学……………62%
 - ・理科……………73%
 - ・総合的な学習の時間……………82%
- 各教科の学習は、社会にでたときに役に立つ
 - ・国語……………96%
 - ・社会……………87%
 - ・数学……………95%
 - ・理科……………77%
 - ・総合的な学習の時間……………85%



家庭学習 ←詳しいグラフはここをクリック

■学校の授業以外に勉強をする時間 (月から金曜日)

- 2時間以上、3時間より少ない……………18%
- 1時間以上、2時間より少ない……………32%
- 1時間より少ない……………40%
- 全くしない……………5%

■学校の授業以外に勉強をする時間 (土・日曜日)

- 2時間以上、3時間より少ない……………15%
- 1時間以上、2時間より少ない……………31%
- 1時間より少ない……………36%
- 全くしない……………10%

■学習塾で勉強をしていますか(家庭教師も含む)

- 学習塾で勉強していない……………57%
- 学校の勉強より進んだ内容や、難しい内容を勉強している……………18%
- 学校の勉強でよく分からなかった内容を勉強している……………8%

(「している」「どちらかといえば、している」を合わせた割合)

- 自分で計画を立てて勉強している……………62%
- 学校の宿題をしている……………96%
- 学校の授業の予習をしている……………54%
- 学校の授業の復習をしている……………81%
- 苦手な教科の勉強をしている……………58%
- テストで間違えた問題について勉強をしている……………62%

学習活動 ←詳しいグラフはここをクリック

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 普段の授業で、自分の考えを発表する機会が与えられていると思う……………79%
- 普段の授業で、生徒の間で話し合う活動をよく行っていると思う……………79%

(「難しい」「どちらかといえば、難しい」を合わせた割合)

- 学校の授業などで、自分の考えを説明したり、文章に書いたりするのは難しい……………75%

生活習慣等 ←詳しいグラフはここをクリック

■読書は好きだ……………77% (「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

■家や図書館で、ふだん1日あたりどれくらい読書しますか

- 30分以上、1時間より少ない……………22%
- 10分以上、30分より少ない……………28%
- 10分より少ない……………15%
- 全くしない……………18%

■昼休みや放課後、学校が休みの日に学校図書室や地域の図書館へどれくらい行きますか

- 週に1～3回……………18%
- 月に1～3回……………25%
- 年に数回程度……………23%
- ほとんど行かない……………29%

■朝食を毎日食べている……………96% (「している」「どちらかといえば、している」を合わせた割合)

■ふだん(月～金曜日)、何時頃に寝ますか

- 午後10時以降、11時より前……………47%
- 午後11時以降、午前0時より前……………19%
- 午前0時以降……………5%

■ふだん(月～金曜日)、1日にどれくらいの時間、テレビやビデオ、DVDを見たり、聞いたりしますか

- 3時間以上……………40%
- 2時間以上、3時間より少ない……………27%
- 1時間以上、2時間より少ない……………23%
- 1時間より少ない……………9%

■ふだん(月～金曜日)、1日にどれくらいの時間、テレビゲームをしますか

- 2時間以上……………21%
- 1時間以上、2時間より少ない……………23%
- 1時間より少ない……………33%
- 全くしない……………23%

■家の手伝いをしていますか

- よくしている……………38%
- ときどきしている……………46%
- あまりしていない……………13%

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 新聞やテレビのニュースなどに関心がある……………71%
- 今住んでいる地域の行事に参加している……………75%

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(中学校第2学年) → 小学校第5学年 小学校第6学年
 中学校第1学年 中学校第3学年

学校生活 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)

数値は、小数第1位で四捨五入している。

(「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」を合わせた割合)

- 学校での生活は楽しい……………91%
- 学校では落ち着いて勉強できている……………87%
- 友だちに会うのは楽しい……………97%
- 好きな授業がある……………90%

学習動機 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 将来の夢や目標をもって……………74%
- 各教科の勉強は好きですか
 - 国語……………65%
 - 社会……………63%
 - 数学……………54%
 - 理科……………65%
 - 英語……………65%
 - 総合的な学習の時間……………78%
- 各教科の学習は、社会にでたときに役に立つ
 - 国語……………92%
 - 社会……………74%
 - 数学……………87%
 - 理科……………82%
 - 英語……………85%
 - 総合的な学習の時間……………78%



家庭学習 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)

■ 学校の授業以外に勉強をする時間 (月から金曜日)

- 2時間以上、3時間より少ない……………20%
- 1時間以上、2時間より少ない……………35%
- 1時間より少ない……………34%
- 全くしない……………4%

■ 学校の授業以外に勉強をする時間 (土・日曜日)

- 2時間以上、3時間より少ない……………21%
- 1時間以上、2時間より少ない……………33%
- 1時間より少ない……………27%
- 全くしない……………9%

■ 学習塾で勉強をしていますか(家庭教師も含む)

- 学習塾で勉強していない……………54%
- 学校の勉強より進んだ内容や、難しい内容を勉強している……………14%
- 学校の勉強でよく分からなかった内容を勉強している……………12%

(「している」「どちらかといえば、している」を合わせた割合)

- 自分で計画を立てて勉強している……………49%
- 学校の宿題をしている……………92%
- 学校の授業の予習をしている……………41%
- 学校の授業の復習をしている……………56%
- 苦手な教科の勉強をしている……………55%
- テストで間違えた問題について勉強をしている……………59%

学習活動 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 普段の授業で、自分の考えを発表する機会が与えられていると思う……………77%
- 普段の授業で、学級の友だちとの間で話し合う活動をよく行っていると思う……………74%

(「難しい」「どちらかといえば、難しい」を合わせた割合)

- 学校の授業などで、自分の考えを説明したり、文章に書いたりするのは難しい……………77%

生活習慣等 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)

■ 読書は好きだ……………76% (「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

■ 家や図書館で、ふだん1日あたりどれくらい読書しますか

- 30分以上、1時間より少ない……………20%
- 10分以上、30分より少ない……………25%
- 10分より少ない……………13%
- 全くしない……………26%

■ 昼休みや放課後、学校が休みの日に学校図書室や地域の図書館へどれくらい行きますか

- 週に1～3回……………14%
- 月に1～3回……………20%
- 年に数回程度……………23%
- ほとんど行かない……………39%

■ 朝食を毎日食べている……………93% (「している」「どちらかといえば、している」を合わせた割合)

■ 普段(月～金曜日)、何時頃に寝ますか

- 午後10時以降、11時より前……………39%
- 午後11時以降、午前0時より前……………35%
- 午前0時以降……………14%

■ 普段(月～金曜日)、1日にどれくらいの時間、テレビやビデオ、DVDを見たり、聞いたりしますか

- 3時間以上……………38%
- 2時間以上、3時間より少ない……………28%
- 1時間以上、2時間より少ない……………23%
- 1時間より少ない……………10%

■ 普段(月～金曜日)、1日にどれくらいの時間、テレビゲームをしますか

- 2時間以上……………23%
- 1時間以上、2時間より少ない……………20%
- 1時間より少ない……………29%
- 全くしない……………28%

■ 家の手伝いをしていますか

- よくしている……………28%
- ときどきしている……………46%
- あまりしていない……………20%

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 新聞やテレビのニュースなどに関心がある……………69%
- 今住んでいる地域の行事に参加している……………58%

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像(中学校第3学年) → 小学校第5学年 小学校第6学年
 中学校第1学年 中学校第2学年

学校生活 ←詳しいグラフはここをクリック

数値は、小数第1位で四捨五入している。

(「思う」「どちらかといえば、思う」を合わせた割合)

- 学校での生活は楽しい……………89%
- 学校では落ち着いて勉強できている……………90%
- 友だちに会うのは楽しい……………98%
- 好きな授業がある……………87%

学習動機 ←詳しいグラフはここをクリック

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 将来の夢や目標をもっている……………73%
- 各教科の勉強は好きですか
 - 国語……………83%
 - 社会……………59%
 - 数学……………82%
 - 理科……………82%
 - 英語……………56%
 - 総合的な学習の時間……………80%
- 各教科の学習は、社会にでたときに役に立つ
 - 国語……………92%
 - 社会……………73%
 - 数学……………83%
 - 理科……………57%
 - 英語……………82%
 - 総合的な学習の時間……………78%



家庭学習 ←詳しいグラフはここをクリック

■学校の授業以外に勉強をする時間 (月から金曜日)

- 2時間以上、3時間より少ない……………22%
- 1時間以上、2時間より少ない……………33%
- 1時間より少ない……………32%
- 全くしない……………5%

■学校の授業以外に勉強をする時間 (土・日曜日)

- 2時間以上、3時間より少ない……………22%
- 1時間以上、2時間より少ない……………32%
- 1時間より少ない……………26%
- 全くしない……………10%

■学習塾で勉強をしていますか(家庭教師も含む)

- 学習塾で勉強していない……………48%
- 学校の勉強より進んだ内容や、難しい内容を勉強している……………14%
- 学校の勉強でよく分からなかった内容を勉強している……………13%

(「している」「どちらかといえば、している」を合わせた割合)

- 自分で計画を立てて勉強している……………46%
- 学校の宿題をしている……………91%
- 学校の授業の予習をしている……………41%
- 学校の授業の復習をしている……………56%
- 苦手な教科の勉強をしている……………55%
- テストで間違えた問題について勉強をしている……………53%

学習活動 ←詳しいグラフはここをクリック

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 普段の授業で、自分の考えを発表する機会が与えられていると思う……………77%
- 普段の授業で、学級の友だちとの間で話し合う活動をよく行っていると思う……………71%

(「難しい」「どちらかといえば、難しい」を合わせた割合)

- 学校の授業などで、自分の考えを説明したり、文章に書いたりするのは難しい……………79%

生活習慣等 ←詳しいグラフはここをクリック

- 読書は好きだ……………76% (「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

■家や図書館で、ふだん1日あたりどれくらい読書しますか

- 30分以上、1時間より少ない……………19%
- 10分以上、30分より少ない……………24%
- 10分より少ない……………14%
- 全くしない……………27%

■昼休みや放課後、学校が休みの日に学校図書室や地域の図書館へどれくらい行きますか

- 週に1～3回……………14%
- 月に1～3回……………17%
- 年に数回程度……………22%
- ほとんど行かない……………42%

- 朝食を毎日食べている……………93% (「している」「どちらかといえば、している」を合わせた割合)

■普段(月～金曜日)、何時頃に寝ますか

- 午後10時以降、11時より前……………29%
- 午後11時以降、午前0時より前……………41%
- 午前0時以降……………22%

■普段(月～金曜日)、1日にどれくらいの時間、テレビやビデオ、DVDを見たり、聞いたりしますか

- 3時間以上……………35%
- 2時間以上、3時間より少ない……………29%
- 1時間以上、2時間より少ない……………24%
- 1時間より少ない……………11%
- 全くしない……………28%

■普段(月～金曜日)、1日にどれくらいの時間、テレビゲームをしますか

- 2時間以上……………23%
- 1時間以上、2時間より少ない……………20%
- 1時間より少ない……………29%
- 全くしない……………28%

■家の手伝いをしていますか

- よくしている……………28%
- ときどきしている……………47%
- あまりしていない……………19%

(「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた割合)

- 新聞やテレビのニュースなどに関心がある……………74%
- 今住んでいる地域の行事に参加している……………50%

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

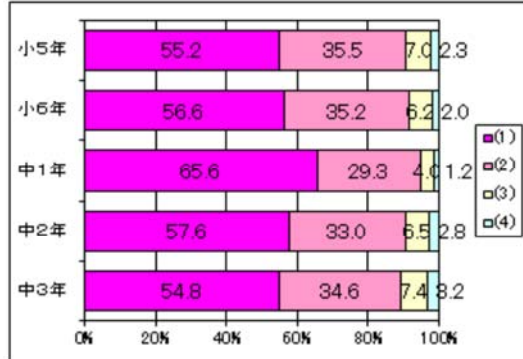
Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の子ども像

学校生活

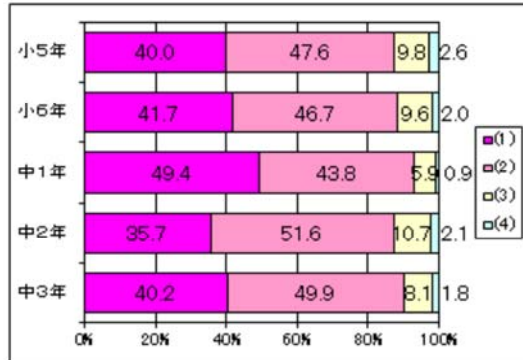
(1) 学校での生活は楽しい。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) そう思う	55.2	56.6	65.6	57.6	54.8
(2) どちらかといえば、そう思う	35.5	35.2	29.3	33.0	34.6
(3) どちらかといえば、そう思わない	7.0	6.2	4.0	6.5	7.4
(4) そう思わない	2.3	2.0	1.2	2.8	3.2



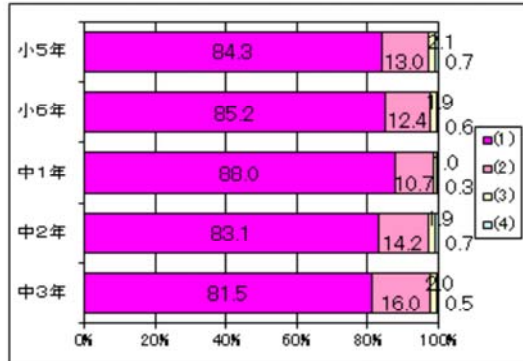
(2) 学校では落ち着いて勉強することができる。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) そう思う	40.0	41.7	49.4	35.7	40.2
(2) どちらかといえば、そう思う	47.6	46.7	43.8	51.6	49.9
(3) どちらかといえば、そう思わない	9.8	9.6	5.9	10.7	8.1
(4) そう思わない	2.6	2.0	0.9	2.1	1.8



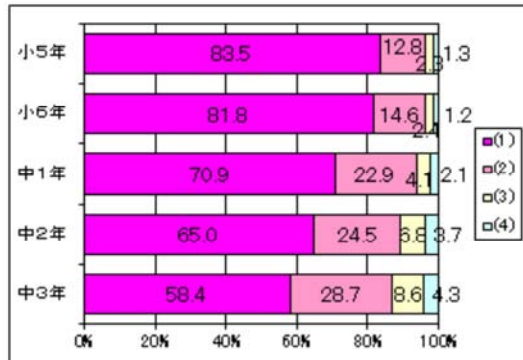
(3) 友達に会うのは楽しい。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) そう思う	84.3	85.2	88.0	83.1	81.5
(2) どちらかといえば、そう思う	13.0	12.4	10.7	14.2	16.0
(3) どちらかといえば、そう思わない	2.1	1.9	1.0	1.9	2.0
(4) そう思わない	0.7	0.6	0.3	0.7	0.5



(4) 好きな授業がある。(%)

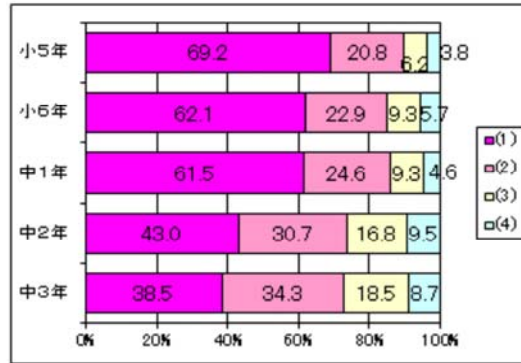
	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) そう思う	83.5	81.8	70.9	65.0	58.4
(2) どちらかといえば、そう思う	12.8	14.6	22.9	24.5	28.7
(3) どちらかといえば、そう思わない	2.3	2.4	4.1	6.8	8.6
(4) そう思わない	1.3	1.2	2.1	3.7	4.3



学習動機

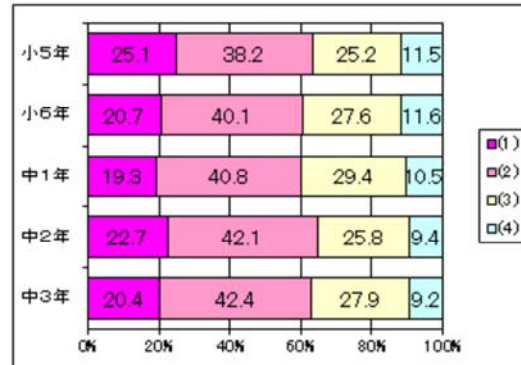
(5) 将来の夢や目標をもっている。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	69.2	62.1	61.5	43.0	38.5
(2) どちらかといえば、当てはまる	20.8	22.9	24.6	30.7	34.3
(3) どちらかといえば、当てはまらない	6.2	9.3	9.3	16.8	18.5
(4) 当てはまらない	3.8	5.7	4.6	9.5	8.7



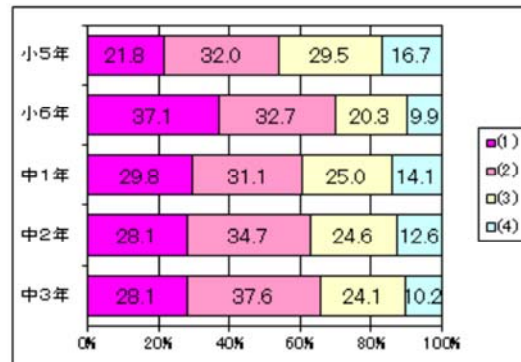
(18) 各教科の勉強は好きですか。ア 国語(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	25.1	20.7	19.3	22.7	20.4
(2) どちらかといえば、当てはまる	38.2	40.1	40.8	42.1	42.4
(3) どちらかといえば、当てはまらない	25.2	27.6	29.4	25.8	27.9
(4) 当てはまらない	11.5	11.6	10.5	9.4	9.2



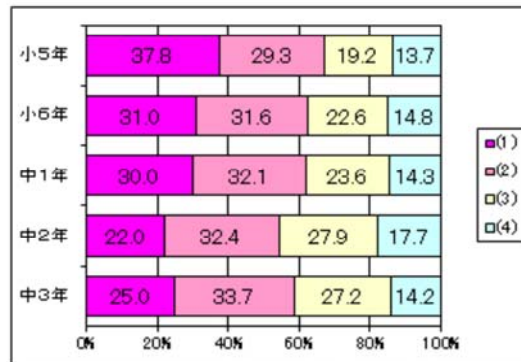
(18) 各教科の勉強は好きですか。イ 社会(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	21.8	37.1	29.8	28.1	28.1
(2) どちらかといえば、当てはまる	32.0	32.7	31.1	34.7	37.6
(3) どちらかといえば、当てはまらない	29.5	20.3	25.0	24.6	24.1
(4) 当てはまらない	16.7	9.9	14.1	12.6	10.2



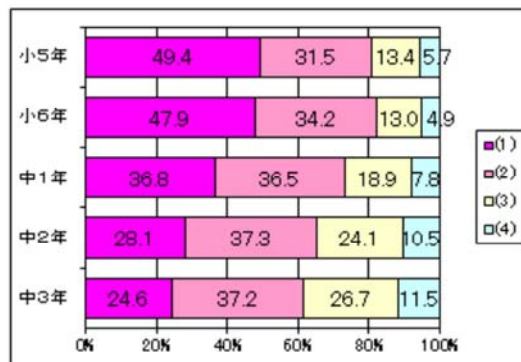
(18) 各教科の勉強は好きですか。ウ 算数・数学(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	37.8	31.0	30.0	22.0	25.0
(2) どちらかといえば、当てはまる	29.3	31.6	32.1	32.4	33.7
(3) どちらかといえば、当てはまらない	19.2	22.6	23.6	27.9	27.2
(4) 当てはまらない	13.7	14.8	14.3	17.7	14.2



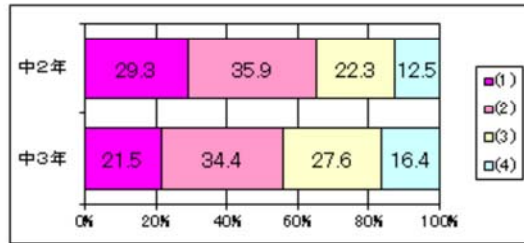
(18) 各教科の勉強は好きですか。エ 理科(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	49.4	47.9	36.8	28.1	24.6
(2) どちらかといえば、当てはまる	31.5	34.2	36.5	37.3	37.2
(3) どちらかといえば、当てはまらない	13.4	13.0	18.9	24.1	26.7
(4) 当てはまらない	5.7	4.9	7.8	10.5	11.5



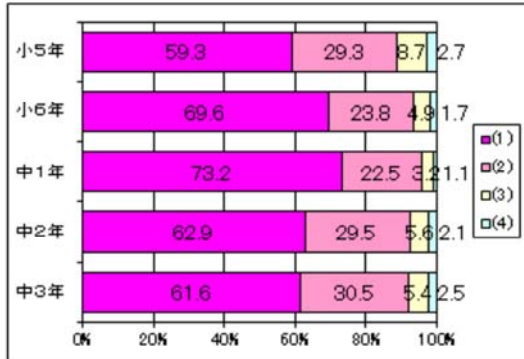
(18) 各教科の勉強は好きですか。オ 英語(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる				29.3	21.5
(2) どちらかといえば、当てはまる				35.9	34.4
(3) どちらかといえば、当てはまらない				22.3	27.6
(4) 当てはまらない				12.5	16.4



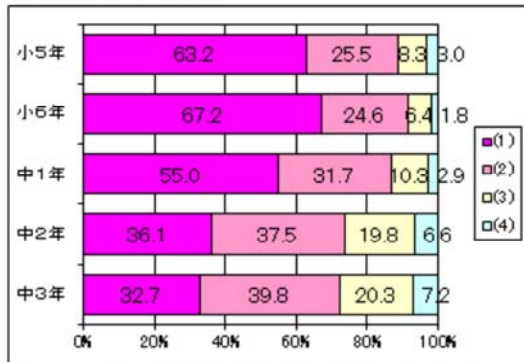
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。ア 国語(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	59.3	69.6	73.2	62.9	61.6
(2) どちらかといえば、当てはまる	29.3	23.8	22.5	29.5	30.5
(3) どちらかといえば、当てはまらない	8.7	4.9	3.2	5.6	5.4
(4) 当てはまらない	2.7	1.7	1.1	2.1	2.5



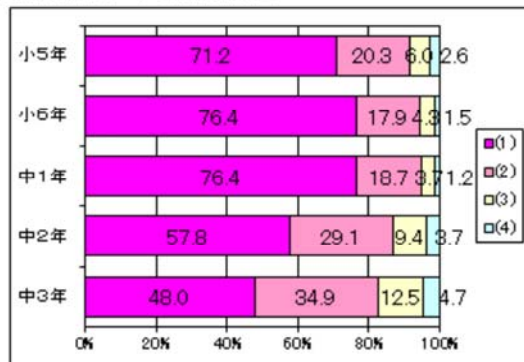
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。イ 社会(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	63.2	67.2	55.0	36.1	32.7
(2) どちらかといえば、当てはまる	25.5	24.6	31.7	37.5	39.8
(3) どちらかといえば、当てはまらない	8.3	6.4	10.3	19.8	20.3
(4) 当てはまらない	3.0	1.8	2.9	6.6	7.2



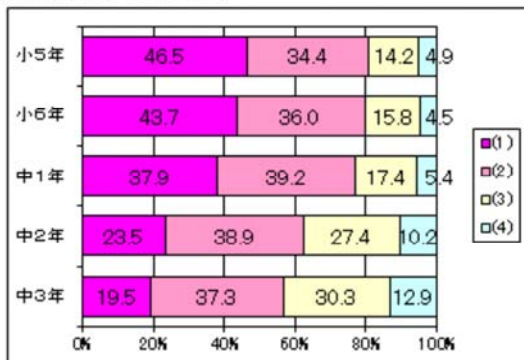
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。ウ 算数・数学(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	71.2	76.4	76.4	57.8	48.0
(2) どちらかといえば、当てはまる	20.3	17.9	18.7	29.1	34.9
(3) どちらかといえば、当てはまらない	6.0	4.3	3.7	9.4	12.5
(4) 当てはまらない	2.6	1.5	1.2	3.7	4.7



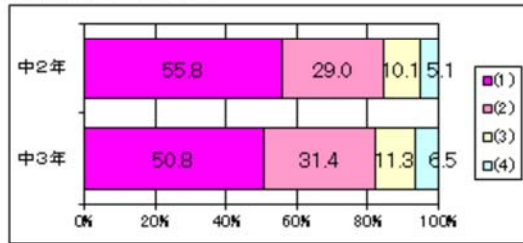
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。エ 理科(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	46.5	43.7	37.9	23.5	19.5
(2) どちらかといえば、当てはまる	34.4	36.0	39.2	38.9	37.3
(3) どちらかといえば、当てはまらない	14.2	15.8	17.4	27.4	30.3
(4) 当てはまらない	4.9	4.5	5.4	10.2	12.9



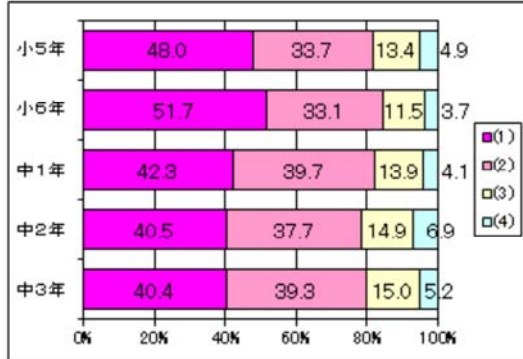
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。 才英語(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる				55.8	50.8
(2) どちらかといえば、当てはまる				29.0	31.4
(3) どちらかといえば、当てはまらない				10.1	11.3
(4) 当てはまらない				5.1	6.5



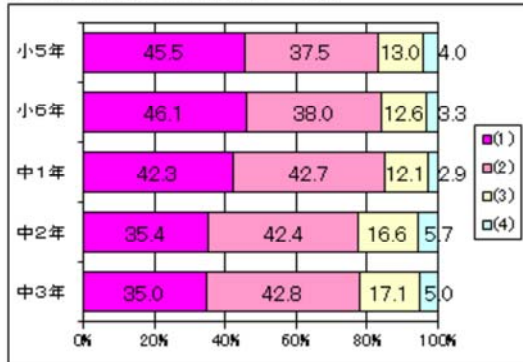
小:(35), 中:(38) 「総合的な学習の時間」の勉強は好きだ。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	48.0	51.7	42.3	40.5	40.4
(2) どちらかといえば、当てはまる	33.7	33.1	39.7	37.7	39.3
(3) どちらかといえば、当てはまらない	13.4	11.5	13.9	14.9	15.0
(4) 当てはまらない	4.9	3.7	4.1	6.9	5.2



小:(36), 中:(39) 「総合的な学習の時間」の授業で学習したことは、普段の生活や社会に出たときに役に立つ。(%)

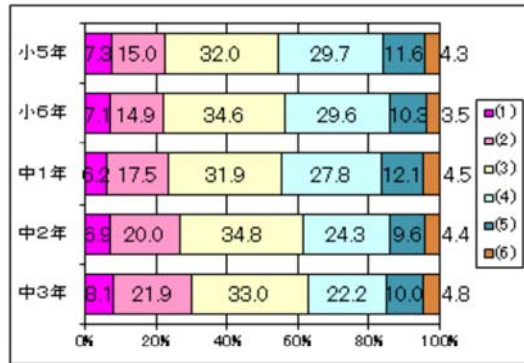
	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	45.5	46.1	42.3	35.4	35.0
(2) どちらかといえば、当てはまる	37.5	38.0	42.7	42.4	42.8
(3) どちらかといえば、当てはまらない	13.0	12.6	12.1	16.6	17.1
(4) 当てはまらない	4.0	3.3	2.9	5.7	5.0



家庭学習

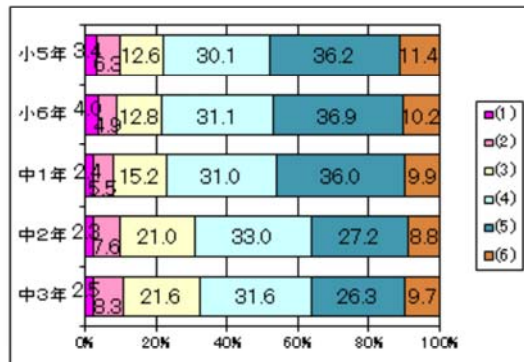
(6) 学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか。(%)
(学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間もふくみます。)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 3時間以上	7.3	7.1	6.2	6.9	8.1
(2) 2時間以上、3時間より少ない	15.0	14.9	17.5	20.0	21.9
(3) 1時間以上、2時間より少ない	32.0	34.6	31.9	34.8	33.0
(4) 30分以上、1時間より少ない	29.7	29.6	27.8	24.3	22.2
(5) 30分より少ない	11.6	10.3	12.1	9.6	10.0
(6) 全くしない	4.3	3.5	4.5	4.4	4.8



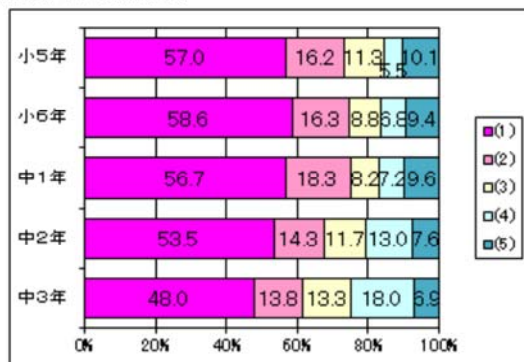
(7) 土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日あたりどれくらいの時間、勉強をしますか。(%)
(学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間もふくみます。%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 4時間以上	3.4	4.0	2.4	2.3	2.5
(2) 3時間以上、4時間より少ない	6.3	4.9	5.5	7.6	8.3
(3) 2時間以上、3時間より少ない	12.6	12.8	15.2	21.0	21.6
(4) 1時間以上、2時間より少ない	30.1	31.1	31.0	33.0	31.6
(5) 1時間より少ない	36.2	36.9	36.0	27.2	26.3
(6) 全くしない	11.4	10.2	9.9	8.8	9.7



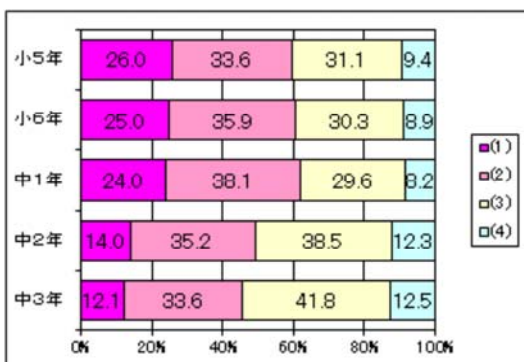
(8) 学習塾(家庭教師の先生に教わっている場合もふくみます。%)で勉強をしていますか。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 学習塾で勉強していない	57.0	58.6	56.7	53.5	48.0
(2) 学校の勉強より難んだ内容や、難しい内容を勉強している	16.2	16.3	18.3	14.3	13.8
(3) 学校の勉強でよく分からなかった内容を勉強している	11.3	8.8	8.2	11.7	13.3
(4) 上記(2)、(3)の両方の内容を勉強している	5.5	6.8	7.2	13.0	18.0
(5) 上記(2)、(3)の内容のどちらともいえない	10.1	9.4	9.6	7.6	6.9



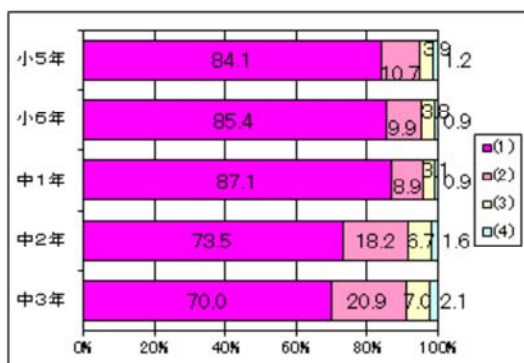
(9) 自分で計画を立てて勉強をしている。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) している	26.0	25.0	24.0	14.0	12.1
(2) どちらかといえば、している	33.6	35.9	38.1	35.2	33.6
(3) あまりしていない	31.1	30.3	29.6	38.5	41.8
(4) 全くしていない	9.4	8.9	8.2	12.3	12.5



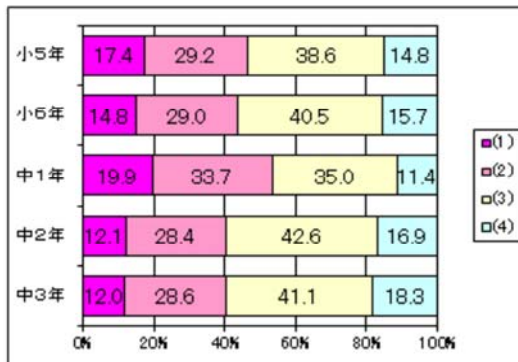
(10) 学校の宿題をしている。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) している	84.1	85.4	87.1	73.5	70.0
(2) どちらかといえば、している	10.7	9.9	8.9	18.2	20.9
(3) あまりしていない	3.9	3.8	3.1	6.7	7.0
(4) 全くしていない	1.2	0.9	0.9	1.6	2.1



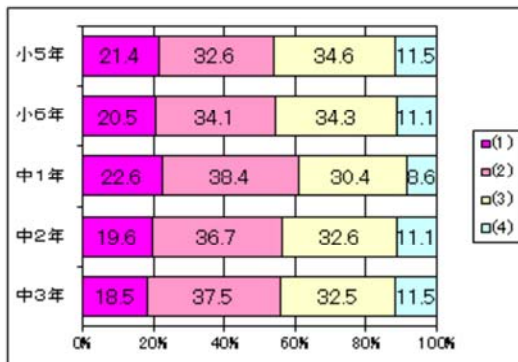
(11) 学校の授業の予習をしている。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) している	17.4	14.8	19.9	12.1	12.0
(2) どちらかといえば、している	29.2	29.0	33.7	28.4	28.6
(3) あまりしていない	38.6	40.5	35.0	42.6	41.1
(4) 全くしていない	14.8	15.7	11.4	16.9	18.3



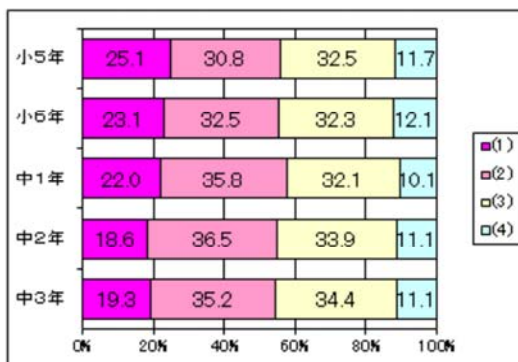
(12) 学校の授業の復習をしている。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) している	21.4	20.5	22.6	19.6	18.5
(2) どちらかといえば、している	32.6	34.1	38.4	36.7	37.5
(3) あまりしていない	34.6	34.3	30.4	32.6	32.5
(4) 全くしていない	11.5	11.1	8.6	11.1	11.5



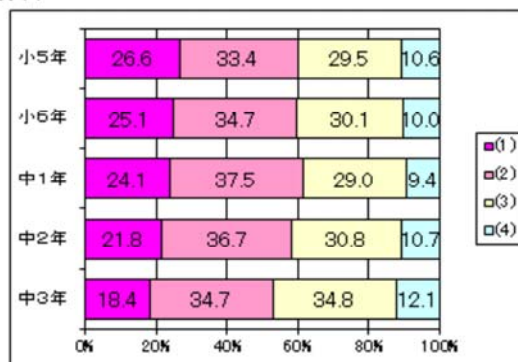
(13) 苦手な教科の勉強をしている。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) している	25.1	23.1	22.0	18.6	19.3
(2) どちらかといえば、している	30.8	32.5	35.8	36.5	35.2
(3) あまりしていない	32.5	32.3	32.1	33.9	34.4
(4) 全くしていない	11.7	12.1	10.1	11.1	11.1



(14) テストで間違えた問題について、間違えたところを後で勉強している。(%)

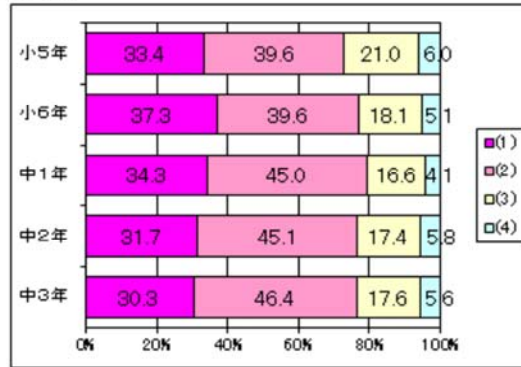
	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) している	26.6	25.1	24.1	21.8	18.4
(2) どちらかといえば、している	33.4	34.7	37.5	36.7	34.7
(3) あまりしていない	29.5	30.1	29.0	30.8	34.8
(4) 全くしていない	10.6	10.0	9.4	10.7	12.1



学習活動

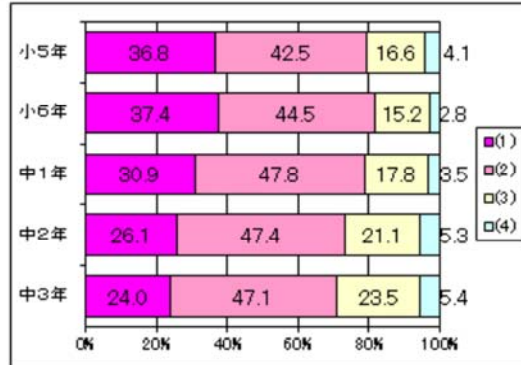
(15) 普段の授業では、自分の考えを発表する機会があたえられていると思う。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	33.4	37.3	34.3	31.7	30.3
(2) どちらかといえば、当てはまる	39.6	39.6	45.0	45.1	46.4
(3) どちらかといえば、当てはまらない	21.0	18.1	16.6	17.4	17.6
(4) 当てはまらない	6.0	5.1	4.1	5.8	5.6



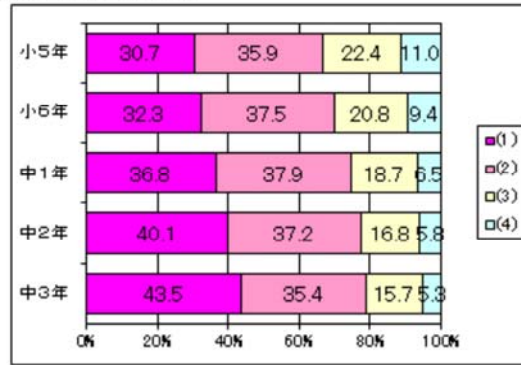
(16) 普段の授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていると思う。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	36.8	37.4	30.9	26.1	24.0
(2) どちらかといえば、当てはまる	42.5	44.5	47.8	47.4	47.1
(3) どちらかといえば、当てはまらない	16.6	15.2	17.8	21.1	23.5
(4) 当てはまらない	4.1	2.8	3.5	5.3	5.4



(17) 学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい。(%)

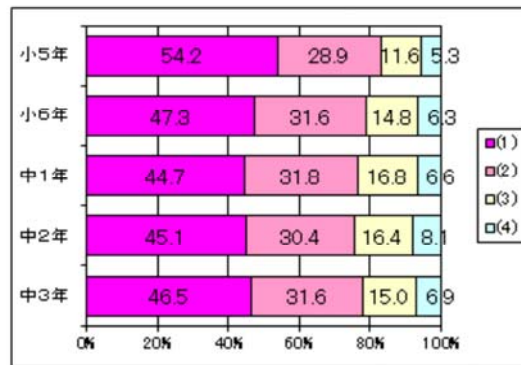
	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 難しいと思う	30.7	32.3	36.8	40.1	43.5
(2) どちらかといえば、難しいと思う	35.9	37.5	37.9	37.2	35.4
(3) どちらかといえば、難しいと思わない	22.4	20.8	18.7	16.8	15.7
(4) 難しいと思わない	11.0	9.4	6.5	5.8	5.3



生活習慣等

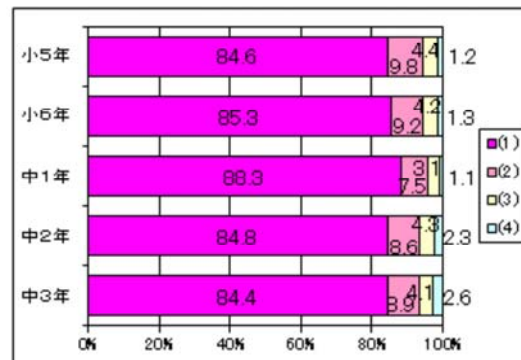
(21) 読書は好きだ。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	54.2	47.3	44.7	45.1	46.5
(2) どちらかといえば、当てはまる	28.9	31.6	31.8	30.4	31.6
(3) どちらかといえば、当てはまらない	11.6	14.8	16.8	16.4	15.0
(4) 当てはまらない	5.3	6.3	6.6	8.1	6.9



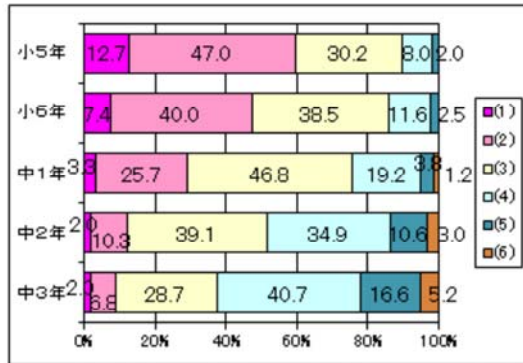
小:(37), 中:(40) 朝食を毎日食べている。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) している	84.6	85.3	88.3	84.8	84.4
(2) どちらかといえば、している	9.8	9.2	7.5	8.6	8.9
(3) あまりしていない	4.4	4.2	3.1	4.3	4.1
(4) 全くしていない	1.2	1.3	1.1	2.3	2.6



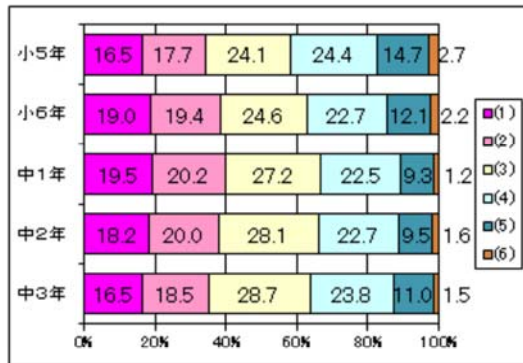
小:(38), 中:(41) 普段(月曜日から金曜日), 何時ごろにねますか。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 午後9時より前	12.7	7.4	3.3	2.0	2.0
(2) 午後9時以降, 午後10時より前	47.0	40.0	25.7	10.3	6.8
(3) 午後10時以降, 午後11時より前	30.2	38.5	46.8	39.1	28.7
(4) 午後11時以降, 午前0時より前	8.0	11.6	19.2	34.9	40.7
(5) 午前0時以降, 午前1時より前	2.0	2.5	3.8	10.6	16.6
(6) 午前1時以降			1.2	3.0	5.2



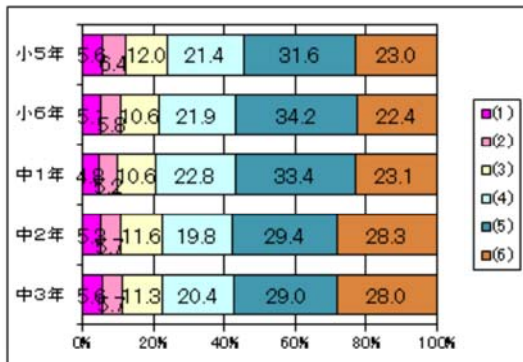
小:(39), 中:(42) 普段(月曜日から金曜日), 1日あたりどれくらいの時間, テレビやビデオ・DVDを見たり, 聞いたりしますか。(%)
(テレビゲームをする時間は除きます。%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 4時間以上	16.5	19.0	19.5	18.2	16.5
(2) 3時間以上, 4時間より少ない	17.7	19.4	20.2	20.0	18.5
(3) 2時間以上, 3時間より少ない	24.1	24.6	27.2	28.1	28.7
(4) 1時間以上, 2時間より少ない	24.4	22.7	22.5	22.7	23.8
(5) 1時間より少ない	14.7	12.1	9.3	9.5	11.0
(6) 全く見たり 聞いたりしない	2.7	2.2	1.2	1.6	1.5



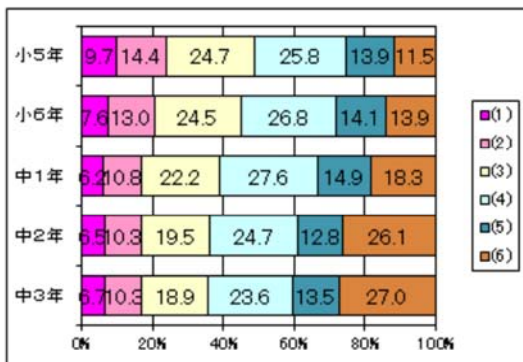
小:(40), 中:(43) 普段(月曜日から金曜日), 1日あたりどれくらいの時間, テレビゲーム(コンピュータゲーム, 携帯型のゲームをふくみます。)をしますか。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 4時間以上	5.6	5.1	4.8	5.3	5.6
(2) 3時間以上, 4時間より少ない	6.4	5.8	5.2	5.7	5.7
(3) 2時間以上, 3時間より少ない	12.0	10.6	10.6	11.6	11.3
(4) 1時間以上, 2時間より少ない	21.4	21.9	22.8	19.8	20.4
(5) 1時間より少ない	31.6	34.2	33.4	29.4	29.0
(6) 全く見たり 聞いたりしない	23.0	22.4	23.1	28.3	28.0



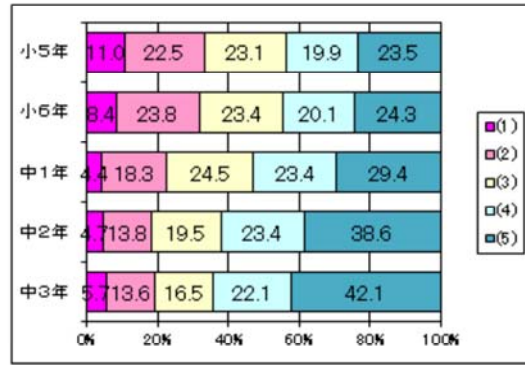
小:(41), 中:(44) 家や図書館で, 普段(月曜日から金曜日), 1日あたりどれくらいの時間, 読書をしますか。(%)
(教科書や参考書, 漫画や雑誌は除きます。)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 2時間以上	9.7	7.6	6.2	6.5	6.7
(2) 1時間以上, 2時間より少ない	14.4	13.0	10.8	10.3	10.3
(3) 30分以上, 1時間より少ない	24.7	24.5	22.2	19.5	18.9
(4) 10分以上, 30分より少ない	25.8	26.8	27.6	24.7	23.6
(5) 10分より少ない	13.9	14.1	14.9	12.8	13.5
(6) 全くしない	11.5	13.9	18.3	26.1	27.0



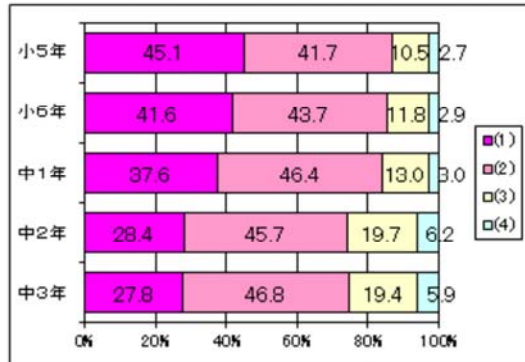
小:(42), 中:(45) 昼休みや放課後、学校が休みの日に、本を読んだり、借りたりするために、学校図書館・学校図書室や地域の図書館へどれくらい行きますか。(%) (教科書や参考書、漫画や雑誌は除きます。%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) たいたい週に4回以上行く	11.0	8.4	4.4	4.7	5.7
(2) 週に1～3回程行く	22.5	23.8	18.3	13.8	13.6
(3) 月に1～3回程行く	23.1	23.4	24.5	19.5	16.5
(4) 年に数回程行く	19.9	20.1	23.4	23.4	22.1
(5) ほとんど、または、全く行かない	23.5	24.3	29.4	38.6	42.1



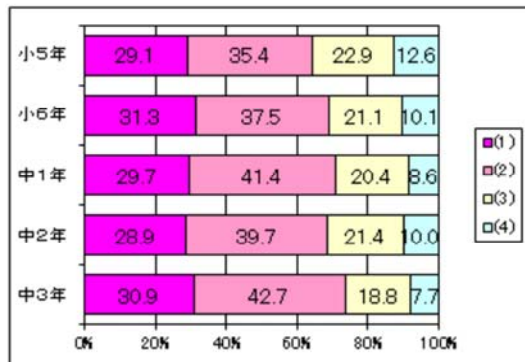
小:(43), 中:(46) 家の手伝いをしていますか。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) よくしている	45.1	41.6	37.6	28.4	27.8
(2) ときどきしている	41.7	43.7	46.4	45.7	46.8
(3) あまりしていない	10.5	11.8	13.0	19.7	19.4
(4) 全くしていない	2.7	2.9	3.0	6.2	5.9



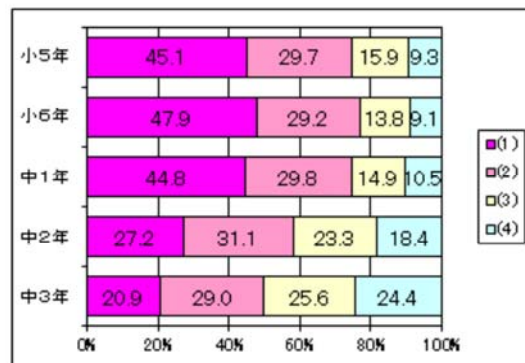
小:(44), 中:(47) 新聞やテレビのニュースなどに興味がある。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	29.1	31.3	29.7	28.9	30.9
(2) どちらかといえば、当てはまる	35.4	37.5	41.4	39.7	42.7
(3) どちらかといえば、当てはまらない	22.9	21.1	20.4	21.4	18.8
(4) 当てはまらない	12.6	10.1	8.6	10.0	7.7



小:(45), 中:(48) 今住んでいる地域の行事に参加している。(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	45.1	47.9	44.8	27.2	20.9
(2) どちらかといえば、当てはまる	29.7	29.2	29.8	31.1	29.0
(3) どちらかといえば、当てはまらない	15.9	13.8	14.9	23.3	25.6
(4) 当てはまらない	9.3	9.1	10.5	18.4	24.4



最終更新日: 2011-10-07

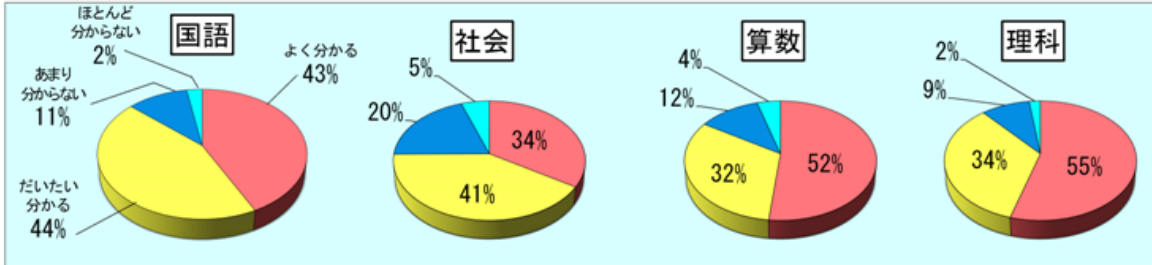
平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

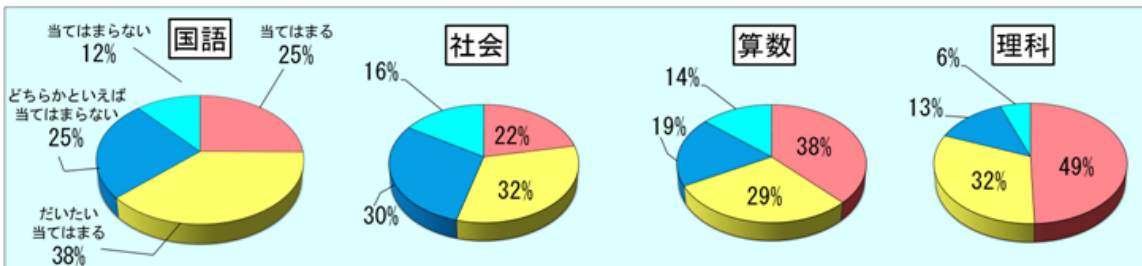
児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(小学校第5学年) → [小学校第6学年](#) [中学校第1学年](#)
[中学校第2学年](#) [中学校第3学年](#)

※数値は小数第一位で四捨五入している。なお、円グラフの数値は、自動的に100%になるように調整してある。

各教科の授業の内容は分かりますか。 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)



各教科の勉強は好きですか。 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)



各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての興味・関心・意欲・態度 ※詳しいグラフは[教科名をクリック](#)

<p>国語</p> <p>国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている ……58%</p> <p>国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てをくふうしている ……59%</p> <p>国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている ……71%</p> <p>国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとめごと内容に理解しながら読んでいる ……74%</p>	<p>社会</p> <p>社会の授業で自分が考えたことや調べたことを、新聞のような形でノートや応用紙にまとめることは楽しい ……71%</p> <p>社会の授業で調べたことをもとにして、発表したり話し合ったりすることは楽しい ……62%</p> <p>博物館や図書館、郷土資料館などで、自分の興味・関心をもったことについて調べることは好きだ ……77%</p>		<p>算数</p> <p>算数の授業で学習したことをふだんの生活の中で活用できないか考える ……70%</p> <p>算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている ……76%</p> <p>算数の授業で、問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている ……82%</p>	<p>理科</p> <p>理科の授業で、自分の考えを発表したり友達に話したりするのは楽しい ……69%</p> <p>理科の授業で、観察や実験について図や文字で記録をしていくことは好きだ ……82%</p> <p>理科の授業で、自分が何を調べるのかははっきり分かって観察や実験を行っている ……87%</p>
---	--	--	--	--

※図中の数値は「当てはまる」「そう思う」と回答した割合と「どちらかといえば、○○○」と回答した割合を合わせた数値である。

最終更新日： 2011-10-07

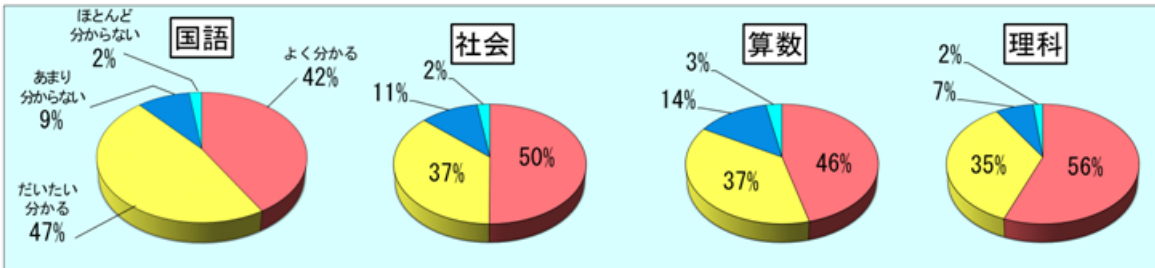
平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

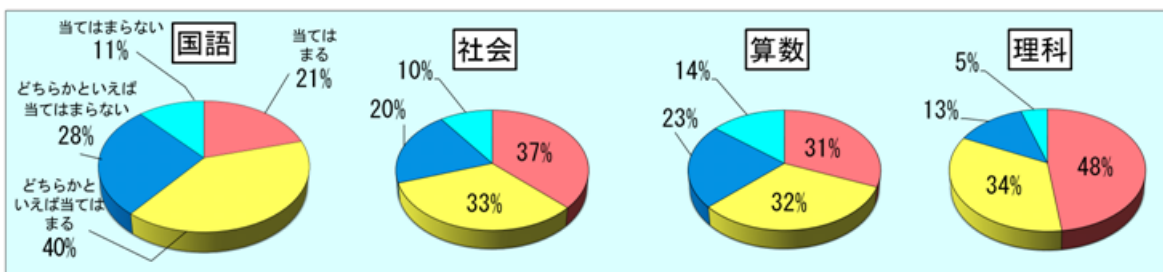
児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(小学校第6学年) → [小学校第5学年](#) [中学校第1学年](#)
[中学校第2学年](#) [中学校第3学年](#)

※数値は小数第一位で四捨五入している。なお、円グラフの数値は、自動的に100%になるように調整してある。

各教科の授業の内容は分かりますか。 ←詳しいグラフは[ここ](#)をクリック



各教科の勉強は好きですか。 ←詳しいグラフは[ここ](#)をクリック



各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての興味・関心・意欲・態度 ※詳しいグラフは[教科名をクリック](#)

<p>国語</p> <p>国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている58%</p> <p>国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てをくふうしている58%</p> <p>国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている71%</p> <p>国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとめりとともに内容を理解しながら読んでいる73%</p>	<p>社会</p> <p>社会の授業で自分が考えたことや調べたことを、新聞のような形でノートや応用紙にまとめることは楽しい75%</p> <p>社会の授業で調べたことをもとにして、発表したり話し合ったりすることは楽しい67%</p> <p>博物館や図書館、郷土資料館などで、自分の興味・関心をもったことについて調べることは好きだ80%</p>		<p>算数</p> <p>算数の授業で学習したことをふだんの生活の中で活用できないか考える67%</p> <p>算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている80%</p> <p>算数の授業で、問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている85%</p>	<p>理科</p> <p>理科の授業で、自分の考えを発表したり友達に話したりするのは楽しい67%</p> <p>理科の授業で、観察や実験について図や文字で記録をしていくことは好きだ81%</p> <p>理科の授業で、自分が何を調べるのかははっきり分かって観察や実験を行っている88%</p>
--	---	--	---	---

※図中の数値は「当てはまる」「そう思う」と回答した割合と「どちらかといえば、○○」と回答した割合を合わせた数値である。

最終更新日: 2011-10-07

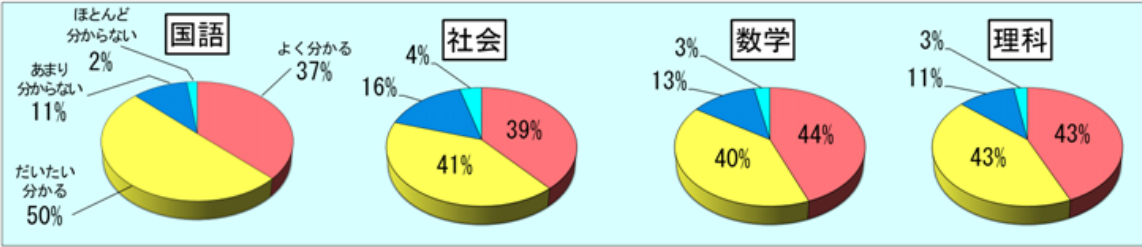
平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

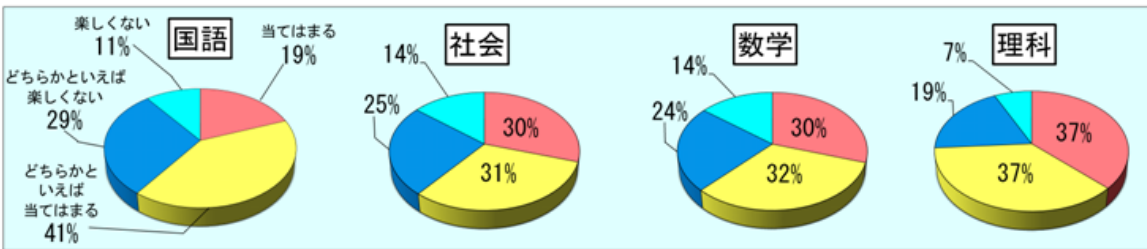
児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(中学校第1学年) → [小学校第5学年](#) [小学校第6学年](#)
[中学校第2学年](#) [中学校第3学年](#)

※数値は小数第一位で四捨五入している。なお、円グラフの数値は、自動的に100%になるように調整してある。

各教科の授業の内容はよく分かる。 ←詳しいグラフは[ここ](#)をクリック



各教科の勉強は好きですか。 ←詳しいグラフは[ここ](#)をクリック



各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての興味・関心・意欲・態度 ※詳しいグラフは[教科名をクリック](#)

<p>国語</p> <p>国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている56%</p> <p>国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している58%</p> <p>国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている73%</p> <p>国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとめりごとに内容を理解しながら読んでいる73%</p>	<p>社会</p> <p>社会の授業で自分が考えたことや調べたことを、新聞のような形でノートや応用紙にまとめることは楽しい70%</p> <p>社会の授業で調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しい61%</p> <p>博物館や図書館、郷土資料館などで、自分の興味・関心をもったことについて調べることは好きだ74%</p>		<p>数学</p> <p>数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える65%</p> <p>数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている77%</p> <p>数学の授業で、問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている86%</p>	<p>理科</p> <p>理科の授業で、自分の考えを文章や図を使って表現したり発表したりしている52%</p> <p>理科の授業で、問題を解決するために、自分で観察や実験を計画し実施したいと思う66%</p> <p>理科の授業で、自分が何を調べるのかははっきり分かって観察や実験を行っている83%</p>
--	---	--	--	--

※図中の数値は「当てはまる」「そう思う」と回答した割合と「どちらかといえば、○○○」と回答した割合を合わせた数値である。

最終更新日: 2011-10-07

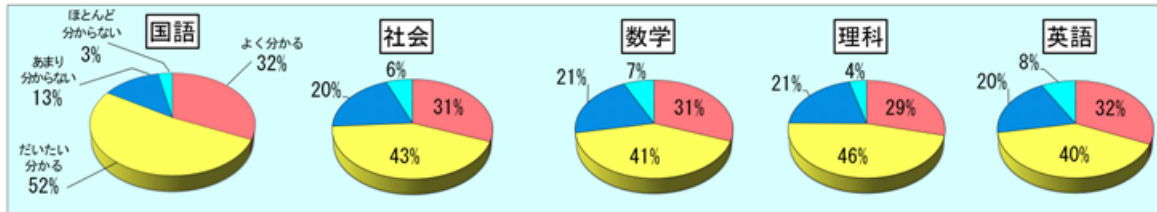
平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

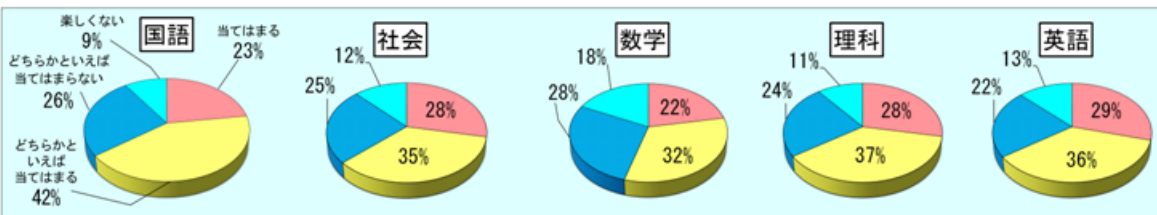
児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(中学校第2学年) → [小学校第5学年](#) [小学校第6学年](#)
[中学校第1学年](#) [中学校第3学年](#)

※数値は小数第一位で四捨五入している。なお、円グラフの数値は、自動的に100%になるように調整してある。

各教科の授業の内容はわかりますか。 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)



各教科の勉強は好きですか。 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)



各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての興味・関心・意欲・態度 ※詳しいグラフは[教科名をクリック](#)

国語	社会	数学	理科	英語
国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている ……52%	社会の授業で自分が考えたことや調べたことを、新聞のような形でノートや応用紙にまとめることは楽しい ……59%	数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える ……49%	理科の授業で、自分の考えを文章や図を使って表現したり発表したりしている ……40%	英語の授業で、あたえられたテーマについて、英語で簡単なスピーチをすることは好きだ ……40%
国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している ……52%	社会の授業で調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しい ……55%	数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている ……67%	理科の授業で、問題を解決するために、自分で観察や実験を計画し実施したいと思う ……58%	英語の授業で、身近な話題について自分の考えや気持ちなどを英語で書くことは難しい ……75%
国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている ……66%	博物館や図書館、郷土資料館などで、自分の興味・関心をもったことについて調べることが好きだ ……65%	数学の授業で、問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている ……85%	理科の授業で、自分が何を調べるのかははっきり分かって観察や実験を行っている ……77%	英語の授業で英語を聞いたり読んだりするとき、大まかな流れや大切な部分をつかみながら聞いたり読んだりしている ……74%
国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいる ……66%				



※図中の数値は「当てはまる」「そう思う」「難しいと思う」と回答した割合と「どちらかといえば、○○○」と回答した割合を合わせた数値である。

最終更新日: 2011-10-07

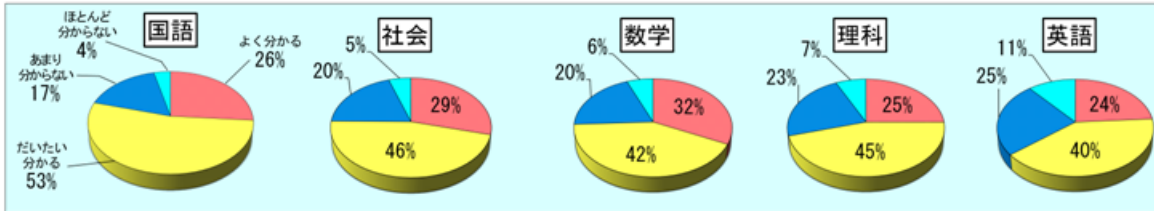
平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > II 調査結果の概要

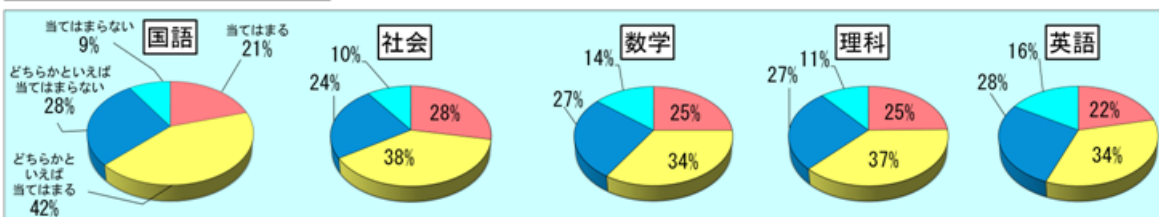
児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(中学校第3学年) → [小学校第5学年](#) [小学校第6学年](#)
[中学校第1学年](#) [中学校第2学年](#)

※数値は小数第一位で四捨五入している。なお、円グラフの数値は、自動的に100%になるように調整してある。

各教科の授業の内容は分かりますか。 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)



各教科の勉強は好きですか。 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)



各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての興味・関心・意欲・態度 ※詳しいグラフは[教科名をクリック](#)

国語	社会	数学	理科	英語
国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている51%	社会の授業で自分が考えたことや調べたことを、新聞のような形でノートや応用紙にまとめることは楽しい53%	数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える44%	理科の授業で、自分の考えを文章や図を使って表現したり発表したりしている37%	英語の授業で、あたえられたテーマについて、英語で簡単なスピーチをすることは好きだ33%
国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している50%	社会の授業で調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しい51%	数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている69%	理科の授業で、問題を解決するために、自分で観察や実験を計画し実施したいと思う52%	英語の授業で、身近な話題について自分の考えや気持ちなどを英語で書くことは難しい77%
国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている65%	博物館や図書館、郷土資料館などで、自分の興味・関心をもったことについて調べることは好きだ63%	数学の授業で、問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている83%	理科の授業で、自分が何を調べるのかははっきり分かって観察や実験を行っている71%	英語の授業で英語を聞いたり読んだりするとき、大まかな流れや大切な部分をつかみながら聞いたり読んだりしている70%
国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいる65%				

※図中の数値は「当てはまる」「そう思う」「難しいと思う」と回答した割合と「どちらかといえば、○○○」と回答した割合を合わせた数値である。



最終更新日: 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

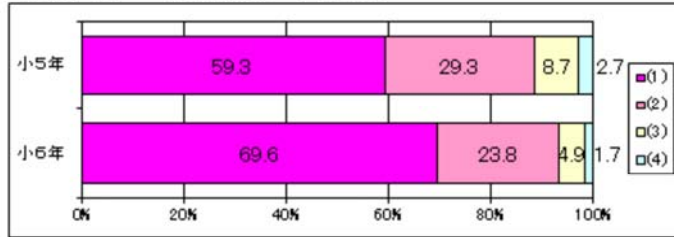
Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(小学校)

国語

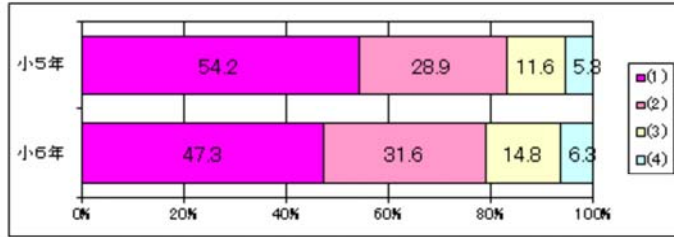
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。ア 国語(%)

	小5年	小6年
(1) 当てはまる	59.3	69.6
(2) どちらかといえば、当てはまる	29.3	23.8
(3) どちらかといえば、当てはまらない	8.7	4.9
(4) 当てはまらない	2.7	1.7



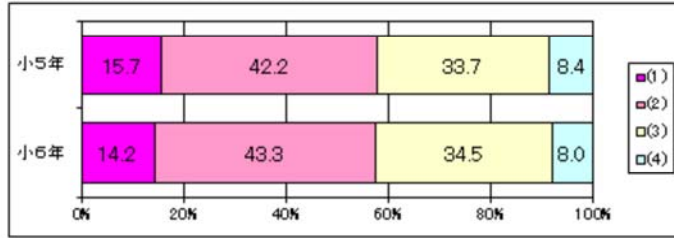
(21) 読書は好きだ。(%)

	小5年	小6年
(1) 当てはまる	54.2	47.3
(2) どちらかといえば、当てはまる	28.9	31.6
(3) どちらかといえば、当てはまらない	11.6	14.8
(4) 当てはまらない	5.3	6.3



(22) 国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている。(%)

	小5年	小6年
(1) 当てはまる	15.7	14.2
(2) どちらかといえば、当てはまる	42.2	43.3
(3) どちらかといえば、当てはまらない	33.7	34.5
(4) 当てはまらない	8.4	8.0



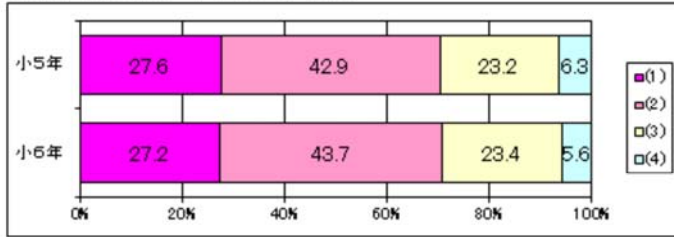
(23) 国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している。(%)

	小5年	小6年
(1) 当てはまる	17.0	15.7
(2) どちらかといえば、当てはまる	42.2	42.2
(3) どちらかといえば、当てはまらない	31.1	33.4
(4) 当てはまらない	9.7	8.7



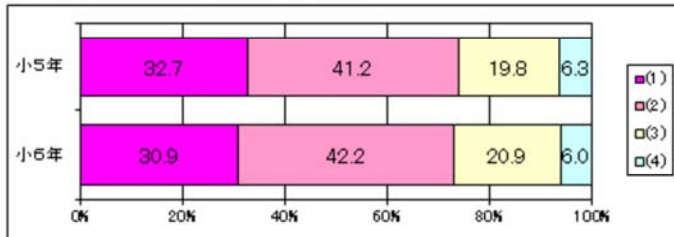
(24) 国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている。(%)

	小5年	小6年
(1) 当てはまる	27.6	27.2
(2) どちらかといえば、当てはまる	42.9	43.7
(3) どちらかといえば、当てはまらない	23.2	23.4
(4) 当てはまらない	6.3	5.6



(25) 国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいる。(%)

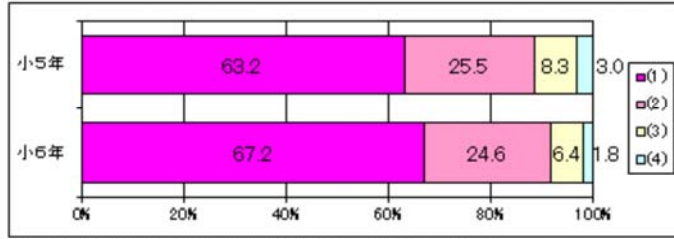
	小5年	小6年
(1) 当てはまる	32.7	30.9
(2) どちらかといえば、当てはまる	41.2	42.2
(3) どちらかといえば、当てはまらない	19.8	20.9
(4) 当てはまらない	6.3	6.0



社会

(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。イ 社会(%)

	小5年	小6年
(1) 当てはまる	63.2	67.2
(2) どちらかといえば、当てはまる	25.5	24.6
(3) どちらかといえば、当てはまらない	8.3	6.4
(4) 当てはまらない	3.0	1.8



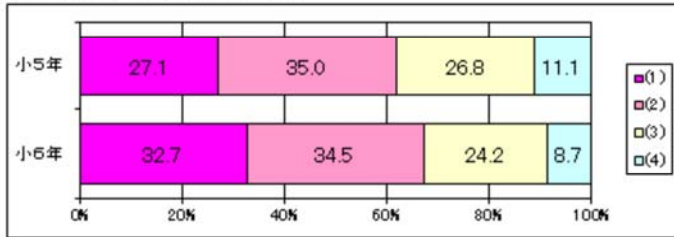
(26) 社会の授業で自分が考えたことや調べたことを、新聞のような形でノートや広用紙にまとめることは楽しい。(%)

	小5年	小6年
(1) そう思う	40.1	45.1
(2) どちらかといえば、そう思う	31.0	29.5
(3) どちらかといえば、そう思わない	19.4	17.1
(4) そう思わない	9.4	8.3



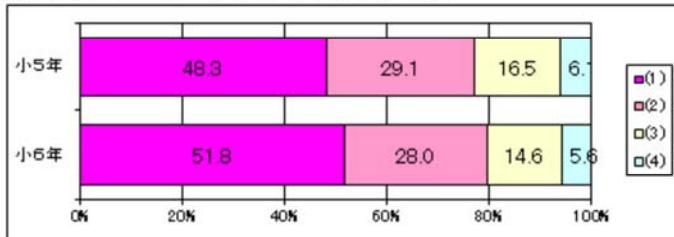
(27) 社会の授業で調べたことをもとにこして、発表したり話し合ったりすることは楽しい。(%)

	小5年	小6年
(1) そう思う	27.1	32.7
(2) どちらかといえば、そう思う	35.0	34.5
(3) どちらかといえば、そう思わない	26.8	24.2
(4) そう思わない	11.1	8.7



(28) 博物館や図書館、郷土資料館などで、自分の興味・関心をもったことについて調べることは好きだ。(%)

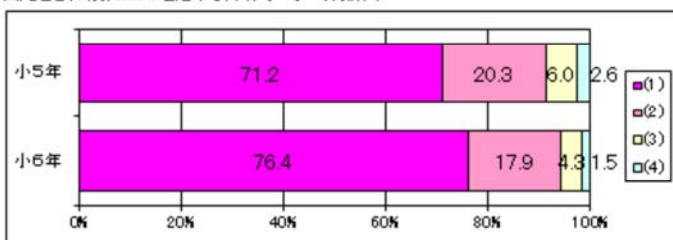
	小5年	小6年
(1) 当てはまる	48.3	51.8
(2) どちらかといえば、当てはまる	29.1	28.0
(3) どちらかといえば、当てはまらない	16.5	14.6
(4) 当てはまらない	6.1	5.6



算数

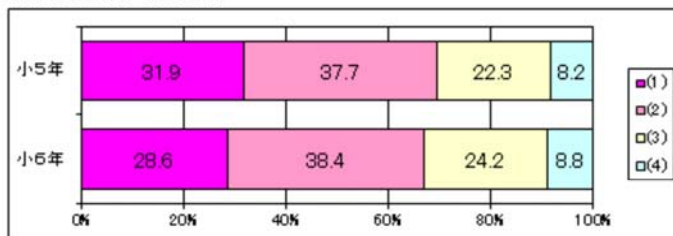
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。ウ 算数(%)

	小5年	小6年
(1) 当てはまる	71.2	76.4
(2) どちらかといえば、当てはまる	20.3	17.9
(3) どちらかといえば、当てはまらない	6.0	4.3
(4) 当てはまらない	2.6	1.5



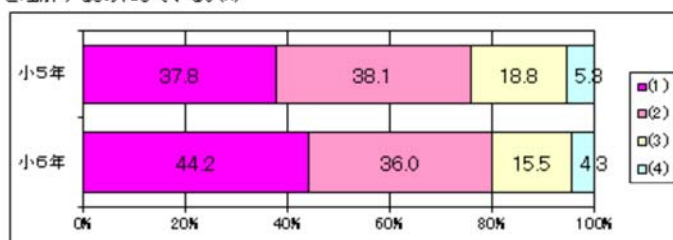
(29) 算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える。(%)

	小5年	小6年
(1) 当てはまる	31.9	28.6
(2) どちらかといえば、当てはまる	37.7	38.4
(3) どちらかといえば、当てはまらない	22.3	24.2
(4) 当てはまらない	8.2	8.8



(30) 算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている。(%)

	小5年	小6年
(1) 当てはまる	37.8	44.2
(2) どちらかといえば、当てはまる	38.1	36.0
(3) どちらかといえば、当てはまらない	18.8	15.5
(4) 当てはまらない	5.3	4.3



(31) 算数・数学の授業で、問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている。(%)

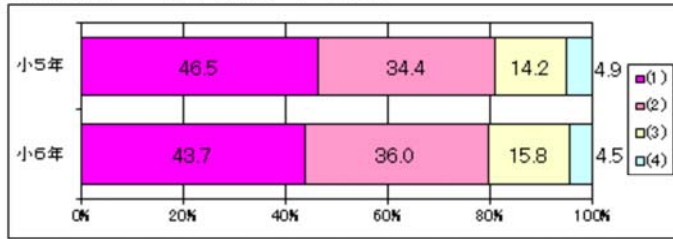
	小5年	小6年
(1) 当てはまる	48.4	51.8
(2) どちらかといえば、当てはまる	33.7	32.9
(3) どちらかといえば、当てはまらない	13.6	12.2
(4) 当てはまらない	4.3	3.1



理科

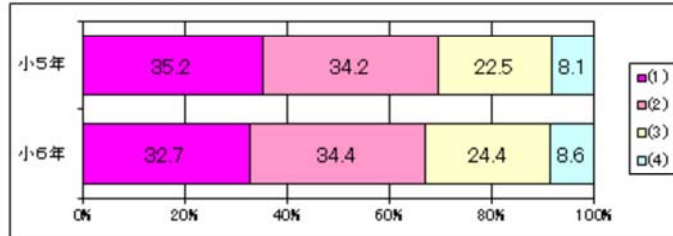
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。エ 理科(%)

	小5年	小6年
(1) 当てはまる	46.5	43.7
(2) どちらかといえば、当てはまる	34.4	36.0
(3) どちらかといえば、当てはまらない	14.2	15.8
(4) 当てはまらない	4.9	4.5



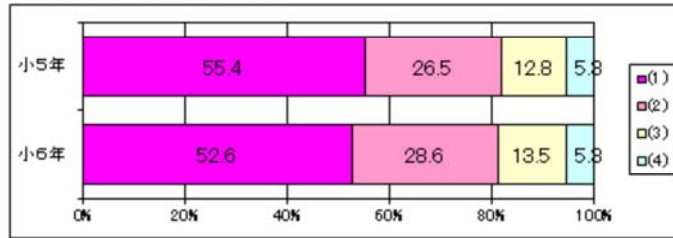
(32) 理科の授業で、自分の考えを発表したり友達に話したりするのは楽しい。(%)

	小5年	小6年
(1) そう思う	35.2	32.7
(2) どちらかといえば、そう思う	34.2	34.4
(3) どちらかといえば、そう思わない	22.5	24.4
(4) そう思わない	8.1	8.6



(33) 理科の授業で、観察や実験について図や文字で記録をしていくことは好きだ。(%)

	小5年	小6年
(1) 当てはまる	55.4	52.6
(2) どちらかといえば、当てはまる	26.5	28.6
(3) どちらかといえば、当てはまらない	12.8	13.5
(4) 当てはまらない	5.3	5.3



(34) 理科の授業で、自分が何を調べるのかははっきり分かって観察や実験を行っている。(%)

	小5年	小6年
(1) 当てはまる	51.2	50.7
(2) どちらかといえば、当てはまる	35.3	36.9
(3) どちらかといえば、当てはまらない	10.5	9.8
(4) 当てはまらない	3.0	2.6



最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

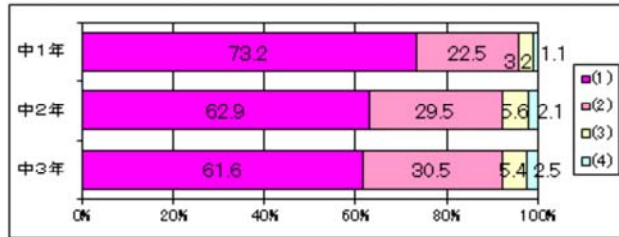
Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像(中学校)

国語

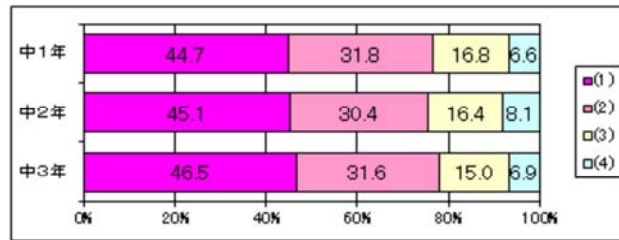
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。ア 国語(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	73.2	62.9	61.6
(2) どちらかといえば、当てはまる	22.5	29.5	30.5
(3) どちらかといえば、当てはまらない	3.2	5.6	5.4
(4) 当てはまらない	1.1	2.1	2.5



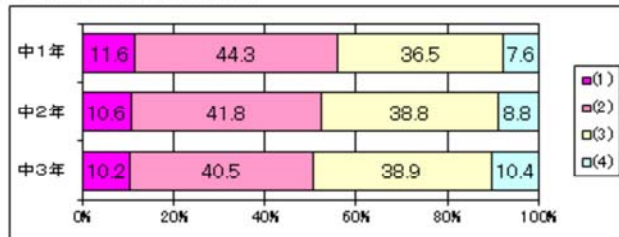
(21) 読書は好きだ。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	44.7	45.1	46.5
(2) どちらかといえば、当てはまる	31.8	30.4	31.6
(3) どちらかといえば、当てはまらない	16.8	16.4	15.0
(4) 当てはまらない	6.6	8.1	6.9



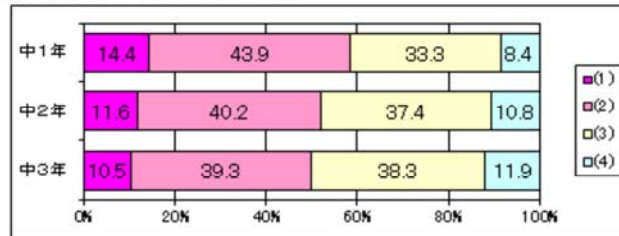
(22) 国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	11.6	10.6	10.2
(2) どちらかといえば、当てはまる	44.3	41.8	40.5
(3) どちらかといえば、当てはまらない	36.5	38.8	38.9
(4) 当てはまらない	7.6	8.8	10.4



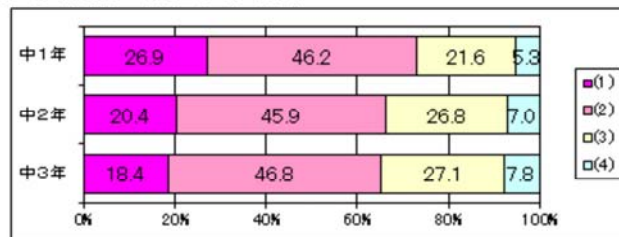
(23) 国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	14.4	11.6	10.5
(2) どちらかといえば、当てはまる	43.9	40.2	39.3
(3) どちらかといえば、当てはまらない	33.3	37.4	38.3
(4) 当てはまらない	8.4	10.8	11.9



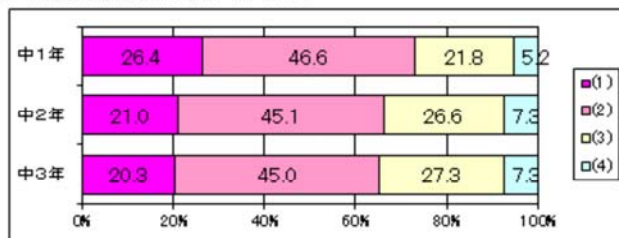
(24) 国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気をつけて書いている。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	26.9	20.4	18.4
(2) どちらかといえば、当てはまる	46.2	45.9	46.8
(3) どちらかといえば、当てはまらない	21.6	26.8	27.1
(4) 当てはまらない	5.3	7.0	7.8



(25) 国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいる。(%)

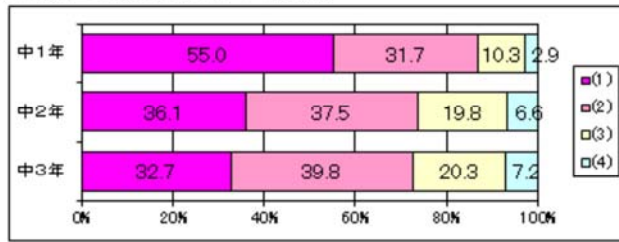
	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	26.4	21.0	20.3
(2) どちらかといえば、当てはまる	46.6	45.1	45.0
(3) どちらかといえば、当てはまらない	21.8	26.6	27.3
(4) 当てはまらない	5.2	7.3	7.3



社会

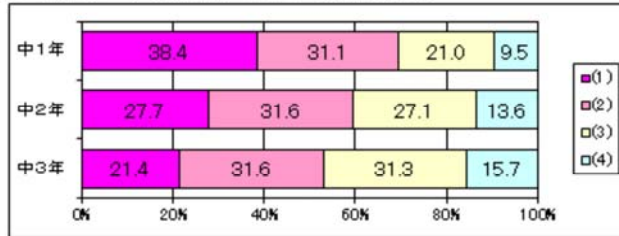
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。 イ 社会(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	55.0	36.1	32.7
(2) どちらかといえば、当てはまる	31.7	37.5	39.8
(3) どちらかといえば、当てはまらない	10.3	19.8	20.3
(4) 当てはまらない	2.9	6.6	7.2



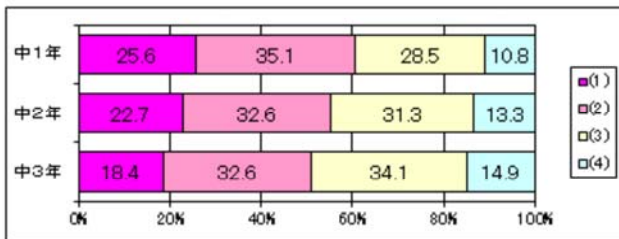
(26) 社会の授業で自分が考えたことや調べたことを、新聞のような形でノートや広用紙にまとめることは楽しい。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) そう思う	38.4	27.7	21.4
(2) どちらかといえば、そう思う	31.1	31.6	31.6
(3) どちらかといえば、そう思わない	21.0	27.1	31.3
(4) そう思わない	9.5	13.6	15.7



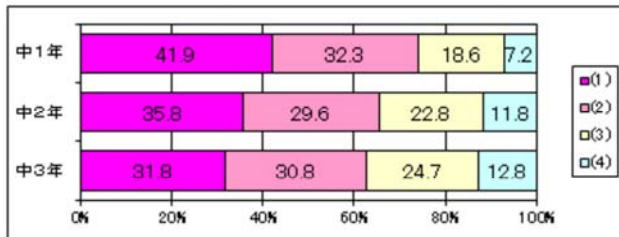
(27) 社会の授業で調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しい。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) そう思う	25.6	22.7	18.4
(2) どちらかといえば、そう思う	35.1	32.6	32.6
(3) どちらかといえば、そう思わない	28.5	31.3	34.1
(4) そう思わない	10.8	13.3	14.9



(28) 博物館や図書館、郷土資料館などで、自分の興味・関心をもったことについて調べることは好きだ。(%)

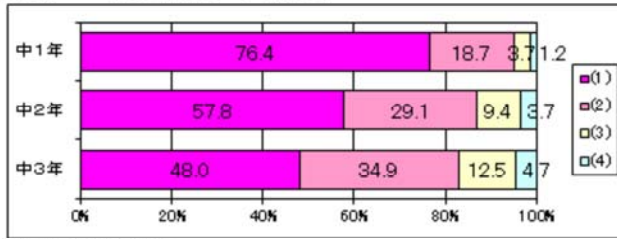
	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	41.9	35.8	31.8
(2) どちらかといえば、当てはまる	32.3	29.6	30.8
(3) どちらかといえば、当てはまらない	18.6	22.8	24.7
(4) 当てはまらない	7.2	11.8	12.8



数学

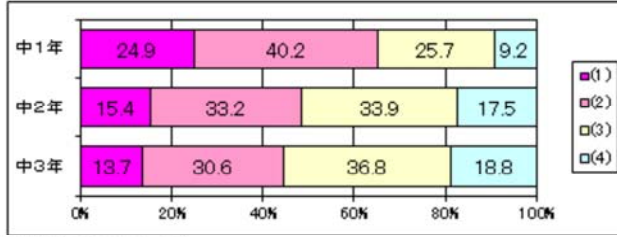
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。ウ 数学(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	76.4	57.8	48.0
(2) どちらかといえば、当てはまる	18.7	29.1	34.9
(3) どちらかといえば、当てはまらない	3.7	9.4	12.5
(4) 当てはまらない	1.2	3.7	4.7



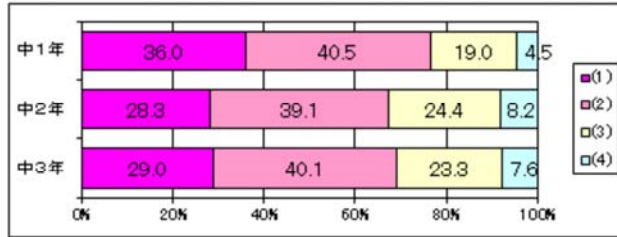
(29) 数学の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	24.9	15.4	13.7
(2) どちらかといえば、当てはまる	40.2	33.2	30.6
(3) どちらかといえば、当てはまらない	25.7	33.9	36.8
(4) 当てはまらない	9.2	17.5	18.8



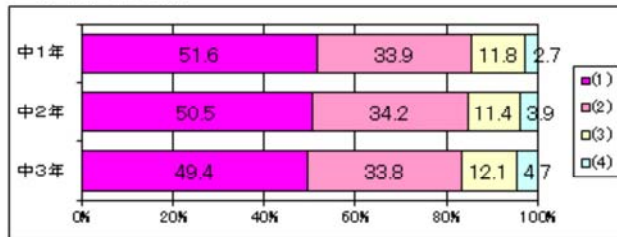
(30) 数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしている。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	36.0	28.3	29.0
(2) どちらかといえば、当てはまる	40.5	39.1	40.1
(3) どちらかといえば、当てはまらない	19.0	24.4	23.3
(4) 当てはまらない	4.5	8.2	7.6



(31) 数学の授業で、問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている。(%)

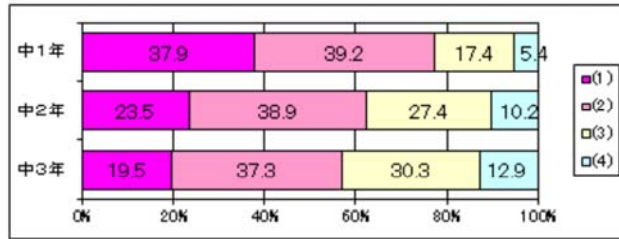
	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	51.6	50.5	49.4
(2) どちらかといえば、当てはまる	33.9	34.2	33.8
(3) どちらかといえば、当てはまらない	11.8	11.4	12.1
(4) 当てはまらない	2.7	3.9	4.7



理科

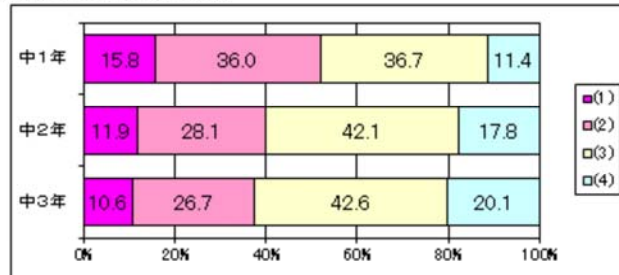
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。エ 理科(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	37.9	23.5	19.5
(2) どちらかといえば、当てはまる	39.2	38.9	37.3
(3) どちらかといえば、当てはまらない	17.4	27.4	30.3
(4) 当てはまらない	5.4	10.2	12.9



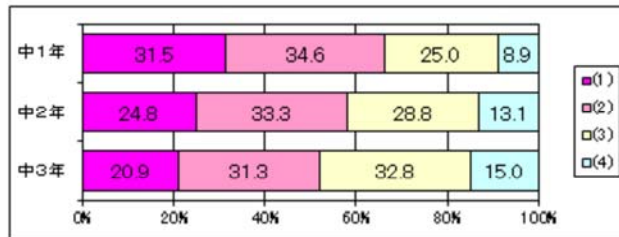
(32) 理科の授業で、自分の考えを文章や図を使って表現したり発表したりしている。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	15.8	11.9	10.6
(2) どちらかといえば、当てはまる	36.0	28.1	26.7
(3) どちらかといえば、当てはまらない	36.7	42.1	42.6
(4) 当てはまらない	11.4	17.8	20.1



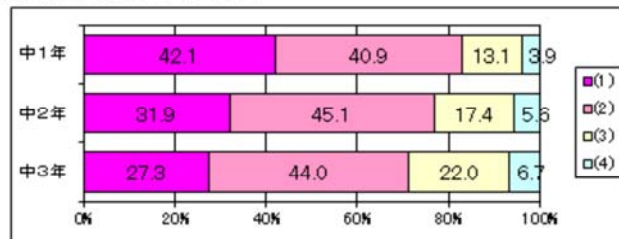
(33) 理科の授業で、問題を解決するために、自分で観察や実験を計画し実施したいと思う。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) そう思う	31.5	24.8	20.9
(2) どちらかといえば、そう思う	34.6	33.3	31.3
(3) どちらかといえば、そう思わない	25.0	28.8	32.8
(4) そう思わない	8.9	13.1	15.0



(34) 理科の授業で、自分が何を調べるのかははっきり分かって観察や実験を行っている。(%)

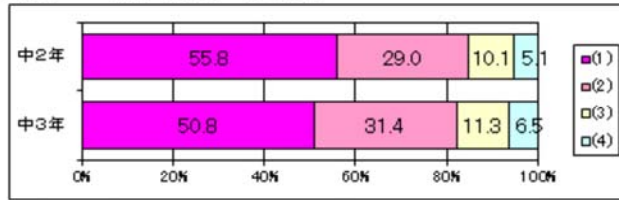
	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	42.1	31.9	27.3
(2) どちらかといえば、当てはまる	40.9	45.1	44.0
(3) どちらかといえば、当てはまらない	13.1	17.4	22.0
(4) 当てはまらない	3.9	5.6	6.7



英語

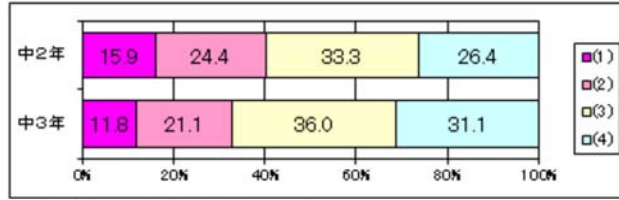
(20) 各教科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか。オ英語(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる		55.8	50.8
(2) どちらかといえば、当てはまる		29.0	31.4
(3) どちらかといえば、当てはまらない		10.1	11.3
(4) 当てはまらない		5.1	6.5



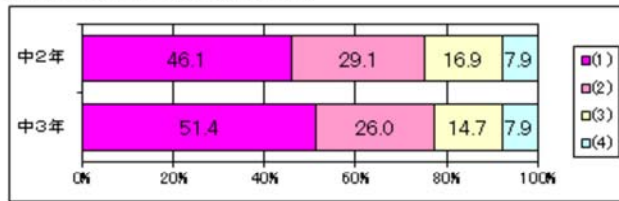
(35) 英語の授業で、あたえられたテーマについて、英語で簡単なスピーチをすることは好きだ。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる		15.9	11.8
(2) どちらかといえば、当てはまる		24.4	21.1
(3) どちらかといえば、当てはまらない		33.3	36.0
(4) 当てはまらない		26.4	31.1



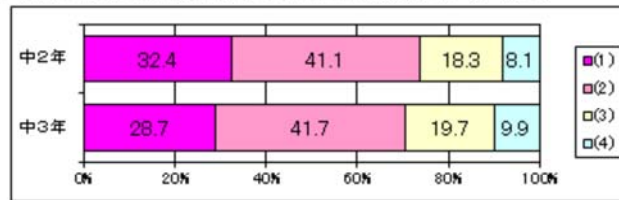
(36) 英語の授業で、身近な話題について自分の考えや気持ちなどを英語で書くことは難しい。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 難しいと思う		46.1	51.4
(2) どちらかといえば、難しいと思う		29.1	26.0
(3) どちらかといえば、難しいと思わない		16.9	14.7
(4) 難しいと思わない		7.9	7.9



(37) 英語の授業で英語を聞いたり読んだりするとき、大まかな流れや大切な部分をつかみながら聞いたり読んだりしている。(%)

	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる		32.4	28.7
(2) どちらかといえば、当てはまる		41.1	41.7
(3) どちらかといえば、当てはまらない		18.3	19.7
(4) 当てはまらない		8.1	9.9



最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

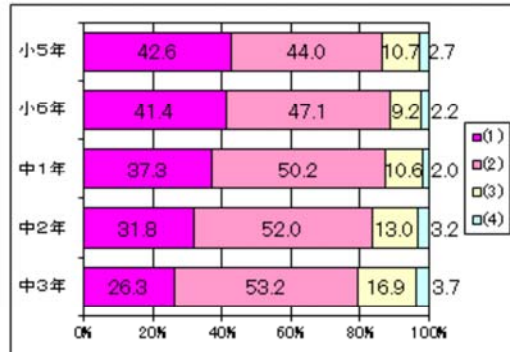
Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

児童生徒意識調査から見た佐賀県の学習者像

各教科の内容はよく分かりますか

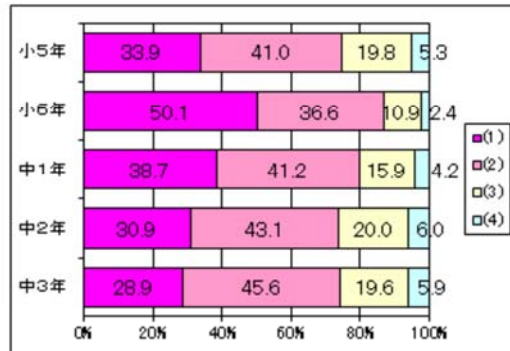
(19) 各教科の内容はよく分かちますか。ア 国語(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	42.6	41.4	37.3	31.8	26.3
(2) どちらかといえば、当てはまる	44.0	47.1	50.2	52.0	53.2
(3) どちらかといえば、当てはまらない	10.7	9.2	10.6	13.0	16.9
(4) 当てはまらない	2.7	2.2	2.0	3.2	3.7



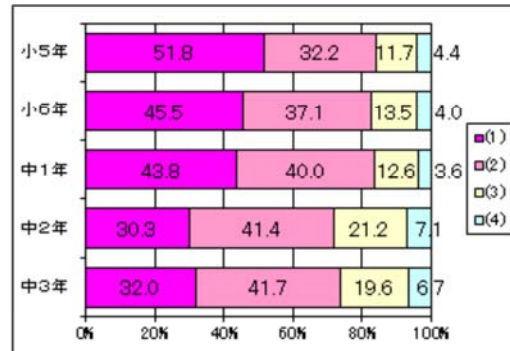
(19) 各教科の内容はよく分かちますか。イ 社会(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	33.9	50.1	38.7	30.9	28.9
(2) どちらかといえば、当てはまる	41.0	36.6	41.2	43.1	45.6
(3) どちらかといえば、当てはまらない	19.8	10.9	15.9	20.0	19.6
(4) 当てはまらない	5.3	2.4	4.2	6.0	5.9



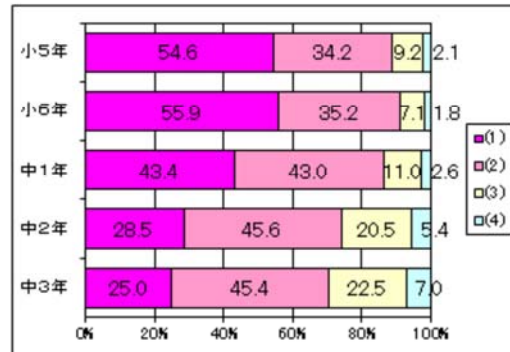
(19) 各教科の内容はよく分かちますか。ウ 算数・数学(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	51.8	45.5	43.8	30.3	32.0
(2) どちらかといえば、当てはまる	32.2	37.1	40.0	41.4	41.7
(3) どちらかといえば、当てはまらない	11.7	13.5	12.6	21.2	19.6
(4) 当てはまらない	4.4	4.0	3.6	7.1	6.7



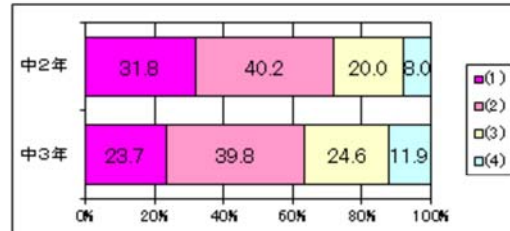
(19) 各教科の内容はよく分かちますか。エ 理科(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	54.6	55.9	43.4	28.5	25.0
(2) どちらかといえば、当てはまる	34.2	35.2	43.0	45.6	45.4
(3) どちらかといえば、当てはまらない	9.2	7.1	11.0	20.5	22.5
(4) 当てはまらない	2.1	1.8	2.6	5.4	7.0



(19) 各教科の内容はよく分かちますか。オ 英語(%)

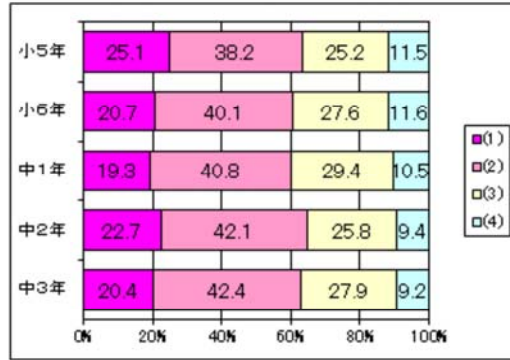
	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる				31.8	23.7
(2) どちらかといえば、当てはまる				40.2	39.8
(3) どちらかといえば、当てはまらない				20.0	24.6
(4) 当てはまらない				8.0	11.9



各教科の勉強は好きですか

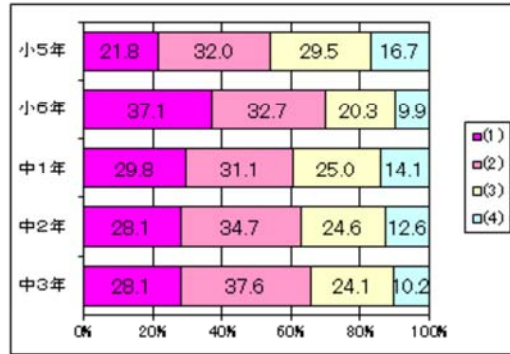
(18) 各教科の勉強は好きですか。ア 国語(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	25.1	20.7	19.3	22.7	20.4
(2) どちらかといえば、当てはまる	38.2	40.1	40.8	42.1	42.4
(3) どちらかといえば、当てはまらない	25.2	27.6	29.4	25.8	27.9
(4) 当てはまらない	11.5	11.6	10.5	9.4	9.2



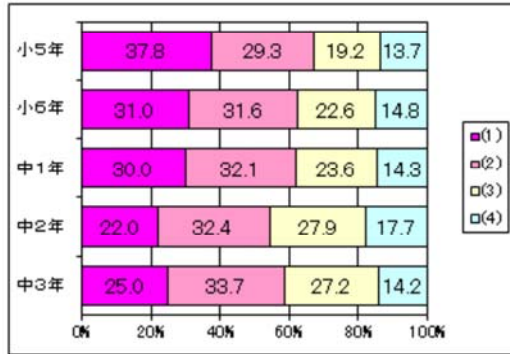
(18) 各教科の勉強は好きですか。イ 社会(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	21.8	37.1	29.8	28.1	28.1
(2) どちらかといえば、当てはまる	32.0	32.7	31.1	34.7	37.6
(3) どちらかといえば、当てはまらない	29.5	20.3	25.0	24.6	24.1
(4) 当てはまらない	16.7	9.9	14.1	12.6	10.2



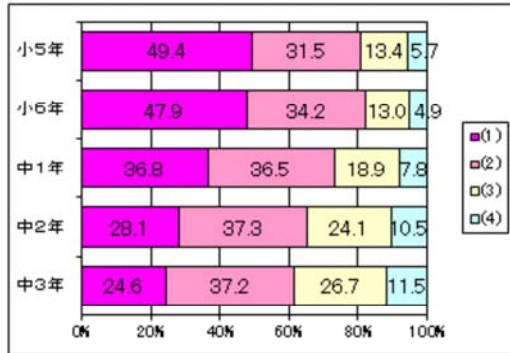
(18) 各教科の勉強は好きですか。ウ 算数・数学(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	37.8	31.0	30.0	22.0	25.0
(2) どちらかといえば、当てはまる	29.3	31.6	32.1	32.4	33.7
(3) どちらかといえば、当てはまらない	19.2	22.6	23.6	27.9	27.2
(4) 当てはまらない	13.7	14.8	14.3	17.7	14.2



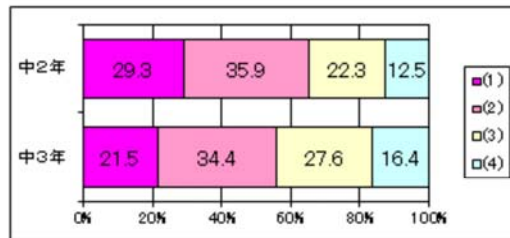
(18) 各教科の勉強は好きですか。エ 理科(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる	49.4	47.9	36.8	28.1	24.6
(2) どちらかといえば、当てはまる	31.5	34.2	36.5	37.3	37.2
(3) どちらかといえば、当てはまらない	13.4	13.0	18.9	24.1	26.7
(4) 当てはまらない	5.7	4.9	7.8	10.5	11.5



(18) 各教科の勉強は好きですか。オ 英語(%)

	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
(1) 当てはまる				29.3	21.5
(2) どちらかといえば、当てはまる				35.9	34.4
(3) どちらかといえば、当てはまらない				22.3	27.6
(4) 当てはまらない				12.5	16.4



最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

教師意識調査から見た佐賀県の教師像(小学校) ※数値は小数第一位で四捨五入している。→ 中学校はこちら
 小学校実施回答数 1234人

教科全般における指導法の工夫 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)

- 発展的課題を取り入れた授業
 - 多くの単元で行っている……………10%
 - 半分程度の単元で行っている……………21%
- 理解が十分でない児童への補足的指導
 - 多くの単元で行っている……………39%
 - 半分程度の単元で行っている……………22%
- レポートや作文など、表現する活動を取り入れた授業
 - 多くの単元で行っている……………17%
 - 半分程度の単元で行っている……………25%
- 表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業
 - 多くの単元で行っている……………46%
 - 半分程度の単元で行っている……………26%
- 身に付けさせたい力を意識した総合的な学習における指導
 - 行っている……………35%
 - どちらかといえば行っている……………59%
- 学習目標や評価規準を明確化した指導
 - 行っている……………31%
 - どちらかといえば行っている……………69%
- 学習内容や学習方法についてのきめ細やかな指導
 - 行っている……………30%
 - どちらかといえば行っている……………60%
- 学習形態を工夫したメリハリのある授業
 - 多くの単元で行っている……………42%
 - 半分程度の単元で行っている……………32%
- PDCAサイクルを踏まえた実践
 - 行っている……………15%
 - どちらかといえば行っている……………67%

教科の特性に応じた指導法の工夫 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)

- 国語**
 - 話したり聞いたりしたことを基に、自分の考えをもつような授業
 - 多くの単元で……………34%
 - 半分程度の単元で……………34%
 - 書き手の考えや表現の仕方について、自分の考えをもつような授業
 - 多くの単元で……………29%
 - 半分程度の単元で……………39%
 - 文章の内容や表現の仕方について、自分の考えをもつような授業
 - 多くの単元で……………35%
 - 半分程度の単元で……………40%
 - 年間を通して、言葉の特徴やきまりなどの指導を行っているか
 - 多くの単元で……………56%
 - 半分程度の単元で……………41%
- 社会**
 - 資料などから読み取ったことをまとめる活動を取り入れた授業
 - 多くの単元で……………19%
 - 半分程度の単元で……………30%
 - 資料などから読み取ったことを基に話し合うような授業
 - 多くの単元で……………14%
 - 半分程度の単元で……………27%
- 算数**
 - 算数的活動を通して課題を解決する授業
 - 多くの単元で……………60%
 - 半分程度の単元で……………24%
 - 問題解決的な学習を取り入れた授業
 - 多くの単元で……………58%
 - 半分程度の単元で……………25%
- 理科**
 - 児童が見通しをもち、観察や実験をするような授業
 - 多くの単元で……………72%
 - 半分程度の単元で……………21%
 - 実験結果やまとめにおいて、いろいろな考えを出し合う授業
 - 多くの単元で……………41%
 - 半分程度の単元で……………36%

学習環境の活用 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)

- コンピュータを活用した授業
 - 年20回以上……………24%
 - 年10～19回程度……………34%
- 【活用内容】**
 - インターネットを用いた調べ学習……………60%
 - 教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など……………22%
- 学校図書館を活用した授業
 - 年20回以上……………27%
 - 年10～19回程度……………22%
- 【活用内容】**
 - 読書指導・読書活動の場……………43%
 - 調べ学習の場……………48%



教師の指導観 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)

- 児童が勉強するよう日頃から指導すべき
 - そう思う……………82%
 - どちらかといえばそう思う……………18%
- 児童が規則を守るよう細かく指導すべき
 - そう思う……………78%
 - どちらかといえばそう思う……………21%
- 勉強のことで児童が気軽に話しかけられるようにすべき
 - そう思う……………93%
 - どちらかといえばそう思う……………7%
- 問題が起きた時、常に児童に意見を求めるべき
 - そう思う……………35%
 - どちらかといえばそう思う……………55%

家庭学習への関与状況 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)

- 宿題を出しているか
 - 多くの時間で宿題を出している……………57%
 - どちらかといえば出している方が多い……………23%
- 【宿題の内容】**

(「多くの時間で」どちらかといえば出している」を合わせた割合)

 - 予習的な内容の宿題を出している……………11%
 - 復習的な内容の宿題を出している……………84%
 - 調べたり書いたりする内容の宿題を出している……………42%
- 家庭での学習方法について、指導をしているか
 - 行っている……………32%
 - どちらかといえば行っている……………47%

学校組織マネジメントに対する意識 ←詳しいグラフは[ここをクリック](#)

- 学力向上や生徒指導など学校の方針を理解しているか
 - 理解している……………61%
 - どちらかといえば理解している……………38%
- 方針や教育内容についての共通理解が図られているか
 - そう思う……………49%
 - どちらかといえばそう思う……………47%
- 学校内に気軽に話し合える雰囲気があるか
 - そう思う……………63%
 - どちらかといえばそう思う……………33%

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

教師意識調査から見た佐賀県の教師像(中学校) ※数値は小数第一位で四捨五入している。→ 小学校はこちら

中学校実施回答数 967人

教科全般における指導法の工夫 ←詳しいグラフはここをクリック

- 発展的課題を取り入れた授業
 - 多くの単元で行っている……15%
 - 半分程度の単元で行っている……13%
- 理解が十分でない生徒への補足的指導
 - 多くの単元で行っている……16%
 - 半分程度の単元で行っている……11%
- レポートや作文など、表現する活動を取り入れた授業
 - 多くの単元で行っている……11%
 - 半分程度の単元で行っている……12%
- 表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業
 - 多くの単元で行っている……21%
 - 半分程度の単元で行っている……17%
- 身に付けさせたい力を意識した総合的な学習における指導
 - 行っている……26%
 - どちらかといえば行っている……58%
- 学習目標や評価規準を明確化した指導
 - 行っている……28%
 - どちらかといえば行っている……62%
- 学習内容や学習方法についてのきめ細やかな指導
 - 行っている……22%
 - どちらかといえば行っている……59%
- 学習形態を工夫したメリハリのある授業
 - 多くの単元で行っている……30%
 - 半分程度の単元で行っている……18%
- PDCAサイクルを踏まえた実践
 - 行っている……13%
 - どちらかといえば行っている……52%

教科の特性に応じた指導法の工夫 ←詳しいグラフはここをクリック

- 国語**
 - 話したり聞いたりしたことを基に、自分の考えをまとめる授業
 - 多くの単元で……19%
 - 半分程度の単元で……18%
 - 自分の思いや考えを書いて表現するような授業
 - 多くの単元で……29%
 - 半分程度の単元で……21%
 - 文章の内容や表現の仕方について、自分の考えをもつような授業
 - 多くの単元で……28%
 - 半分程度の単元で……23%
 - 国語の特質に関する事項を、日常生活に生かすような指導を行っているか
 - 多くの単元で……29%
 - 半分程度の単元で……63%
- 社会**
 - 資料などから読み取ったことをまとめる活動を取り入れた授業
 - 多くの単元で……6%
 - 半分程度の単元で……7%
 - 資料などから読み取ったことを基に話し合うような授業
 - 多くの単元で……10%
 - 半分程度の単元で……11%
- 数学**
 - 数学的活動を通して課題を解決する授業
 - 多くの単元で……22%
 - 半分程度の単元で……15%
 - 問題解決的な学習を取り入れた授業
 - 多くの単元で……19%
 - 半分程度の単元で……16%
- 理科**
 - 生徒が見通しをもち、観察や実験をするような授業
 - 多くの単元で……60%
 - 半分程度の単元で……20%
 - 実験結果やまとめにおいていろいろな考えを出し合う授業
 - 多くの単元で……34%
 - 半分程度の単元で……26%
- 英語**
 - スピーチをする活動を取り入れた授業
 - 多くの単元で……6%
 - 半分程度の単元で……9%
 - 自分の考えや気持ちなどを書く活動を取り入れた授業
 - 多くの単元で……16%
 - 半分程度の単元で……20%

学習環境の活用 ←詳しいグラフはここをクリック

- コンピュータを活用した授業
 - 年20回以上……6%
 - 年10～19回程度……5%
- 【活用内容】**
 - インターネットを用いた調べ学習……20%
 - 教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など……34%
- 学校図書館を活用した授業
 - 年20回以上……1%
 - 年10～19回程度……3%
- 【活用内容】**
 - 読書指導・読書活動の場……11%
 - 調べ学習の場……44%



教師の指導観 ←詳しいグラフはここをクリック

- 生徒が勉強するよう日頃から指導すべき
 - そう思う……71%
 - どちらかといえばそう思う……27%
- 生徒が規則を守るよう細かく指導すべき
 - そう思う……65%
 - どちらかといえばそう思う……33%
- 勉強のことで生徒が気軽に話しかけられるようにすべき
 - そう思う……81%
 - どちらかといえばそう思う……18%
- 問題が起こった時、常に生徒に意見を求めるべき
 - そう思う……20%
 - どちらかといえばそう思う……58%

家庭学習への関与状況 ←詳しいグラフはここをクリック

- 宿題を出しているか
 - 多くの時間で宿題を出している……33%
 - どちらかといえば出している方が多い……34%
- 【宿題の内容】**
 - 予習的な内容の宿題を出している……31%
 - 復習的な内容の宿題を出している……74%
 - 調べたり書いたりする内容の宿題を出している……30%
- 家庭での学習方法について、指導をしているか
 - 行っている……31%
 - どちらかといえば行っている……50%

学校組織マネジメントに対する意識 ←詳しいグラフはここをクリック

- 学力向上や生徒指導など学校の方針を理解しているか
 - 理解している……49%
 - どちらかといえば理解している……49%
- 方針や教育内容についての共通理解が図られているか
 - そう思う……32%
 - どちらかといえばそう思う……58%
- 学校内に気軽に話し合える雰囲気があるか
 - そう思う……44%
 - どちらかといえばそう思う……47%

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅱ 調査結果の概要

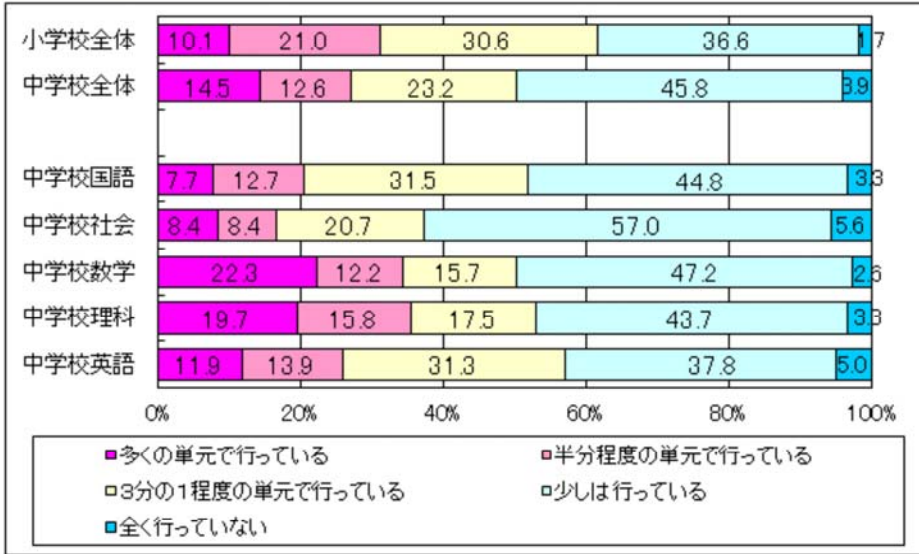
教師意識調査から見た佐賀県の教師像

小学校実施回答数 1,234人 中学校実施回答数 967人

教科全般における指導法の工夫

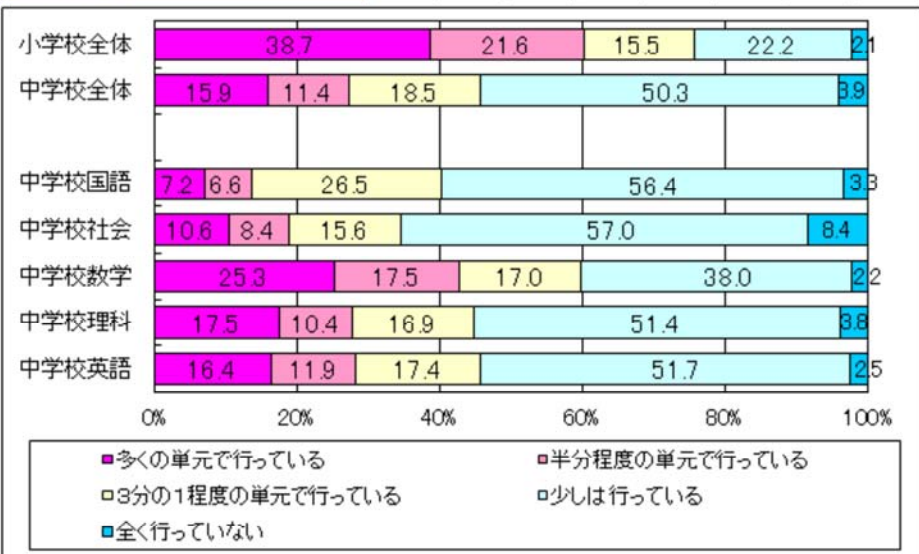
(11) 発展的な課題を取り入れた授業を行っていますか。

	小学校全体	中学校全体	中学校国語	中学校社会	中学校数学	中学校理科	中学校英語
多くの単元で行っている	10.1	14.5	7.7	8.4	22.3	19.7	11.9
半分程度の単元で行っている	21.0	12.6	12.7	8.4	12.2	15.8	13.9
3分の1程度の単元で行っている	30.6	23.2	31.5	20.7	15.7	17.5	31.3
少しは行っている	36.6	45.8	44.8	57.0	47.2	43.7	37.8
全く行っていない	1.7	3.9	3.3	5.6	2.6	3.3	5.0



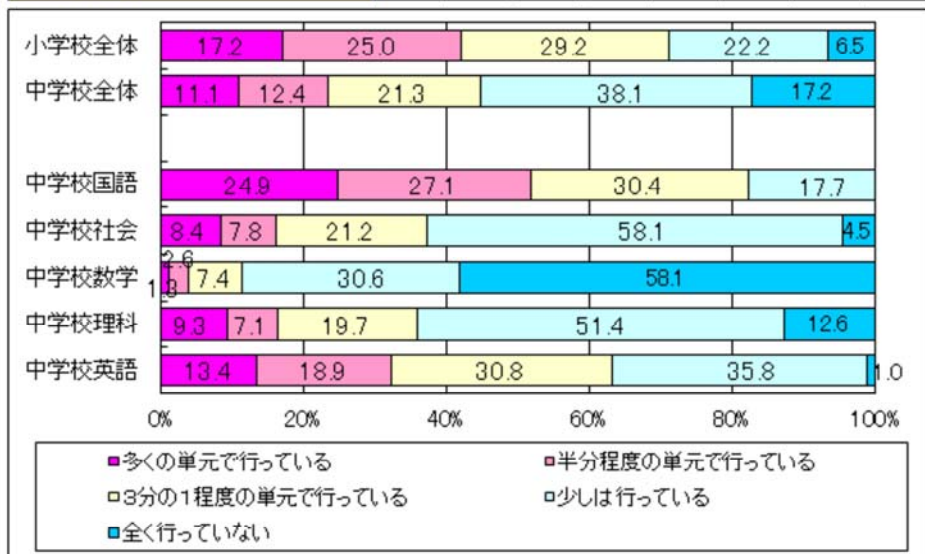
(12) 理解が十分でない児童・生徒に対し、授業の合間や放課後などに更に指導していますか。

	小学校全体	中学校全体	中学校国語	中学校社会	中学校数学	中学校理科	中学校英語
多くの単元で行っている	38.7	15.9	7.2	10.6	25.3	17.5	16.4
半分程度の単元で行っている	21.6	11.4	6.6	8.4	17.5	10.4	11.9
3分の1程度の単元で行っている	15.5	18.5	26.5	15.6	17.0	16.9	17.4
少しは行っている	22.2	50.3	56.4	57.0	38.0	51.4	51.7
全く行っていない	2.1	3.9	3.3	8.4	2.2	3.8	2.5



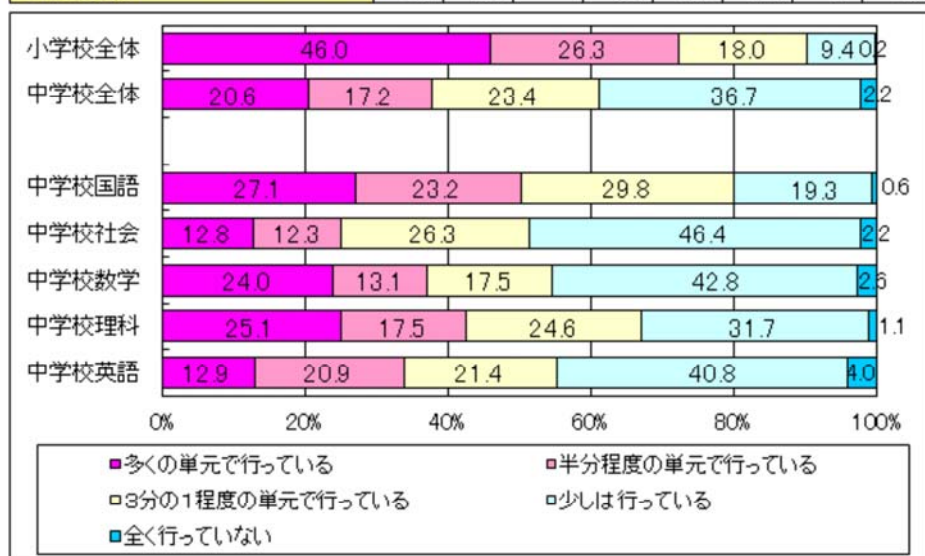
(13) レポートや作文など書いて表現する活動を取り入れた授業を行っていますか。

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの単元で行っている	17.2	11.1	24.9	8.4	1.3	9.3	13.4
半分程度の単元で行っている	25.0	12.4	27.1	7.8	2.6	7.1	18.9
3分の1程度の単元で行っている	29.2	21.3	30.4	21.2	7.4	19.7	30.8
少しは行っている	22.2	38.1	17.7	58.1	30.6	51.4	35.8
全く行っていない	6.5	17.2	0.0	4.5	58.1	12.6	1.0



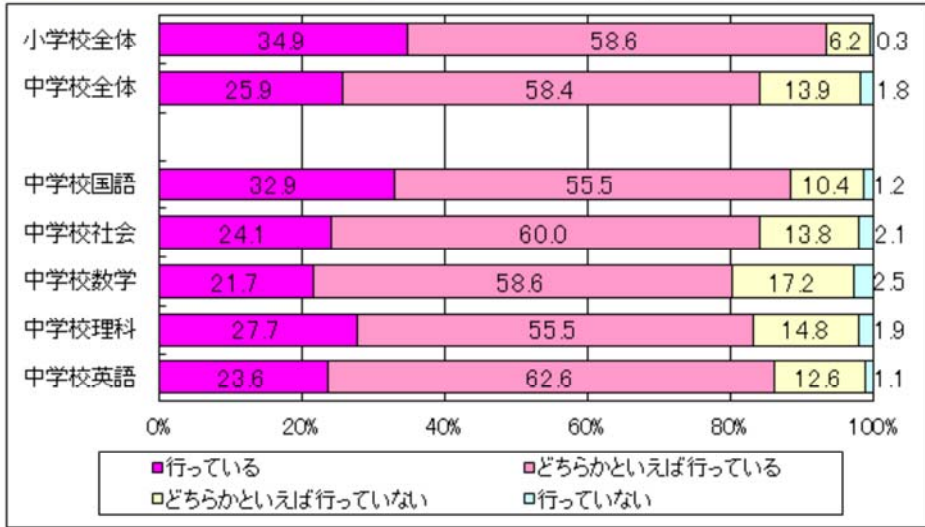
(14) 発表や話し合い活動など表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか。

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの単元で行っている	46.0	20.6	27.1	12.8	24.0	25.1	12.9
半分程度の単元で行っている	26.3	17.2	23.2	12.3	13.1	17.5	20.9
3分の1程度の単元で行っている	18.0	23.4	29.8	26.3	17.5	24.6	21.4
少しは行っている	9.4	36.7	19.3	46.4	42.8	31.7	40.8
全く行っていない	0.2	2.2	0.6	2.2	2.6	1.1	4.0



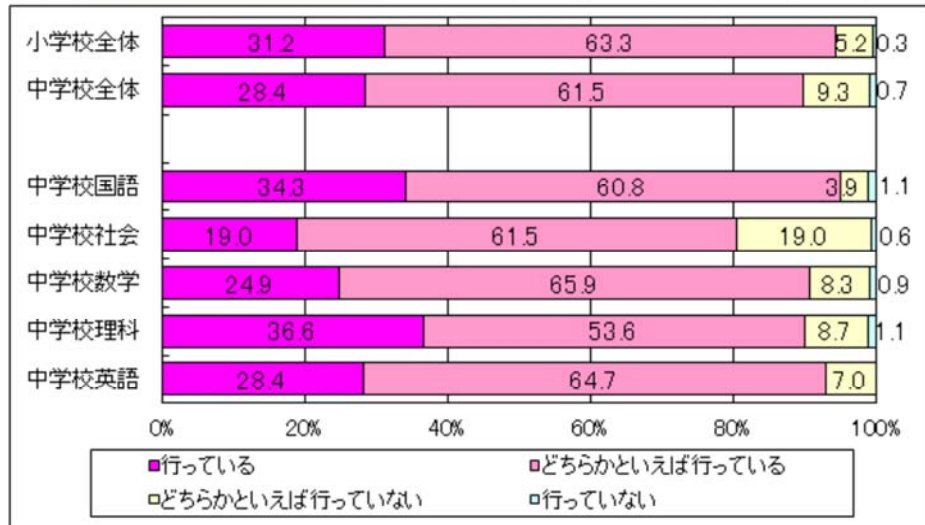
(15) 総合的な学習の時間においては、児童・生徒にどのような力を身につけさせるのかを意識した指導を行っていますか。

	小学校 全体	中学校 全体		中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
行っている	34.9	25.9		32.9	24.1	21.7	27.7	23.6
どちらかといえば行っている	58.6	58.4		55.5	60.0	58.6	55.5	62.6
どちらかといえば行っていない	6.2	13.9		10.4	13.8	17.2	14.8	12.6
行っていない	0.3	1.8		1.2	2.1	2.5	1.9	1.1

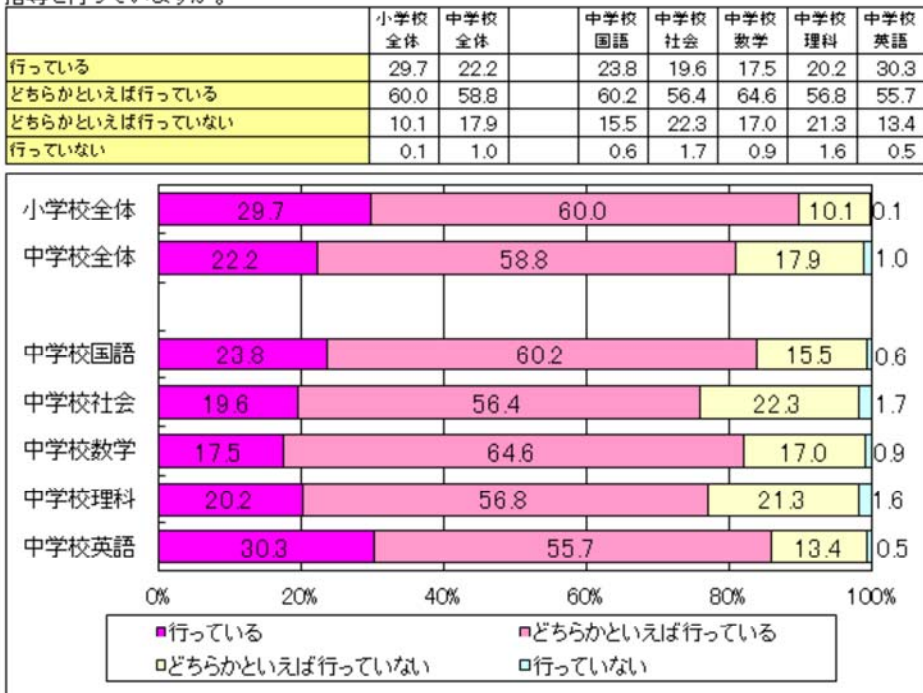


(16) 単元における学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や学習活動を指導計画に取り入れて指導を行っていますか。

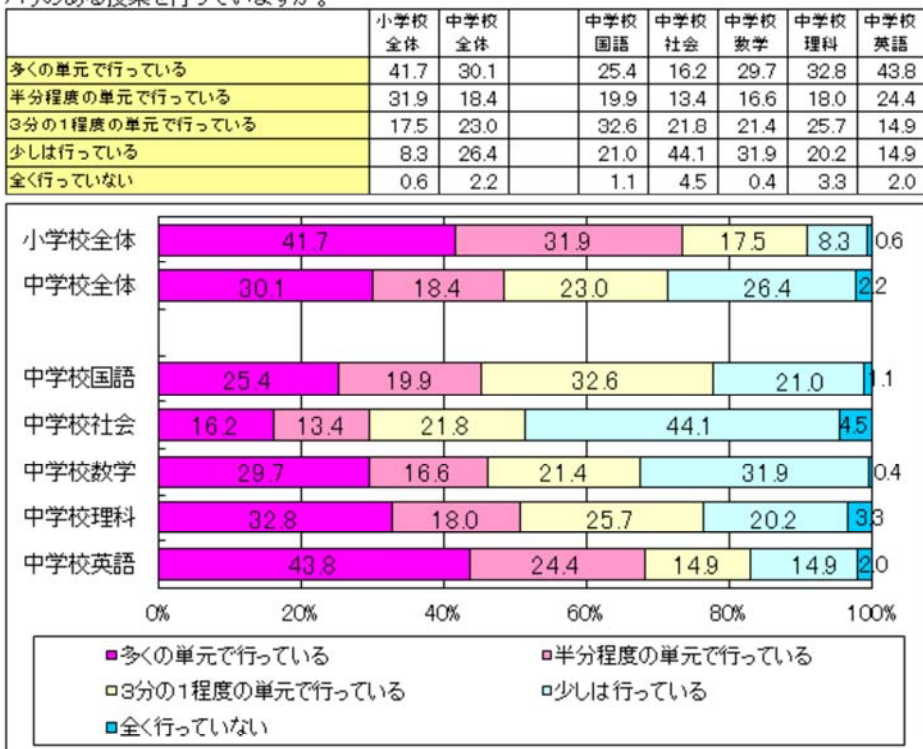
	小学校 全体	中学校 全体		中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
行っている	31.2	28.4		34.3	19.0	24.9	36.6	28.4
どちらかといえば行っている	63.3	61.5		60.8	61.5	65.9	53.6	64.7
どちらかといえば行っていない	5.2	9.3		3.9	19.0	8.3	8.7	7.0
行っていない	0.3	0.7		1.1	0.6	0.9	1.1	0.0



(17) ノートのまとめ方や話し合いの進め方など学習内容だけでなく学習方法についてもきめ細やかに指導を行っていますか。

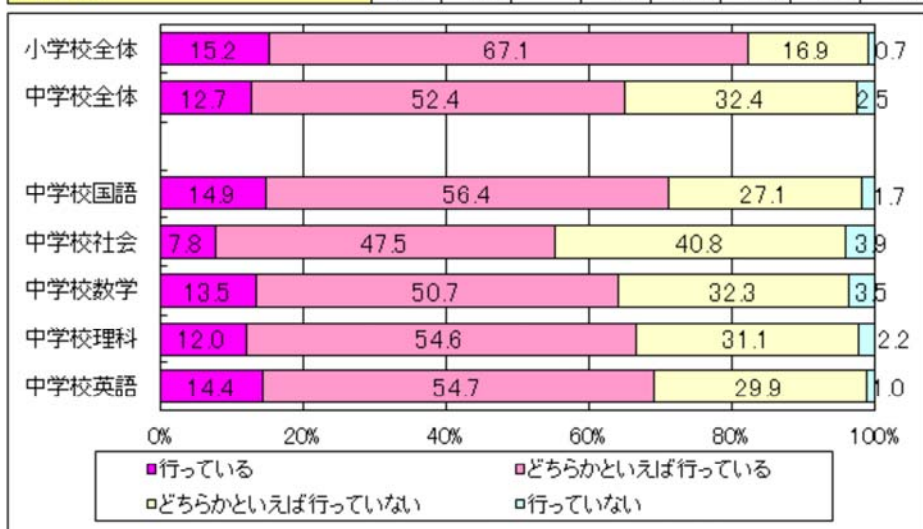


(18) 教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面とグループ活動やペア活動の形態を取り入れ、児童・生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業を行っていますか。



(19) 日常の授業や単元等の指導、学校における教育活動において、PDCAサイクルを踏まえた実践を行っていますか。

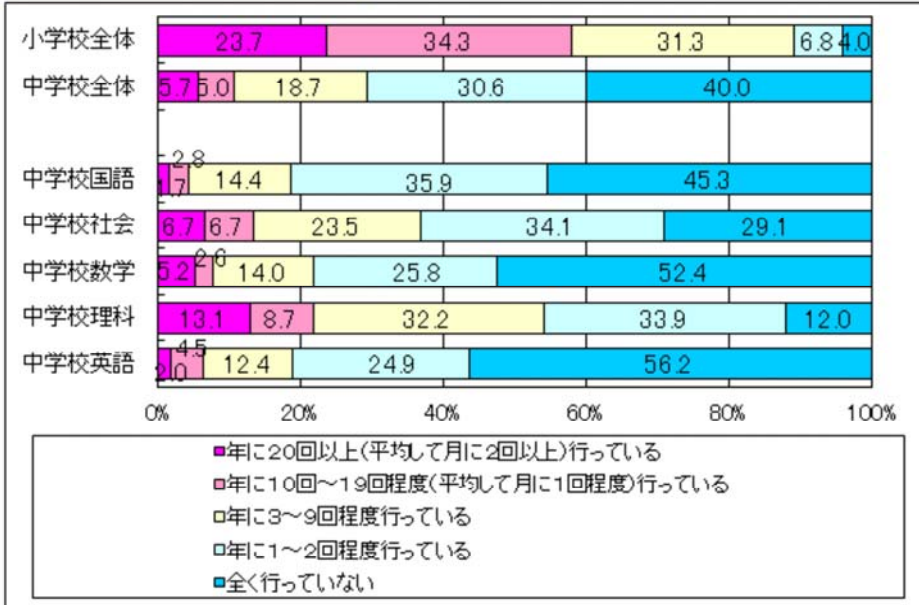
	小学校 全体	中学校 全体		中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
行っている	15.2	12.7		14.9	7.8	13.5	12.0	14.4
どちらかといえば行っている	67.1	52.4		56.4	47.5	50.7	54.6	54.7
どちらかといえば行っていない	16.9	32.4		27.1	40.8	32.3	31.1	29.9
行っていない	0.7	2.5		1.7	3.9	3.5	2.2	1.0



学習環境の活用

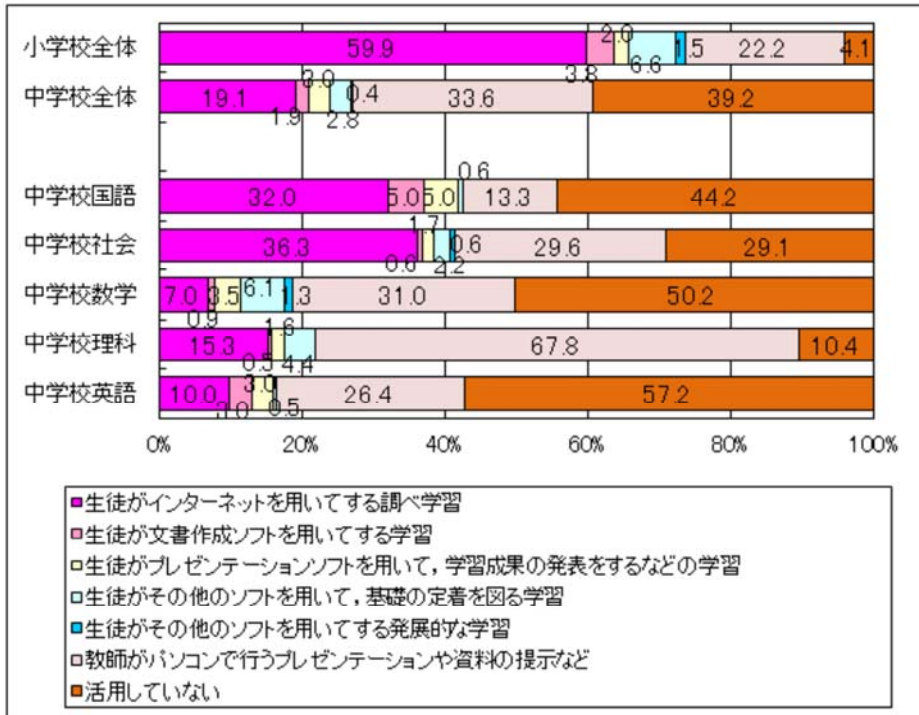
(7) コンピュータを活用した授業を行っていますか。

	小学校全体	中学校全体	中学校国語	中学校社会	中学校数学	中学校理科	中学校英語
年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている	23.7	5.7	1.7	6.7	5.2	13.1	2.0
年に10回～19回程度(平均して月に1回程度)行っている	34.3	5.0	2.8	6.7	2.6	8.7	4.5
年に3～9回程度行っている	31.3	18.7	14.4	23.5	14.0	32.2	12.4
年に1～2回程度行っている	6.8	30.6	35.9	34.1	25.8	33.9	24.9
全く行っていない	4.0	40.0	45.3	29.1	52.4	12.0	56.2



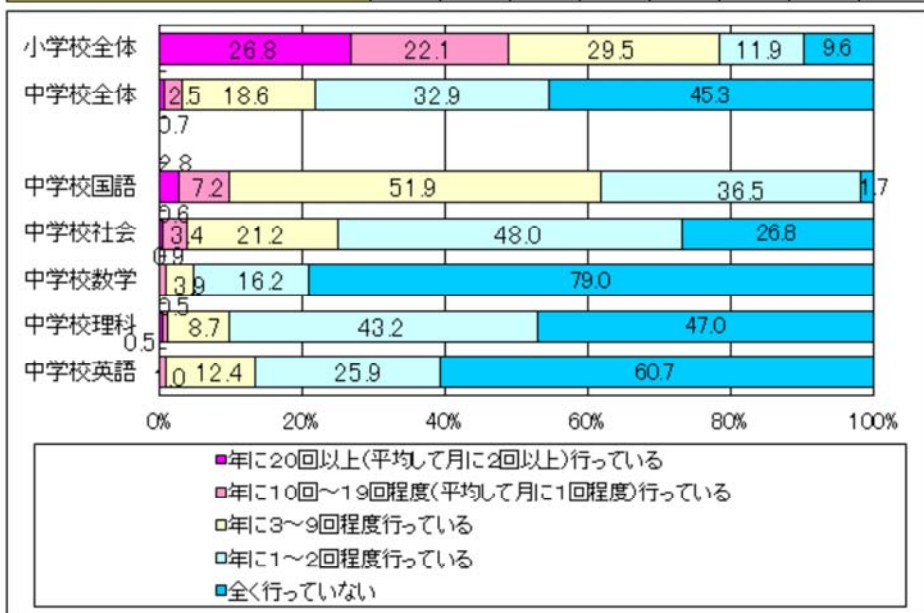
(8) 授業では、コンピュータを主にどのように活用していますか。

	小学校全体	中学校全体	中学校国語	中学校社会	中学校数学	中学校理科	中学校英語
生徒がインターネットを用いている調べ学習	59.9	19.1	32.0	36.3	7.0	15.3	10.0
生徒が文書作成ソフトを用いている学習	3.8	1.9	5.0	0.6	0.9	0.5	3.0
生徒がプレゼンテーションソフトを用いて、学習成果の発表をするなどの学習	2.0	3.0	5.0	1.7	3.5	1.6	3.0
生徒がその他のソフトを用いて、基礎の定着を図る学習	6.6	2.8	0.6	2.2	6.1	4.4	0.5
生徒がその他のソフトを用いている発展的な学習	1.5	0.4	0.0	0.6	1.3	0.0	0.0
教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など	22.2	33.6	13.3	29.6	31.0	67.8	26.4
活用していない	4.1	39.2	44.2	29.1	50.2	10.4	57.2



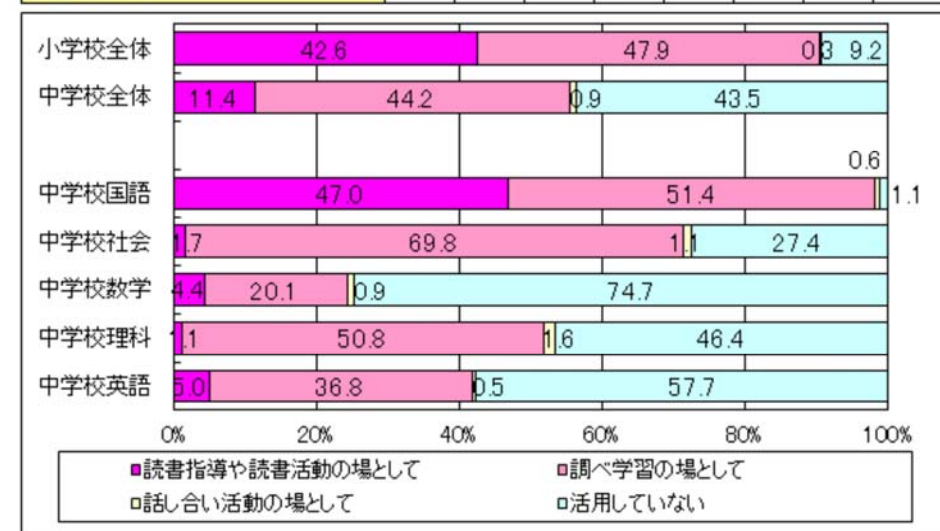
(9) 学校図書館を活用した授業を行っていますか。

	小学校全体	中学校全体	中学校国語	中学校社会	中学校数学	中学校理科	中学校英語
年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている	26.8	0.7	2.8	0.6	0.0	0.5	0.0
年に10回～19回程度(平均して月に1回程度)行っている	22.1	2.5	7.2	3.4	0.9	0.5	1.0
年に3～9回程度行っている	29.5	18.6	51.9	21.2	3.9	8.7	12.4
年に1～2回程度行っている	11.9	32.9	36.5	48.0	16.2	43.2	25.9
全く行っていない	9.6	45.3	1.7	26.8	79.0	47.0	60.7



(10) 授業では、学校図書館を主にどのように活用していますか。

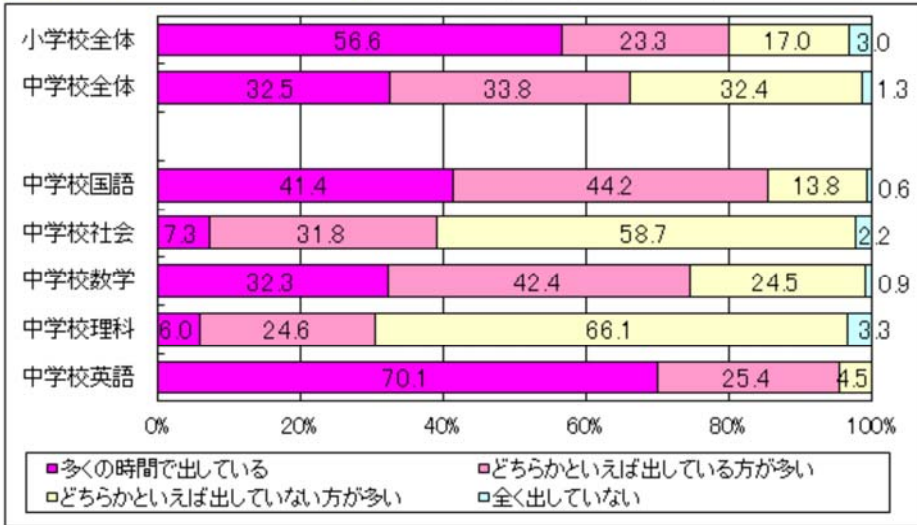
	小学校全体	中学校全体	中学校国語	中学校社会	中学校数学	中学校理科	中学校英語
読書指導や読書活動の場として	42.6	11.4	47.0	1.7	4.4	1.1	5.0
調べ学習の場として	47.9	44.2	51.4	69.8	20.1	50.8	36.8
話し合い活動の場として	0.3	0.9	0.6	1.1	0.9	1.6	0.5
活用していない	9.2	43.5	1.1	27.4	74.7	46.4	57.7



家庭学習への関与状況

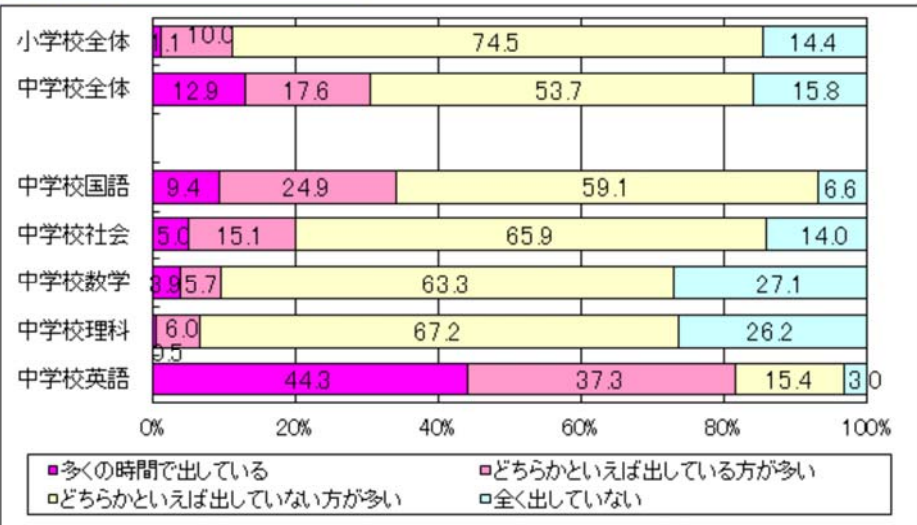
(2) 宿題を出していますか。

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの時間で出している	56.6	32.5	41.4	7.3	32.3	6.0	70.1
どちらかといえば出している方が多い	23.3	33.8	44.2	31.8	42.4	24.6	25.4
どちらかといえば出していない方が多い	17.0	32.4	13.8	58.7	24.5	66.1	4.5
全く出していない	3.0	1.3	0.6	2.2	0.9	3.3	0.0



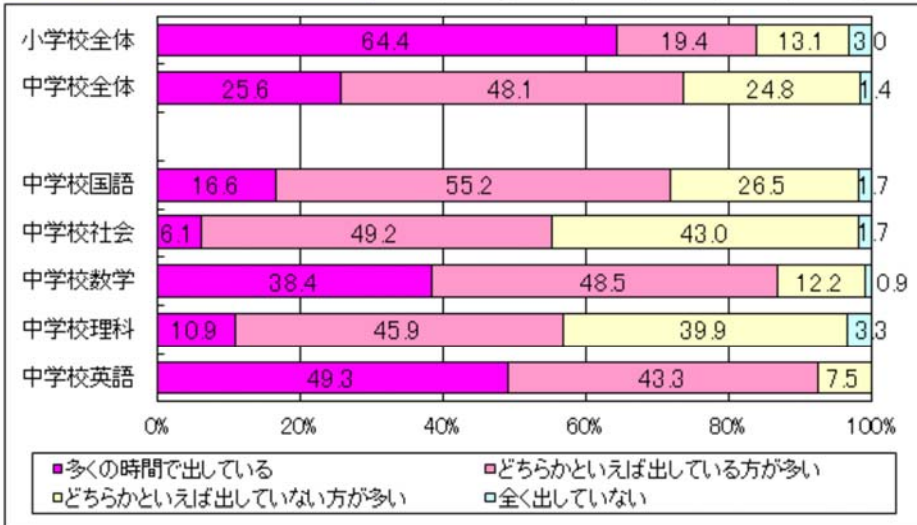
(3) 予習的な宿題を出していますか。

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの時間で出している	1.1	12.9	9.4	5.0	3.9	0.5	44.3
どちらかといえば出している方が多い	10.0	17.6	24.9	15.1	5.7	6.0	37.3
どちらかといえば出していない方が多い	74.5	53.7	59.1	65.9	63.3	67.2	15.4
全く出していない	14.4	15.8	6.6	14.0	27.1	26.2	3.0



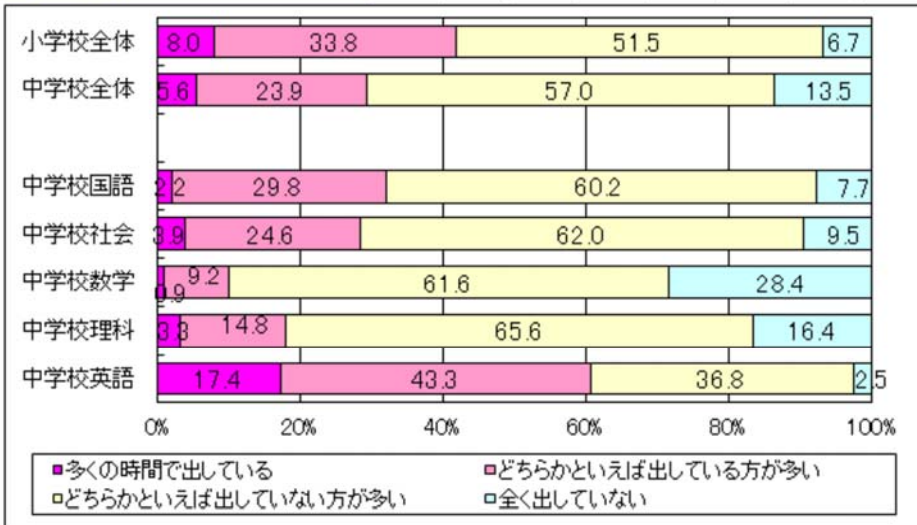
(4) 復習的な宿題を出していますか。

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの時間で出している	64.4	25.6	16.6	6.1	38.4	10.9	49.3
どちらかといえば出している方が多い	19.4	48.1	55.2	49.2	48.5	45.9	43.3
どちらかといえば出していない方が多い	13.1	24.8	26.5	43.0	12.2	39.9	7.5
全く出していない	3.0	1.4	1.7	1.7	0.9	3.3	0.0



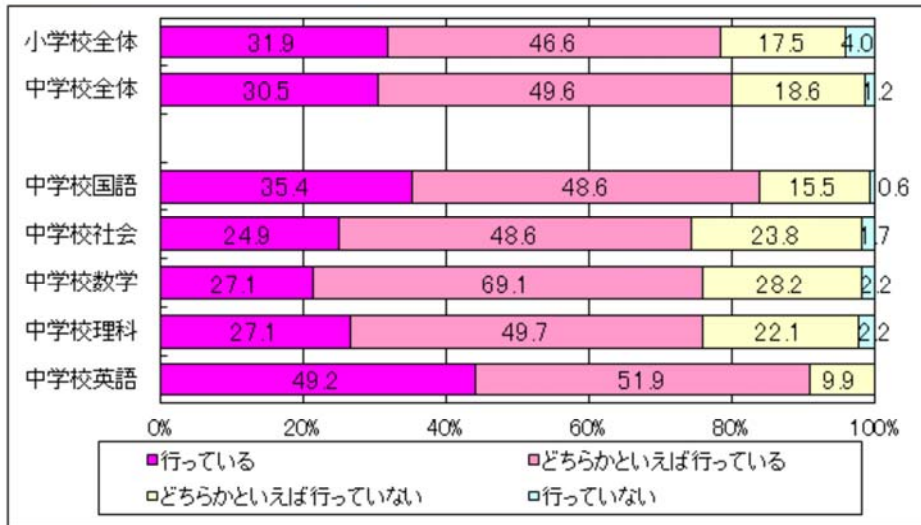
(5) 調べたり文章を書いたりする内容の宿題を出していますか。

	小学校 全体	中学校 全体	中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
多くの時間で出している	8.0	5.6	2.2	3.9	0.9	3.3	17.4
どちらかといえば出している方が多い	33.8	23.9	29.8	24.6	9.2	14.8	43.3
どちらかといえば出していない方が多い	51.5	57.0	60.2	62.0	61.6	65.6	36.8
全く出していない	6.7	13.5	7.7	9.5	28.4	16.4	2.5



(6) 家庭での学習方法について、具体例を挙げながら指導していますか。

	小学校 全体	中学校 全体		中学校 国語	中学校 社会	中学校 数学	中学校 理科	中学校 英語
行っている	31.9	30.5		35.4	24.9	27.1	27.1	49.2
どちらかといえば行っている	46.6	49.6		48.6	48.6	69.1	49.7	51.9
どちらかといえば行っていない	17.5	18.6		15.5	23.8	28.2	22.1	9.9
行っていない	4.0	1.2		0.6	1.7	2.2	2.2	0.0



教科の特性に応じた指導法の工夫

(20) 国語で、話したり聞いたりしたことをもとに、自分の考えをもつことができるような活動を取り入れた授業を行っていますか。(小学校)

(20) 国語で、目的や場面に応じて、話したり聞いたりしたことをもとに自分の考えをまとめる活動を取り入れた授業を行っていますか。(中学校)

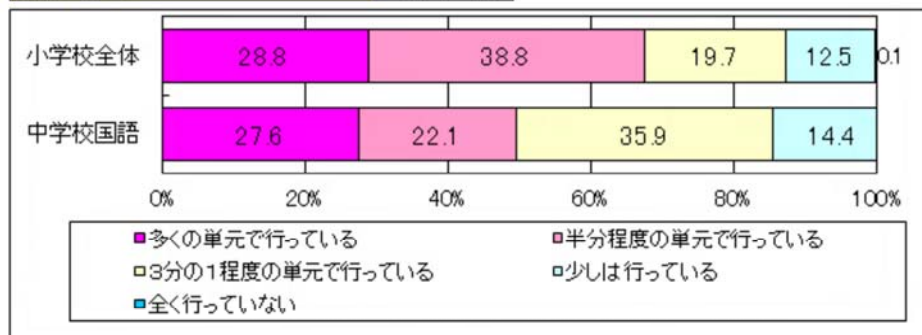
	小学校 全体	中学校 国語
多くの単元で行っている	33.6	17.7
半分程度の単元で行っている	34.2	17.7
3分の1程度の単元で行っている	21.3	37.0
少しは行っている	10.5	27.1
全く行っていない	0.3	0.6



(21) 国語で、書き手の考えや表現の仕方について、自分の考えをもつことができるような活動を取り入れた授業を行っていますか。(小学校)

(21) 国語で、目的や意図に応じて、自分の思いや考えを書いて表現する活動を取り入れた授業を行っていますか。(中学校)

	小学校 全体	中学校 国語
多くの単元で行っている	28.8	27.6
半分程度の単元で行っている	38.8	22.1
3分の1程度の単元で行っている	19.7	35.9
少しは行っている	12.5	14.4
全く行っていない	0.1	0.0



(22) 国語で、文章の内容や表現の仕方に注意して読み、それについての自分の考えをもつことができるような活動を取り入れた授業を行っていますか。(小学校)

(22) 国語で、目的や意図に応じて、文章の内容や表現の仕方に注意して読み、それについての自分の考えをもつ活動を取り入れた授業を行っていますか。(中学校)

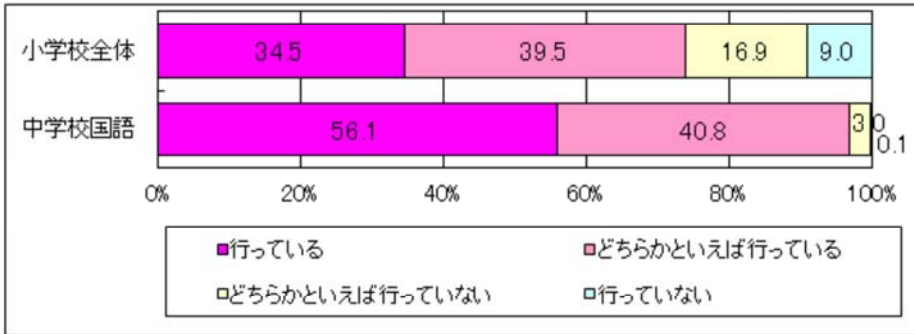
	小学校 全体	中学校 国語
多くの単元で行っている	34.5	27.1
半分程度の単元で行っている	39.5	23.8
3分の1程度の単元で行っている	16.9	30.9
少しは行っている	9.0	17.7
全く行っていない	0.0	0.6



(23) 国語で、言葉の特徴やきまり、文字などの指導を、年間を通して繰り返し行っていますか。(小学校)

(23) 国語で、言葉の特徴やきまり、漢字などの国語の特質に関する事項の学習を、日常生活に生かすことができるような指導を行っていますか。(中学校)

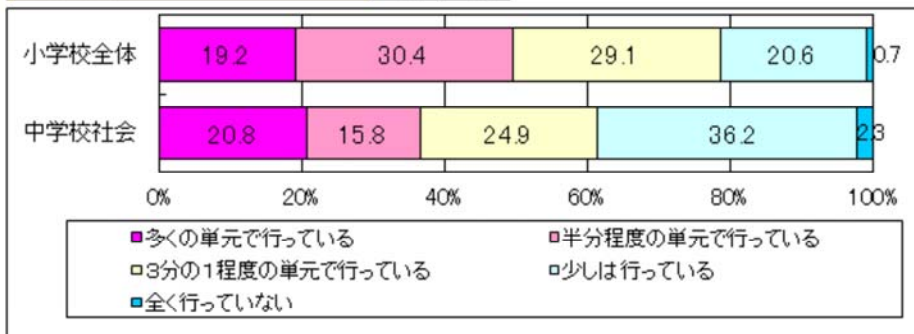
	小学校 全体	中学校 国語
行っている	34.5	56.1
どちらかといえば行っている	39.5	40.8
どちらかといえば行っていない	16.9	3.0
行っていない	9.0	0.1



(24) 社会で、児童が資料などから読み取ったことを基に、新聞のような形式でノートや広用紙にまとめる活動を取り入れた授業を行っていますか。(小学校)

(24) 社会で、生徒が資料などから読み取ったことを基に、新聞やレポートのような形式でノートや広用紙にまとめる活動を取り入れた授業を行っていますか。(中学校)

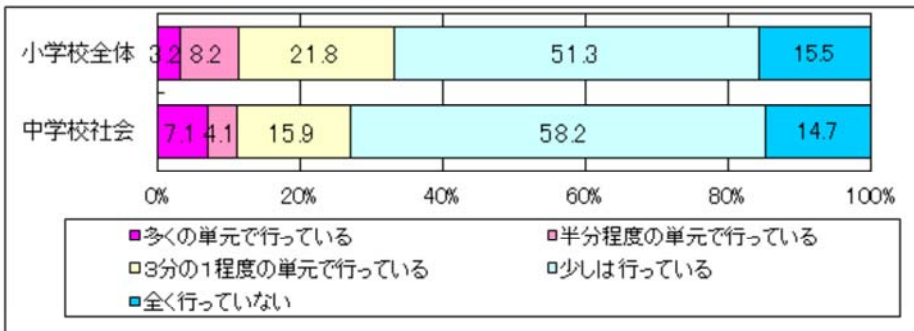
	小学校 全体	中学校 社会
多くの単元で行っている	19.2	20.8
半分程度の単元で行っている	30.4	15.8
3分の1程度の単元で行っている	29.1	24.9
少しは行っている	20.6	36.2
全く行っていない	0.7	2.3



(25) 社会で、児童が資料などから読み取ったことを基にして考えたことを、話し合う活動を取り入れた授業を行っていますか。(小学校)

(25) 社会で、生徒が資料などから読み取ったことを基にして考えたことを、話し合う討論活動を取り入れた授業を行っていますか。(中学校)

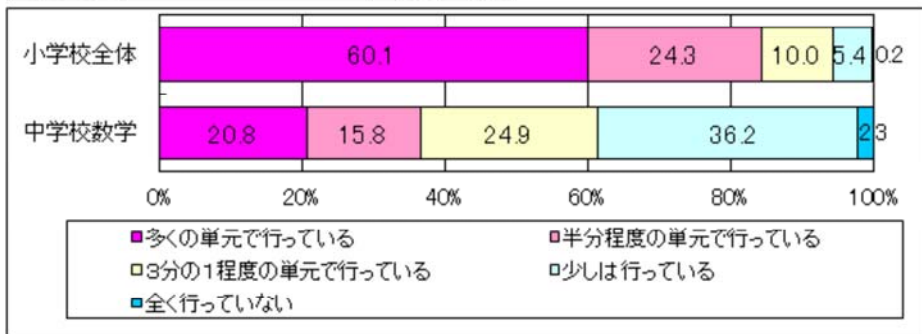
	小学校 全体	中学校 社会
多くの単元で行っている	3.2	7.1
半分程度の単元で行っている	8.2	4.1
3分の1程度の単元で行っている	21.8	15.9
少しは行っている	51.3	58.2
全く行っていない	15.5	14.7



(26) 算数で、算数的活動を通して課題を解決する授業を行っていますか。(小学校)

(26) 数学で、数学的活動を通して課題を解決する授業を行っていますか。(中学校)

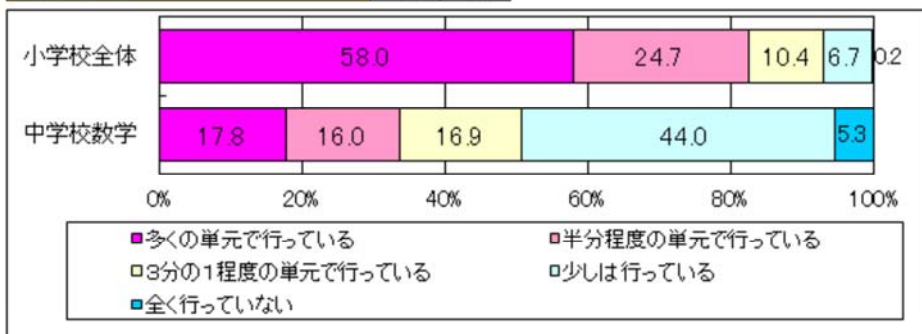
	小学校 全体	中学校 数学
多くの単元で行っている	60.1	20.8
半分程度の単元で行っている	24.3	15.8
3分の1程度の単元で行っている	10.0	24.9
少しは行っている	5.4	36.2
全く行っていない	0.2	2.3



(27) 算数で、児童が問題について自分なりに考え、それを出し合っ問題解決的な学習を取り入れた授業を行っていますか。(小学校)

(27) 数学で、生徒が問題について自分なりに考え、それを出し合っ問題解決的な学習を取り入れた授業を行っていますか。(中学校)

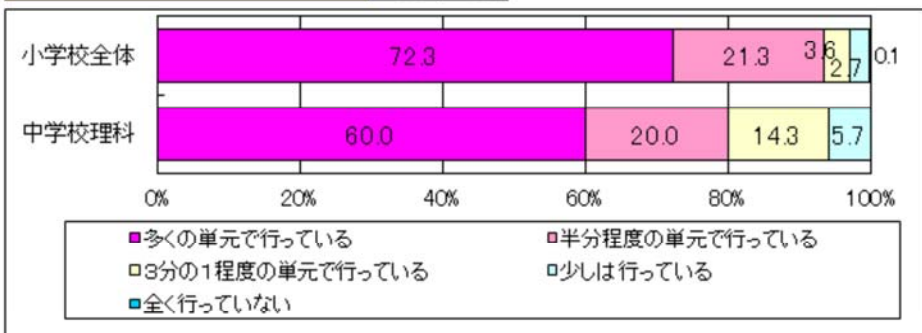
	小学校 全体	中学校 数学
多くの単元で行っている	58.0	17.8
半分程度の単元で行っている	24.7	16.0
3分の1程度の単元で行っている	10.4	16.9
少しは行っている	6.7	44.0
全く行っていない	0.2	5.3



(28) 理科で、児童がどのような結果が予想されるかの見通しをもち、観察や実験をするような授業を行っていますか。(小学校)

(28) 理科で、生徒がどのような結果が予想されるかの見通しをもち、観察や実験をするような授業を行っていますか。(中学校)

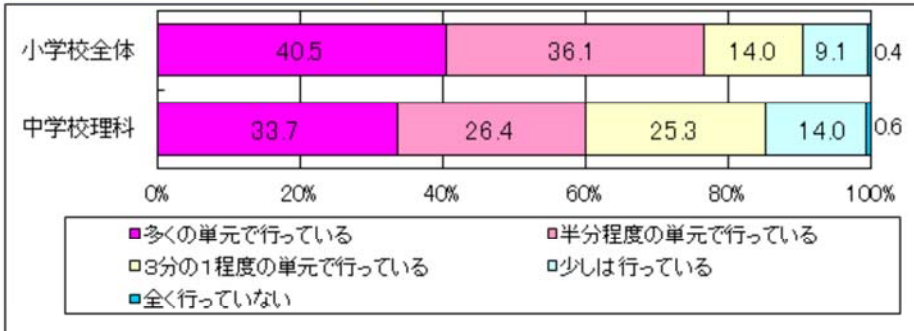
	小学校 全体	中学校 理科
多くの単元で行っている	72.3	60.0
半分程度の単元で行っている	21.3	20.0
3分の1程度の単元で行っている	3.6	14.3
少しは行っている	2.7	5.7
全く行っていない	0.1	0.0



(29) 理科で、実験結果やまとめの発表において、児童がお互いにいろいろな考えを話し合い、検討し合うような授業を行っていますか。(小学校)

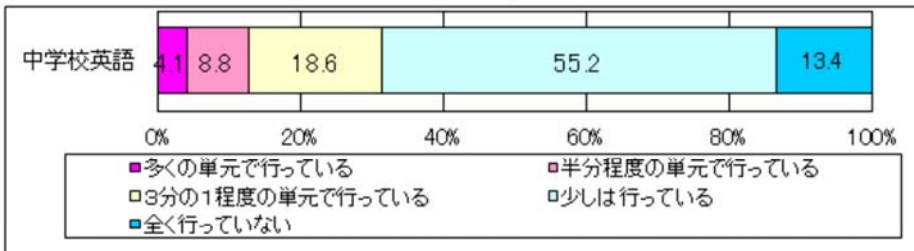
(29) 理科で、実験結果やまとめの発表において、生徒がお互いにいろいろな考えを話し合い、検討し合うような授業を行っていますか。(中学校)

	小学校全体	中学校理科
多くの単元で行っている	40.5	33.7
半分程度の単元で行っている	36.1	26.4
3分の1程度の単元で行っている	14.0	25.3
少しは行っている	9.1	14.0
全く行っていない	0.4	0.6



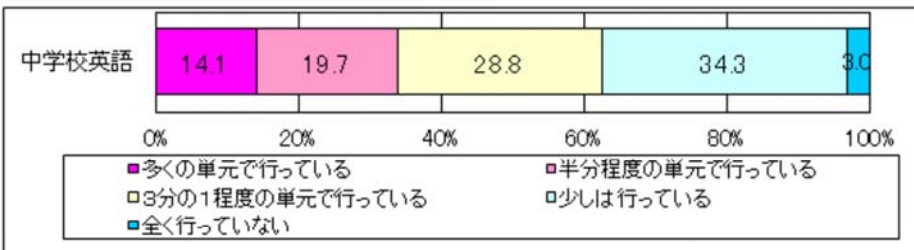
(30) 英語で、与えられたテーマについて簡単なスピーチをする活動を取り入れた授業を行っていますか。(中学校)

	小学校全体	中学校英語
多くの単元で行っている		4.1
半分程度の単元で行っている		8.8
3分の1程度の単元で行っている		18.6
少しは行っている		55.2
全く行っていない		13.4



(31) 英語で、身近な話題について自分の考えや気持ちなどを書く活動を取り入れた授業を行っていますか。(中学校)

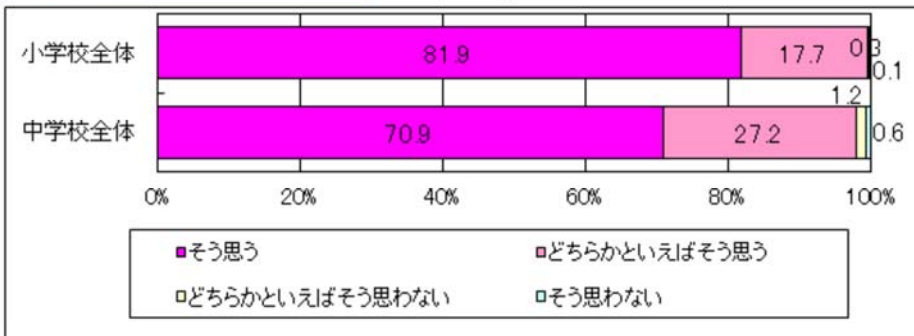
	小学校全体	中学校英語
多くの単元で行っている		14.1
半分程度の単元で行っている		19.7
3分の1程度の単元で行っている		28.8
少しは行っている		34.3
全く行っていない		3.0



教師の指導観

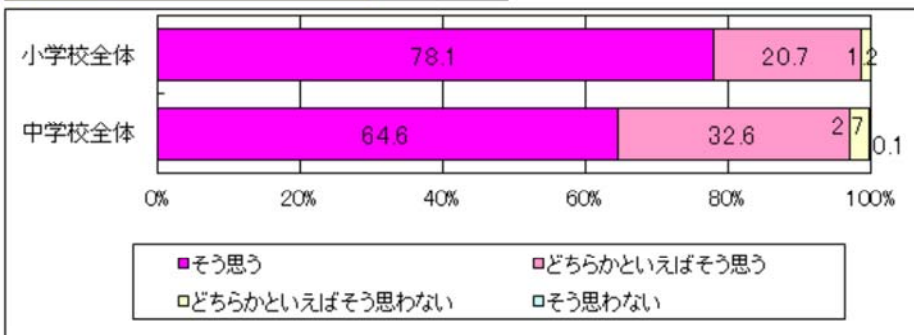
- (30) 教師は、児童ができるだけ勉強するよう、日頃から指導すべきだと思いますか。(小学校)
 (32) 教師は、生徒ができるだけ勉強するよう、日頃から指導すべきだと思いますか。(中学校)

	小学校 全体	中学校 全体
そう思う	81.9	70.9
どちらかといえばそう思う	17.7	27.2
どちらかといえばそう思わない	0.3	1.2
そう思わない	0.1	0.6



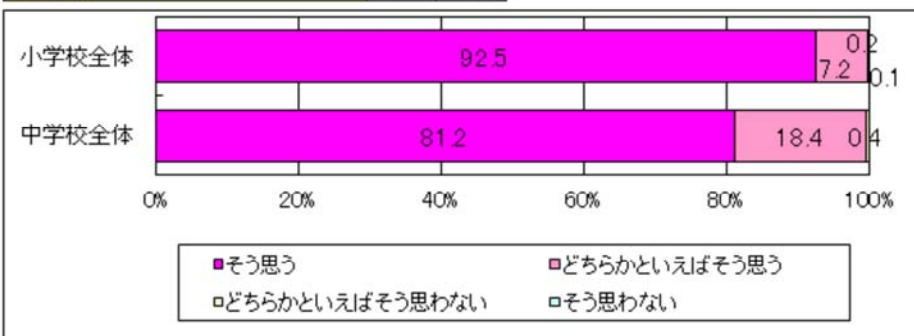
- (31) 教師は、児童が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思いますか。(小学校)
 (33) 教師は、生徒が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思いますか。(中学校)

	小学校 全体	中学校 全体
そう思う	78.1	64.6
どちらかといえばそう思う	20.7	32.6
どちらかといえばそう思わない	1.2	2.7
そう思わない	0.0	0.1



- (32) 教師は、勉強のことで児童がいつでも気軽に話しかけられるようにすべきだと思いますか。(小学校)
 (34) 教師は、勉強のことで生徒がいつでも気軽に話しかけられるようにすべきだと思いますか。(中学校)

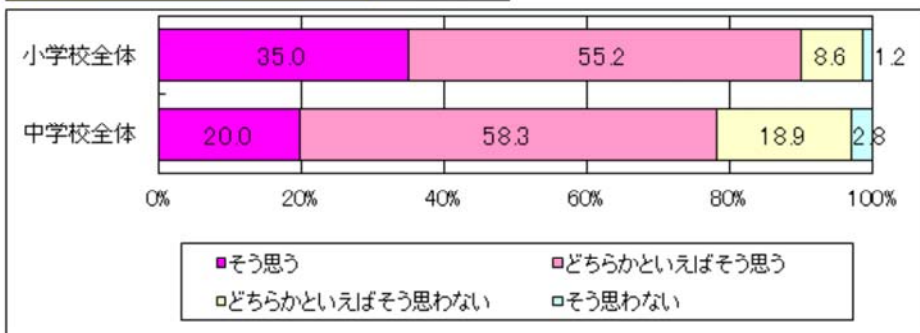
	小学校 全体	中学校 全体
そう思う	92.5	81.2
どちらかといえばそう思う	7.2	18.4
どちらかといえばそう思わない	0.2	0.4
そう思わない	0.1	0.0



(33) 教師は、勉強のことで児童がいつでも気軽に話しかけられるようにすべきだと思いますか。(小学校)

(35) 教師は、勉強のことで生徒がいつでも気軽に話しかけられるようにすべきだと思いますか。(中学校)

	小学校 全体	中学校 全体
そう思う	35.0	20.0
どちらかといえばそう思う	55.2	58.3
どちらかといえばそう思わない	8.6	18.9
そう思わない	1.2	2.8

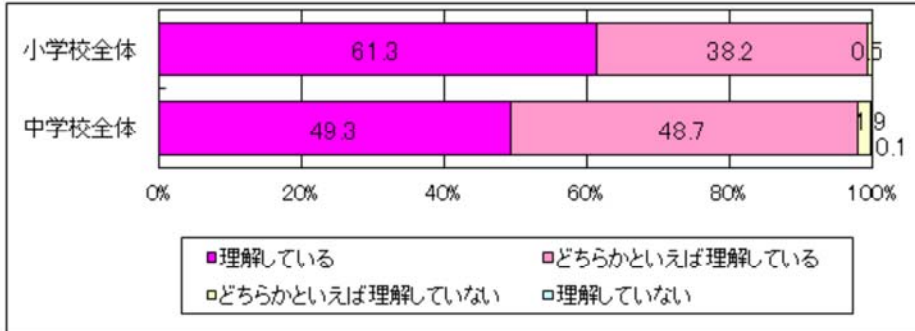


学校組織マネジメントに対する意識

(34) あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか。(小学校)

(36) あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか。(中学校)

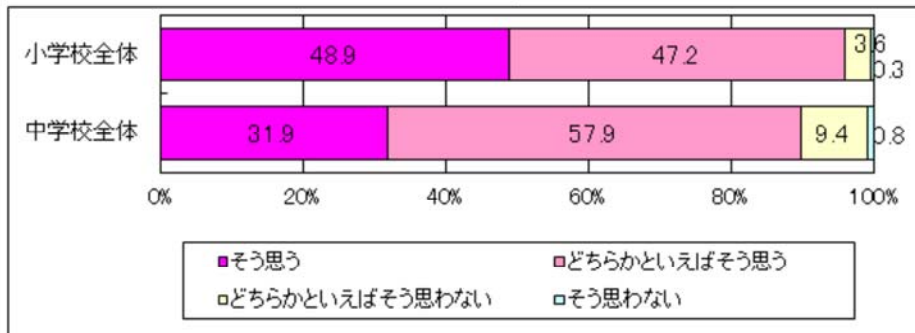
	小学校全体	中学校全体
理解している	61.3	49.3
どちらかといえば理解している	38.2	48.7
どちらかといえば理解していない	0.5	1.9
理解していない	0.0	0.1



(35) あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか。(小学校)

(37) あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか。(中学校)

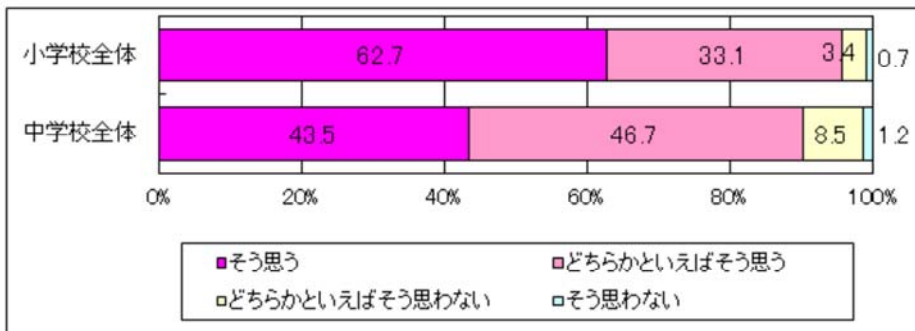
	小学校全体	中学校全体
そう思う	48.9	31.9
どちらかといえばそう思う	47.2	57.9
どちらかといえばそう思わない	3.6	9.4
そう思わない	0.3	0.8



(36) あなたの学校では、指導の在り方や課題などについて、気軽に話し合える雰囲気がありますか。(小学校)

(38) あなたの学校では、指導の在り方や課題などについて、気軽に話し合える雰囲気がありますか。(中学校)

	小学校全体	中学校全体
そう思う	62.7	43.5
どちらかといえばそう思う	33.1	46.7
どちらかといえばそう思わない	3.4	8.5
そう思わない	0.7	1.2



平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科の調査結果の分析 > 小学校国語

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

- ※ 中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。
- ※ 本報告書「Ⅱ 調査結果の概要」には、小6国語についても、参考のために、便宜上、到達基準を設定しているが、この項の小6国語においては、到達基準を基にした分析を行っていない。

小学校国語

「書くこと」における学習の系統性を重視した指導の工夫を

小学6年生では、「話すこと・聞くこと」の内容・領域、評価の観点の他は、実施時の全国の正答率を上回った。小学5年生と中学1年生では、「書くこと」の内容・領域、評価の観点の他は、「おおむね達成」の基準を上回った。中学1年生の「話すこと・聞くこと」「言語についての知識・理解・技能」においては、「十分達成」の基準を上回った。「言語事項(漢字の読み)」においては、小学5年生、中学1年生ともに「十分達成」を上回った。しかし、小学5年生、中学1年生ともに、「書くこと」の「様式や条件に合わせて書くこと」に課題が見られた。今後は「書くこと」における学習の系統性を重視した指導の工夫が必要である。

国語科においては、評価の観点と内容・領域が重なるという教科の特質上、以下のように記す。

- | | |
|------------------|-------------------------|
| ○国語への関心・意欲・態度 | → 「関心・意欲・態度」(小学6年生のみ設定) |
| ○話す・聞く能力 | → 「話す・聞く」 |
| ○書く能力 | → 「書く」 |
| ○読む能力 | → 「読む」 |
| ○言語についての知識・理解・技能 | → 「知識・理解・技能」 |

ア 結果の概要

各学年ごとに教科全体の正答率について到達基準との比較を示す。

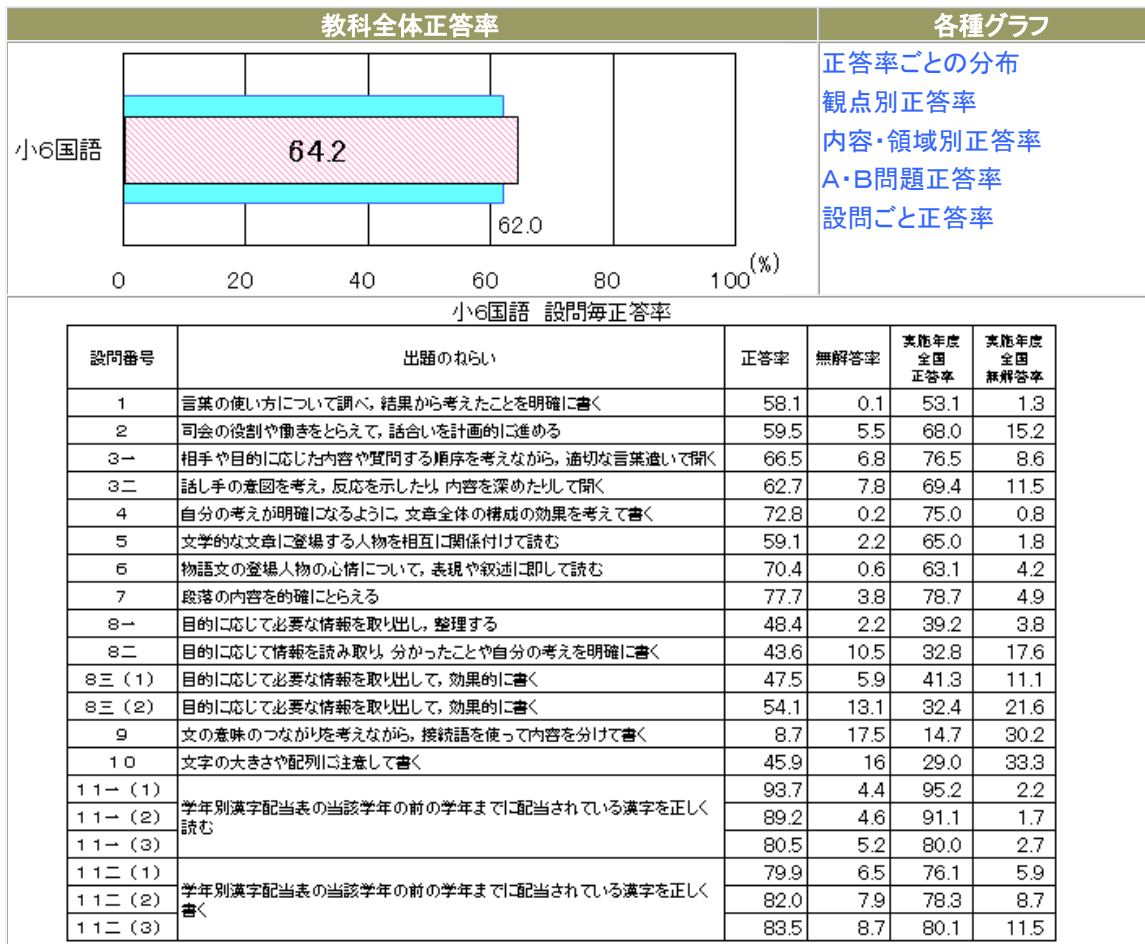
(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

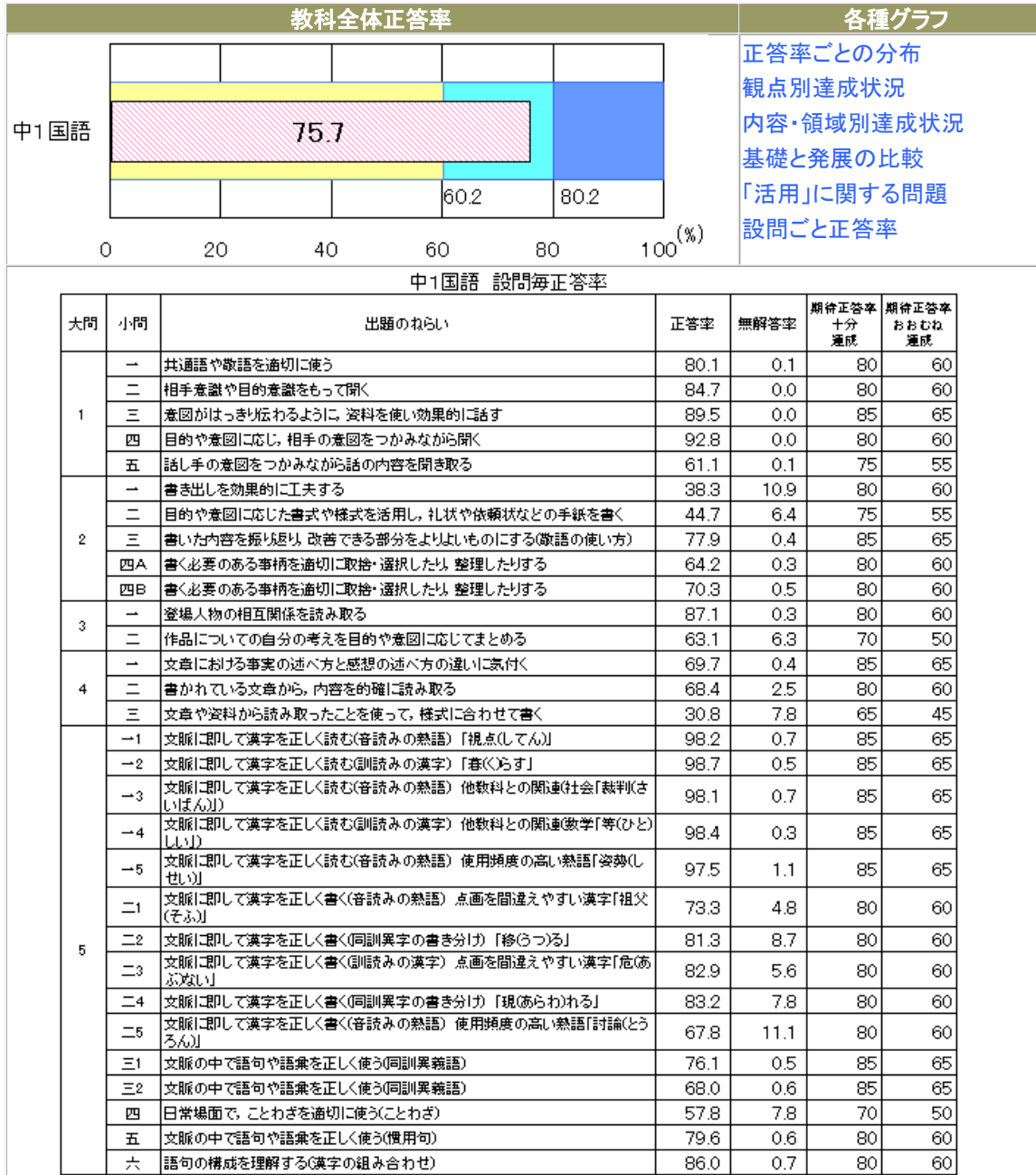
小6国語は、過去の全国調査の問題を利用しているため、凡例が異なる。

(凡例) : 実施時の全国平均

(ア) 教科全体及び設問毎正答率







小学5年生、中学1年生ともに、「おおむね達成」の基準を上回った。小学6年生では、実施時の全国の正答率を上回った。しかし、正答率が「おおむね達成」の基準を下回る問題や無解答率が10.0を超える問題など多い。

(イ) 評価の観点別正答率

①小学5年生

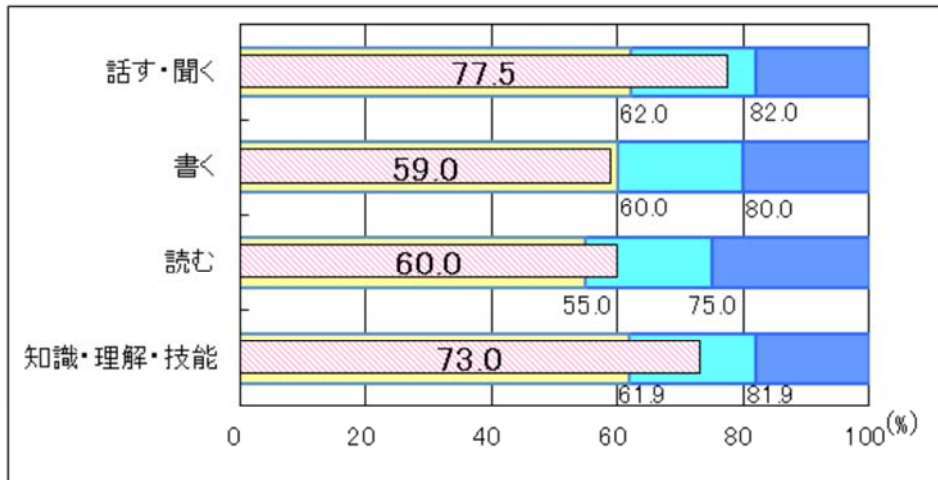


図1 H23年度(小学5年生国語)評価の観点別正答率

「話す・聞く」「読む」「知識・理解・技能」は、「おおむね達成」の基準を上回ったが、「書く」は、「おおむね達成」の基準を1.0ポイント下回った。特に「相手意識や目的意識をもち、様式に合わせて書くこと」に課題が見られた。いくつかの条件に合わせて自分の考えを書く力の定着に課題が見られる。

②中学1年生

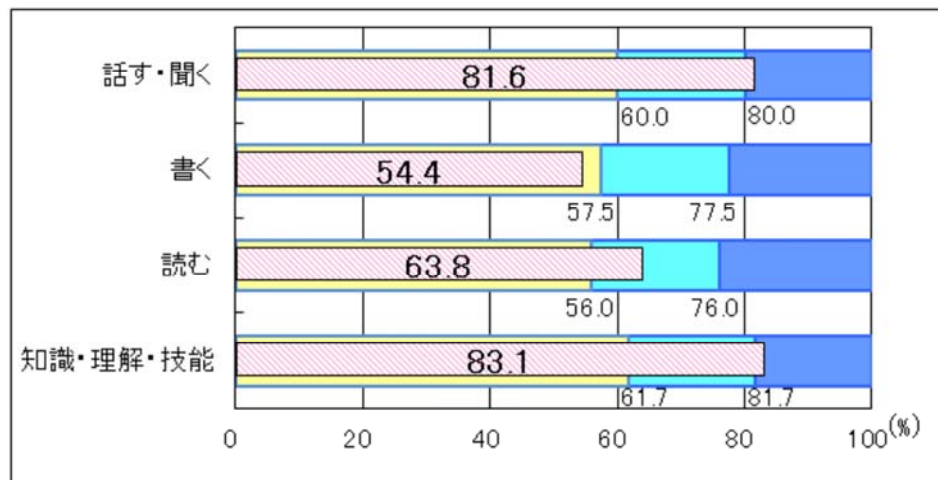


図2 H23年度(中学1年生国語)評価の観点別正答率

「話す・聞く」では1.6ポイント、「知識・理解・技能」では1.4ポイント、「十分達成」の基準を上回った。「書く」は、「おおむね達成」の基準を3.1ポイント下回った。書き出しを効果的に工夫する問題での無回答率は10.9、条件に合わせて手紙を書く問題での無解答率は6.4であった。「書式や様式に合わせて書くこと」に課題が見られる。

(ウ) 内容・領域別正答率

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」については、評価の観点の項目と同じであるため、本項目では、言語事項「漢字の読み」「漢字の書き」「語句に関する知識」について分析する。

①小学5年生

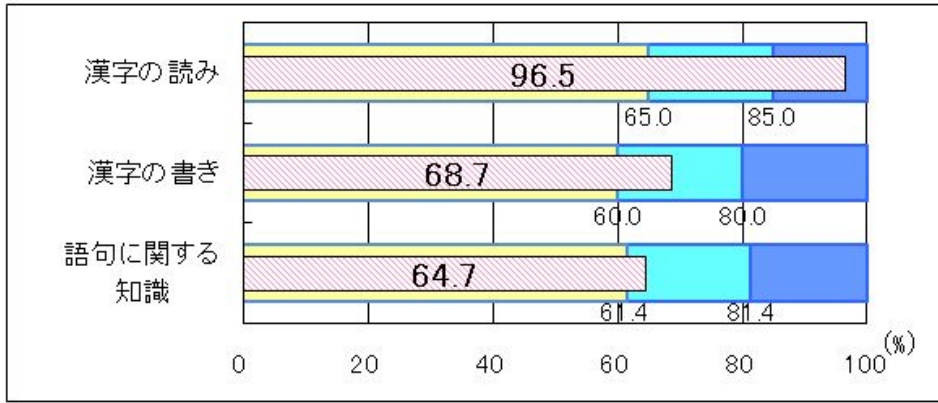


図3 H23年度(小学5年生国語)言語事項の内容・領域別の正答率

「漢字の読み」については、「十分達成」の基準を11.5ポイント上回った。「漢字の書き」では8.7ポイント、「語句に関する知識」では3.3ポイント、「おおむね達成」の基準を上回った。日常生活でよく目にするものの多い漢字やよく使う漢字については定着していることがうかがえる。しかし、画数の多い「漢字の書き」や、ローマ字の読み書きについては「おおむね達成」の基準を下回り、課題が見られた。

②中学1年生

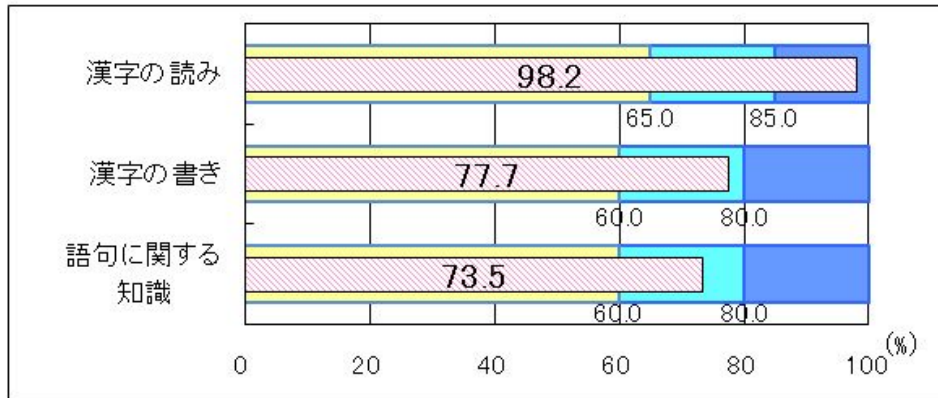


図4 H23年度(中学1年生国語)言語事項の内容・領域別の正答率

「漢字の読み」については、「十分達成」の基準を13.2ポイント上回った。「漢字の書き」では17.7ポイント、「語句に関する知識」では13.5ポイント、「おおむね達成」の基準を上回った。「漢字の読み」に比べ、「漢字の書き」の無解答率が高く、なかでも「とろん(討論)」の無解答率は11.1で一番高かった。また、「語句に関する知識」において、「日常場面できとわざを適切に使う」という問題は、「おおむね達成」の規準を上回ったが無解答率は7.8であり、課題が見られた。

イ 経年比較

(凡例) ■: 要努力(おおむね達成の基準を下回る) ■: おおむね達成 ■: 十分達成

平成22年度の小学5年生の調査結果では、「書くこと」と「読むこと」が、他の内容・領域に比べて正答率が低い傾向にあった。平成23年度も同様の結果であった。そこで、経年比較では、まず「書くこと」について、平成22年度と平成23年度において小学5年生同一学年を取り上げ、分析を行う。次に、「読むこと」について、平成22年度と平成23年度において小学5年生同一学年を取り上げ、分析を行う。また、中学1年生でも、「書くこと」で「おおむね達成」の基準を3.1ポイント下回った。よって、中学1年生では、「書くこと」について、平成22年度と平成23年度において中学1年生同一学年を取り上げ、分析を行う。

(ア) 同一学年児童生徒の経年比較

①小学5年生の「書くこと」の経年比較

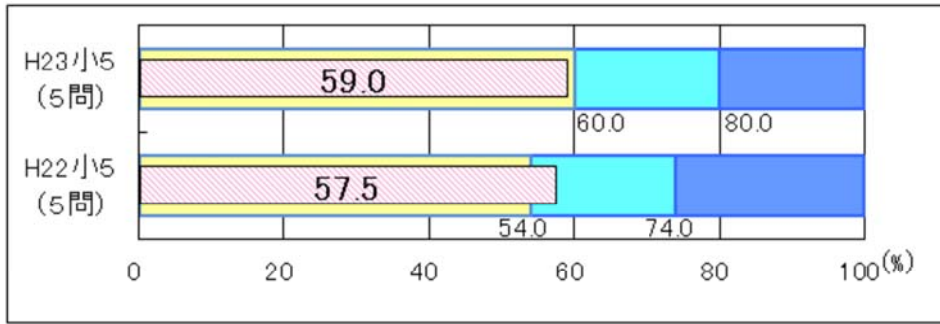


図5 H22・23年度(小学5年生国語)「書くこと」の正答率の経年比較

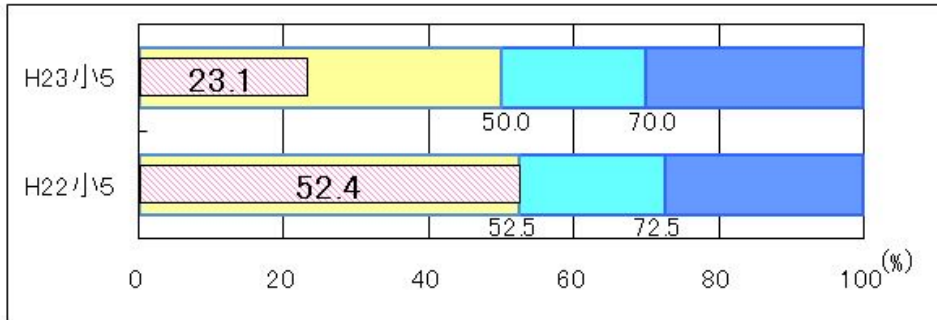


図6 H22・23年度(小学5年生国語)「書くこと」の記述式問題の正答率の経年比較
 正答率の経年変化を見ると、平成22年度に比べて、正答率は上がったが、「おおむね達成」の基準を1.0ポイント下回った(図5)。そこで、記述式問題の正答率で経年比較をしてみると、平成22年度は「おおむね達成」の基準を0.1ポイント下回ったが、平成23年度は26.9ポイント下回った(図6)。相手意識や目的意識をもち、様式に合わせて書くという問題の正答率が低かったためである。理由を入れて自分の考えを書いたり、いくつかの条件に合わせて書いたりすることに課題がある。

②小学5年生の「読むこと」の経年比較

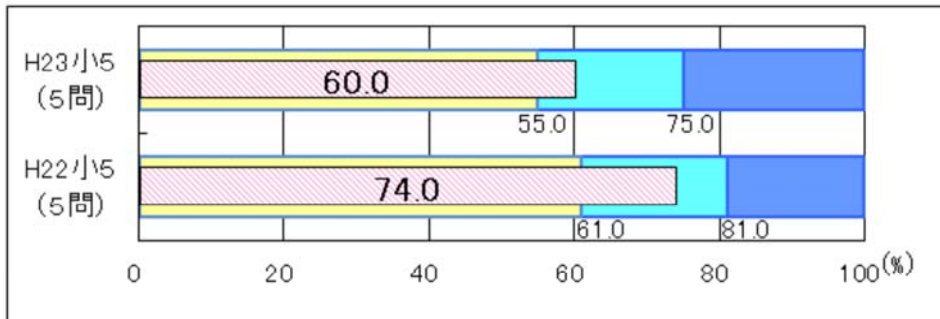


図7 H22・23年度(小学5年生国語)「読むこと」の正答率の経年比較

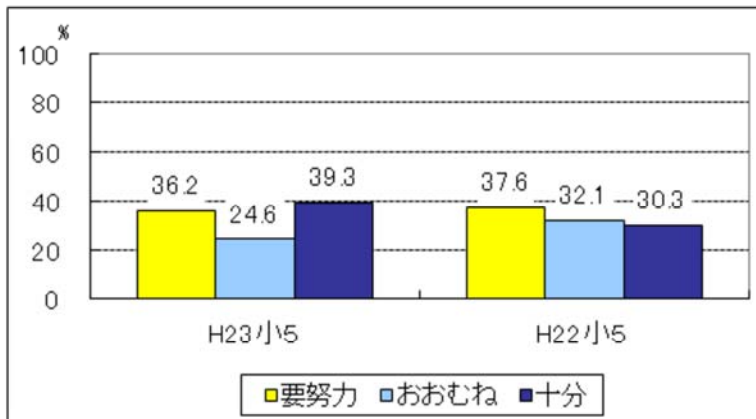


図8 H22・23年度(小学5年生国語)「読むこと」の到達度分布の経年比較

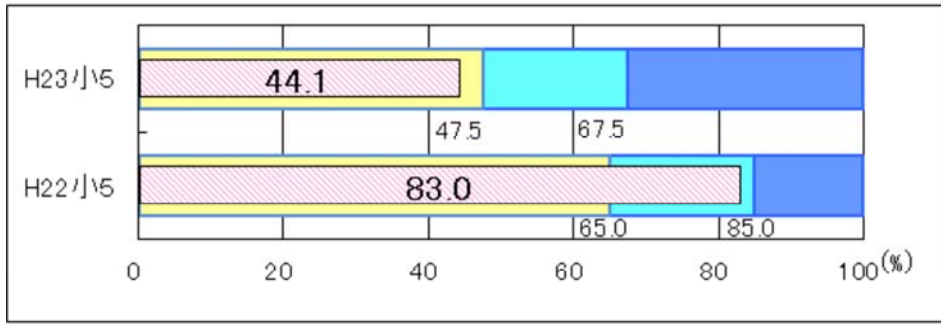


図9 H22・23年(小学5年生国語)「読むこと」の記述式問題の正答率の経年比較
 正答率の経年変化を見ると、平成22年度に比べて、正答率は下がったが、「おおむね達成」の基準を5.0ポイント上回った(図7)。到達度分布では、平成22年度に比べ、「要努力」の割合が1.4ポイント、「おおむね達成」の割合が7.5ポイント下回り、「十分達成」の割合が9.0ポイント上回った(図8)。記述式問題の正答率で経年比較をしてみると、平成22年度に比べて正答率が下がっており、「要努力」の結果となった(図9)。読み取った内容について自分の考えをまとめたり、様式に合わせて書き換えたりする学習に課題がある。

③中学1年生の「書くこと」の経年比較

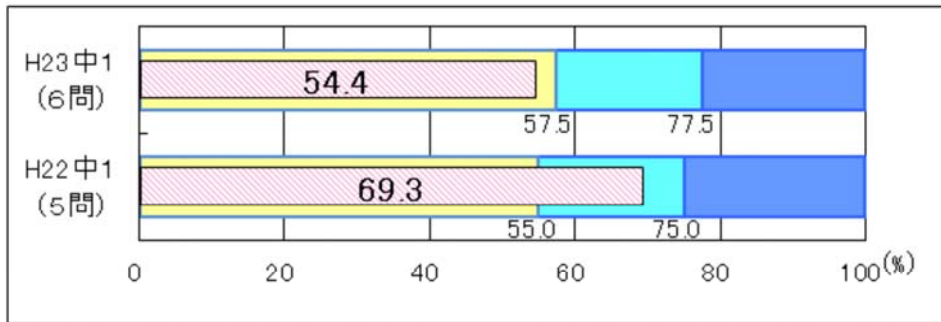


図10 H22・23年度(中学1年生国語)「書くこと」の正答率の経年比較

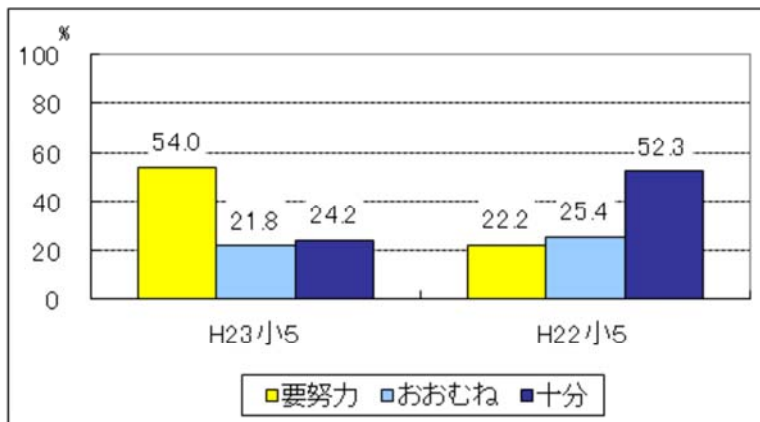


図11 H22・23年度(中学1年生国語)「書くこと」の到達度分布の経年比較

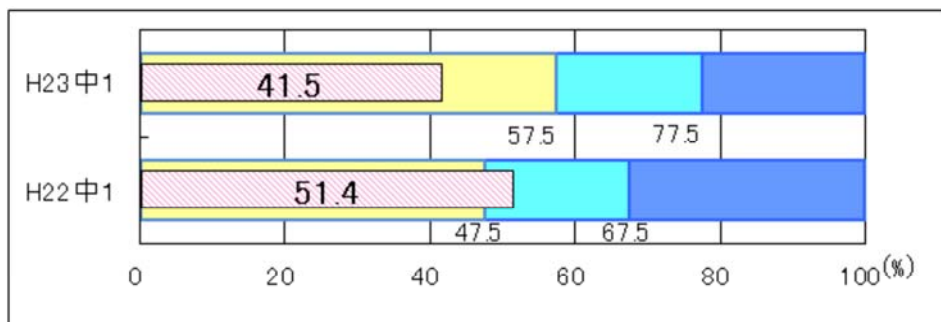


図12 H22・23年度(中学1年生国語)「書くこと」の記述式問題の正答率の経年比較
 正答率の経年変化を見ると、平成22年度に比べて正答率は下がり、「おおむね達成」の基準を3.1ポイント下回った(図10)。到達度分布では、平成22年度に比べて、「十分達成」の生徒の割合が28.1ポイント減少し、「要努力」の生徒の割合が31.8ポイント増加した(図11)。そこで、記述式問題の正答率で経年比較をしてみると、平成22年度に比べて、正答率が下がっており、「要努力」の結果となった(図12)。依頼状など手紙の書式に合わせた書き方が定着に課題がある。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

平成23年度の調査結果を受け、主に「書くこと」領域における正答率が低い問題、無解答率が高い問題について分析する。

傾向1 「書くこと」における基礎的・基本的問題に課題がある。

[小学5年生 大問2の二]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2二	文章を書くときに、会話の部分などを改行して書くこと。 (選択式)	会話の部分で改行して書かれた正しい文を3つの選択肢から選ぶ。	47.4	0.3	85.0	65.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率65.0に対して、正答率は47.4であり、17.6ポイント下回った。会話文は、教科書の教材の中によく出てくるが、会話の部分は改行するということが定着していないと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

会話の部分は改行して書くことなど文章の構成や表記に関する基礎的・基本的な事項について、教師が意識して繰り返し指導することが大切である。繰り返し指導していくことによって、児童の学習の定着に役立ち、児童の意識も高まると考える。具体的には、次のような指導が効果的である。

- ①作文や日記など児童に文章を書かせるとき、会話の部分を入れて書かせる。
- ②文学的な文章などを読むとき、会話の部分があれば、その部分は改行して書かなければならないことをその都度指導する。

[中学1年生 大問2の一]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2一	書き出しを効果的に工夫すること。 (記述式)	面識のない人に依頼状を出すとき、手紙の前文に何を書くとよいか参考文を見て書く。	38.3	10.9	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対し、正答率は38.3であり、21.7ポイント下回った。無解答率は10.9であった。児童は、問われていることが、【手紙の下書き】にある「わたしは、～です。」の部分を指しているとは分かっているが、それを「自己紹介」とまとめて表すことが難しかったのではないと思われる。

○ 指導法改善の手立て

中学年の「書くこと」の指導事項に即した言語活動例に、「目的に合わせて依頼状、案内状、礼状などの手紙を書く」がある。高学年でも中学年で学習を想起させ、継続して指導することが大切である。具体的には、次のような指導が効果的である。

- ①手紙の形式(初めのあいさつ、本文、結びのあいさつ、後付け)を一つ一つ確認させる。
- ②実際に送られてきたはがきや便せんなどを用いて、手紙の種類・内容はいろいろあるが、形式は変わらないことを確認させる。
- ③依頼状や礼状など手紙の内容によって、「よろしくお願いします」「ありがとうございました」など、必要な言葉があることに気付かせる。

他教科や学校行事などで手紙を書くときにも、上記の①②③を押さえながら、丁寧に書かせる事が大切である。

傾向2 「書くこと」「読むこと」における条件に合わせて記述することに課題がある。

[小学5年生 大問2の五]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問2五	相手意識や目的意識をもち、様式に合わせて書くこと。 (記述式)	自分がしかられた理由を入れてストロー飛行機を飛ばすときに気を付けることを条件に合わせて書く。	23.1	6.9	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対し、正答率は23.1であり、26.9ポイント下回った。無解答率は6.9であった。【日記】の中では、としひこさんがお母さんにしかられた理由が明確に書かれておらず、それを文中から判断して書かなければならない。書くときの条件は、①としひこさんがお母さんにしかられた理由を入れて書くこと、②文末は「～で飛ばすこと。」にすること、③一文で書くことの3点あるが、①の理由を考えて書くことが特に難しかったのではないかと推察される。

○ 指導法改善の手立て

条件に合わせて書く学習を積み重ねることによって、自分で考えて書いたことに自信をもつことができ、書くことへの苦手意識も低くなるのではないかとと思われる。また、次第にいろいろな思考を試みるようになると考える。具体的には、次のような指導が効果的である。

- ①理由を入れて文章を書くときや自分の考えをまとめるとき、相手や目的、様式や字数などの条件に合わせて書くという活動を、日頃から授業に取り入れる。
- ②考えて書いたことを発表し合い、交流する。交流することによって、自分や友達の書いた文章のよさを感じ取り、自分の考えを深めたり、自分の表現の参考にしたりすることができる。

[中学1年生 大問4の三]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問4三	文章や資料から読み取ったことを使って、様式に合わせて書くこと。 (記述式)	スピーチ原稿を作るのに、新聞記事やグラフから読み取ったことを入れて条件に合わせて書く。	30.8	7.8	65.0	45.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し、正答率は30.8であり、14.2ポイント下回った。無解答率は7.8であった。【新聞記事の一部】に書かれた具体的な節電の方法と【グラフ】から分かることを入れ、【スピーチ原稿】の文章と合うように二文で書くという条件がある。【グラフ】からどんなことが分かったか、それを【新聞記事の一部】の節電の方法とどのように結び付けるか、そして、スピーチ原稿としてどのように書かか。さらに、二文に分けて書くなど、児童にとって複雑な思考を要するため、無解答率も高くなったと考える。

○ 指導法改善の手立て

要旨の捉え方、文章と図表などの資料が関連していることを、説明文・物語などの教材で学習する。その際、学習したことをいくつか組み合わせて書く指導をするときに、条件を少しずつ増やして書かせることが考えられる。児童が文章の内容をどれだけ理解しているか、どれだけ読み取っているかということは、書いて表現させることが多い。日頃から、自分の考えを書かせるということを意識した指導が必要である。具体的には、次のような指導が効果的である。

- ①段落の要旨をまとめ、教師の示した前後の文章に当てはまるように書かせる。
- ②資料から分かることや自分が思ったことを一、二文で書かせる。
- ③読み取ったことを、学級新聞、スピーチ原稿、推薦書や宣伝文などに書き換えさせる。

[中学1年生 大問2の二]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問2二	目的や意図に応じた書式や様式を活用し、礼状や依頼状などの手紙を書くこと。 (記述式)	依頼状を書くときに、見学とインタビューをお願いする内容を条件に合わせて書く。	44.7	6.4	75.0	55.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率55.0に対し、正答率は44.7であり、10.3ポイント下回った。無解答率は6.4であった。文章を書くときの条件は、①たずねるように書くこと、②本文の書き方に合わせて書くこと、③「くわしく知りたいので、」に続けて一文で書くことの3つである。「おおむね達成」の基準を下回ったのは、手紙という形式で書き慣れていないことが原因にあると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

目的や相手に応じて手紙の書式に則して書かせ、実践を重ねる。具体的には、次のような指導が効果的である。

- ①どんな手紙の種類があるか調べさせる。(学校からの行事案内・お願いのプリントなどで調べさせてもよい。)
- ②どんな手紙にも、手紙の形式(初めのあいさつ、本文、結びのあいさつ、後付け)が用いられていることを確かめさせる。
- ③体験学習の指導を依頼する手紙、学校行事について案内をする手紙、地域の方にお世話になったことへのお礼の手紙などいろいろな場面で手紙を書く機会を設け、手紙の書式を一つずつ確認させる。
- ④手紙を実際に書き送るという経験をさせ、相手から返事をもらったり感想を聞いたりして手紙のよさを実感させる。

傾向3 **日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、ローマ字で書くことに課題がある。**

[小学5年生 大問5の三①]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	全国の 正答率	佐賀県の 正答率
問5三①	ローマ字で書くこと。 (記述式)	[さる] → saru	53.3	12.5	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対し、正答率は53.3であり、6.7ポイント下回った。無解答率は12.5であった。ローマ字の学習の定着には、漢字の読み書きのように繰り返し練習することが必要であるが、そこまで至っていないと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

ローマ字の指導は、従前の小学4年生から小学3年生に移行した。授業時数としては、4、5時間程度となるので、授業以外でも、小学4年生以上でも継続して指導することが大切である。また、情報機器の活用等とも関連してローマ字に触れさせ、定着を図りたい。具体的には、次のような指導が効果的である。

- ①母音と子音のきまりを確かめ、身の回りのものの名前をローマ字で書く練習をさせる。
- ②濁音、拗音、長音、促音、撥音の表記のきまりを確かめ、それらを含む身の回りのものの名前をローマ字で書く練習をさせる。
- ③ローマ字表を児童の目に付くところに掲示して、児童のローマ字に対する意識が低くならないようにする。
- ④コンピュータを使用するとき、ローマ字入力で練習させる。
- ⑤学習プリントに自分の氏名をローマ字で書かせるなどして、ローマ字に親しませる。
- ⑥明日の準備などを連絡ノートに書かせるとき、教師がローマ字で板書した文やことばを、ひらがなで書かせたり、教師が口頭で伝えたものをローマ字で書かせたりする。
- ⑦児童がローマ字で書いたものには、その都度評価をする。

エ これからの指導に向けて

今回の調査によって、「書くこと」における基礎的・基本的問題、「書くこと」「読むこと」における条件に合わせて記述すること、日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、ローマ字で書くこと、の3点に課題があることが分かった。これらの課題を解決するためには、以下のことを意識しながら指導し、改善を図っていくことが大切である。

(ア) 系統性を重視した繰り返しの指導

「書くこと」の指導事項が身に付くように、小学校6年間の中で系統的に指導していくことが大切である。前学年で学んでいることは何か、それが児童に身に付いているのかについて、把握することが必要である。既習事項が身に付いていない場合は、家庭での復習の機会を設けたり、補充学習の時間を設けたりして、繰り返し指導して定着を図る。また、国語の授業で学習したことを他の教科等でも使用させる。学習したことを相互に生かすことによって、更に学習の定着が図られると考える。言葉の特徴やきまりに関する事項(表記、言葉遣いなど)や文字に関する事項(漢字の読み書きなど)についても、教育活動全体で繰り返し指導していくことが大切である。

る。

(イ) 手立てと評価

系統性を重視した繰り返しの指導により、基礎的・基本的な知識・技能が身に付くと、それを活用して課題を解決することができるようになると考えられる。それと並行して、書くことが難しいと感じている児童への手立ても必要である。書き出しの言葉を手掛かりに、それに続けて一文を書かせたり、理由をつけて考えを書かせたりするなど、次第に条件を増やしていき、書いたものには、その都度評価をする。その際、教師からの評価だけでなく、児童同士の交流によって評価を行わせることにより、相手の書き方のよいところを見付けさせたり、多様な考えがあることを知らせたりすることもできる。

(ウ) 日常生活に生かせる言語活動の設定

多くの児童生徒は、国語の授業で学習したことが、将来、社会に出たときに役に立つと考えている。指導事項を身に付けさせるために取り入れた言語活動が、この単元のどこに意味をもつのか、次学年のどの学習に役に立つのか、日常生活のどのような場面で必要とされるのか、教師がまず理解しておかなければならない。そして、それを意識して指導することが大切である。学んだことが日常生活に生かされると実感させることができるならば、学習意欲だけでなく知識・技能も高まり、学力の向上も期待できる。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日：2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > [Ⅲ 各教科の調査結果の分析](#) > 小学校社会

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

小学校社会

知識・技能と思考力・判断力・表現力とのつながりを意識した指導

小学5年生の「観察・資料活用の技能・表現」、小学6年生の「社会的事象についての知識・理解」については、「おおむね達成」の基準を下回ったが、それ以外の評価の観点、内容・領域においては、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、「観察・資料活用の技能・表現」の観点については、小学6年生と中学1年生では「おおむね達成」の基準を上回ったが、小学5年生では「おおむね達成」の基準を下回った。また、3学年を通して、児童の生活との結び付きを感じにくい単元ほど正答率が低いという傾向が見られた。そこで、小学校社会科においては、さらに、社会的事象に対する児童の興味・関心を高め、知識や技能の確実な定着を図る指導の工夫が必要である。

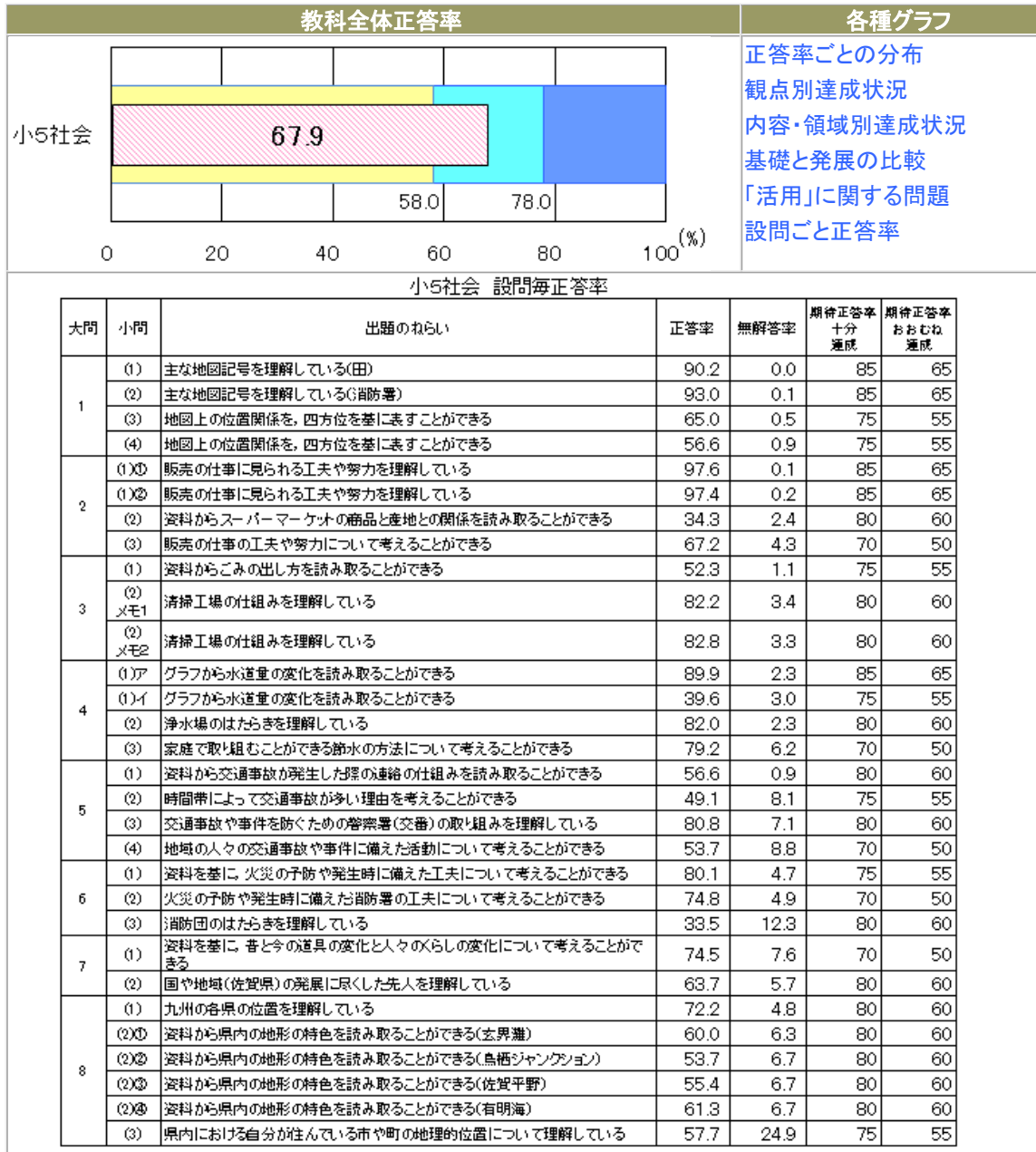
この後、評価の観点については、以下のように記す。

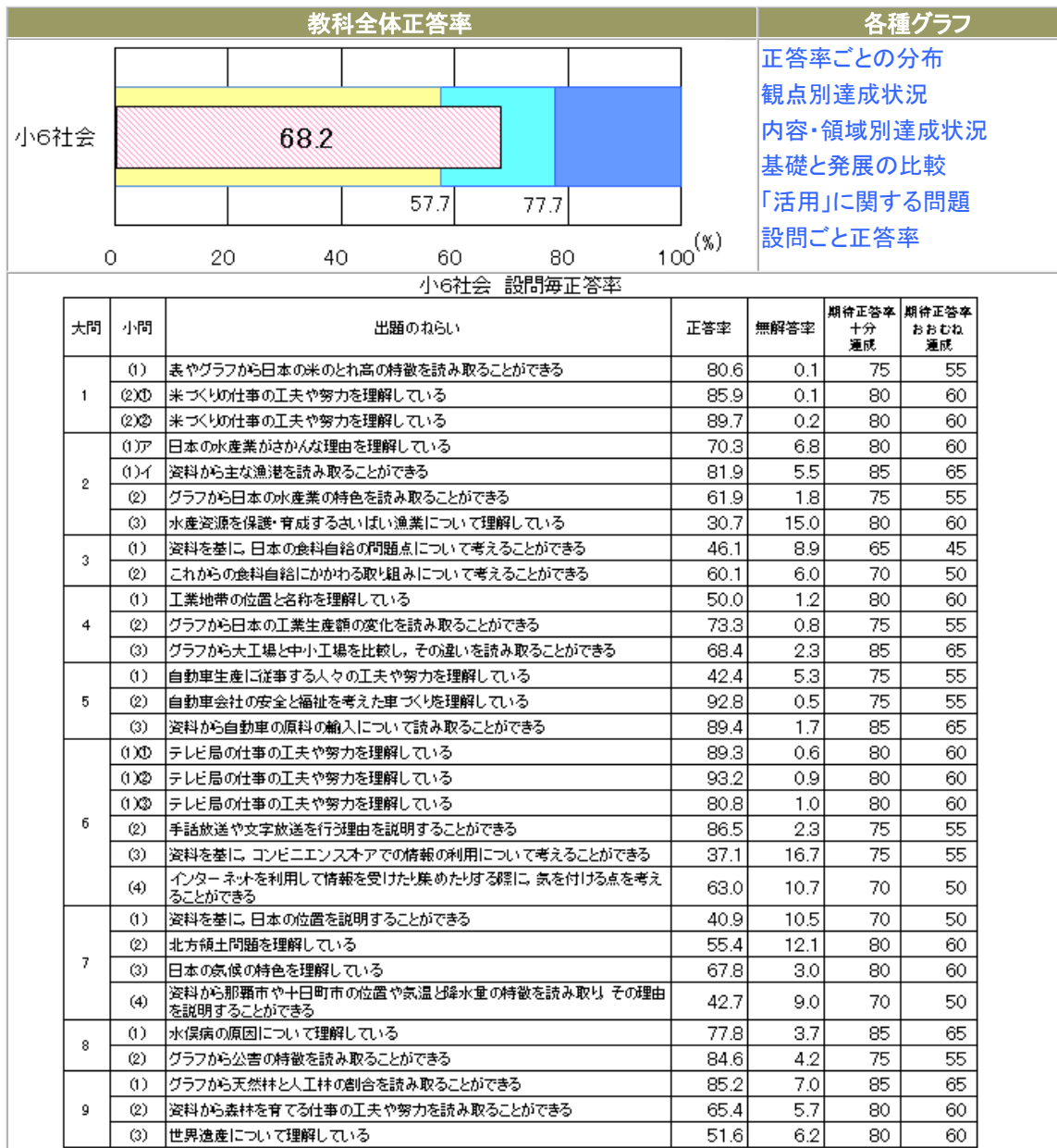
- | | | |
|-------------------|---|-----------|
| ○社会的な事象への関心・意欲・態度 | → | 本調査では設定なし |
| ○社会的な思考・判断 | → | 「思考・判断」 |
| ○観察・資料活用の技能・表現 | → | 「技能・表現」 |
| ○社会的事象についての知識・理解 | → | 「知識・理解」 |

ア 結果の概要

(凡例) :要努力(おおむね達成の基準を下回る) :おおむね達成 :十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率







全ての学年において、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「十分達成」の基準を上回った学年は見られなかった。

(イ) 評価の観点別正答率

①小学5年生

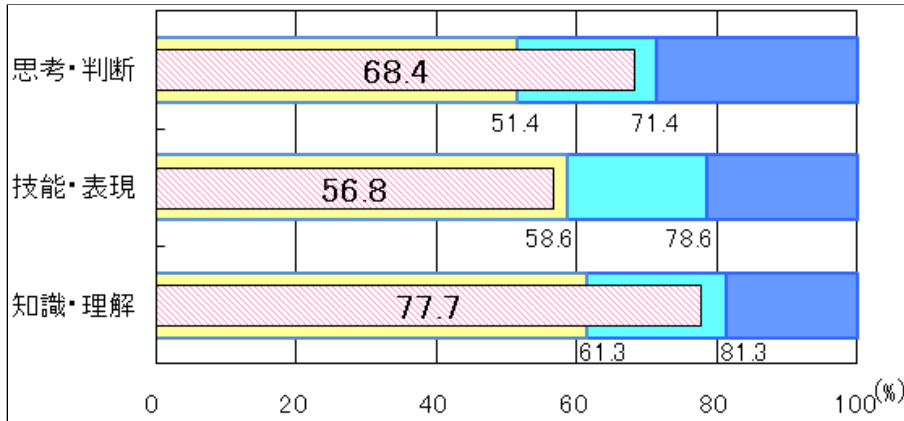


図1 H23年度(小学5年生社会)評価の観点別正答率

「思考・判断」と「知識・理解」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「技能・表現」については、「おおむね達成」の基準を下回っており、「図から販売の仕事の工夫を見出し、まとめること」、「地図から佐賀県の地形の特色を読み取ること」に課題が見られた。資料のどこに着目すべきかが分からなかったり、学習で習得した知識と提示された資料とを関連付けられなかったりしたためと考えられる。

②小学6年生

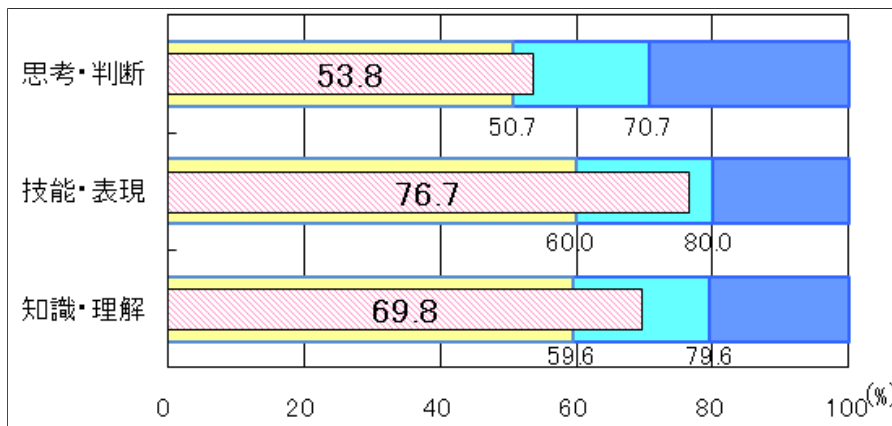


図2 H23年度(小学6年生社会)評価の観点別正答率

全ての観点において、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、「技能・表現」は、3つの観点の中で一番高い正答率であった。授業の中で、グラフや分布図などを基に、我が国の産業の特色を読み取ったり、まとめたりすることを丁寧に指導されているためと考えられる。

③中学1年生

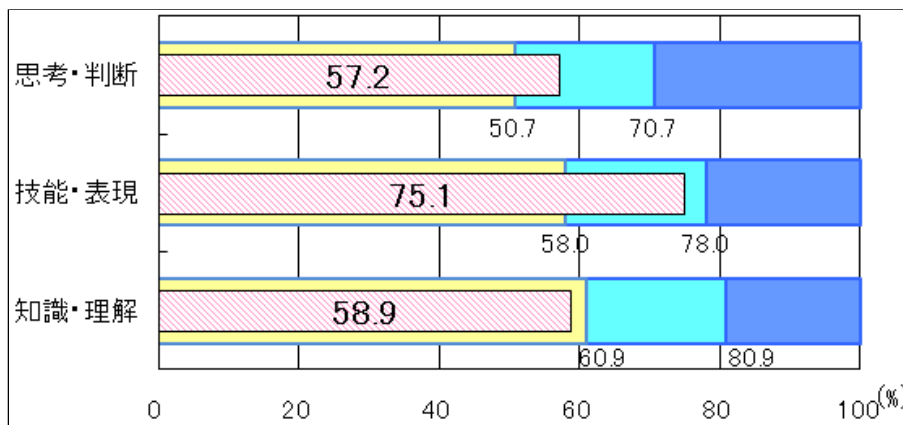


図3 H23年度(中学1年生社会)評価の観点別正答率

「思考・判断」「技能・表現」については、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「知識・理解」については、「おおむね達成」の基準を下回った。特に、人物名や政策名などの用語や概念の理解に課題が見られた。時代背景と人物、政策などに関連付けながら理解できていないために、断片的な知識になっていることが考えられる。

(ウ) 内容・領域別正答率

①小学5年生

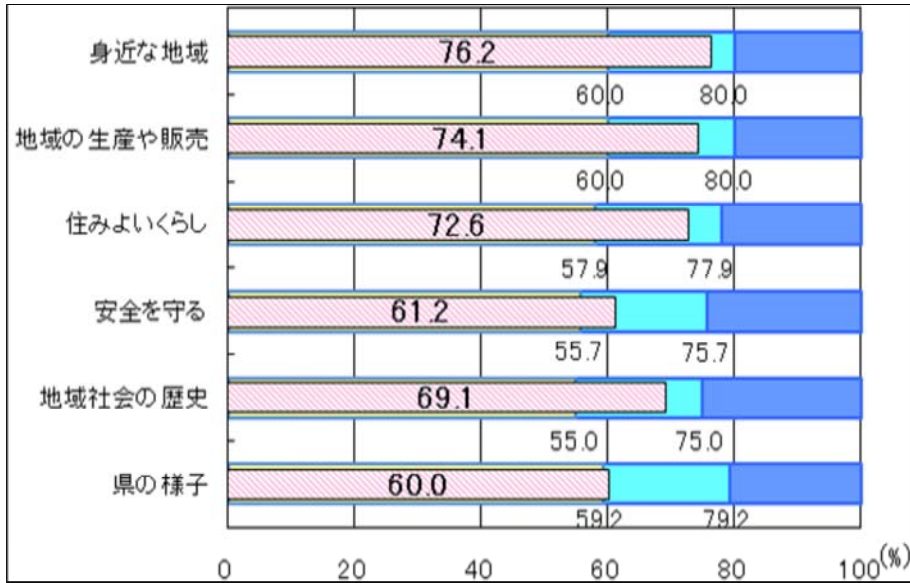


図4 H23年度(小学5年生社会)内容・領域別正答率

②小学6年生

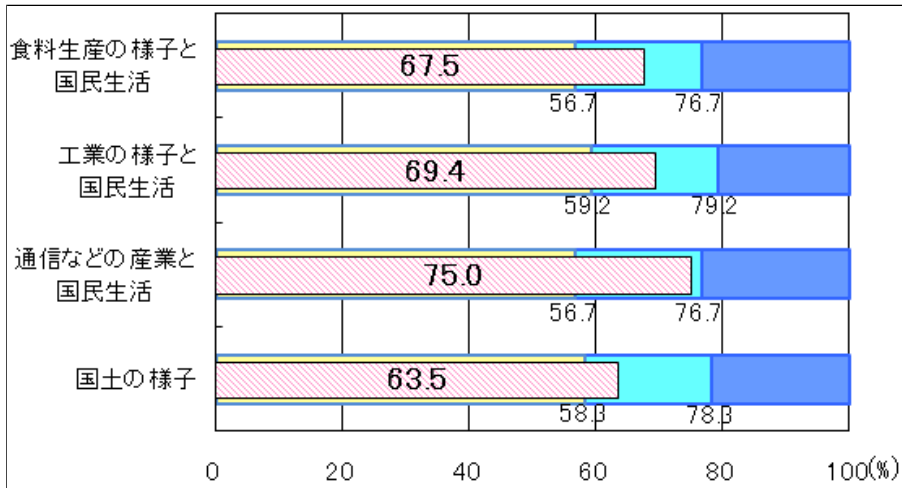


図5 H23年度(小学6年生社会)内容・領域別正答率

③中学1年生

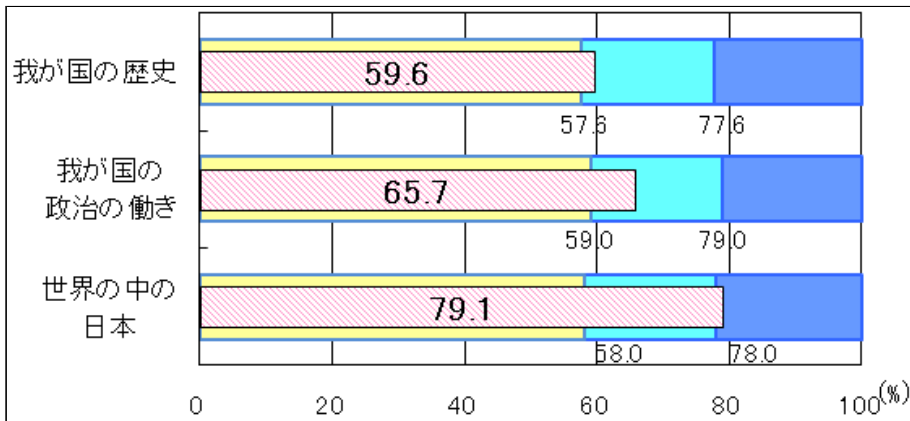


図6 H23年度(中学1年生社会)内容領域別正答率

小学5年生では「身近な地域」「地域の生産や販売」(図4)、小学6年生では「通信などの産業と国民生活」(図5)、中学1年生では「世界の中の日本」(図6)が、他の内容・領域と比べると高い正答率であった。しかし、内容・領域別ごとに正答率の差が見られた。特に、小学5年生の「県の様子」、小学6年生の「国土の様子」、中学1年生の「我が国の歴史」については、他の内容・領域と比べると課題が見られた。このことについては、平成21・22年度も同様の傾向が見られた。県や国土の様子、歴史など児童が自分の生活との結び付きを感じづらい内容・領域については、社会生活や社会的事象の仕組みを理解したり、事象について考えたりすることが難しくなるためと考え

られる。

イ 経年比較

(凡例) ■:要努力(おおむね達成の基準を下回る) ■:おおむね達成 ■:十分達成

結果の概要を受け、(ア)では、小学5年生の「技能・表現」の観点について、指導法の改善が図られたかを見るために同一学年の経年比較をする。(イ)では、中学1年生の「知識・理解」の観点について、指導法の改善が図られたかを見るために同一学年の経年比較を、児童の変容と学習内容との関係を見るために同一児童の比較する。また、(ウ)では平成22年度の課題を受け、「活用」に関する問題について、平成22年度と比べて、3学年の中で正答率が1番下回った小学6年生の同一児童の経年比較をし、分析をする。

(ア) 小学5年生の「技能・表現」の観点についての経年比較(同一学年)

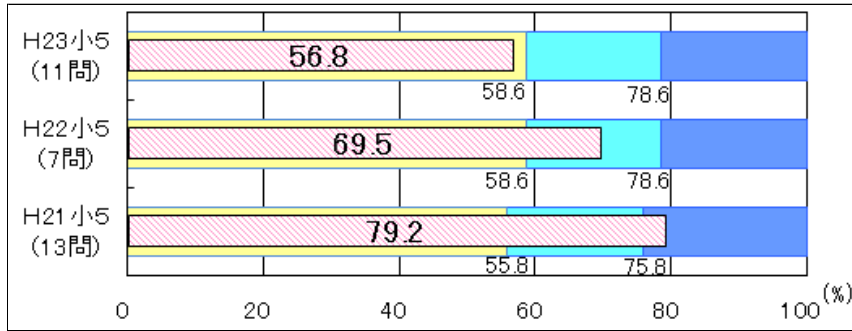


図7 H21・22・23年度(小学5年生社会)「技能・表現」の正答率の経年比較

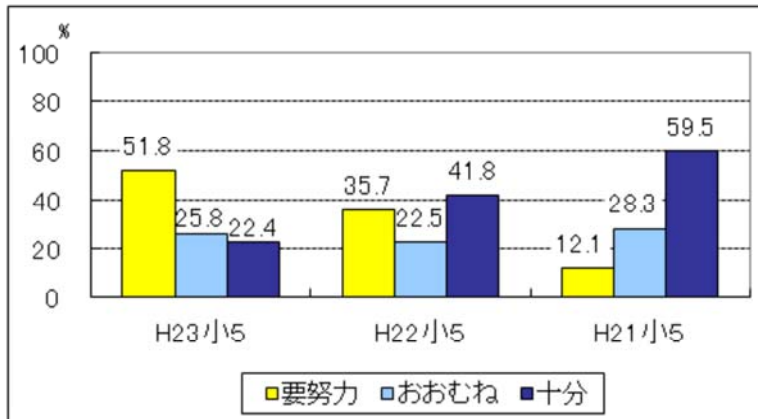


図8 H21・22・23年度(小学5年生社会)「技能・表現」の到達度分布の経年比較

平成22年度の調査では「技能・表現」が「おおむね達成」の基準を上回っていたが、平成23年度の調査では「おおむね達成」の基準を下回った。平成21年度は、「十分達成」の基準を上回っていたことから考えても、年々低下している(図7)。さらに、到達度分布(図8)を見ると、年々「十分達成」の児童の割合が減少し、「要努力」の児童の割合が増加しており、課題である。

そこで、「技能・表現」について、資料の内容を「グラフ(統計)」と「図・写真」に分けて、正答率を比較することにした。

表1 H21・22・23年度(小学5年生社会)「技能・表現」の資料の内容別の正答率比較

	H23	H22	H21
グラフ	64.8 (2問)	74.7 (3問)	79.0 (3問)
図・写真等	55.0 (9問)	65.7 (4問)	79.3 (4問)

※正答率のあとの()には、出題した質問数を示している。

表1のように、「グラフ」、「図・写真等」ともに、正答率が低下している。特に、図や写真などから情報を読み取ったりまとめたりすることに課題が見られる。平成23年度調査(小5社会)において、「グラフ」では大問4(1)アの全体的な傾向を捉える問題の正答率は89.9であったが、大問4(1)イの数値を比較する問題の正答率は39.6であった。このことから、条件に合わせて必要な情報を取り出し、比較したりまとめたりすることが十分に身に付いていないことがうかがえる。また、「図・写真等」については、9問中7問が地図を活用する問題であったことを考えると地図を使って場所を確認したり、学習ことを地図にまとめたりする活動や経験が少なくなっていることが考えられる。

(イ) 中学1年生の「知識・理解」の観点についての経年比較

①同一学年

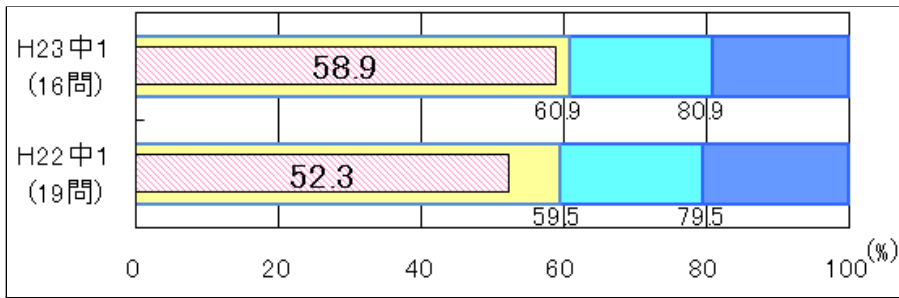


図9 H22・23年度(中学1年生社会)「知識・理解」の正答率の経年比較

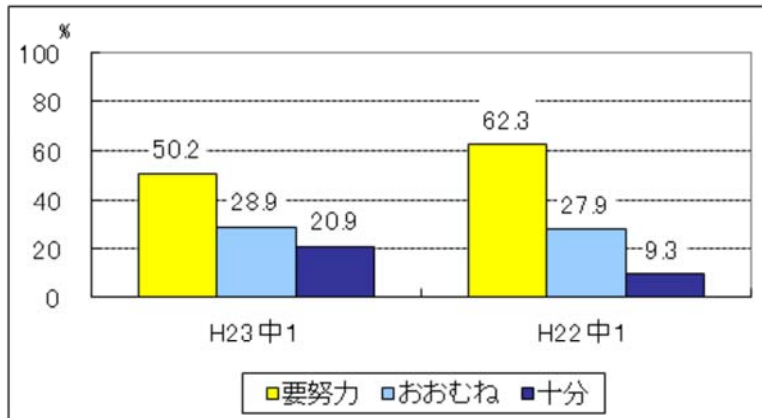


図10 H22・23年度(中学1年生社会)「知識・理解」の到達度分布の経年比較

「知識・理解」について、平成22年度と比較すると平成23年度の調査の正答率が高くなっている。しかし、「おおむね達成」の基準を下回っており、ここ数年課題が見られる観点である(図9)。到達度分布(図10)を見ると、「十分達成」の児童の割合が11.6ポイント増加し、「要努力」の児童の割合が12.1ポイント減少している。平成23年度においても、特に、明治時代以降の学習内容についての「知識・理解」に課題が見られた。江戸時代までの学習内容と比較すると、明治時代以降の内容は時代背景も複雑で、登場する歴史上の人物や取り扱う出来事が多くなるために、理解しづらくなり、児童の興味・関心・意欲が低くなっていくことが1つの原因として考えられる。

②同一児童比較

平成23年度に課題が見られた中学1年生の「知識・理解」について、同一児童の過去3年間を比較する。

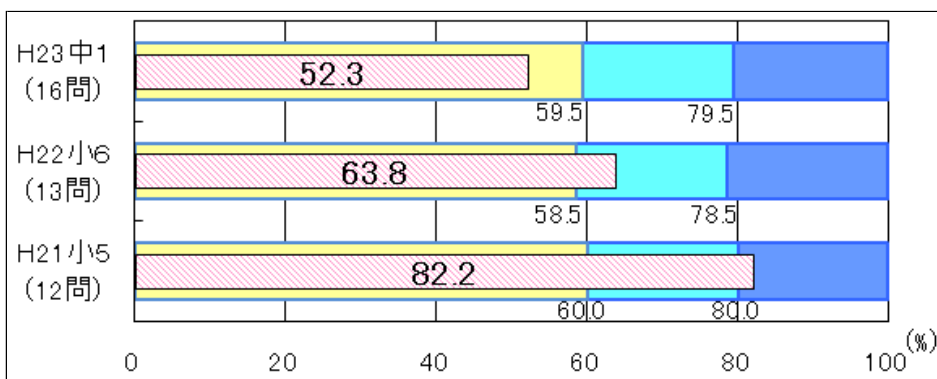


図11 H21・22・23年度(小学5年、小学6年、中学1年生社会)「知識・理解」の正答率の経年比較

H21年度小学5年生では、「知識・理解」の正答率が「十分達成」の基準を上回っていたが、H22年度小学6年生では「おおむね達成」を上回るにとどまり、H23年度中学1年生では「おおむね達成」の基準を下回った。学習内容が身近な地域や県の様子から我が国の産業や国土の様子、歴史、世界とのつながりへと広がっていくため、初めて聞くような言葉も多く、社会的事象の仕組みと私たちの生活とを関連付けながら理解することが難しくなるためと考えられる。

(ウ) 「活用」に関する問題についての経年比較(同一児童比較)

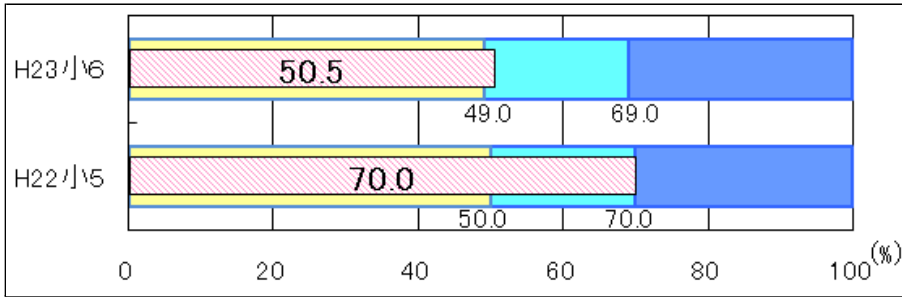


図12 H22年度(小学5年生社会)、H23年度(小学6年生社会)「活用」に関する問題の正答率の経年比較

「活用」に関する問題について、平成22年度の調査では「十分達成」の基準と同程度であったが、平成23年度の調査では「おおむね達成」の基準を上回るにとどまった(図12)。

そこで、「活用」に関する問題を、大きく次の2つに分けて比較することとする。

- 社会的な問題や社会の中で直面しそうな問題に対して自分の考えや解決策を**論述**する設問
- 社会的事象の特色や関連、意味・意義について**解釈**したり**説明**したりする設問

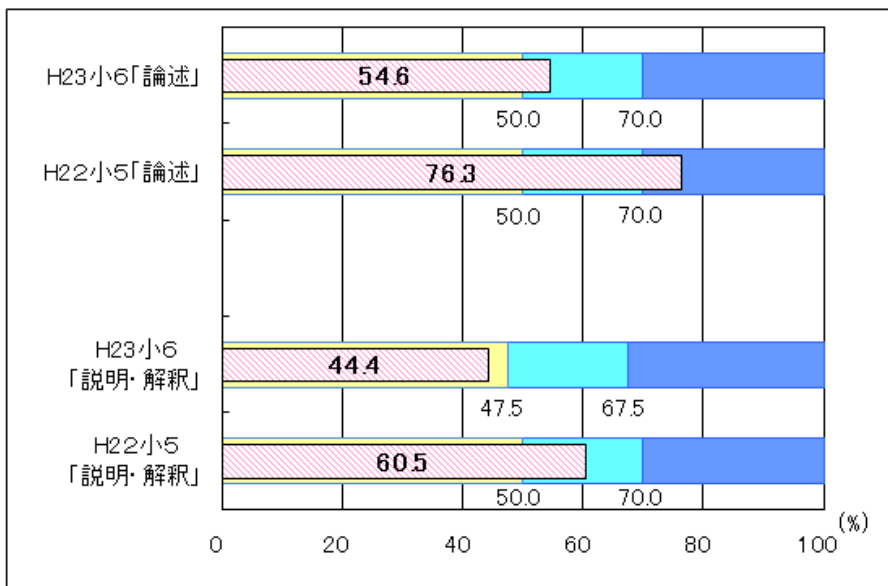


図13 H22年度(小学5年生社会)、H23年度(小学6年生社会)「活用」に関する問題の設問内容ごとの正答率の経年比較

「論述」「説明・解釈」共に、平成22年度の調査と比較すると大きく下回っている。特に、「説明・解釈」については、「おおむね達成」の基準を下回っており、課題が見られる。小学5年生と小学6年生の「活用」に関する問題の違いとしては、まずは学習内容の違いが挙げられるが、もう一つとして資料の数が挙げられる。つまり、複数の資料を基に、社会的事象の相互の関連や意味・意義を説明したり、解釈したりすることが十分身に付いていないことが考えられる。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

平成23年度の調査結果の概要を踏まえ、傾向1では、地理的な内容の中でも、「地図を基にまとめたり考えたりすること」、傾向2では「社会的事象に関わる用語や概念を理解すること」について設問レベルで分析する。また、経年比較を踏まえ、傾向3では、「事象の相互の関連や意味などを説明すること」について設問レベルで分析する。

傾向1 **地図を基にまとめたり考えたりすることに課題がある。**

[小学5年生 大問2の(2)]

- 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2(2)	資料からスーパーマーケットの商品と産地との関係を読み取ることができる。 (短答式)	スーパーマーケットの商品の産地をまとめた地図を基に、県外や外国からも送られてきていることについてまとめる。	34.3	2.4	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して、正答率は34.3であり、25.7ポイント下回った。商品が生産された場所を表す2つの地図からそれぞれ「県外」、「外国(国外)」ということは見出すことができたとしても、表現する際には「遠くから(も)」、「いろいろなところから(も)」と抽象的な言葉にしてしまったことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

資料から情報を読み取らせ、まとめさせる際には、資料から分かることを明確にさせ、抽象的になりすぎないように気を付けさせる必要がある。例えば、「遠くから」という言葉でまとめてしまうと、基準となる場所が分かりにくい。また、「いろいろなところから」という言葉では、十分に読み取ったことは伝わらなくなる。そこで、「県外」と「外国(国外)」を「遠くから」や「いろいろなところから」としてもよいか検討させ、よりの確に、分かりやすくまとめさせるような指導が大切である。

[小学5年生 大問8の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問8(2)①	資料から県内の地形の特色を読み取ることができる。 (選択式)	4枚の県内の写真(海や平野など)が地形図のどこに当てはまるのか、5つの選択肢の中から選ぶ。	60.0	6.3	80.0	60.0
問8(2)②			53.7	6.7	80.0	60.0
問8(2)③			55.4	6.7	80.0	60.0
問8(2)④			61.3	6.7	80.0	60.0

○ 解答状況

①は「出入りの多い海岸(玄界灘)」、②は「高速道路のジャンクション(鳥栖ジャンクション)」、③は「佐賀平野に広がる水田」、④は「遠くまで干潟のできる遠浅の海(有明海)」の写真であった。特に、②、③については「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して、正答率は55.0前後であり、5ポイント程度下回った。大問8(3)の白地図上で自分たちの住んでいる市町を見付ける問題の正答率は57.7で、無解答率が24.9だったことから、佐賀県の市町や主な地形の位置が十分につかめていないことが理由として考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「県の様子」の内容・領域では、佐賀県の全体の地形や主な産業の概要、交通網の様子、主な都市の位置などを学習する。その際、出てきた地名などについては、その時その時に地図で確認させ、地図上で場所を示すことができるようにしていきたい。学習指導要領においても地図帳や地球儀の活用を一層重視することが求められている。国語科で国語辞典を使うように、社会科では地図帳を使う場面を意図的に増やしていく必要がある。

[小学6年生 大問7の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問7(1)	資料を基に、日本の位置を説明することができる。 (記述式)	日本の周辺の地図を基に、大陸や国名、緯度や経度を使って、日本の位置を記述する。	40.9	10.5	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は40.9であり、9.1ポイント下回った。地図上に大陸や国の名前は示されていたことから考えると、四方位や緯度・経度については学習していても、それを使って自分なりに表現する経験が不足していることが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

我が国の国土の位置の学習をする際には、大陸や国の名前など他との関係で位置を示す方法や、緯度と経度で示す方法があることを取り上げることが考えられる。四方位や緯度・経度について習得した知識・技能を活用させるためにも、地図帳や地球儀を使いながら我が国の国土の位置を説明する文章を書いたり、ペアで説明しあったりするような活動の工夫が必要である。

傾向2 **社会的事象に関わる用語や概念についての知識の定着に課題がある。**

[小学5年生 大問6の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問6(3)	消防団のはたらきを理解している。 (短答式)	火事が起きたときに消防署と協力して消火したり、防火の呼びかけをしたりしている地域の団体の名称を書く。	33.5	12.3	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して、正答率は33.5であり、26.5ポイント下回った。火事が発生した際の消防署を中心とした関係諸機関の働きや連絡の仕組みについては、丁寧な指導が行われている。しかし、ガス会社や水道局など特徴ある機関と比べると、消防団は消防署と役割が似ており、児童にとって違いを捉えにくいことが考えられる。また、身近な地域で消防団の活動を見ることができない児童にとっては、実感を伴った理解がしづらいことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「地域の人々の安全を守るための諸活動」の内容・領域では、これまで警察署や消防署などの関係諸機関の連携や努力などを中心に学習してきた。しかし、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う上でも、地域の人々の働きにスポットを当てるのが大切である。単元の中で、できるだけ見学する時間を位置付けるようにし、活動の様子を見せたり、話を聞かせたりすることが必要である。そして、地域の安全が互いに協力したり助け合ったりしながら守られていることについて気付かせるような指導を行う必要がある。

[小学6年生 大問2の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2(3)	水産資源を保護・育成するさいばい漁業について理解している。 (短答式)	日本の水産業の「育てる漁業」として、養殖業ともう一つはどんな業業があるかを書く。	30.7	15.0	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して、正答率は30.7であり、29.3ポイント下回った。栽培漁業についての方法や作業の流れは理解していても、遠洋漁業や沖合漁業などの「とる漁業」と比較しながら、栽培漁業の目的や苦勞について捉えることができておらず、知識を十分に定着させるまでには至っていないことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「育てる漁業」としては、「養殖漁業」と「栽培漁業」がある。「とる漁業」と関連付けながら、「育てる漁業」が増えている理由を考えさせたり、よさや問題点などを整理させたりすることが大切である。また、「養殖漁業」と「栽培漁業」の違いを、絵や矢印などを使いながら自分の言葉でまとめさせたり、説明させたりする活動も有効である。

[中学1年生 大問6の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問6(2)	大日本帝国憲法の制定に重要な役割を果たした伊藤博文を理解している (短答式)	大日本帝国憲法の制定に重要な役割を果たした人物の名前を書く。	42.0	22.5	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して、正答率は42.0であり、18.0ポイント下回った。大問3(1)では源平の戦いで活躍した「源義経」の名前を短答式で答える問題であったが、問題の中に人物画があったこともあり、正答率は49.6であり、無解答率は12.0であった。大問6(2)については、人物画もなく選択肢もなかったため、正答率が低かったことが考えられる。同じように、「文明開化」や「大化の改新」、「北方領土」を短答式で答える問題も同様の結果であった。人物の名前や歴史的な出来事、政策名などの知識が断片的なものとなっており、十分な定着がなされていないことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

小学校の歴史学習では、取り上げる人物として42名の名前が学習指導要領に示されている。学習が進めば進む

ほど、人物の名前や業績、人物が活躍した時代名などの知識が増えていき、忘れやすくなってしまふことが考えられる。そのため、歴史的な事象についての知識が十分に定着できていないことが考えられる。そこで、児童の興味・関心を高める資料を提示したり、単元や学期の終わりに人物の名前や業績、人物が活躍した時代名などをノートにまとめさせたり、カルタやクイズなどを通して整理させたりするような活動を取り入れていくことも有効である。

傾向3 **社会的事象の関連や意味などを説明したり解釈したりする力に課題がある。**

[小学6年生 大問3の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問3(1)	資料を基に、日本の食料自給の問題点について考えることができる。 (記述式)	このまま食料を輸入に頼ることで起こる問題について考え、記述する	46.1	8.9	65.0	45.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対して、正答率は46.1であり、1.1ポイント上回った。話し合い活動などを通して、このままの食料自給率では、相手国が輸出できない状態(自然災害や戦争など)になった場合に困ることは理解していると考えられる。しかし、そのことと世界の人口増加に関する資料とを関連付けることができなかつたことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

資料を基に、世界の人口増加と耕地面積との関係に着目させ、今まで以上に食料が必要になることに気付かせることが大切である。そして、食料のおよそ60パーセントを海外からの輸入に頼っている日本への影響を考えさせるといったステップを踏んだ指導が必要である。

[小学6年生 大問7の(4)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問7(4)	資料から那覇市や十日町市の位置や気温と降水量の特徴を読み取り、その理由を説明することができる。 (記述式)	気温と降水量のグラフから那覇市を選び出し、その理由を「気温」と「降水量」の言葉を使って記述する	42.7	9.0	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は42.7であり、7.3ポイント下回った。那覇市と十日町市の場所や降水量と気温のグラフから、どちらが那覇市であるかは選ぶことはできたのではないかと考えられる。しかし、その理由を「気温」と「降水量」の言葉を使って表現することが難しかったためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

まずは、気温のグラフと降水量のグラフのそれぞれから分かることを明確にさせる。そして、それを自分なりの言葉で表現させる指導が必要である。その際、我が国の地形や気候の特徴を想起させたり、那覇市と十日町市の位置を確認させたりするなど既習内容を想起させることが大切である。

[中学1年生 大問4の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問4(3)	資料を基に、江戸幕府が参勤交代を制度化した理由を説明することができる。 (記述式)	江戸幕府が大名に参勤交代を義務づけた理由を考えて記述する。	32.6	23.5	65.0	45.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対して、正答率は32.6であり、12.4ポイント下回った。「大名が守るべきまわり(武家諸法度)」「当時の佐賀藩の予算」の2つの資料と時代背景とを関連付けながら、参勤交代の制度を義務づけた理由を考えることが難しかったためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「大名が守るべきまわり(武家諸法度)」の資料からは、江戸幕府が大名の力をおさえようとしたことを、「当時の佐

賀藩の予算」の資料からは、藩の予算の半分以上が参勤交代に関わる費用となっていたことを読み取らせることが大切である。そして、安土桃山時代から江戸時代への時代の流れを踏まえながら、江戸幕府が目指した政治について考えさせるような発問をしていく必要がある。

エ これからの指導に向けて

本調査では、「地理的な学習内容の知識・技能の定着」と「社会的な事象の特色や関連、意味を説明・解釈すること」に課題があることが分かった。新しい学習指導要領においては、社会的な見方や考え方を養い、そこで身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力につないでいくことが求められている。そのためにも、思考力・判断力・表現力の基盤となる知識や技能の定着と、言語活動の充実に継続して取り組んでいくことが必要と考える。

(ア) 観察・資料活用の技能を高めるために

「技能・表現」に課題が見られる中学年の学習においては、社会科の入門期でもあるので、資料の見方や考え方、まとめ方について時間をかけて丁寧に指導を行うことが大切である。体験したことや調査したことをまとめたり、資料から必要な情報を読み取ったりする力を高めるために、「小学校学習指導要領解説社会編」(平成20年8月)では、発達の段階に応じた指導をしていくことが求められており、中学年については以下のように記されている。

「小学校学習指導要領解説社会編」(平成20年8月)p20

「地域における社会的な事象を観察・調査する」

- ・ありのままに観察する。
- ・数や量に着目して観察する。
- ・観点に基づいて観察、調査する。
- ・他の事象と対比しながら観察、調査する。
- ・まわりの諸条件と関係付けて観察、調査する。

「地図や各種の具体的資料を効果的に活用」

- ・資料から必要な情報を読み取る。
- ・資料に表されている事柄の全体的な傾向を捉える。
- ・必要な資料を収集する。

この内容を踏まえ、中学年の2年間を通して、意図的・計画的に指導をしていくことが大切である。また、「気付いたことはないですか？」という曖昧な発問ではなく、この資料から読み取らせたいことを教師自身が明確にして、具体的な発問をすることが必要である。

(イ) 地図帳や地球儀の活用

新しい学習指導要領では、社会科の学習において地図帳や地球儀の活用を一層重視することが求められている。そこで、児童が地図帳や地球儀を見たり触れたり、活用したりする機会を増やしていくことが大切である。具体的には、次のような方法が考えられる。

- 校内や教室に地図を常時掲示したり、地球儀を置いたりする。
- 学習に必要なものとして、地図帳を常に準備させ、学習の中で出てきた地名をすぐに確認させる。
- 地図を使って調べたり、考えたりする活動を意図的に取り入れる。
- ICT機器や地図ソフトなどを活用する。

(ウ) 自分たちの生活との関わりを感じさせるために

自分の生活との結び付きを感じづらい内容・領域ほど正答率が低くなる傾向が見られた。特に、小学5年生の「県の様子」、小学6年生の「国土の様子」、中学1年生の「我が国の歴史」などは、自分の生活との結び付きを感じづらく、調べることへの意欲をもったり切実感をもって考えにくかったりするためと思われる。そこで、児童が自ら考え、判断し、表現しやすくなるように、自分たちの生活との関わりを感じたり、既存の知識とのずれを感じたりするような事例や資料を取り上げることが必要である。

(エ) 知識を定着させるための指導の工夫

学年が上がるにしたがって、社会科における「知識・理解」が十分に定着できていないことが分かった。それは、初めて聞くような言葉も多く、社会的な事象の仕組みと私たちの生活とを関連付けながら理解することが難しくなるためと考えられる。もちろん、小テストなどを通して知識を定着させることも大切ではあるが、「社会科＝暗記教科」とならないようにするためには、指導法の改善を行うことが大切である。具体的に、次のような方法が考えられる。

- これまでに学んだ知識を想起させたり、比べさせたりする学習場面を意図的に位置付ける。

○社会的な問題を取り上げ、「どうすべきか」「どの解決策が望ましいのか」「どうした方が望ましかったのか(選択肢があったのか)」ということについて自分の考えをまとめ、それを基に話し合う活動を取り入れるなど、習得した知識を活用する学習場面を位置付ける。

○教室や廊下等に、これまでの学習内容をまとめた模造紙を掲示したり、学習内容についてのクイズコーナーを作ったりするなど学習環境を工夫する。

(オ)「思考力・判断力・表現力」の評価

新しい評価の観点として「社会的な思考・判断」が「社会的な思考・判断・表現」となった。児童が学習の対象となる社会的事象に対して、思考・判断したことを「話す」「書く」といった言語活動を通して表現される内容について評価をすることになる。具体的には、「何を根拠としているのか」、「どのように表現しているか」などが考えられる。どの程度の表現内容を「おおむね満足できる」状況(A)と判断するのか、「十分満足できる」状況(B)と判断するのかを、「かかわる立場」や「社会的な価値」の内容、論理性などを基にして決めておき、評価することが大切である。そのためには、教師が事前に期待する児童の発言やワークシートの記述内容を想定して、「おおむね満足できる」状況と十分満足できる」状況(B)を具体的に考えておくことが必要である。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日：2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科の調査結果の分析 > 小学校算数

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

- ※ 中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。
- ※ 本報告書「Ⅱ 調査結果の概要」には、小6算数についても、参考のために、便宜上、到達基準を設定しているが、この項の小6算数においては、到達基準を基にした分析を行っていない。

小学校算数

児童の基礎的な知識・技能を高め、数学的な思考力・判断力・表現力を育てる授業づくり

「数量や図形についての表現・処理」、「数量や図形についての知識・理解」の評価の観点別正答率及びほとんどの内容・領域別正答率において、「おおむね達成」の基準と同等か上回った。特に、小学5年生の「数量や図形についての表現・処理」の観点においては「十分達成」の基準を上回った。しかし、小学5年生、中学1年生とともに「数学的な考え方」の観点別正答率で「おおむね達成」の基準を下回り、「『活用』」に関する問題や「発展的・応用的問題」の正答率でも、小学5年生、中学1年生ともに「おおむね達成」の基準を下回っており、課題である。授業において算数的活動を充実させ、数量や図形についての基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させるとともに、思考力・判断力・表現力を高めることが必要である。

この後、評価の観点については、以下のように記す。

- | | | |
|------------------|---|-----------|
| ○算数への関心・意欲・態度 | → | 本調査では設定なし |
| ○数学的な考え方 | → | 「考え方」 |
| ○数量や図形についての表現・処理 | → | 「表現・処理」 |
| ○数量や図形についての知識・理解 | → | 「知識・理解」 |

ア 結果の概要

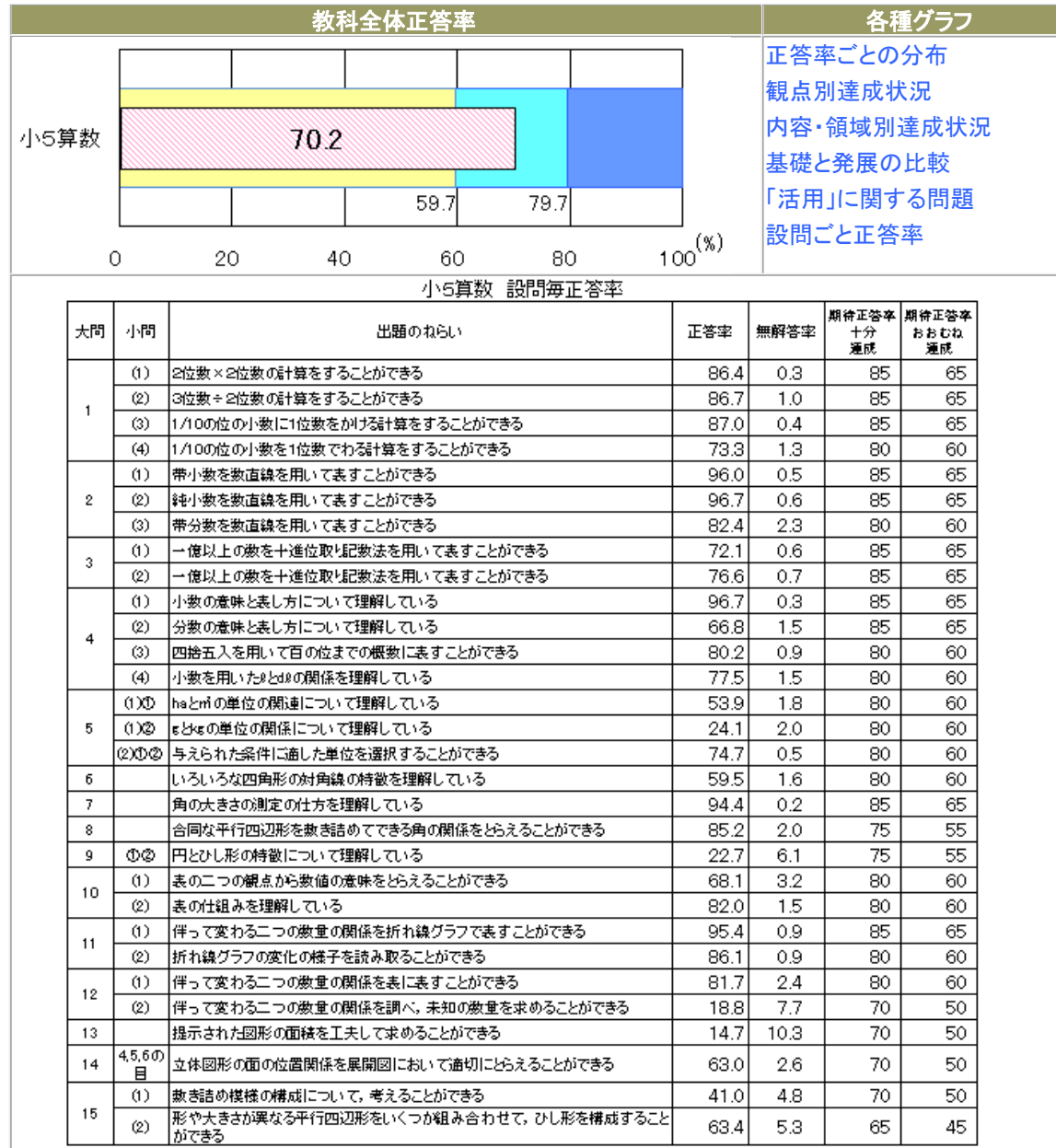
各学年ごとに教科全体の正答率について到達基準との比較を示す。

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

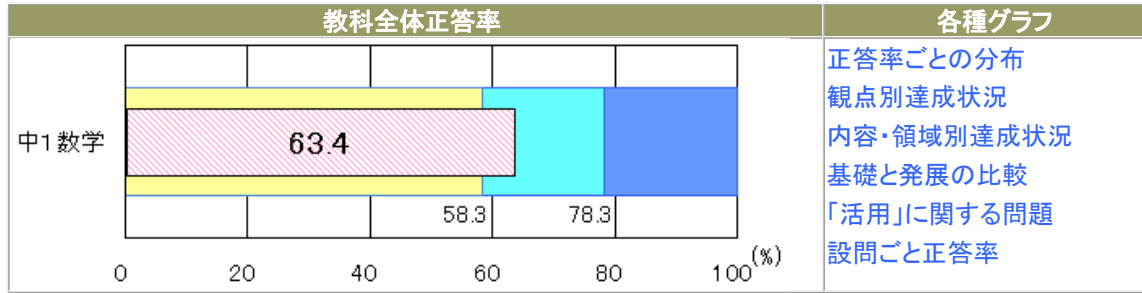
小6算数は、過去の全国調査の問題を利用しているため、凡例が異なる。

(凡例) : 実施時の全国平均

(ア) 教科全体及び設問毎正答率







大問	小問	出題のねらい	正答率	無解答率	期待正答率 十分達成	期待正答率 おおむね達成
1	(1)	異分母の分数の加法ができる	88.3	0.5	85	65
	(2)	帯分数を含んだ分数の減法ができる	73.5	1.7	80	60
	(3)	異分母による除法と約分ができる	87.7	1.1	85	65
	(4)	計算の順序のきまりを理解し、小数の計算ができる	63.5	1.7	80	60
2	(1)	面積と人口の関係から人口密度を求めることができる	51.7	2.6	80	60
	(2)	最小公倍数を求めることができる	87.6	0.7	85	65
	(3)	最大公約数を求めることができる	84.8	1.7	85	65
3	(1)	直方体の展開図を理解している	56.9	1.2	85	65
	(2)	直方体の体積を求めるために必要な一辺の長さを考えることができる	70.9	0.7	75	55
4	(1)	円柱について理解している	88.1	1.9	85	65
	(2)アイ	縮図や拡大図の関係について理解している	21.9	3.3	80	60
5	(1)	平均を求めることができる	79.5	0.8	85	65
	(2)	図や表などを使って組み合わせを求めることができる	83.9	1.0	80	60
	(3)	速さと道のりから、時間を求めることができる	63.4	2.4	75	55
	(4)	百分率から代金を求めることができる	49.7	4.4	75	55
6	(1)	台形の公式を理解し、面積を求めることができる	49.3	4.5	80	60
	(2)	面積の単位の仕組みを理解している	52.2	4.3	85	65
	(3)	かさの単位の仕組みを理解している	75.4	2.4	85	65
7	(1)	四則計算のきまりを使うことができる	89.0	1.1	80	60
	(2)	数の合成・分解の考えを使って、工夫して計算することができる	62.7	3.3	80	60
	(3)	比のきまりを使って、未知数を求めることができる	93.1	1.0	80	60
8	(1)	比例の関係をとらえることができる	51.5	0.8	75	55
	(2)	数量を表す言葉を x や y に置き換えて式化できる	93.1	1.7	75	55
9	(1)	条件に応じて角度を求めることができる	76.6	3.1	80	60
	(2)	円の面積の公式を使って、条件に応じた面積を考えることができる	34.8	10.8	70	50
	(3)	半径の長さが2倍になったときに、面積が何倍になるかを考えることができる	35.5	15.9	65	45
10	(1)アイ	面積を基に、複合図形の辺の長さを求めることができる	56.2	9.9	70	50
	(2)	辺の長さを基に、条件にあった木の本数を考えることができる	41.8	6.1	65	45
11	(1)	資料から必要な情報を取り出し、条件に合った割合を求めることができる	27.4	11.5	75	55
	(2)	複数の資料から必要な情報を取り出し、問題を解決する過程を説明することができる	12.3	22.5	65	45

教科全体正答率においては、小学5年生は「おおむね達成」の基準を上回り、中学1年生も「おおむね達成」の基準を上回る結果となった。また、小学6年生においても、実施時の全国の正答率を上回る結果となった。

(イ) 評価の観点別正答率

①小学5年生

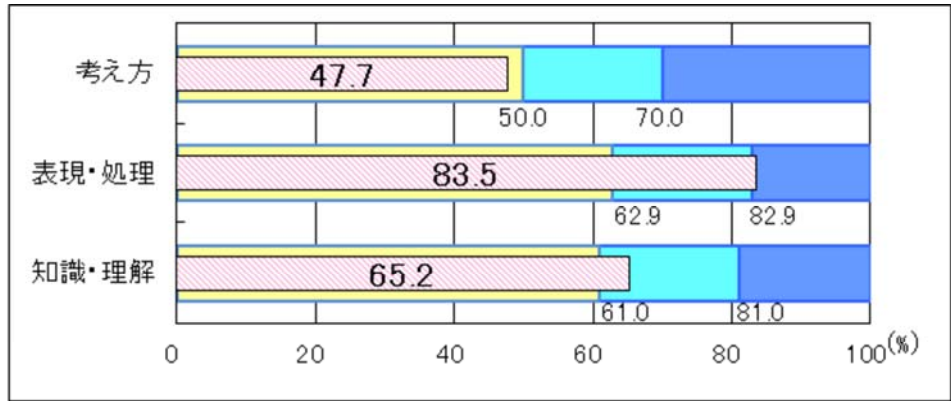


図1 H23年度(小学5年生算数)評価の観点別正答率

「表現・処理」の観点では、「十分達成」の基準を上回り、「知識・理解」の観点でも「おおむね達成」の基準を上回った。一方、「考え方」の観点においては、「おおむね達成」の基準を下回っており、特に課題としては、次の3点が挙げられる。

- 提示された図形の面積の求め方などを式や言葉で説明する力が十分ではない。
- 伴って変わる、二つの数量の間にある関係を調べる力が十分ではない。
- 敷き詰め模様の中から図形を見出すような力が十分ではない。

②中学1年生

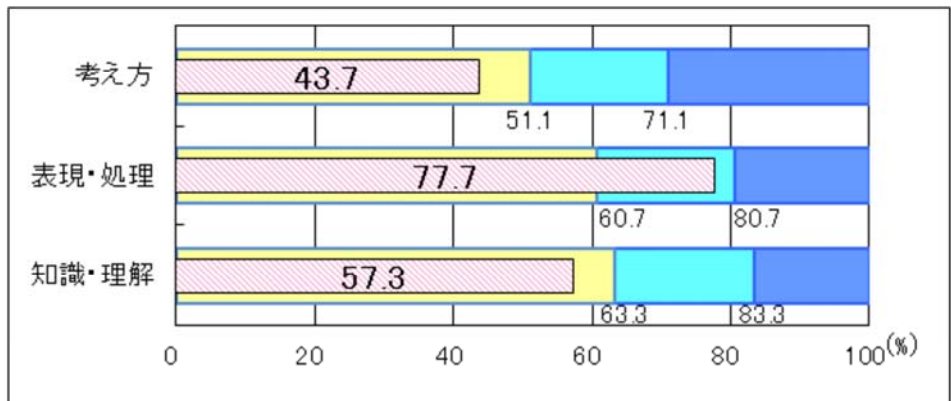


図2 H23年度(中学1年生数学)評価の観点別正答率

「表現・処理」の観点においては「おおむね達成」の基準を大きく上回った。「知識・理解」や「考え方」の観点においては「おおむね達成」の基準を下回っており、特に課題としては、次の3点が挙げられる。

- 資料を考察して、問題を解決する過程を説明する力が十分ではない。
- 円の面積の公式を使って、半径の長さとの面積の関係について考える力が十分ではない。
- 縮図や拡大図の関係についての理解が十分ではない。

(ウ) 内容・領域別正答率

内容・領域別正答率においては、「数と計算」「数量関係」の領域においては良好な結果であった。一方、「量と測定」領域においては小学5年生と中学1年生が「おおむね達成」を下回った。また、「図形」領域においても小学6年生は当時の全国平均を下回り、中学1年生においては「おおむね達成」を下回る結果となった。

①小学5年生

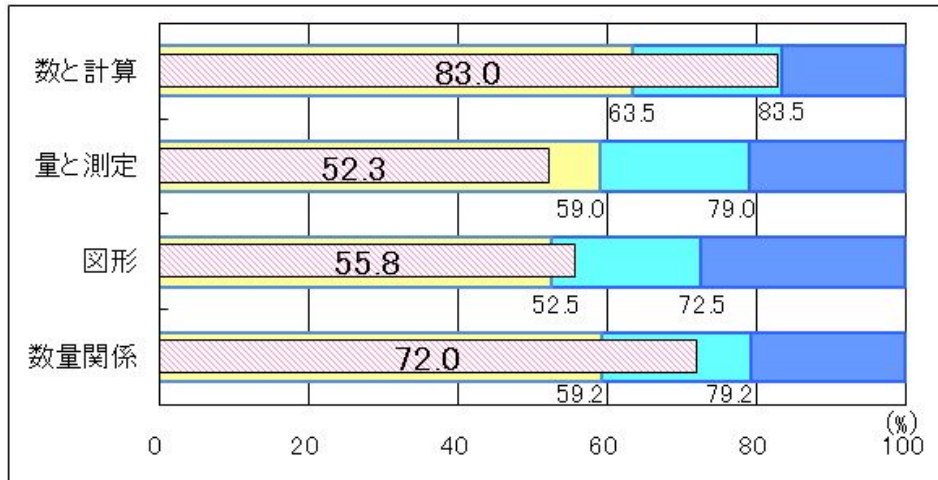


図3 H23年度(小学5年生算数)内容・領域別正答率

「数と計算」、「図形」、「数量関係」領域は、「おおむね達成」の基準を上回る結果であったが、「量と測定」領域においては「おおむね達成」の基準を下回っており、課題としては、次の2点が挙げられる。

- gとkgやhaと㎡の単位の関連についての理解が十分ではない。
- 提示された図形の面積を工夫して求める力が十分ではない。
- 円とひし形の特徴についての理解が十分ではない。

②中学1年生

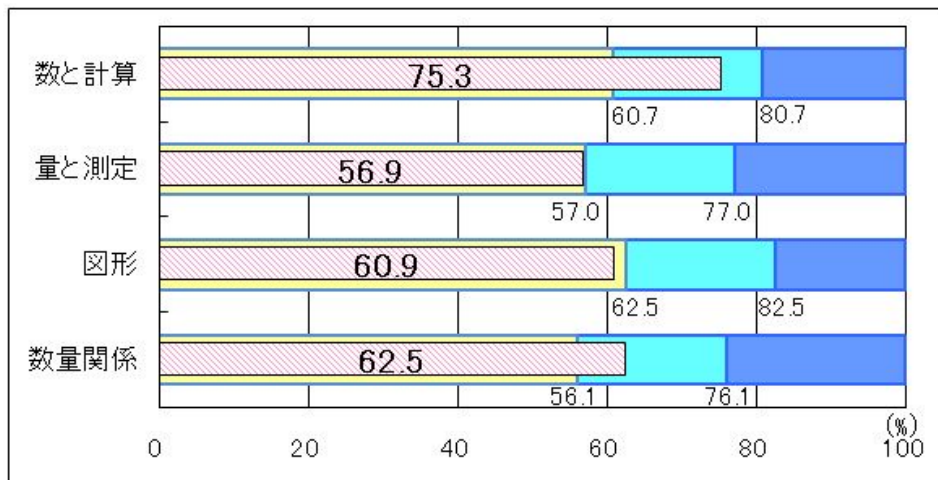


図5 H23年度(中学1年生数学)内容・領域別正答率

「数と計算」、「数量関係」領域は、「おおむね達成」の基準を上回る結果であった。しかし、「図形」、「量と測定」領域は、「おおむね達成」の基準を下回っており、課題として次の3点が挙げられる。

- 縮図や拡大図の関係についての理解が十分ではない。
- 直方体の展開図の理解が十分ではない。
- 台形の公式や面積の単位についての理解が十分ではない。

イ 経年比較

(凡例) ■: 要努力(おおむね達成の基準を下回る) ■: おおむね達成 ■: 十分達成

小学校6年間の学習の成果を考察するために、平成22年度と平成23年度の中学1年生に着目し、同一学年の経年比較を行う。経年比較の内容は「基礎的・基本的問題」における正答率の比較と昨年度課題として挙げられていた「活用」における正答率の比較をして考察を行った。

(ア) 「基礎的・基本的問題」の経年比較

中学1年生(同一学年)

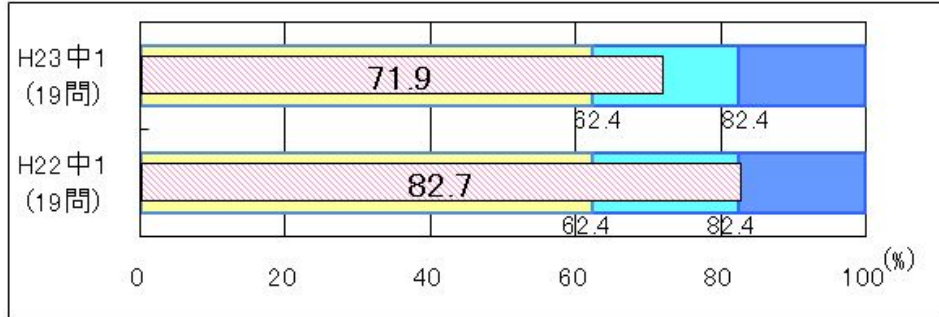
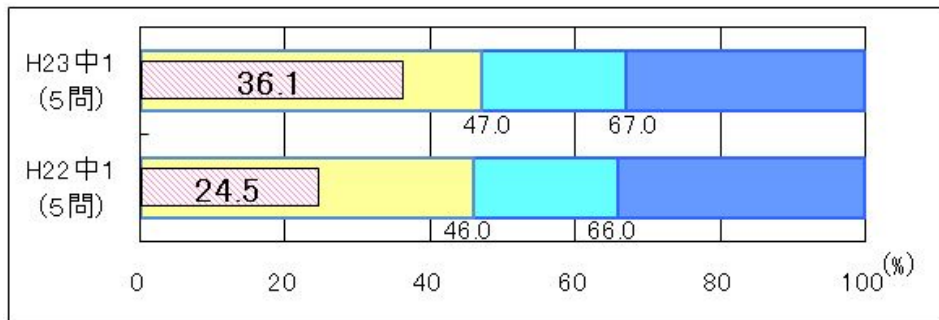


図7 H22・23年度(中学1年生数学)「基礎的・基本的問題」の正答率の経年比較

「基礎的・基本的問題」の正答率は、平成22年度は82.7で、「十分達成」の基準を上回っていた。平成23年度の正答率は71.9で、「おおむね達成」を上回っているものの、平成22年度と比較すると10.8ポイント下回っており、下降傾向である。平成23年度は、「図形」領域において円柱の名前を記述することや「数と計算」領域において最小公倍数を求めることはよく理解できている。しかし、「図形」領域において縮図・拡大図の性質を言葉で表現することや「量と測定」領域における台形の面積の公式を適用させて面積を求めることなどに課題が見られた。

(イ) 「活用」に関する問題の経年比較

① 中学1年生(同一学年)



H22・23年度「活用」に関する問題の正答率の経年比較

平成23年度の「活用」に関する問題の正答率は、36.1であった。平成22年度は「おおむね達成」の到達基準46.0に対して正答率は24.5で、11.6ポイント上回り、やや改善傾向にあると言える。しかし、「おおむね達成」の到達基準47.0から見ると10.9ポイント下回り、課題が見られる。領域を見てみると「量と測定」領域において円の中心角を8等分にした角度を求める問題や面積を基にして複合図形から指定された辺の長さを求めることについては理解できていた。しかし、「数量関係」領域において「複数の資料から必要な情報を取り出して割合を求めたり問題を解決したりする過程を説明すること」に課題が見られた。また、「円の面積の公式を使って条件に応じた面積を求めること」「半径の長さを2倍にしたときに面積が何倍になるかを説明したりすること」に課題が見られた。経年比較を通して見えてきた課題は、平成22年度に引き続き、学習したことを明らかにしながら問題の解決の過程を説明することである。根拠を基に適切に自分の考えを表現していく指導の改善が必要である。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

今年度の調査で、正答率が低かった問題と無解答率が高かった問題について、「基礎的・基本的な知識・技能の定着」と「数学的な思考力・判断力・表現力の育成」の2つの視点で、分析を行った。

傾向1 **重さの単位や円とひし形の特徴など、一部の学習内容において定着に課題が見られる。**

[小学5年生 大問5の(1)②]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問5(1) ②	gとkgの単位の関係について理解している。 (短答式)	1個30gの空き缶100個の重さをkgで表す。	24.1	2.0	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して、正答率は24.1であり、35.9ポイント下回った。1000g=1kgという基礎的な知識を確実に習得していないことや、30gの100個分を計算で求めることができなかったことが要因であると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

算数的活動を通して、重さの概念を身に付けさせ、1円玉などの具体物を通して量感を豊かに育てていくことが必要である。また、1kgは1gにk(キロ)を付けて作られた単位であることなどを知らせながら児童の単位に対する興味・関心を育てていくことも大切である。また、継続的に単位換算の練習などにも取り組ませていく必要がある。

[小学5年生 大問9の①②]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問9 ①②	円とひし形の特徴について理解している。 (短答式)	2つの円が交わってできる2点と2つの円の中心を結んでできる四角形がひし形である理由を考える。	22.7	6.1	75.0	55.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率55.0に対して、正答率は22.7であり、32.3ポイント下回った。無解答率も6.1であった。円の半径の長さとしし形の辺の長さを対応して考えることができなかったことが考えられる。また、ひし形の定義を理解できていなかったことが要因であると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

算数的活動を通して、ひし形の性質やかき方の指導を行っていく必要がある。その際、定規やコンパスや分度器を使って図形の性質に気付かせたり、図形のどのような性質を使って作図したのかを児童に考えさせることが大切である。また、図形の定義については算数的活動を行ったあと、図形と対応させて確実に記憶させ、定着を図る必要がある。

[中学1年生 大問4の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問4(2)	縮図や拡大図の関係について理解している。 (短答式)	拡大図の関係にある三角形について、対応する辺の長さや角度についての性質を記述する。	21.9	3.3	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して、正答率は21.9であり、38.1ポイント下回った。互いに縮図や拡大図の関係にある図形については、その対応している角の大きさは全て等しく、対応している辺の長さの比はどこでも一定であるという理解が十分ではなかったことが要因であると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

算数的活動を通して互いに縮図や拡大図の関係にある図形の対応している角度や対応している辺の長さの比について考察させ、児童の縮図や拡大図に対する気づきを確認させる指導が大切である。また、拡大図を作図する活動を取り入れどのような定義や性質を基にしたのかを説明する活動を取り入れることも大切である。

傾向2 **基礎的・基本的な知識・技能を活用することに課題がある。**

[小学5年生 大問12の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問12 (2)	伴って変わる二つの数量の関係を調べ、未知の数量を求めることができる。 (短答式)	1つの辺の長さが20cmの正三角形を作るときに指定された棒が何本必要かを式や言葉で説明する。	18.8	7.7	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は18.8であり、31.2ポイント下回った。無解答率も7.7であった。伴って変わる二つの数量の関係を調べ、式やことばを使って、2cmの棒が何本必要であるかについて適切な考え方や棒の本数を求める問題であった。問題の意味を十分に把握できなかったことや、式や言葉を使って正三角形を作るための棒の本数の求め方を記述できなかったことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

この問題では、伴って変わる二つの数量を表を用いて表し、二つの数量の間にある関係を調べるものである。数量関係領域においては、求めるものは他のどんなものとの関係があるか、何が決まれば他のものが決まってくるかというように、求めるものと他のものとの関連付けてみる見方を大切にしていける必要がある。また、問題で問われていることが図のどこと対応しているのかを常に意識させ、解決させるような指導を心掛けていける必要がある。

[小学5年生 大問13]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問13	提示された図形の面積を工夫して求めることができる。 (短答式)	長方形の土地の中で、重なりのある道路の面積を式や言葉で説明する。	14.7	10.3	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は14.7であり、35.3ポイント下回った。無解答率も10.3であった。この問題では、長方形の形をした土地に幅が2mの道を作ったときの面積を求めさせる問題であった。長方形の面積の公式を活用して道の面積を求めるときに、道の重なりを処理しなかったり、道以外の部分を全体から差し引いて求めることができなかつたりしたことが考えられる。また、式や言葉を使って考え方を記述できなかったことも考えられる。

○ 指導法改善の手立て

この問題では、道の重なりを処理したり、等積変形をして条件に合った面積を求めることが大切になってくる。その際、図形を分割し再構成して形を変えても面積は変わらないという面積の保存性を理解していることが必要である。また、児童が問題を解決する際、今、何を求めているのかを図と対応させ、図中に記号を付け、式と記号を対応させるなどの表現の工夫をさせることも重要である。そのためには、ノート指導などを通して児童の思考過程を表現させていく指導も行っていく必要がある。また、長方形や正方形の面積の公式をいろいろな場面を通して活用させるような指導も必要である。

[中学1年生 大問9の(2)(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問9(2)	円の面積の公式を使って、条件に応じた面積を考えることができる。 (短答式)	指定された面積を工夫して半円に置き換え、面積を求める。	34.8	10.8	70.0	50.0
問9(3)	半径の長さが2倍になったときに、面積が何倍になるかを考えることができる。 (記述式)	円の半径の長さを2倍にしたら円の面積は何倍になるかを説明する。	35.5	15.9	65.0	45.0

○ 大問9の(2)解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は34.8であり、15.2ポイント下回った。無解答率も10.8であった。この問題は、円を8個のおうぎ形に分割したときの4つのおうぎ形の面積の和を求める問題であった。4つのおうぎ形を等積変形して半円の面積を求めたり、円の面積の半分と見たりして求めることが困難であったことが考えられる。

○ 大問9の(2)指導法改善の手立て

この問題では、まず円の面積の公式を確実に使うことができるようになっていることが重要である。そのためには半径の長さを問題の中から読み取ったり、円の面積の公式を確実に覚えていたりすることが大切である。また、偶数と奇数の意味をきちんと理解しておくことも必要である。問題を解決させる際には、今、何が分かっている、これから何を求めるのかという情報を整理させることや円を分割したらどのような形になるのかという円の多様な見方を育てていく必要もあると考える。

○ 大問9の(3)解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対して、正答率は35.5であり、9.5ポイント下回った。無解答率も15.9であった。この問題は円(給食当番表)の半径の長さを2倍にしたときに円の面積を求める問題であった。実際に半径の長さを2倍にした円の面積と提示された円の面積と比べることができなかつたり、公式から判断して面積が4倍になることを求めることができなかつたりしたことが考えられる。また、無解答率が高かったことから、問題の意味を把握できなかつたり、考え方を式や言葉使って表現することができなかつたりした児童が多かったことが考えられる。

○ 大問9の(3)指導法改善の手立て

この問題では(2)と同様に円の面積の公式を確実に使うことができるようになっていることが重要である。解決していることがどこの部分の面積なのかを常に考えさせ、順を追って筋道立てて表現させる指導が今後重要になってくると考える。また、「何が何の何倍か」を考えることは、児童が苦手とする内容である。そこで、数直線を用いた図や線分図などに数量を表して、それらの関係を捉えることができるように繰り返し指導し、あらゆる場面で基準量を意識できるようにすることが大切である。

[中学1年生 大問11の(1)(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問11(1)	資料から必要な情報を取り出して問題を解決することができる。 (短答式, 記述式)	資料から必要な情報を取り出し, 条件に合った割合を求める。	27.4	11.5	75.0	55.0
問11(2)		複数の資料から必要な情報を取り出し, 問題を解決する過程を説明する。	12.3	22.5	65.0	45.0

○ 大問11の(1) 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率55.0に対して、正答率は27.4であり、27.6ポイント下回った。無解答率も11.5であった。この問題は提示された資料からトラックの台数を取り出し、全体の台数の何%に当たるかを求める問題であった。資料から必要な情報を取り出せなかったり、割合の意味を理解していなかったりしたことが要因として考えられる。

○ 大問11の(1) 指導法改善の手立て

資料を読み取らせる際には、二次元表の中の数が表す事柄について、その数が何を表しているのか、単位に着目して表現できるようにすることが大切である。また、「数と計算」領域の学習指導においても割合の考えを意識して指導する必要があるので「何が何の何倍か」を考えることは、割合の考えの基礎となるものである。数直線を用いた図や線分図などに数量を表してそれらの関係を捉えることができるように繰り返し指導し、あらゆる場面で基準量を意識できるようにすることが大切である。

○ 大問11の(2) 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対して、正答率は12.3であり、32.7ポイント下回った。無解答率も22.5と平成23年度調査(中1数学)の中で1番高かった。この問題は、2つの資料から条件に合った乗用車の台数を取り出して、全体の中での白色の乗用車の台数を考察していく問題であった。条件に合った乗用車の台数を取り出せなかったり、円グラフを読み取って白色の乗用車の台数を求めることができなかったりしたことが考えられる。また、円グラフのみを見て1番多かった白色のトラックの台数を求めたことも考えられる。

○ 大問11の(2) 指導法改善の手立て

複数の資料を扱う場合は、資料の表題を基に関連している部分を考察させることが大切である。さらに円グラフのみを見てC病院前を通った白色の乗用車が1番多いと判断した生徒には(基準量)×(割合)=(比較量)の関係を図などを通して理解させ、(比較量)は(割合)だけではなく(基準量)×(割合)の量で決まることを理解させることも重要である。また、割合に関する問題解決の場面で、(基準量)×(割合)=(比較量)などの割合の考えを根拠にして、式や言葉で理由を説明できるようにすることが大切である。

エ これからの指導に向けて

今回の調査によって明らかになった課題は、図形や数量などについての基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させること、身に付けた基礎的・基本的な知識・技能を活用していく力を身に付けさせていくことである。今後も基礎的・基本的な知識・技能の習得と児童の数学的な思考力・判断力・表現力を育てていくために継続して授業に取り組んでいく必要がある。そこで、今回の調査で課題として顕著であった問題を基にして、日々の算数の授業において留意すべき3点について述べたい。

(ア) 図的な表現から言語的な表現への指導

今回の調査において、「円とひし形」の特徴、「縮図や拡大図」の関係など図形についての性質などを言葉で補う問題において課題が見られた。

算数の授業においては、算数的活動において操作的な表現から図的な表現、言語的な表現を通して児童が内容を理解していくようにすることが重要である。例えば、操作的な表現として、ひし形を2つの同じ円を交わるようにかかせる。そして、図的な表現として、かかれたひし形を観察させ、なぜ2つの円が交わってできる2点と2つの円の中心を結んでできる四角形がひし形であるのかを児童に考えさせる。次に言語的な表現として、できた四角形がひし形である理由をノートに記述させることは大切である。このように児童が図的には何となく分かるものを図形の構成要素などの言葉を使って適切に記述させる指導は今後重要視する必要がある。また、この場合、円の半径やひし形の性質など各時間に学習した算数の用語などを学習プリントなどを使ってきちんと定着させることも重要である。

(イ) 学習したことを先の算数や生活と関連付ける指導

今回の調査において、身の回りにあるものの単位換算や特殊な形の面積を求めること、資料から必要な情報を取り出して問題を解決することに課題が見られた。

算数の授業の中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付けさせることだけでなく、身に付けた知識及び技能を活用させていくことを重視しなければならない。そこで、日々の授業において、算数科の系統性を重視して、今日の学習と既習事項のつながりをいつも意識して授業を進めていく必要がある。そのためには、児童のノートや教科書、掲示物等にも配慮し、学習を振り返ることができるような手立ての工夫が必要である。また、児童には身の回りにある算数的な事象にも積極的に関わらせ、学習したことが実際に身の回りで存在することを児童に意識付けることも大切である。

例えば、小学3年生の「重さの測定」の学習で、児童に測定させた砂の重さをgで表させたり、kgで表させたりする中で、単位の関係に気付かせたり、学校の敷地の面積をいろいろな単位を使って表現させたりすることも考えられる。また、その学習を通してメートル法も発展的に学習させることも考えられる。他にも、教室の中にある掲示物の面積を求めたり、教室の中で垂直や平行を見付け出したりするような問題を提示する授業を設定することも必要である。

さらに、学習したことを活用して総合的な学習の時間等で探究的な学習ができるようにすることも大切である。例えば、読書の時間等を調査して表やグラフにまとめさせ、割合などを使って考察させる学習活動を設定し、算数の学習の有用性や意義を意識付けることなどが考えられる。

(ウ) 式や言葉を使って説明させる指導

今回の調査において解決過程を式や言葉を使って説明することに課題が見られた。算数科において、考えを表現したり、説明したりする力を児童に身に付けさせることは数学的な思考力・判断力・表現力を育てていく上で重視していかなければならない。

まず、算数の授業の中では、教師が本時のめあてを児童に明確に示して活動に取り組みせ、めあてに沿うように、式や言葉などを使って適切に表現させることが必要である。その際、数直線やテープ図、関係図などを児童が使えるように指導し、それらを活用するように促すことも大切である。

次に、自分が考えたことを隣の友達に説明することを意識させてノートに表現させることも大切である。さらに、相手に分かるようにどのように説明したらよいかを考えさせ、表現の仕方も箇条書きや番号付けなどの工夫をさせることも大切である。そして、友達から考えのよさや疑問点などを伝えてもらうことにより、説明した児童が自分の考えのよさや誤りに気付くことも考えられる。

また、全体の話し合いを通して友達の考えの表現のよさを称賛し、学級の全員で共有させて、活用していこうとする意識を高めさせることも大切である。

さらに、考えのよさを使って適用題や応用題に取り組みせ、解答だけではなく解決した根拠を明らかにさせながら表現させていくことも必要である。その際、「～だから、～」や「～を使うと、～」などの表現を大切にして、児童の演繹的な思考を育むことも重要である。

才 授業実践に参考となるリンク



授業に役立つ実践研究



授業・自己研修・校内研修のための資料集

最終更新日：2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科の調査結果の分析 > 小学校学校理科

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

小学校理科

意味付け・関係付けを意識し、考えを表現させる授業づくり

小学5年生、小学6年生、中学1年生の全ての評価の観点において、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、小学6年生では、「科学的な思考」が「おおむね達成」、「観察・実験の技能・表現」が「おおむね達成」の基準を大きく上回った。さらに、2つの観点とも「十分達成」の基準にも達している。「自然事象についての知識・理解」に関しても、小学5年生、小学6年生、中学1年生ともに「おおむね達成」の基準を上回っており、良好な定着状況が見られた。しかし、用語の定着に課題が見られた。また、小学5年生の「科学的な思考」については、「観察・実験の技能・表現」「自然事象についての知識・理解」に比べ、低い結果となり、今後の指導への課題が残る。授業では、教師は児童に対して、何が問題となっていて、それを解決するためにどのような観察や実験を行うのか、目的意識をもたせた上で活動を行わせ、学習中、常に目的意識が継続されるよう、児童の考えを表現させる積極的な場づくりを行っていく必要がある。

この後、評価の観点については、以下のように記す。

- | | | |
|-----------------|---|----------------------|
| ○自然事象への関心・意欲・態度 | → | 本調査では設定なし |
| ○科学的な思考 | → | 「思考」ただし本文中では「科学的な思考」 |
| ○観察・実験の技能・表現 | → | 「技能・表現」 |
| ○自然事象についての知識・理解 | → | 「知識・理解」 |

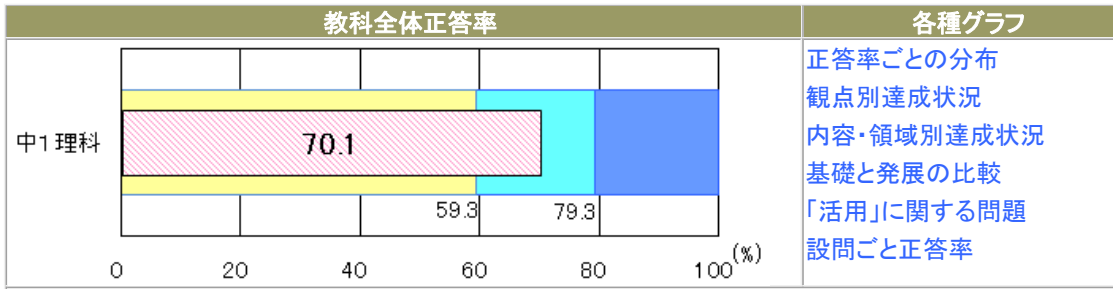
ア 結果の概要

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率



教科全体正答率		各種グラフ				
小6理科		正答率ごとの分布 観点別達成状況 内容・領域別達成状況 基礎と発展の比較 「活用」に関する問題 設問ごと正答率				
	0 20 40 60 80 100 (%)					
小6理科 設問毎正答率						
大問	小問	出題のねらい	正答率	無解答率	期待正答率 十分 達成	期待正答率 おおむね 達成
1	(1)	種子が発芽する条件を理解している	61.9	0.3	80	60
	(2)	種子が発芽する条件を調べる実験ができる	80.9	0.2	80	60
	(3)	種子が発芽するときの養分がどの部分にあるかを理解している	74.8	0.2	85	65
	(4)	種子にはでんぷんが含まれていることを理解している	73.5	1.3	80	60
2	(1)	メダカの雄と雌を区別することができる	76.7	0.1	85	65
	(2)	資料を基に、メダカの卵が日がたつにつれて成長し、中の様子が変化していく順を考えることができる	94.5	0.0	80	60
	(3)㉔	解剖顕微鏡の使い方と各部の名称を理解している	96.2	0.0	80	60
	(3)㉕	解剖顕微鏡の使い方と各部の名称を理解している	95.9	0.0	80	60
3	(4)	メダカが食べるミジンコを理解している	94.1	0.2	80	60
	(1)	精子と卵(卵子)が結びつくことを受精ということを理解している	74.1	2.1	85	65
	(2)㉔	子宮を満たしているものを羊水ということを理解している	61.1	5.1	80	60
	(2)㉕	胎児は母体内で、へその緒と胎盤でつながっていることを理解している	80.3	3.2	80	60
4	(2)㉔	胎児は母体内で、へその緒と胎盤でつながっていることを理解している	70.0	6.3	80	60
	(3)	生き物の特徴を考え、親と同じ形で生まれてくる生き物を判断することができる	87.3	0.2	80	60
	(1)	空における雲の量で天気を判断することができる	93.4	0.1	85	65
5	(2)	日本上空付近の雲は、おおむね西から東へと移動していくことを資料から読み取ることができる	63.6	0.2	85	65
	(3)	気象衛星の雲画像とアメダスのデータから天気を考えることができる	51.1	0.4	75	55
	(1)	アサガオの花のめしべを理解している	89.6	0.3	85	65
6	(2)	花粉がめしべの先につくことを受粉ということを理解している	91.3	2.5	80	60
	(3)	受粉しなければ実ができないことを確かめる実験を考えることができる	71.4	0.7	80	60
	(1)	植物の成長には、日光が関係していることを理解し、生活に生かすことができる	76.0	6.8	75	55
7	(2)	植物の実ができる受粉のしくみを基に、人工的に受粉を行う方法を考えることができる	54.1	8.4	70	50
	(1)	曲がっている川の内側と外側の流れの速さを、手応えで表すことができる	83.6	0.2	80	60
	(2)㉔㉕	川が曲がって流れているところでは、流れの向きが違うことを理解している	79.9	0.3	80	60
8	(3)	資料の川原の石の様子などから、下流の様子であることを考え、判断できる	94.3	0.6	80	60
	(1)	川の上流で降った雨も、しばらくすると下流に流れてきて、水かさが増えることについて考えることができる	73.6	3.3	70	50
	(2)	上流の雨により、地面の土などが削られ、下流まで運ばれてくることについて考えることができる	75.1	4.4	70	50
9	(1)	ものが溶けて見えなくなっている液体を水溶液ということを理解している	67.7	6.2	80	60
	(2)	水溶液の重さは、水の重さと溶かしたものの重さの和になることを理解している	93.8	0.9	85	65
	(3)	温度や水の量によってものの溶け方が変わることから、溶ける量を増やす方法を考えることができる	76.7	0.7	75	55
10	(1)	ふれはばと振り子が1往復する時間との関係について、条件を考え実験することができる	75.7	1.3	80	60
	(2)	おもりの重さと振り子が1往復する時間との関係について、条件を考え実験することができる	79.2	1.5	80	60
	(3)	振り子の長さや振り子が1往復する時間との関係について、条件を考え実験することができる	76.7	1.7	80	60
	(4)	振り子が往復する時間は、振り子の長さによって変わることを理解している	69.5	5.8	80	60
11	(1)	電磁石の働きの変化とその要因について、条件に着目して実験することができる	74.7	5.9	80	60
	(2)	電磁石とばね磁石の共通点と相違点について理解している	71.2	1.8	80	60



中1理科 設問毎正答率						
大問	小問	出題のねらい	正答率	無解答率	期待正答率 十分 達成	期待正答率 おおむね 達成
1	(1)	ものが燃えた後の空気は、石灰水を白濁させることがあることを性質を理解している	96.7	0.4	85	65
	(2)	ものが燃えた後の空気には、二酸化炭素が増えていることを理解している	90.9	0.1	85	65
	(3)	気体検知管を使って、ものが燃えた後の空気の性質を調べることができる	69.8	0.5	80	60
	(4)	ものが燃えるとき、酸素の一部が使われ二酸化炭素ができることを理解している	44	0.3	80	60
2	(1)	熱して析出物が出ないことから、気体が溶けている水溶液であることを説明することができる	26.7	9.5	75	55
	(2)A	水溶液を加熱したり、水溶液に金属を入れたらした実験結果を基に、水溶液を見分けることができる	59.0	0.4	75	55
	(2)C	水溶液を加熱したり、水溶液に金属を入れたらした実験結果を基に、水溶液を見分けることができる	72.1	0.4	75	55
	(3)D	酸性、アルカリ性、中性の水溶液の液性をトマス紙を使って調べることができる	62.0	0.3	80	60
	(3)E	酸性、アルカリ性、中性の水溶液の液性をトマス紙を使って調べることができる	56.0	0.3	80	60
3	(1)	支点と力点の距離が遠いほど、作用点に働く力は大きくなることを理解している	76.4	0.2	80	60
	(2)	てこの支点、力点、作用点を理解している	85.4	0.2	80	60
	(3)1	てこの働きを支点、力の作用点、作用点を観察し、てこの働きと関係付けて考えることができる	88.9	0.1	75	55
	(3)2	てこの働きを支点、力の作用点、作用点を観察し、てこの働きと関係付けて考えることができる	86.7	0.2	75	55
	(4)D	てこの氷平につり合うときのおもりや重さや位置とを関係付けて、数値的に考えることができる	72.2	1.0	80	60
	(4)E	てこの氷平につり合うときの規則性は、支点からの距離と力の大きさの積で表せることを理解している	82.6	3.9	85	65
4	(1)	コンデンサーという器具の名称を理解している	54.2	18.3	85	65
	(2)	コンデンサーの働きを理解している	82.1	2.4	80	60
	(3)	同じく、の蓄電量するとき、点灯時間の違いから、発光ダイオードと豆電球の電気の消費量を関係付けて考えることができる	67.4	1.8	80	60
5	(1)	燃焼のしくみと関係付けて、木材がよく燃える置き方の理由を考えることができる	66.8	3.0	75	55
	(2)	燃焼のしくみと関係付けて、木材がよく燃える置き方を考えることができる	96.0	0.5	75	55
6	(1)	でんぷんを確かめる水溶液を理解している	87.6	2.6	85	65
	(2)	実験の結果から、日光と植物の葉のでんぷんのでき方との関係を考えることができる	64.6	3.6	80	60
7	(1)	根から吸い上げられた水は、植物の体全体に行きわたることを実験で確かめることができる	58.6	0.3	85	65
	(2)	観察の結果から、葉の中の水の移動を理解している	76.5	0.4	80	60
	(3)	根から吸い上げられた水は、主に葉から蒸散していることを理解している	28.5	14.1	80	60
8	(1)	生物の間には、食う食われるという関係があることを考えることができる	79.5	0.5	80	60
	(2)	枯れた植物を食べている動物を通して、植物と動物の関係について考えることができる	69.0	7.3	70	50
9	(1)	顕微鏡に見える地層は、小石(礫)、砂、粘土(泥)などから構成されていることを考えることができる	53.8	4.8	75	55
	(2)	地層のでき方には、流れる水の働きが関係していることを考えることができる	67.3	4.2	70	50
10	(1)D	月は太陽の光に照らされて輝いていることを理解している	72.2	0.9	80	60
	(1)E	月と太陽の位置関係を正しく観察することができる	78.5	1.0	80	60
	(2)	満月のとき、月と太陽は地球を挟んで反対の位置にあることを考えることができる	17.0	8.8	65	45
11	(1)	人体の、血液を送る心臓の働きと位置を理解している	89.4	1.7	85	65
	(1)	人体の、血液を送る働きをする臓器を心臓ということを理解している	87.7	2.7	85	65
	(2)A	血液は、酸素を運んでいることを理解している	70.9	3.5	85	65
	(2)B	血液は、養分を運んでいることを理解している	78.0	3.2	85	65

教科全体正答率について、全ての学年において、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「十分達成」の基準を上回った学年は見られなかった。

(イ) 評価の観点別正答率

①小学5年生

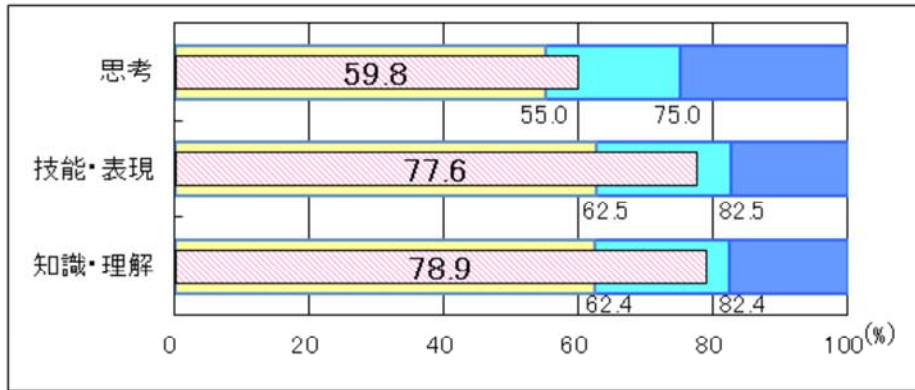


図1 H23年度(小学5年生理科)評価の観点別正答率

全ての観点において、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「科学的な思考」については、「おおむね達成」の到達基準55.0を4.8ポイント上回った。しかし、「技能・表現」の到達基準62.5を15.1ポイント上回っていること、「知識・理解」の到達基準62.4を16.5ポイント上回っていることに比べて低い結果となった。事象の解釈や観察・実験を行うことの理由を説明することに課題が見られた。何を解決するために観察や実験を行っているのか、目的を明確にしないまま活動を行っていることが考えられる。

②小学6年生

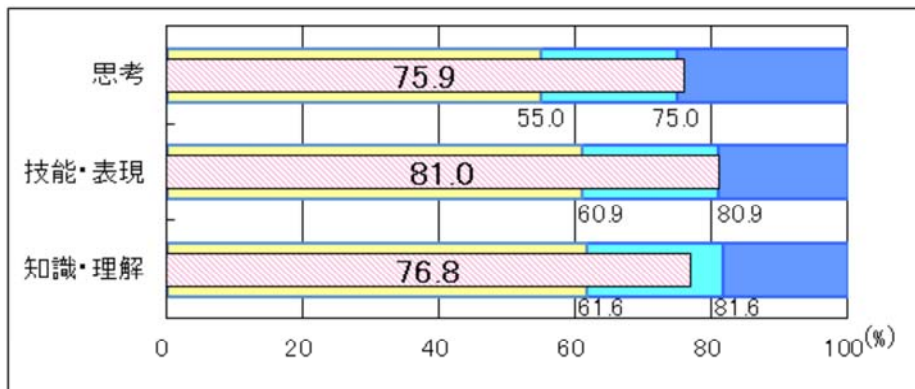


図2 H23年度(小学6年生理科)評価の観点別正答率

全ての観点において、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、「科学的な思考」と「技能・表現」は基準を上回っており、「十分達成」の基準に達していた。調べる目的を明確にして、観察や実験の活動に向かわせるような学習指導が行なわれていると考えられる。

③中学1年生

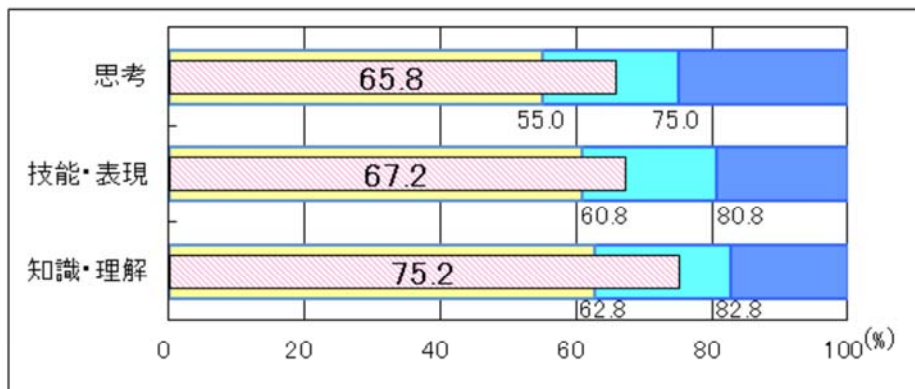


図3 H23年度(中学1年生理科)評価の観点別正答率

全ての観点において、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「科学的な思考」が「おおむね達成」の到達基準55.0を10.8ポイント上回っていること、「知識・理解」が「おおむね達成」の到達基準62.8を12.4ポイント上回っていることに比べて、「技能・表現」については、「おおむね達成」の到達基準60.8を6.4ポイントと、「おおむね達成」の基準を上回る率が低い結果となった。高学年では、普段の生活の中ではなじみが薄い、理科の実験特有の薬品や器具を扱った実験も多い。一例としてリトマス試験紙を使った水溶液の液性調べなどでは、水溶液とリトマス試験紙の色の変化について、正しく結果を整理させることが不十分なことが挙げられる。

(ウ) 内容・領域別正答率

①小学5年生

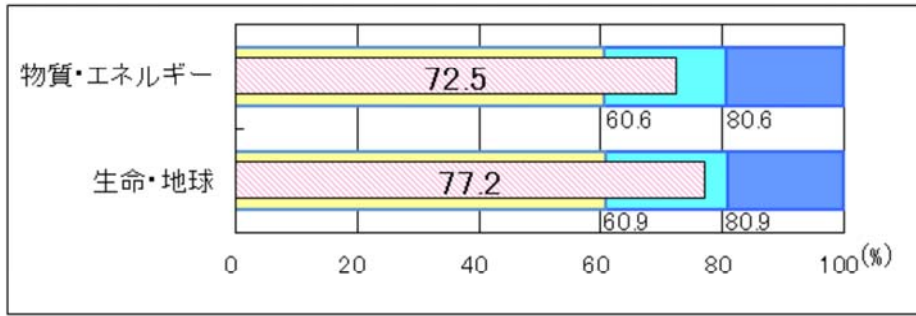


図4 H23年度(小学5年生理科)内容・領域別正答率

②小学6年生

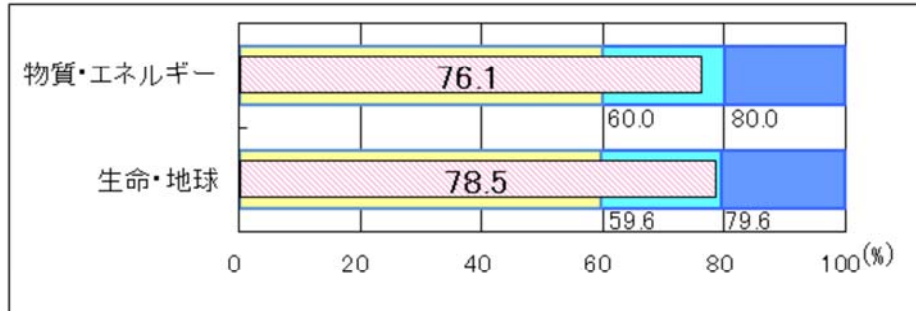


図5 H23年度(小学6年生理科)内容・領域別正答率

③中学1年生

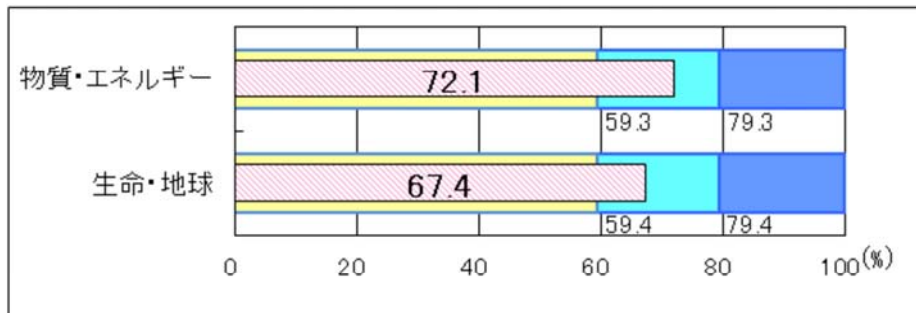


図6 H23年度(中学1年生理科)内容・領域別正答率

平成23年度から全面実施となった新学習指導要領では、「物質・エネルギー」、「生命・地球」の2つに区分けされた。小学5年生と小学6年生では、「生命・地球」に比べて、「物質・エネルギー」の正答率が低くなっている傾向が見られる。中学1年生では、「物質・エネルギー」に比べて、「生命・地球」の正答率が低くなっている傾向が見られる。中学年の「生命・地球」の内容は、星の観察や植物の成長の仕方など、観察活動が主となるが、高学年の「生命・地球」の内容は、植物の水の通り道を実験で調べたり、月と太陽の位置関係をモデル実験で調べたりするなど、実験的な活動が求められる。つまり、事象と実験を関係付けて問題解決を図ることが多い。このことが、高学年において、児童が「生命・地球」の内容に難しさを感じていると考えられる。

イ 経年比較

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

平成22年度の教科正答率は、小学校5年生が最も低い結果であった。また、平成22年度の小学5年生の観点別正答率を見ると、中でも「科学的な思考」が最も低い結果であった。そこで、経年比較では、まず初めに、考える力の児童の能力の伸長の点から、「科学的な思考」について、平成22年度と平成23年度において同一児童を追跡し分析を行う。次に、児童の体験充実の点から「観察・実験の技能・表現」について、平成22年度と平成23年度において、中学1年生同一学年を取り上げ、分析を行う。最後に、「活用」に関する問題について、平成22年度と平成23年度において、中学1年生同一学年を取り上げ、分析を行うこととする。

(ア) 「科学的な思考」の経年比較

①H23小学6年生とH22小学5年生(同一児童)

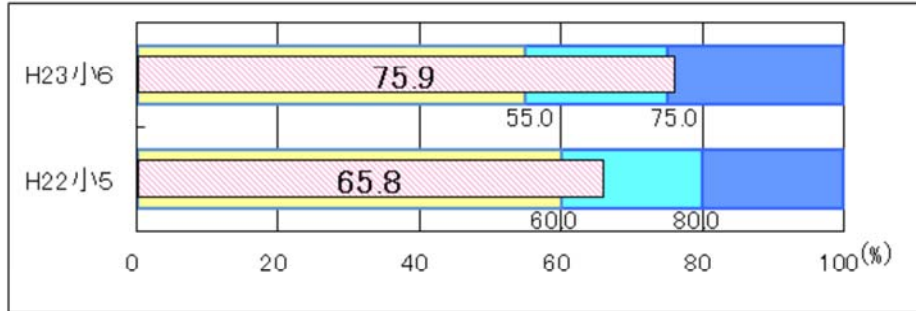


図7 H22・23年度(小学5・6年生理科)「科学的な思考」正答率の経年比較

平成22年度の小学5年生では、「おおむね達成」の到達基準60.0に対して、それを5.8ポイント上回る正答率65.8であった。平成23年度の小学6年生では、「おおむね達成」の到達基準55.0に対して、それを20.9ポイント上回る正答率75.9であり、平成22年度から増加している。さらに、これを「科学的な思考」の到達度分布で、平成22年度と平成23年度を比較すると図8のようになる。

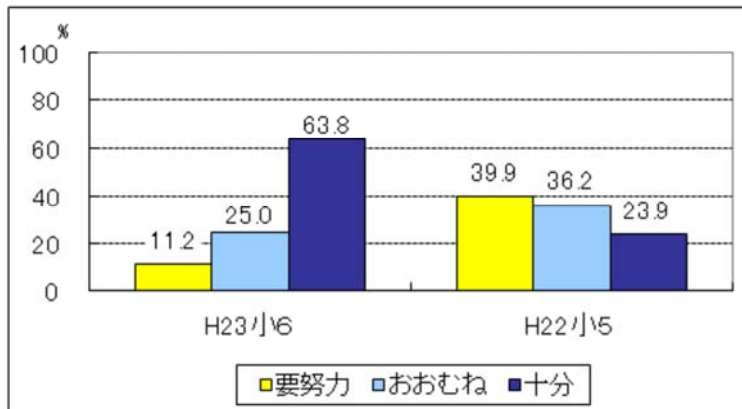


図8 H22・23年度(小学5・6年生理科)「科学的な思考」の到達度分布の経年比較

「十分達成」の児童の割合は、平成22年度の23.6%に対し、平成23年度は63.8%と「十分達成」の基準に到達している児童の割合が増えていることが分かる。「要努力」の児童の割合を見ても、平成22年度の39.9%に対し、平成23年度は11.2%と28.7ポイント減少している。平成23年度の小学6年生の「科学的な思考」の調査問題を各設問ごとに見ると、児童が観察や実験を行った結果を基にした思考を問う問題が多く出題されている傾向がある。そのため児童が、実際の授業での観察や実験を想起しながら、そこから論理的に考えて解答することができたと考えられる。しかし、平成23年度の調査問題では、気象衛星の雲画像とアメダスのデータから、日本のある地点の天気を考える問題について、「おおむね達成」の基準をに到達していなかった。資料やデータを読み解く力に課題があると考えられる。

②H23中学1年生とH22小学6年生(同一児童)

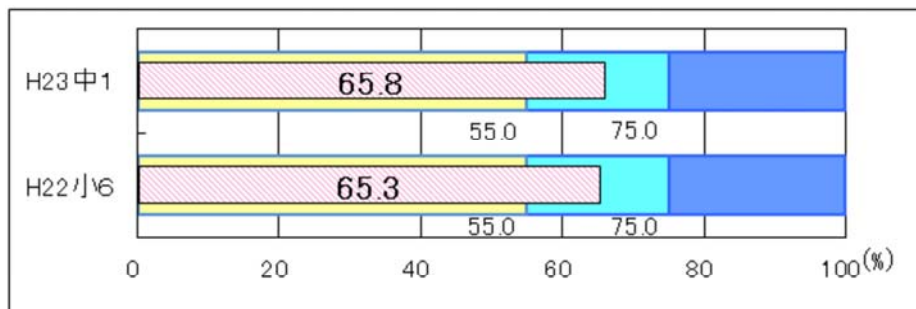


図9 H22・23年度(小学6年生・中学1年生理科)、「科学的な思考」の正答率の経年比較

平成22年度の小学6年生では、「おおむね達成」の到達基準55.0に対して、それを10.3ポイント上回る正答率65.3であった。同一児童である平成23年度の中学1年生では、「おおむね達成」の到達基準55.0に対して、それを10.8ポイント上回る正答率65.8であり、平成23年度は平成22年度より0.5ポイント上回っていた。しかし、これを「科学的な思考」の到達度分布で、平成22年度と平成23年度を比較すると図10のようになる。

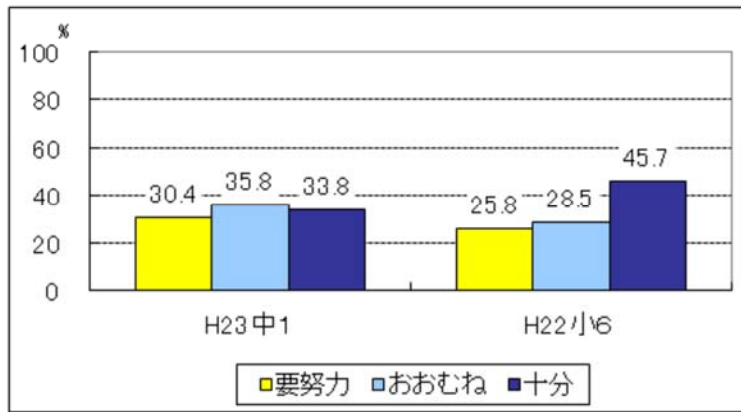


図10 H23年度(中学1年生理科)、H22年度(小学6年生理科)「科学的な思考」の到達度分布の経年比較

「十分達成」の生徒の割合は、平成22年度は45.7%だったのに対し、平成23年度は33.8%と、「十分達成」の基準に到達している生徒の割合が減少している。「要努力」の生徒の割合を見ると、平成22年度の25.8%に対し、平成23年度は30.4%と4.6ポイント増加している。平成23年度の中学1年生の「科学的な思考」の調査問題では、月の見え方と太陽の位置との関係から、月と太陽の位置関係を推論して説明したり、地層とその地層に見られる小石の特徴から地層のでき方を説明したりすることに課題が見られた。事実と事実を関係付けて、そこに解釈を加え表現することに児童が難しさを感じていることがうかがえる。

(イ) 「観察・実験の技能・表現」の経年比較

H23・H22年度中学1年生理科(同一学年)

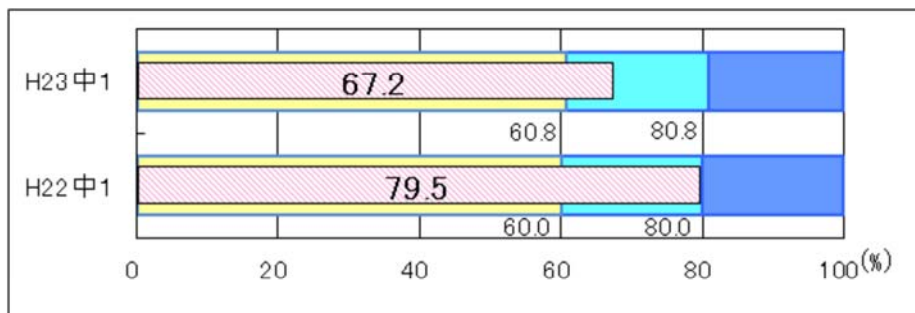


図11 H22・23年度(中学1年生理科)「観察・実験の技能・表現」の正答率の経年比較

平成22年度の中学1年生では、「おおむね達成」の到達基準60.0に対して、それを19.5ポイント上回る正答率79.5であった。平成23年度の中学1年生では、「おおむね達成」の到達基準60.8に対して、それを6.4ポイント上回る正答率67.2であり、平成22年度より低い結果となった。これを「技能・表現」の到達度分布で、平成22年度と平成23年度を比較すると図12のようになる。

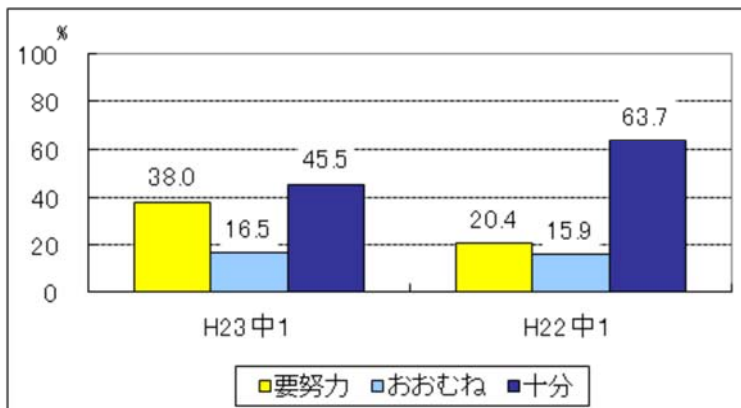


図12 H22・23年度(中学1年生理科)「技能・表現」の到達度分布の経年比較

「十分達成」の生徒の割合が、平成22年度の63.7%に対し、平成23年度は45.5%と「十分達成」の基準に到達している生徒の割合が減少している。さらに、「要努力」の生徒の割合を見ると、平成22年度の20.4%に対し、平成23年度

は38.0%と17.6ポイント増加している。平成22年度と平成23年度の比較から、「技能・表現」について、「十分達成」と「要努力」との二極化傾向にあることが懸念される。平成23年度の調査問題を設問毎に見てみると、「リトマス試験紙を使って水溶液の液性を調べたり、植物の水の通り道を実験で調べたりすること」に課題が見られた。どちらも、問題を解決するための調べるための「方法」としては理解できているが、一人一人が実験の結果として、正確に整理できていないことが考えられる。結果を表に整理させ、考察させる際、結果を根拠として表現させるような指導が必要であると考える。

(ウ) 「活用」に関する問題の経年比較
H23・H22年度中学1年生理科(同一学年)

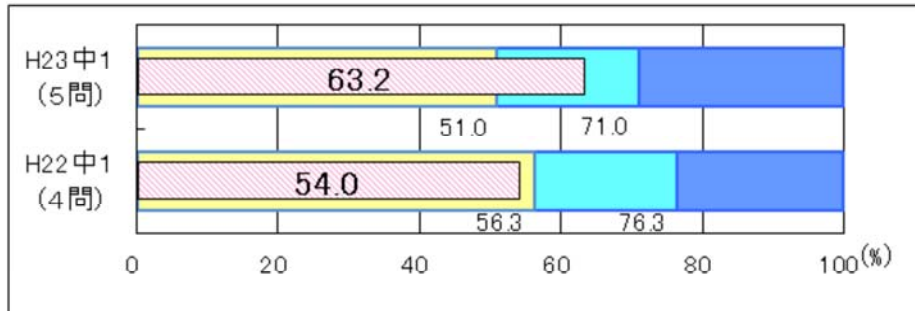


図13 H22・23年度(中学1年生理科)「活用」に関する問題の正答率の経年比較

平成22年度の中学1年生では、「おおむね達成」の到達基準56.3に対して、それを2.3ポイント下回る正答率54.0であった。平成23年度の中学1年生では、「おおむね達成」の到達基準51.0に対して、それを12.2ポイント上回る正答率63.2であり、平成23年度は、平成22年度を上回った。平成21年度からの移行期間から、平成23年度の学習指導要領に対応するため、「活用」を意識した学習指導が行われている成果が見られると考えられる。活用に関する問題では、記述で解答を求めることが多い。そこで、平成23年度の小学5年生、小学6年生、中学1年生の調査問題から、活用に関する問題を含む「理由や解釈を記述させる問題」を抽出し、整理すると表1のようになる。

表1 H23年度(小学5年生、小学6年生、中学1年生理科)「理由や解釈を記述させる問題」の正答率

	問題数	正答率	十分達成	おおむね達成
小学5年生	4	33.8	73.8	53.8
小学6年生	4	69.7	71.3	51.3
中学1年生	7	52.6	72.9	52.9

表1より、小学6年生は「おおむね達成」の基準を上回っているが、小学5年生と、中学1年生は、「おおむね達成」の基準を下回っている。特に、小学5年生において、正答率が低く、理由や解釈を記述することに課題が見られる。このことは、中学年の学習指導において、観察や実験の活動で時間をとり、児童自身の考えを記述させるような場面が少なくなってしまうことが一因として考えられる。観察や実験の活動に加えて、積極的に自分の考えを表現させるような言語活動の充実を図る必要がある。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

平成23年度の調査結果を受け、学習内容の理解、定着の面から、「知識・理解」について、自らの考えを表現することの面から「科学的な思考」について総合的に分析する。また、学習指導要領にて、重点の1つとなっている実社会・実生活との関連を重視する内容を充実させる点からも分析を行う。

傾向1 **自然の事物・現象の解釈をしたり、理由について考えを述べたりすることに課題がある。**

[小学5年生 大問5の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問5(1)	身の回りのものを使って、水の温まり方を調べることができる。 (記述式)	水の温まり方の実験で、みそを入れる目的を説明させる。	55.2	2.7	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して、正答率は55.2であり、4.8ポイント下回った。無解答率も2.7であった。この学習では、水の温まり方を調べるために、みそを用いることが多い。水にみそを入れて、熱したときのみそ動きから、温められた水の動きを視覚的に捉えさせるものである。本調査問題は、水の温まり方を調べる「方法」から「目的」を問う、可逆的な思考を要するものである。児童に、調べる目的と実験方法との意味付けや関係付けがなされていないことが正答率の低さの理由として考えられる。

○ 指導法改善の手立て

水の温まり方の学習では、導入で、水を入れた試験管の下部を熱し、熱したところから離れた水面近くが温まっていることを体感させ、「水はどのように温まっていくのか」という学習問題へと導くことが多く行われる。そこで、それを調べるためにみそなどを用いることになる。しかし、児童によっては、水の中にみそを入れて熱することで、なぜ温まり方が分かるのか、目的と実験方法とが結びつかないまま活動を行っているものと考えられる。指導としては、児童に、問題に対し予想や仮説を基に実験を行わせることが大切である。「もし温められた水が移動しているならば、その動きがみそで分かるのではないか」という考えをもたせた上で、実験に取り組ませる必要がある。さらに、考察の場面では、「みそが上に移動していることから、温められた水は、上に移動している」という結果を踏まえた表現をさせる指導が必要である。

[中学1年生 大問2の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2(1)	熱して析出物が出ないことから、気体が溶けている水溶液であることを説明することができる。 (記述式)	塩酸を熱したとき、あとに何も残らなかったことについて、理由を説明させる。	26.7	9.5	75.0	55.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率55.0に対して、正答率は26.7であり、28.3ポイント下回った。無解答率も9.5であった。水溶液の性質の単元では、気体が溶けている水溶液として、実際に水に二酸化炭素を溶かす内容がある。これにあわせて、塩酸も気体が溶けたものであることを指導する。塩酸は塩化水素が水に溶けたものであるが、危険な薬品でもあり、塩化水素の名称についても小学6年生では取り扱わない。この調査問題では、塩酸を熱したあとに何も残らなかった理由を、「気体」という用語を使って説明することに、難しさを感じる児童が多かったと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「気体が溶けている水溶液」の学習内容で、水に二酸化炭素を溶かす活動を行う。教師は、気体が溶ける水溶液の代表として、水に二酸化炭素を溶かす活動を行わせることを、より意識して指導する必要がある。二酸化炭素が溶けている証明として、炭酸水の液性をリトマス試験紙で調べたり、石灰水と混ぜて白濁することを確認めたりさせるが、これに加えて、炭酸水を熱してもあとに何も残らないことを丁寧に指導し、気体が溶けているから熱してもあとに何も残らないという考えをもたせることが大切である。このとき、塩酸やアンモニア水も熱して、あとに何も残らないことを確かめさせ、気体が溶けている水溶液について、より理解を深めさせると良い。

傾向2 **学習したことを実生活での場面と関連させて考えたり生かしたりしていくことに課題がある。**

[小学5年生 大問9の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問9(1)	空気中の水蒸気は、結露して現れることがあることについて考えることができる。 (記述式)	冬、教室の窓ガラスの内側に水滴がついていたことを理由を説明させる。	26.5	6.8	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は26.5であり、23.5ポイント下回った。無解答率も6.8であった。学習指導においては、「水の三態」のあと、「自然の中の水」として、空気中の水蒸気存在について学習する。具体的には、コップに氷水を入れて、コップの外側に水滴が付くことから、空気中の水蒸気が冷やされて水の状態に戻ること調べる活動を行う。しかし、特定の条件下で実験したことと、身の回りに起きる自然現象とを関連させて考え、説明することが児童にとって難しい様相がうかがえる。

○ 指導法改善の手立て

自然の中の水の蒸発について、単元の導入にて、雨が降ったあとの水たまりなどが、しばらくするとなくなっていく現象をどのように考えるか、児童の考えを十分引き出させるような丁寧な指導が必要である。児童はこの現象に対して、自分なりに考えをもち、イメージを膨らませる。導入の段階では、水蒸気となって空気中に出て行くことに関して、漠然としたイメージでもよい。そこから予想や仮説を立てて、水を入れた2つの容器で、ラップをかぶせたもの、かぶせないものを比較する実験へとつなげるようにする。このとき、水蒸気をイメージ図として描かせることが、見えない水蒸気が空気中に出て行くことを、より具体的なイメージとしてもたせることに有効であると考えられる。逆に、氷水を入れたコップに水滴が付く現象についても、空気中の水蒸気をイメージ図として描かせ説明させるような指導を行っていくようにする。このように、現象をイメージ図として描かせることで、自然現象が起きる日常生活の場面でも、事象を具体的にイメージし、学習と実生活の場面とを関連させて考えることができるようになっていくと考える。

[小学6年生 大問4の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問4(2)	日本上空付近の雲はおおよそ西から東へと移動していくことを理解している。 (選択式)	気象衛星から見た連続した3日間の日本上空の雲画像から、雲の移動(方角)の特徴を選択肢から選ばせる。	63.6	0.2	85.0	65.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率65.0に対して、正答率は63.6であり、1.4ポイント下回った。日本上空付近の雲はおおよそ、西から東へと移動していることについて、選択式の問題にも関わらず「おおむね達成」の基準を下回った。日本上空付近の雲は、おおよそ西から東へと移動していることは、調査結果よりも多くの児童が知識として持っていると考えられるが、気象衛星から見た雲画像を示されたことで、かえって地図上に見るデータの読み取り方に戸惑ったのではないかと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

気象衛星から見た日本上空の雲画像は、日常生活では、天気予報番組などでよく目にするものである。今後の天気について天気の情報を得たり、自分なりに予想することは、私たちの日常生活を送る上でも欠かせない活動である。学習指導要領においても、映像などの情報を活用して雲の動きなどを調べ、天気の変化の仕方について考えをもたせることが求められている。実際の学習指導では、教科書やインターネットなどの画像データなどを利用することが多い。その際、画像データに映る日本と地図上の方位を丁寧に関係付けて読み取らせることが大切である。また、学級全体で画像データの読み取りを確認させる場を設けることが大切である。一人一人のデータの読み取りを整理し、学習をまとめるために電子黒板などの情報機器の利用が考えられる。

傾向3 **科学的な用語の定着に課題がある。**

[小学6年生 大問9の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問9(1)	ものが溶けて見えなくなっている液体を水溶液ということを理解している。 (短答式)	ものが溶けて見えなくなっている液体の総称をことばで書く。	67.7	6.2	80.0	60.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して、正答率は67.7であり、7.7ポイント上回った。しかし、他の知識・理解を問う問題に比べ無解答率が6.2と高かった。水に物を溶かして無色透明又は有色透明になっている液体を水溶液といい、食塩水、ホウ酸水、塩酸などは全て水溶液である。しかし、水に食塩を溶かしたものは、「食塩水」、水にホウ酸を溶かしたものは「ホウ酸水」と呼ぶため、学習の中で、児童が、水溶液という用語を使う頻度が少ないことが、無解答率が高くなる一因として考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「水溶液」という用語の定着のためには、水溶液の定義を学習する際は、教師は、「食塩の水溶液」、「ホウ酸の水溶液」など、ことばに出したり、板書して示したりし、「水にものを溶かして見えなくなった状態のものを水溶液ということ」を児童に意識させることが大切である。水溶液の重さは、水と溶かしたものの重さの和になることを学習する内容では、実験素材としては食塩水を用いることが多い。この場合、「水に食塩をとかずと重さはかわるのだろうか」という問題提起でなく、「水に食塩をとかしたとき、水溶液の重さは変わるのだろうか」などの問題提起の仕方を工夫することが大切である。

[中学1年生 大問7の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
H23 問7(3)	根から吸い上げられた水は、主に葉から蒸散していることを理解している。 (短答式)	植物の体から水が水蒸気となって出ていくことを何とよいか、ことばで書く。	28.5	14.1	80.0	60.0
H22 問7(2) ㊸		植物の体から水が水蒸気となって出ていくことを何とよいか、文章中にことばを入れる。	27.2	14.3		

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率60.0に対して、正答率は28.5であり、31.5ポイント下回った。また、無解答率も14.1と平成23年度調査(中1理科)において高かった。平成22年度も同様の問題が出題されているが、同じような結果であった。学習指導要領改訂にともない、平成21年度の以降期間から追加された内容である。植物が根から水を取り入れていること、その水は植物の体全体に行きわたっていることは、経験的に児童にも理解されやすい。その水が、植物の葉から空気中に放出されるという事実とその用語について、日常生活で意識されたり、用語を使用したりすることがほとんどないことが正答率の低さ、無解答率の高さの理由として考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「蒸散」という日常生活では使わない用語の定着のためには、植物が吸い上げた水が葉の表面の穴から水蒸気となって空気中に放出されることを、実験を通して科学的な概念として獲得させた後に、積極的に用語として使用していくことが求められる。例えば、学習の中で「植物はなぜ水をあげないと枯れてしまうのか」などの問いかけをし、説明し合うような場面を設けることが考えられる。そのとき児童が、「蒸散で水が出て行ってしまうから」などの説明ができるように指導していくことが必要である。

エ これからの指導に向けて

今回の調査によって、主に「自然の事物・現象の解釈をしたり、理由について考えを述べたりする」と、「実生活との関連を図る」ことに課題があることが分かった。この2つの点は、つながりが深い。小学校理科の教科の目標に掲げられている「科学的な見方や考え方を養う」ことについて、学習の対象は、自然の事物・現象である。この自然の事物・現象の関わって私たちの生活があり、そこに理科の学習で科学的なアプローチをして、児童に科学的な概念をもたせなければならない。したがって、教師は、常に児童に「学習していることは、自分たちの生活と関わっていること」を念頭に置かせて、自然の事物・現象に対して、疑問や問題意識をもたせ、目的意識をもって観察・実験を行わせていくことが大切である。さらに、より科学的な思考力・表現力の育成を図るために、学習指導要領で求められている言語活動の充実の一つとして、自分の考えを根拠をもって述べさせたり、考えを交流させたりすることが大切である。学習で学んだ自然の事物・現象の性質や働き、規則性などが、実際の自然の中で成り立っていることに気付いたり、生活の中で役立てられていることを確かめたりすることで、自然の事物・現象について、意味付け・関係付けが図られ、実感を伴った理解ができると考える。

(ア) 日常生活との関連を図った問題解決に取り組ませること

学習と日常生活との関連を図るためには、児童が生活の事象から問題を見だし、それを解決していこうという態度をもたせることが大切である。例えば、5年生の「天気の変化」では、1日の雲の様子を観察から始め、数日間の雲の様子の変化と天気の変化を関係付けさせ、雲の動きの規則性について気象情報を集めさせたり、読み取らせたりする活動を通して、天気は予想することができるという考えをもたせるように指導することが多い。しかし、児童は、日常生活の天気予報番組などで、明日の天気や一週間の天気を予想できることは知っており、その情報を基に日々の生活を送っていることも事実としてある。このことを踏まえると、児童には、「そもそも天気予報はどのようにして天気を予想しているのだろうか」、という単元を通じた問題意識をもたせて学習に取り組ませたい。このような単元全体を見通した問題意識をもたせることで、一連の問題解決が、理科の授業場面のみならず、児童の日常生活の中でも継続され、単なる天気に関する情報として見ていた天気予報番組も見方が変わっていくと考えられる。さらに、理科の学習場面にそれが生かされるようになることも考えられる。このように、教師は、常に日常生活と学習との関連を意識した指導計画を立て、学習指導を行うことが大切である。

(イ) 観察・実験の結果を踏まえた考察を行わせること

自然の事物・現象の解釈をさせたり、理由について考えを述べさせたりする力を高めるためには、観察・実験の結果を踏まえた考察を行わせることである。そのためには、まず、児童に観察・実験の「結果」を重要視させることが大切である。観察・実験の「結果」を重要視させることは、遡って、調べる目的が明確でなければならないことも意味する。例えば、6年生の「水溶液の性質」では、水溶液の液性を調べるのにリトマス試験紙を使用する。塩酸の液性を調べた場合、「塩酸は酸性であることが分かった」ことだけを考察として表現させてはならない。「結果」と「考察」を分けて指導することが大切である。「結果」「考察」「結論」と、学習過程によっては、考察を結果の検討の場とし、考察のあと結論を位置付ける考え方もあるが、この場合も教師は「結論」を重視してはならない。結果とは「青色リトマス紙に塩酸を付けると、リトマス紙が赤色に変わった」「赤色リトマス紙に塩酸を付けると、リトマス紙は変化しなかった」ということである。この「結果」と合わせて、「考察」として表現させることが大切である。つまり「塩酸は酸性である」という結論の根拠を結果に求め、常に意識させて表現させることが大切である。

(ウ) 思考と表現をつなぐ言語活動の充実を図ること

学習指導要領改訂により評価の観点が従来の「科学的な思考」から「科学的な思考・表現」となった。このことは、理科の学習における児童の思考を、表現させることで、その表現を基に思考の評価を行っていくというものである。前述の「(イ) 観察・実験の結果を踏まえた考察を行わせること」も理科における言語活動の一つと考えてよい。児童が事象に対してどのような考えをもっているのか、どのように解決していこうとしているのか、なぜそう思うのかなど、児童に自分の考えを表現させる場の設定やワークシートの記述のさせ方の工夫が必要である。児童にとっても、頭の中で分かっているつもりでいても、それを声に出したり、書き出したりすることで、より思考の整理が行われる。そのことで、自身の理解の程度や課題となる点について自覚することにつながり、探究活動がより一層充実したものになると考えられる。

オ 授業実践に参考となるリンク



平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科の調査結果の分析 > 中学校国語

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

- ※ 中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。
- ※ 本報告書「Ⅱ 調査結果の概要」には、中3国語についても、参考のために、便宜上、到達基準を設定しているが、この項の中3国語においては、到達基準を基にした分析を行っていない。

中学校国語

読み取ったことを基に、自分の考えをもたせ、表現させる言語活動の充実を

中学2年生全体としては、全ての評価の観点において、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、「言語についての知識・理解・技能」の観点においては、「十分達成」の基準を上回った。しかし、「書くこと」に課題が見られた。設問毎に見ていくと、自分の考えの形成に課題があるという実態が見られた。今後は、授業における言語活動の充実の核として、読み取ったことを基に、自分の考えをもち、的確に話したり、書いたりする活動を充実させる必要がある。

国語科においては、評価の観点と内容・領域が重なるという教科の特質上、以下のように記す。

- | | |
|------------------|-------------------------|
| ○国語への関心・意欲・態度 | → 「関心・意欲・態度」(中学3年生のみ設定) |
| ○話す・聞く能力 | → 「話す・聞く」 |
| ○書く能力 | → 「書く」 |
| ○読む能力 | → 「読む」 |
| ○言語についての知識・理解・技能 | → 「知識・理解・技能」 |

ア 結果の概要

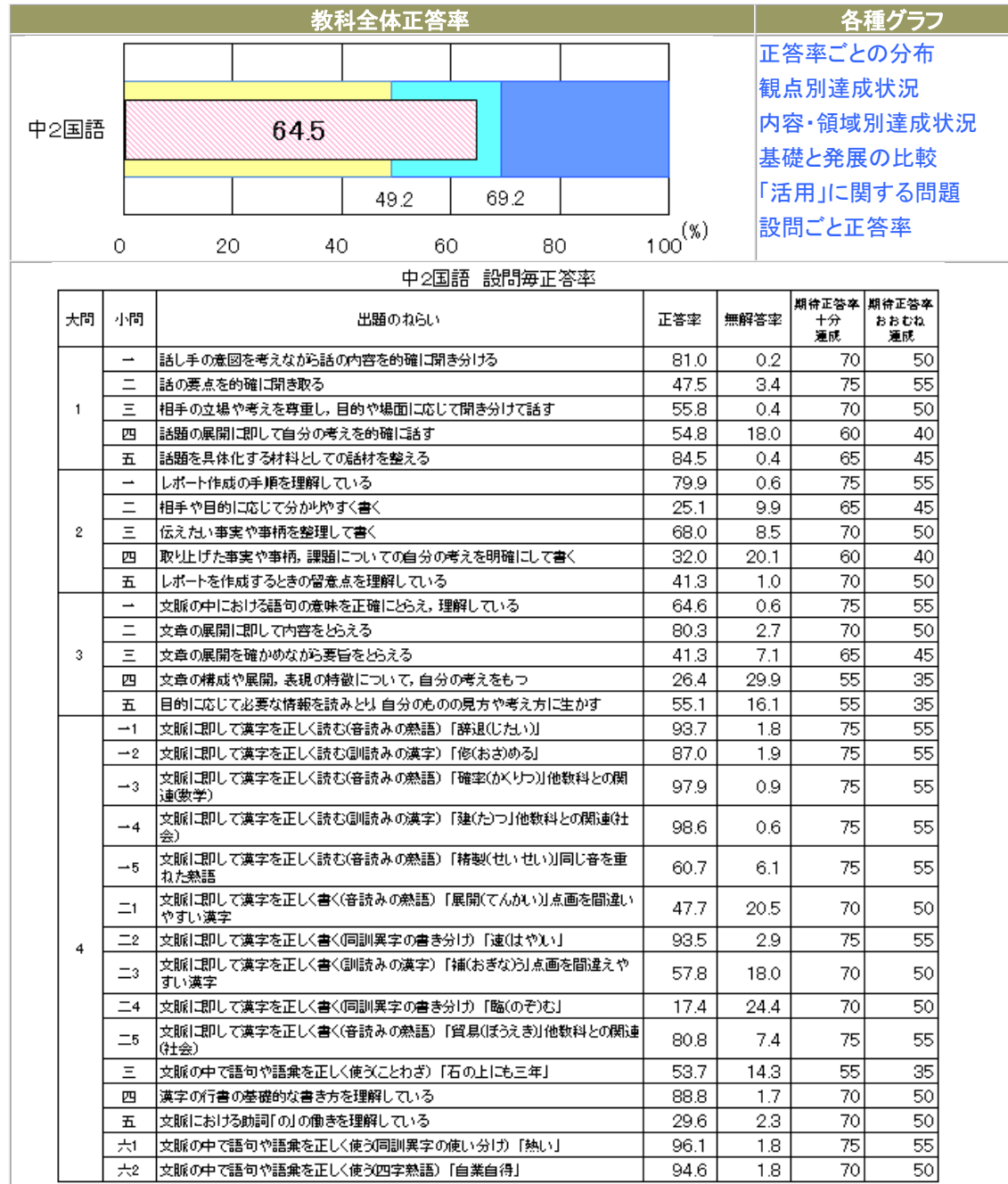
各学年ごとに教科全体の正答率について到達基準との比較を示す。

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

中3国語は、過去の全国調査の問題を利用しているため、凡例が異なる。

(凡例) : 実施時の全国平均

(ア) 教科全体及び設問毎正答率





中学2年国語の教科全体の正答率は64.5で、「おおむね達成」の到達基準49.2に対して、15.3ポイント上回った。中学3年国語の教科全体の正答率は81.3で、実施時の全国平均に対して、0.5ポイント上回った。

(イ) 評価の観点別正答率

① 中学2年生

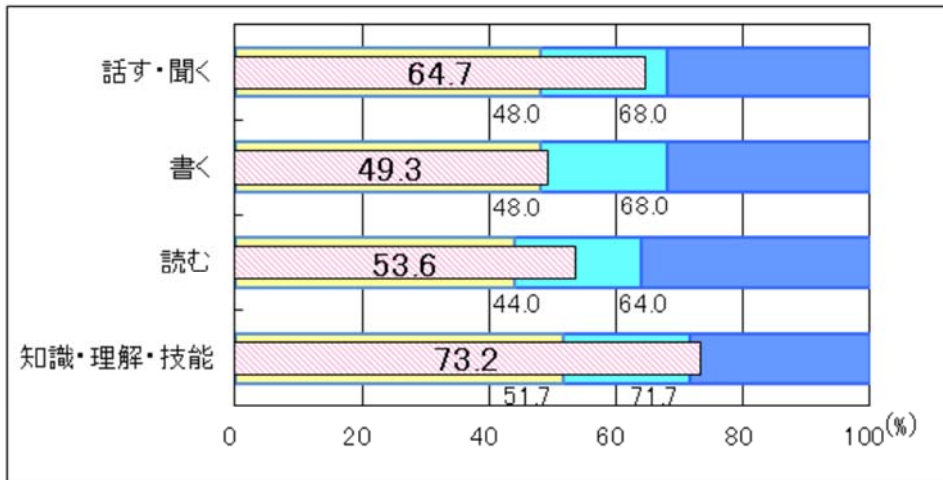


図1 H23年度(中学2年生国語)評価の観点別正答率

中学2年国語の評価の観点別正答率を見ていくと「書く」の観点49.3で、「おおむね達成」の到達基準48.0に対して、1.3ポイント上回ったが、他の観点に比べて最も低かった。児童生徒意識調査によると、「国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている」という設問に対して、半数程度の生徒が「当てはまる」と回答している。また、教師意識調査では、「自分の思いや考えを書いて表現するような授業」を「多くの単元で行っている」の回答が29%、「半数程度の単元で行っている」の回答が23%であった。「書くこと」の授業は行われているものの、「何を書けばよいのか」、「どのように書けばよいのか」の理解の定着が図られていないことが原因であると思われる。

(ウ) 内容・領域別正答率

① 中学2年生

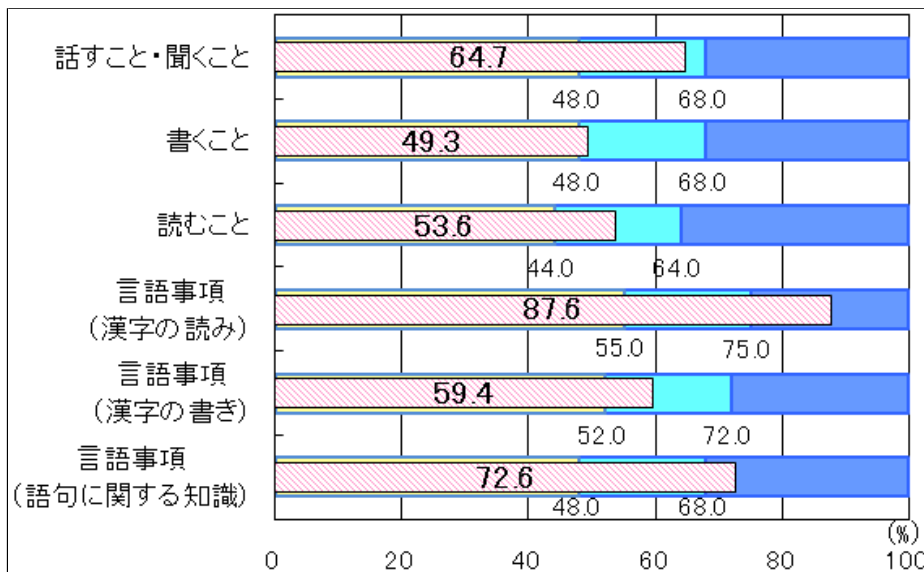


図2 H23年度(中学2年生国語)内容領域別正答率

「話すこと・聞くこと」と「言語事項」については、「おおむね達成」の基準を上回った。特に、「漢字の読み」については、「十分達成」の基準を12.6ポイント上回った。しかし、「書くこと」「読むこと」については「おおむね達成」の基準を上回る程度で、課題が見られる。

イ 経年比較

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

平成22年度からの課題となっている内容・領域の「書くこと」、「読むこと」、「言語事項(漢字の書き)」について分析し、指導改善が図られたかの確認を行うことにする。そのために、同一学年の中学2年生に着目し、平成23年度と平成22年度の経年比較により分析を行う。

(ア) 中学校2年生の「書くこと」の経年比較(同一学年)

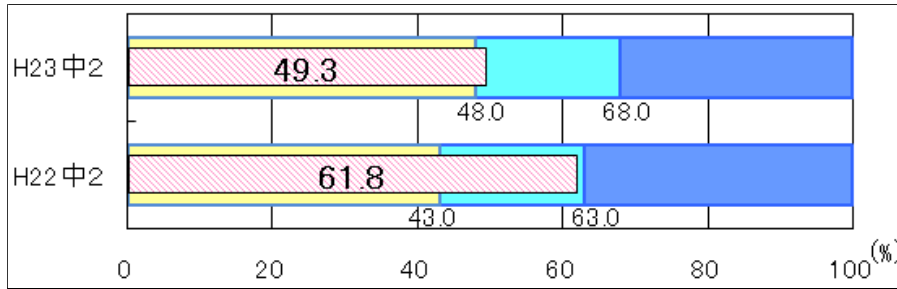


図3 H22・23年度(中学2年生国語)「書くこと」の正答率の経年比較

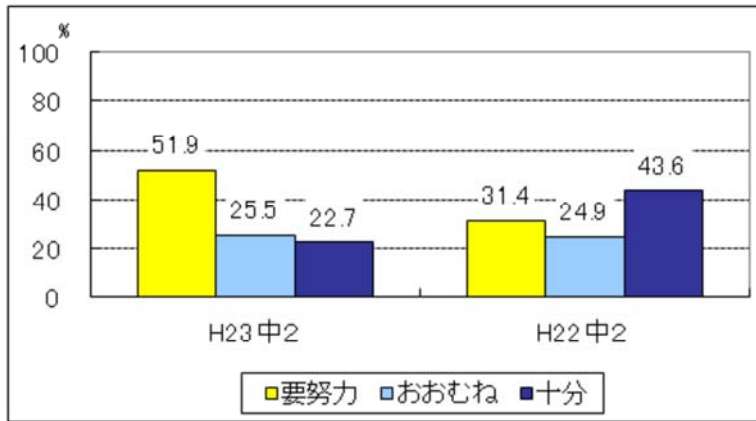


図4 H22・23年度(中学2年生国語)「書くこと」の到達度分布の経年比較

平成22年度と平成23年度(中学2年生国語)「書くこと」の正答率と到達分布について経年比較を行った。平成22年度は「おおむね達成」の基準を18.8ポイント上回っていたが、平成23年度は「おおむね達成」の基準を1.3ポイント上回る結果となった(図3)。設問毎に見ていくと、「相手や目的に応じて分かりやすく書くことや、取り上げた事実や事柄、課題についての自分の考えを明確にして書くこと」、「レポートを作成する時の留意点を理解しながら書くこと」の正答率が低い結果となった。

「書くこと」の到達度分布の経年比較をすると、「おおむね達成」の生徒の割合は、平成22年度に比べて0.6ポイント増加しているが、「十分達成」の生徒の割合は、平成22年度に比べて20.9ポイント減少している。また、「要努力」の生徒の割合が、平成22年度に比べて20.5ポイント増加する結果となっていて、課題である(図4)。

(イ) 中学校2年生の「読むこと」の経年比較(同一学年)

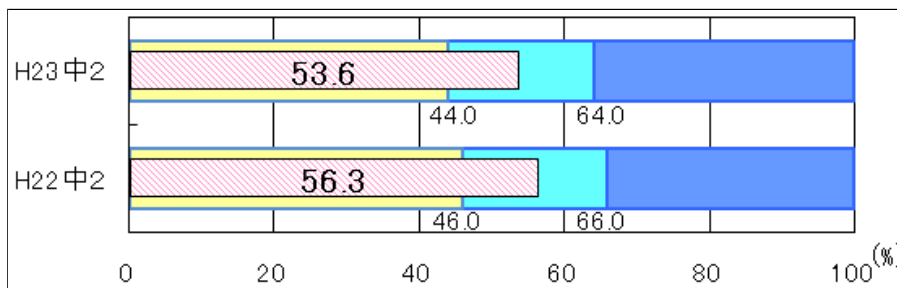


図5 H22・23年度(中学2年生国語)「読むこと」の正答率の経年比較

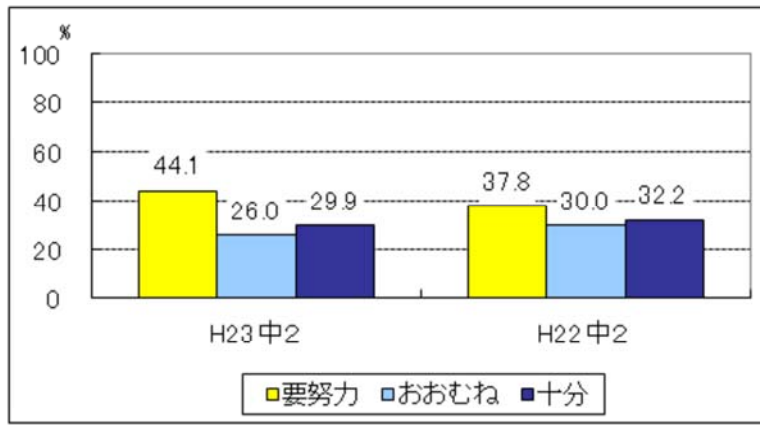


図6 H22・23年度(中学2年生国語)「読むこと」の到達度分布の経年比較

平成22年度と平成23年度の(中学2年生国語)「読むこと」の正答率の経年比較と到達分布の経年比較を見ると明らかなように、平成23年度の中学2年生は、平成22年度の中学2年生に比べて、正答率は2.7ポイント下回っている(図5)。平成22年度も「読むこと」に課題があったが、平成23年度も引き続き「読むこと」に課題があると言える。設問毎に見ていくと、「文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつ」問題に関して、正答率は26.4で、無解答率は29.9と、正答率を3.5ポイント上回っている。

教師意識調査によると、「国語で目的や意図に応じて、文章の内容や表現の仕方に注意して読み、それについて自分の考えをもつ活動を取り入れた授業を行っていますか」という設問に対して、ほとんどの教師が「行っている」という回答であった。にもかかわらず、生徒の力として定着していない。

「読むこと」の到達度分布の経年比較を見てみると、平成22年度と平成23年度では、分布グラフの形状としては、形が似通っているものの、「十分達成」の生徒の割合も「おおむね達成」の生徒の割合も平成22年度に比べて、それぞれ3.0ポイント減少している。また、「要努力」の生徒の割合については、平成22年度よりも6.3ポイントも増加していて課題である(図6)。

(ウ) 中学2年生の「言語事項(漢字の書き)」の正答率の経年比較

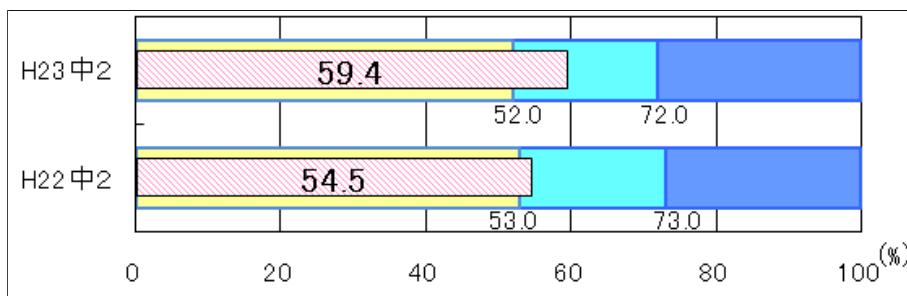


図7 H22・23年度(中学2年生国語)「言語事項(漢字の書き)」の正答率の経年比較

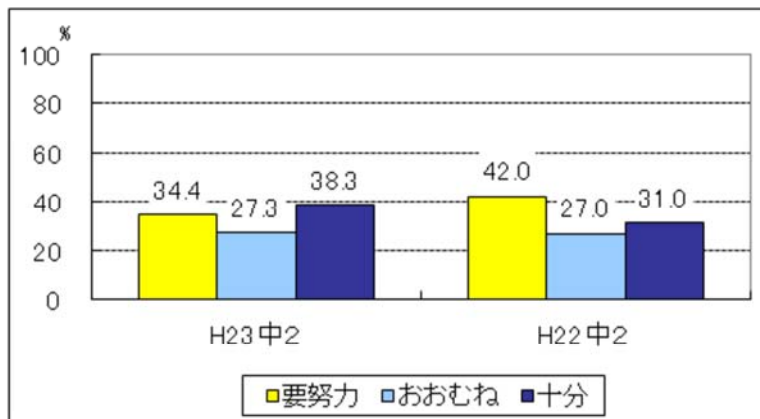


図8 H22・23年度(中学2年生国語)「言語事項(漢字の書き)」の正答率の経年比較

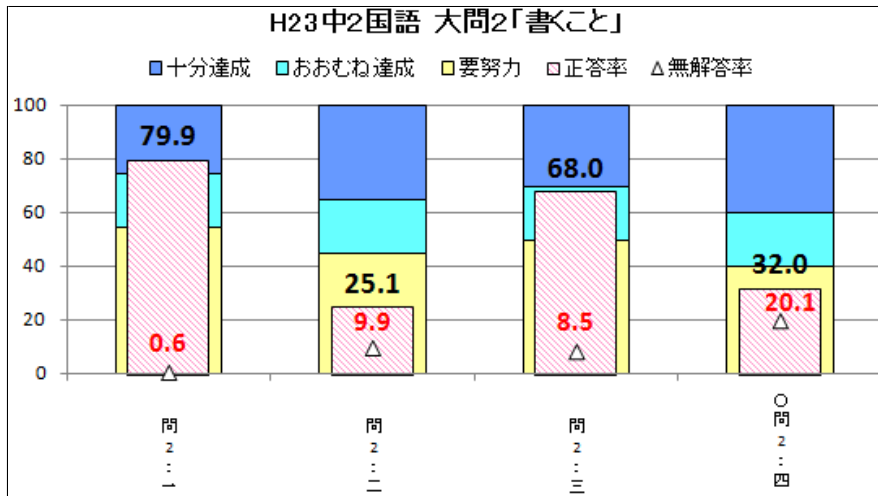
平成22年度と平成23年度の(中学2年生国語)「言語事項(漢字の書き)」の正答率の経年比較と到達分布の経年比較を見ると明らかなように、正答率が4.9ポイント上回っており、漢字の書きの力は定着してきていることがうかがえる(図7)。設問毎に見ていくと、同訓異字の書き分けの問題である「はやくい」については正答率は93.5で、定着が見られることが分かる。点画の間違いやすい問題についても、定着が見られる。「臨む」については、正答率の経年変化を見るため、平成22年度に引き続き再出題したが、正答率が17.4である。無解答率は24.4と高く、迷った末に無解答のままにしてしまったのではないと思われる。

「言語事項(漢字の書き)」正答率の経年比較を見ていくと、「おおむね達成」の生徒の割合は、さほど変化がないものの、「要努力」の生徒の割合が平成22年度に比べ、7.6ポイント減少し、「十分達成」の生徒の割合が7.3ポイント増加している(図8)。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

上記の「ア結果の概要」と「イ経年変化」から、「書くこと」、「読むこと」、「言語事項」において課題が見えてきた。そこで、この3つの内容・領域を取り上げ、正答率が低かった設問と無解答率が高かった問題について、設問ごとに分析を行うことで、より詳細に課題を把握し、具体的な改善の手立てについて探ることとした。

傾向1 **相手や目的に応じて分かりやすく書いたり、取り上げた事実や事柄、課題についての自分の考えを明確にして書いたりすることに課題がある。**



[中学2年生 大問2の二]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2二	相手や目的に応じて分かりやすく書く (記述式)	テーマ設定の理由を、構想メモをもとに、レポートに合う形に書き換える。	25.1	9.9	65.0	45.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対して、正答率は25.1であり、19.9ポイント下回った。答えとして求められていることについて、内容とレポート形式という答え方の2段階に分けて思考を整理することや、2文という条件に合わせて書くことに、課題がある生徒が多いためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

与えられた条件を踏まえた思考の道筋を示すことが大切である。この問題では次の3ステップが考えられる。

1、何を書くのか

テーマ設定の理由

2、構想メモをもとに2文で

①梅雨の時期体調を崩した

②医者から体力が落ちていて、朝食を食べているかの確認

3、指定された形(レポート形式、2文で)

「このことから、朝食と体力との関係を詳しく調べようと思った。」に続く形で、2文で書く。

以上のことを、ステップ毎に丁寧に押さえていく必要がある。

[中学2年生 大問2の四]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2四	取り上げた事実や事柄、課題についての自分の考えを明確にして書く。 (記述式)	調べた内容(1)から(3)の中から一つ選び、それについての意見を田中さんになつたつもりで書く。	32.0	20.1	60.0	40.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して、正答率は32.0であり、8.0ポイント下回った。文章や図表などから、何が書かれているかを読み取り、読み取ったことを基に、自分の考えをもつ。最後に、自分の考えを、条件に合わせて文章に書くということに、課題がある生徒が多いためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

与えられた条件を踏まえた思考の道筋を示すことが大切である。この問題では次の3ステップが考えられる。

1、何が書かれているのか

レポートの中にある調べた内容(1)から(3)までが、それぞれ何が書かれているかを読み取る。

その際、文章だけでなく、図表などを読み取る力も問われてくる。

2、読み取ったことを基に、自分の考えをもつ

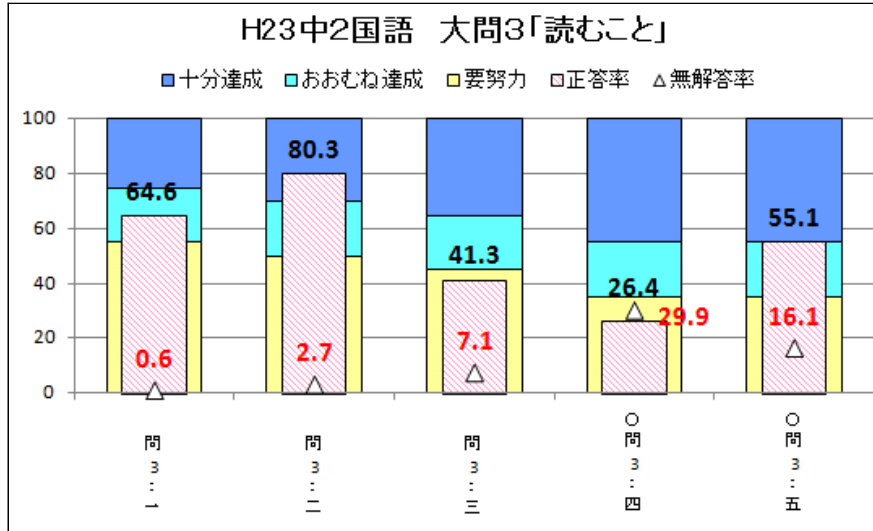
1で読み取った傾向を基に、今後どうすればよいか考えをもつ。

3、考えたことを、条件に合わせて書く。

条件に合わせて、分かりやすく書く。

以上のことを、ステップ毎に丁寧に押さえていく必要がある。

傾向2 **読み取ったことを基に、自分の考えをもつことに課題がある。**



[中学2年生 大問3の三]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問3三	文章の展開を確かめながら要旨をとらえる。 (短答式)	文章中に書かれている内容を一文にまとめる。	41.3	7.1	65.0	45.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対して、正答率は41.3であり、3.7ポイント下回った。5行ほどに書かれている内容の要旨を捉えることが出来ないことが課題であると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

説明的な文章では、接続詞や順序を表す言葉に着目して読むことで、内容の理解に役立つことがある。「かむことによる別の効用」は、本文には5行ほどに書かれており、要約するのは困難と思いがちだが、「第一に」「第二に」という言葉に着目することで、筆者が何を言いたいかを読み取ることができる。そして、その言葉を基に、条件に合わせて一文にすることで、正解が得られる問題である。

説明的な文章は、論の展開の中心となる部分と、それを支える例示や引用などの付加的な部分とが組み合わせられていたり、事実を述べた部分と意見を述べた部分とで構成されていたりする。「文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分ける」には、接続詞や順序を表す言葉などに着目し、文章の構成や展開、表現の特徴をおおまかに捉えるような習慣を身に付けさせたい。

[中学2年生 大問3の四]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問3四	文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつ。 (記述式)	文章の特徴と、その効果について、山田さんになったつもりで自分の考えを書く。	26.4	29.9	55.0	35.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率35.0に対して、正答率は26.4であり、8.6ポイント下回った。文章の内容を読み取

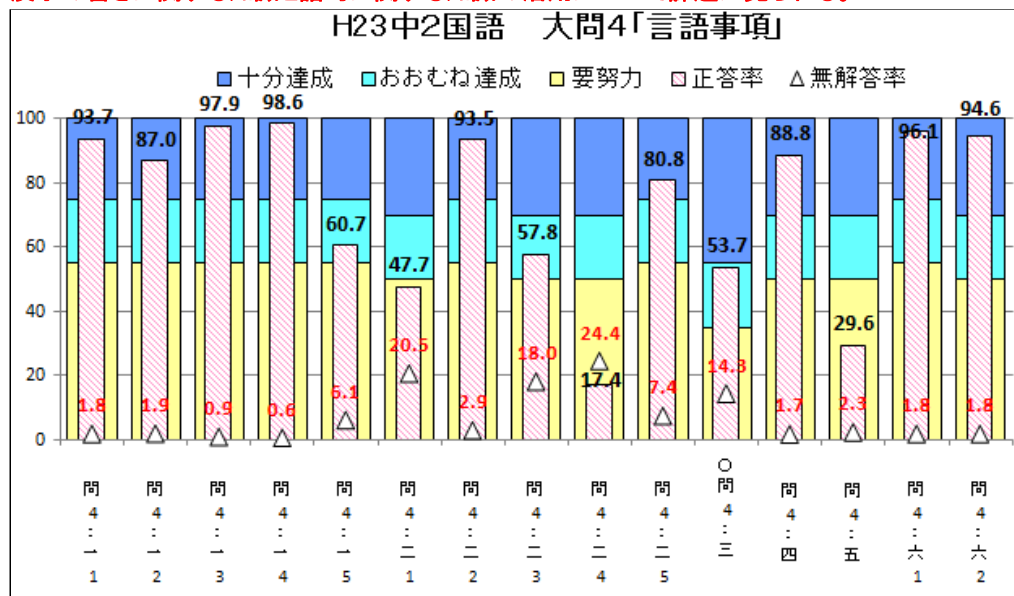
ることができるが、文章の構成や展開、表現の特徴にまで気を付けて読む習慣が身に付いていないことが課題であると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

この問題は、文章と図表との関連を考えながら、説明の文章を読み、自分の考えを表現する問題である。文章を読む際に「何が書かれているのか」という内容の理解だけでなく、「どのように書かれているか」という文章の表現の仕方にも注意して読む必要がある。

文章の構成や展開、表現の特徴を捉え、それについて「自分の考えをもつ」というのは、文章についての印象をもつことにとどまるものではない。様々な形態の文章の構成や展開、表現の特徴を分析的に捉え、その工夫と効果について、自分の考えをもつことである。このためには、説明、評論、物語、詩歌など、様々な文種の文章に触れさせ、比べ読みをするなどして、その特徴と効果について考えさせる必要がある。普段の授業においても、比べ読みの活動を取り入れるなど、複数かつ様々な文種の文章に触れさせる機会を設ける必要がある。また、日頃の読書活動においても、様々な文種の文章に親しむように指導したい。

傾向3 漢字の書きに関する知識と語句に関する知識の活用について課題が見られる。



【中学2年生 大問4の2の4】

○ 問題の概要

出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問4-2-4 文脈に即して漢字を書く。(同訓異字の書き分け)「臨む」 (短答式)	競技会の開会式に「ノゾむ」の「臨む」を書く。	17.4	24.4	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は17.4であり、32.6ポイント下回った。無解答率も24.4であった。「のぞむ」=「望む」であり、「臨む」という訓読みの漢字と用例が定着していないことが課題であると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

漢字を指導する際には、その漢字を用いた語句の例を併せて学習させることが大切である。「開会式に臨む」は「臨場」「臨席」などと関連させ、同訓異字の書き分けは、熟語にして考えたり、文中で考えたりしながら、適宜指導していく必要がある。また、日常の様々な機会を捉えて、漢和辞典などを活用し、漢字を用いた語彙を広げていくことも大切である。

【中学2年生 大問4の5】

○ 問題の概要

出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問4-5 文脈における助詞「の」の働きを理解している。 (短答式)	助詞「の」のうち、言葉の働きが他と異なるものを選ぶ。	29.6	2.3	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は29.6であり、20.4ポイント下回った。文における付属語の働きが理解できていないことが課題であることが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「助詞」は単語と単語との関係を示したり、意味を添えたりする働きをもつ品詞である。助詞を使うことによって、言語生活の上でお互いの伝えたい微妙なニュアンスを、相手によりよく伝えることが出来ることに気付かせるよう指導する。また、日常の言語生活を具体的に取り上げ、助詞や助動詞が、文脈の中でどのような働きをしているかに注意させ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことに役立たせるようにすることも大切である。

エ これからの指導に向けて

本調査で明らかになったことは、「書くこと」について、平成22年度は、改善が見られたものの、平成23年度になり、また落ち込むという結果になった。以下の点を意識しながら改善を図っていくことが大切である。

(ア)「話すこと聞くこと」

話の内容を聞き取る指導は充実してきたので、これに加えて、話し手の意図を考えながら聞くことにも配慮して指導する。更に授業では、聞き取ったことを基に自分の考えをもち、根拠を明らかにして話す活動に取り組ませることにより、話す力の向上にもつなげることができる。また、話し方や聞き方、話し合い方などの指導も必要である。

(イ)「書くこと」

平成23年度佐賀県学習状況調査(中学校国語)において、一番課題となった領域であり、力を入れて指導すべき領域である。

指導に当たっては、日常生活や社会生活の中から課題を集め、多様な方法で材料を集めながら自分の考えをまとめるような機会を設けるようにする。集めた材料を分類するなどして整理するとともに、段落の役割を考えて文章を書く活動を取り入れる。初めは短い文章から取り組み、徐々に分量を多くするように心がける。事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるようにするためには、分かりやすい説明や具体例を加えたり、表現しようとする内容に最もふさわしい語句を選んで描写を工夫したりすることが大切である。また、文の構成や描写を工夫するだけでなく、書いた文章を読み返し、より分かりやすい文章にするように心がける習慣も身に付けさせなければならない。最後に書いた文章はお互いに交流することを通して、意見や助言を交換し、次の表現の参考にさせるように指導することが必要である。

(ウ)「読むこと」

説明的な文章の解釈については、文章の中心的部分と付加的部分と意見などを読み分け、要約したり要旨を捉えたりすることが大切である。また、文学的な文章の解釈については、描写の効果や登場人物の言動の意味などを考えて読み取り、読み取ったことを基に、自分の考えをもたせることが大切である。様々な種類の文章を読むためには、文章だけでなく、図表などを読み取る力も問われてくる。文章と図表などの関連を考えながら、説明や記録の文章を読む力を身に付けさせなければならない。また、文章の内容だけでなく、文章の構成や展開、表現の仕方など、文章の形式についても自分の考えをもたせる必要がある。

(エ)「言語事項」

漢字の読み書きについては、日常的にあらゆる機会を捉えて地道に行うことが大切である。新出漢字だけでなく、既習漢字についても、音訓、熟語の基本を押さえた後は、文脈に即して漢字を使うことができるかどうかを確認することが大切である。語句に関する知識についても、覚えた後は、使う機会を増やして定着を図るようにする。日々の漢字の練習も、効果的な練習をさせるようにしたい。国語のノートのみならず、他教科のノートや学活ノートなどでも、習った漢字を使うように言葉がけをしていくなど、工夫が必要である。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日：2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科の調査結果の分析 > 中学校社会

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

中学校社会

思考力・判断力・表現力を育み、知識・技能の確実な定着を図るために

中学2年生、中学3年生ともに「社会的な思考・判断」「資料活用の技能・表現」の観点は、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「社会的事象についての知識・理解」は「おおむね達成」の基準を中学2年生、中学3年生ともに下回った。平成22年度の調査で課題として挙げられた「社会的な思考・判断」について、中学2年生、中学3年生ともに「おおむね達成」の基準を上回り、改善が見られた。しかし、「社会的事象についての知識・理解」については、特に中学2年生、中学3年生の歴史的分野の基礎的・基本的な知識や技能・概念の習得と定着に課題が見られた。社会的事象の意味、意義を解釈する学習や、事象の特色や事象間の関連を説明する学習などを通して、習得した基礎的・基本的な知識、概念や技能を定着させる手立てが必要である。

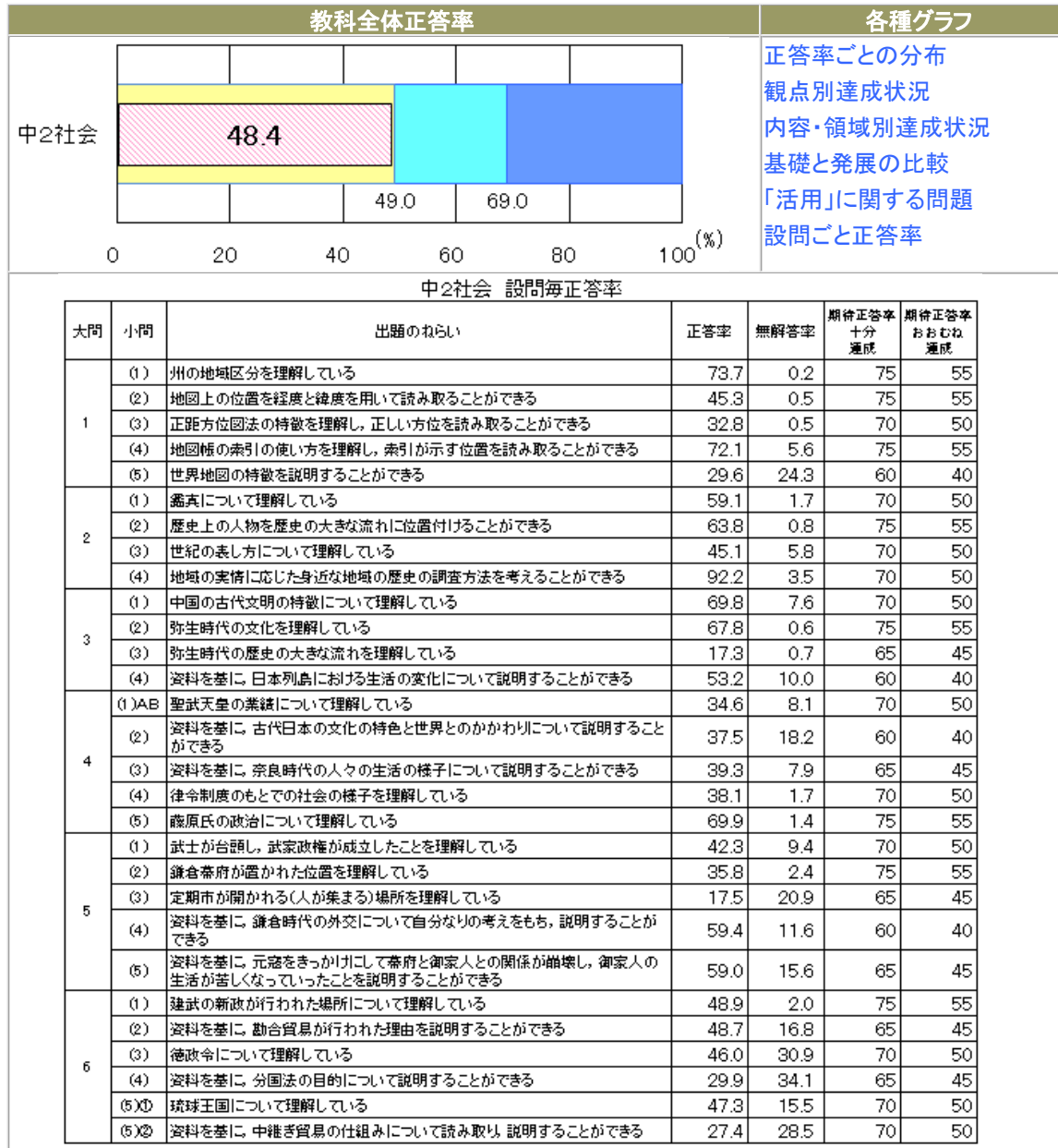
この後、評価の観点については、以下のよう記す。

- | | | |
|-------------------|---|-----------|
| ○社会的な事象への関心・意欲・態度 | → | 本調査では設定なし |
| ○社会的な思考・判断 | → | 「思考・判断」 |
| ○資料活用の技能・表現 | → | 「技能・表現」 |
| ○社会的事象についての知識・理解 | → | 「知識・理解」 |

ア 結果の概要

(凡例) :要努力(おおむね達成の基準を下回る) :おおむね達成 :十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率





中学2年生は「おおむね達成」の基準を下回った。中学3年生は「おおむね達成」の基準を上回った。また、正答率が「おおむね達成」の基準を上回っていても、無解答率が20.0を超える問題もあった。

(イ) 評価の観点別正答率

① 中学2年生

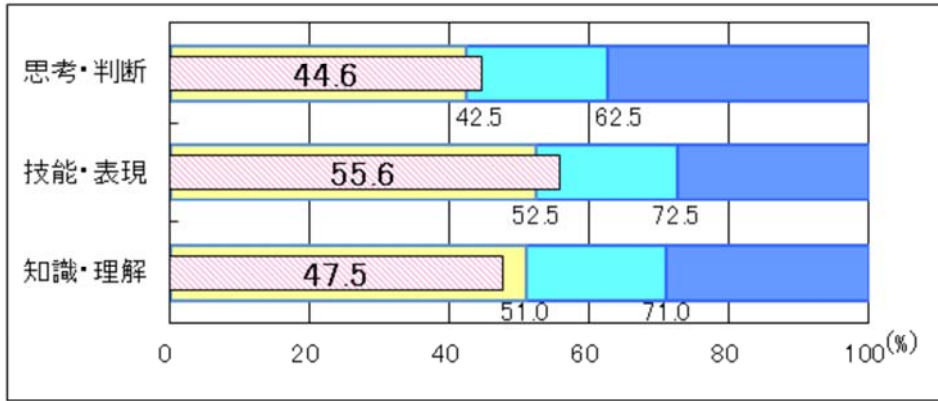


図1 H23年度(中学2年生社会)評価の観点別正答率

「思考・判断」「技能・表現」の観点は、「おおむね達成」の基準を上回ったが、「知識・理解」は「おおむね達成」の基準を下回った。歴史的分野の「中世の日本」の「知識・理解」に課題が見られ、鎌倉時代から室町時代に関する基礎的・基本的な歴史的事象についての理解と定着が不十分であったためと考えられる。

② 中学3年生

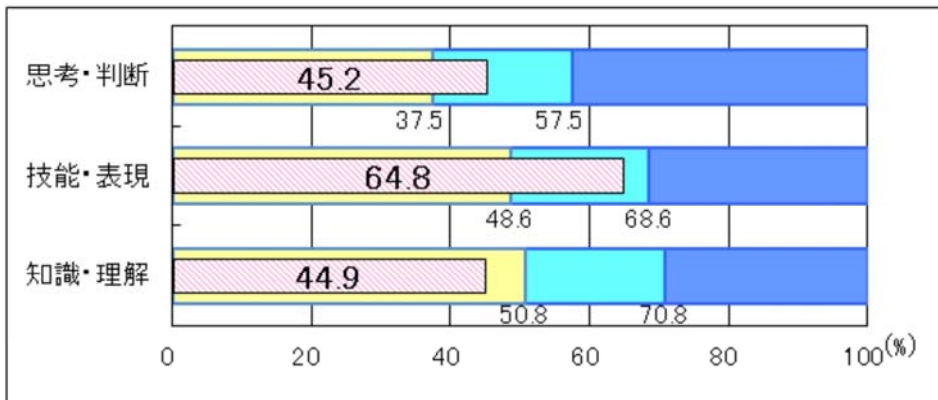


図2 H23年度(中学3年生社会)評価の観点別正答率

「思考・判断」「技能・表現」の観点は、「おおむね達成」の基準を上回ったが、「知識・理解」は「おおむね達成」の基準を下回った。歴史的分野の「近現代の日本と世界」の「知識・理解」に課題が見られ、戦後の高度経済成長の時期に関する歴史的事象についての基礎的・基本的な事象の理解と定着が不十分であったためと考えられる。

(ウ) 内容・領域別正答率

① 中学2年生

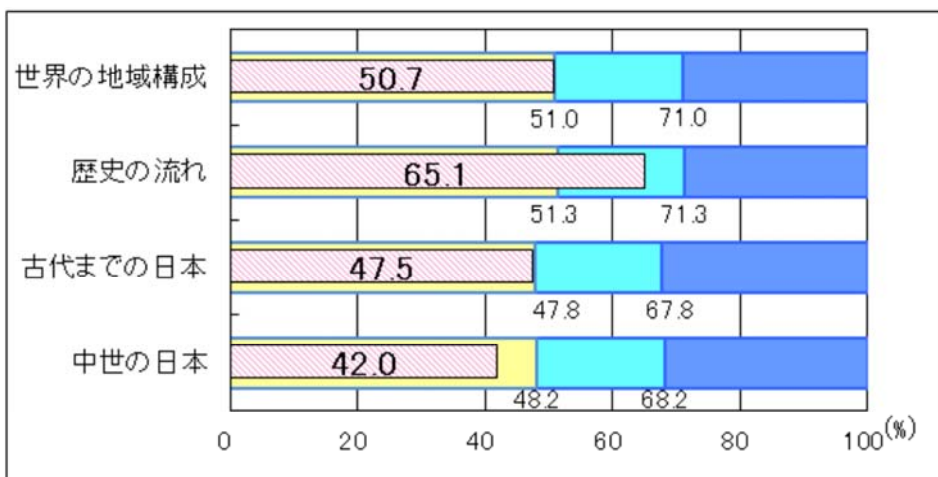


図3 H23年度(中学2年生社会)内容・領域別正答率

地理的分野の「世界の地域構成」は「おおむね達成」の基準を下回った。特に、緯度・経度や、さまざまな地図

の活用についての問題の正答率が、「おおむね達成」の到達基準を10.0～20.0ポイント下回っている。歴史的分野では、「歴史の流れ」が「おおむね達成」の基準を上回り、「古代までの日本」がほぼ「おおむね達成」と同等と見ることができるが、「中世の日本」が「おおむね達成」の基準を下回った。これは、鎌倉時代から室町時代にかけての基礎的・基本的な歴史的事象についての理解と定着が不十分であったためと考えられる。

② 中学3年生

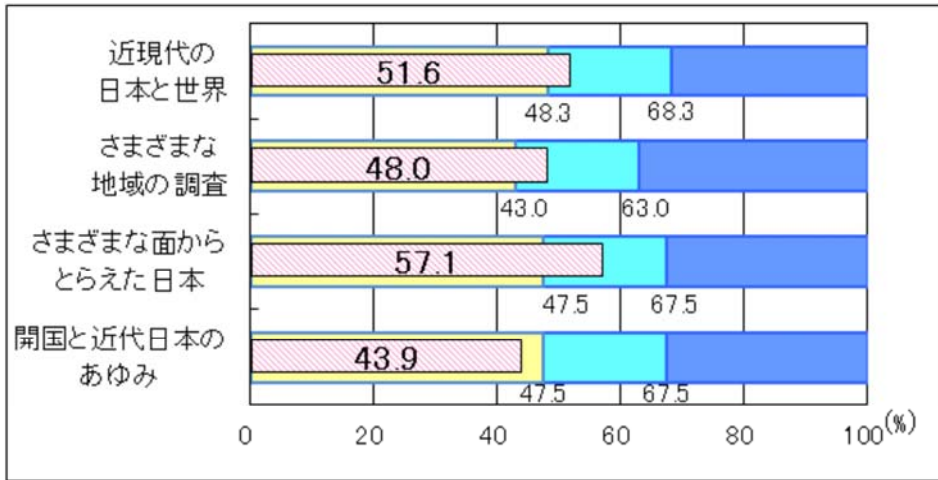


図4 H23年度(中学3年生社会)内容・領域別正答率

地理的分野では全ての領域で「おおむね達成」の基準を上回ったが、資料を基に社会的な事象に関する意味や意義を考える問題についての無解答率が20.0を超える問題が見られた。

歴史的分野では「近現代の日本と世界」では「おおむね達成」の基準を上回ったが、「開国と近代の日本のあゆみ」では「おおむね達成」の基準を下回った。これは明治新政府の諸改革と、自由民権運動についての理解と定着が不十分であったためと考えられる。

イ 経年比較

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

中学2年生については中学1年生の調査は、小学6年生の内容であることを考慮して、平成22年度と平成23年度の同一学年の経年比較により分析をする。

中学3年生については、同一生徒の中学校における社会科学習の変容を見るために、平成22年度と平成23年度の同一生徒の経年比較による分析をする。

中学2年生と中学3年生ともに、「知識・理解」の評価の観点別正答率が他の観点に比べて低く、課題が見られた。そこで(ア)では、「知識・理解」の定着に関する点から平成22年度と平成23年度の中学2年生において同一学年を対象に経年比較を行う。(イ)では、同様に平成22年度と平成23年度の中学3年生において同一生徒を対象に追跡調査し、経年比較を行う。また、(ウ)では、平成22年度の中学2年生で課題が見られた「思考・判断」に関する伸長の点から同一生徒での経年比較を行い、分析していくこととする。

(ア) 中学2年生の「知識・理解」についての経年比較(同一学年)

①評価の観点別正答率

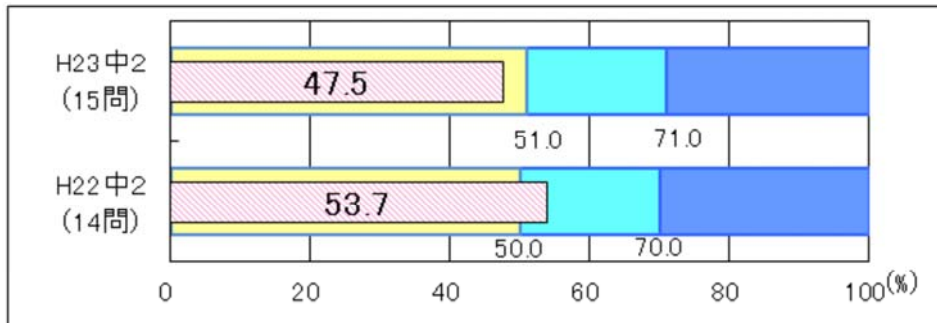


図5 H22・H23年度(中学2年生社会)「知識・理解」の正答率の経年比較

平成22年度の調査では「おおむね達成」の基準を上回ったが、平成23年度の調査では「おおむね達成」の基準を下回り、平成22年度の正答率より、6.2ポイント下回った。

次に、内容・領域別正答率で正答率が最も低かった「中世の日本」の正答率について経年比較を行う。

②「中世の日本」についての経年比較

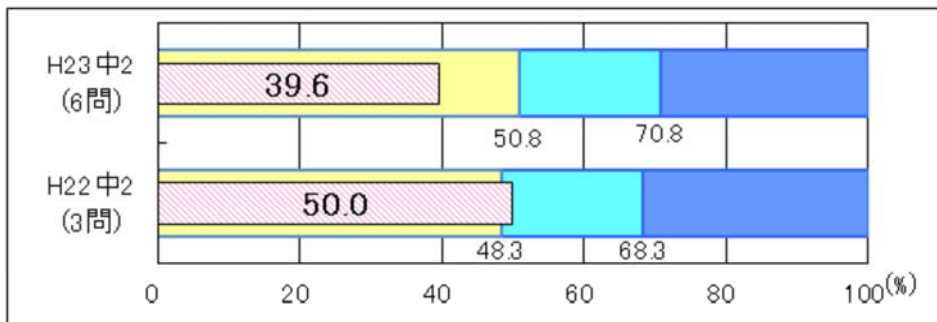


図6 H22・H23年度(中学2年生社会)「中世の日本」の「知識・理解」の正答率の経年比較

平成22年度の調査では、「おおむね達成」の基準を上回ったが、平成23年度の調査では、「おおむね達成」の基準を下回り、平成22年度の正答率より10.4ポイント下回った。

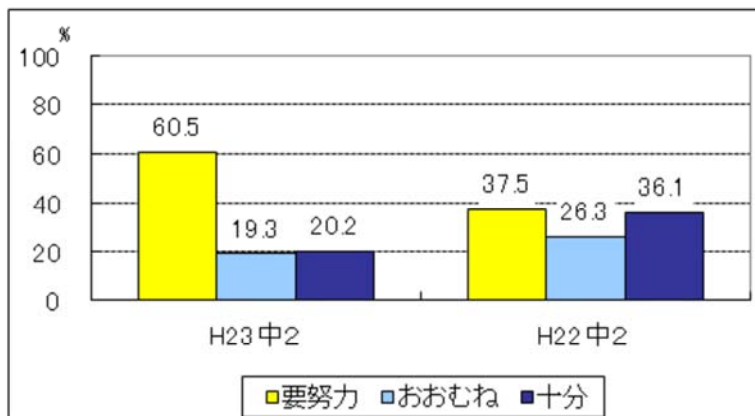


図7 H22・H23年度(中学2年生社会)「中世の日本」の到達度分布の経年比較

到達度分布を見てみると、「十分達成」の生徒の割合が15.9ポイント、「おおむね達成」の生徒の割合が7.0ポ

イント減少し、「要努力」の生徒の割合が 23.0ポイント増加している。

③問題形式別正答率

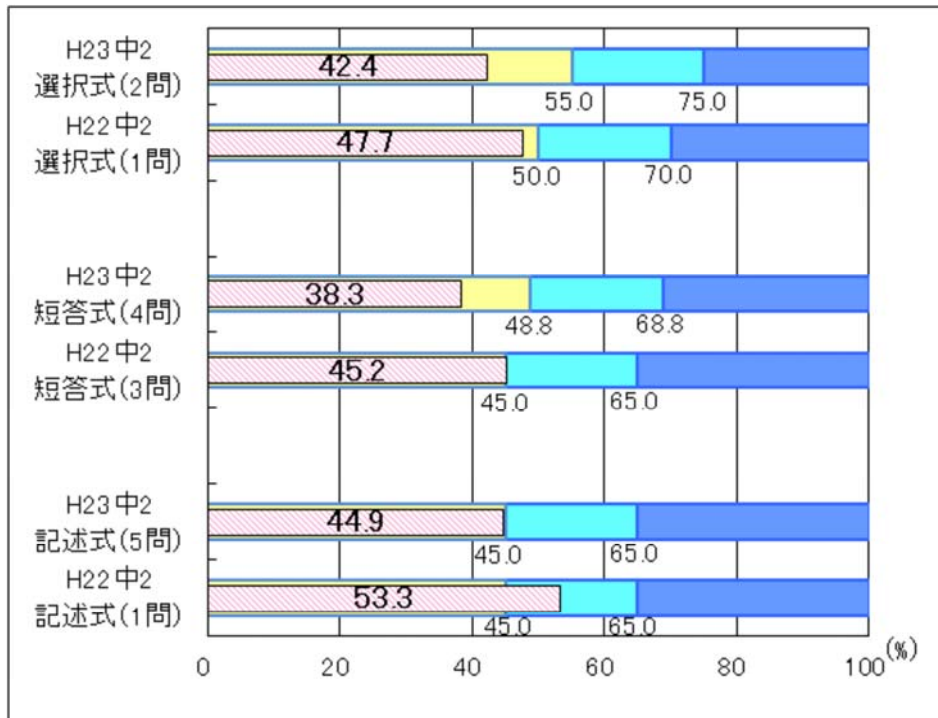


図8 H22・H23年度(中学2年生社会)「中世の日本」の問題形式別の正答率の経年変化
 問題形式ごとの経年変化を見てみると、選択式、短答式、記述式の正答率は全て、平成22年度より下回っている。平成23年度の選択式・短答式の正答率はそれぞれ「おおむね達成」の基準よりそれぞれ12.6ポイント、10.5ポイント下回っている。記述式の正答率については、ほぼ「おおむね達成」の基準と同等である。個々の歴史的事象や歴史的背景や、関連などを説明する力については定着が見られるが、歴史的な用語や概念といった基礎的・基本的な知識・理解の定着については課題が見られる。

④同一設問による経年比較

平成22年度の調査において、「定期市が開かれる(人が集まる)場所」についての問題の解答状況に課題が見られたため、平成23年度の調査においても引き続き調査を行った。

表1 平成22年度(中学2年生)、平成23年度(中学2年生)「定期市が開かれる(人が集まる)場所」についての設問に関する経年変化(同一学年)

	出題のねらい(出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
H23 問5(3)	定期市が開かれる(人が集まる)場所を理解している(短答式)	資料を参考にして、定期市が開かれていた場所を1つ記述する。	17.5	20.9	65.0	45.0
H22 問6(4)			18.6	30.6		

平成22年度の調査と比較して、正答率は1.1ポイント下回り、無解答率は9.7ポイント減少した。歴史的な用語や概念といった基礎的・基本的な知識・理解の定着について、課題が見られる。

(イ) 中学3年生の「知識・理解」についての経年比較(同一生徒)

①評価の観点別正答率

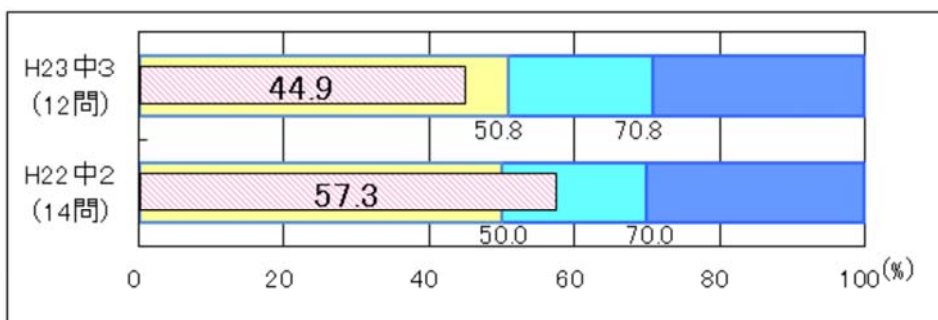


図9 H22年度(中学2年生社会)、H23年度(中学3年生社会)「知識・理解」

の正答率の経年比較

平成22年度の調査では、「おおむね達成」の基準を上回ったが、平成23年度の調査では、「おおむね達成」の基準を下回り、平成22年度より正答率が12.4ポイント下回った。

②基礎的・基本的問題

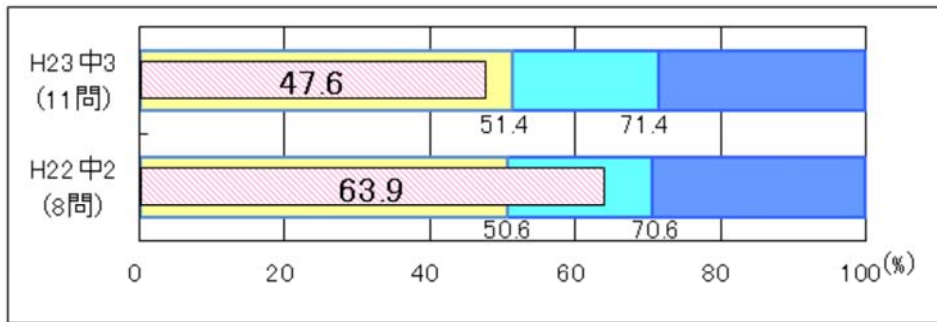


図10 H22年度(中学2年生社会)、H23年度(中学3年生社会)「基礎的・基本的問題」

の正答率の経年比較

平成22年度の調査では、「おおむね達成」の基準を上回ったが、平成23年度の調査では「おおむね達成」の基準を下回り、平成22年度より正答率が16.3ポイント下回った。

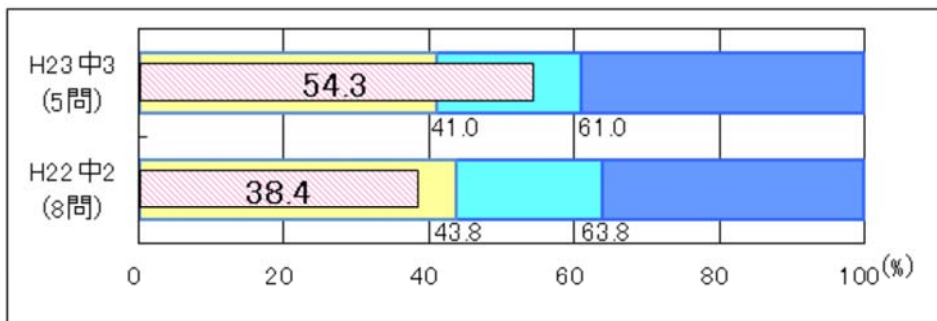


図11 H22年度(中学2年生社会)、H23年度(中学3年生社会)「発展的・応用的問題」

の正答率の経年比較

平成22年度の調査では、「おおむね達成」の基準を下回ったが、平成23年度の調査では上回り、平成22年度より正答率が15.9ポイント上回った。

表2 H22年度(中学2年生社会)、H23年度(中学3年生社会)歴史的分野の「知識・理解」

の選択式設問の正答率の経年比較

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
H23中3 問6(2)	明治維新に対する国民の反応について理解している (選択式)	明治初期の士族や農民たちの不満の背景について適切でない説明を選ぶ。 (四択から1つ選択)	46.3	2.2	75.0	55.0
H22中2 問5(3)	古代の日本の政治や文化などについて理解している (選択式)	天平文化、飛鳥文化、国風文化を時代順に正しく並び替える。(三択・完全正答)	72.3	1.3	65.0	45.0

平成22年度の調査では、「おおむね達成」の基準を上回っているが、平成23年度の調査では「おおむね達成」の基準を下回っている。

中学3年生では、歴史的分野の学習が進むにつれて、生徒の歴史的事象や歴史的背景の理解に時間がかかることや、獲得した知識が断片的なものとなりがちとなり、歴史的事象が時代の流れの中で関連付けて理解できていないことも考えられる。

(ウ) 中学3年生の「思考・判断」についての経年比較

①評価の観点別正答率

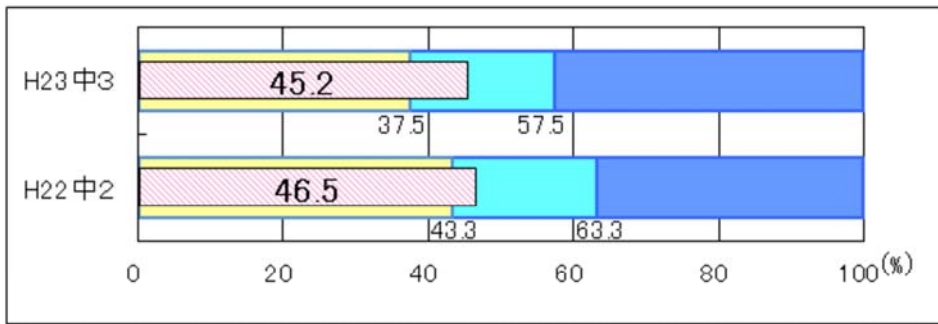


図12 平成22年度(中学2年生)、平成23年度(中学3年生)「思考・判断」の正答率の経年比較

平成22年度、平成23年度ともに「おおむね達成」の基準を上回っている。また、平成22年度は「おおむね達成」の基準を3.2ポイント上回っているが、平成23年度は7.7ポイント上回り、上回り方を比較すると、4.5ポイント上回っている。このことから、社会的な事象について思考・判断し、自分の考えを記述することに関しては改善が見られる。

②「思考・判断」の到達度分布

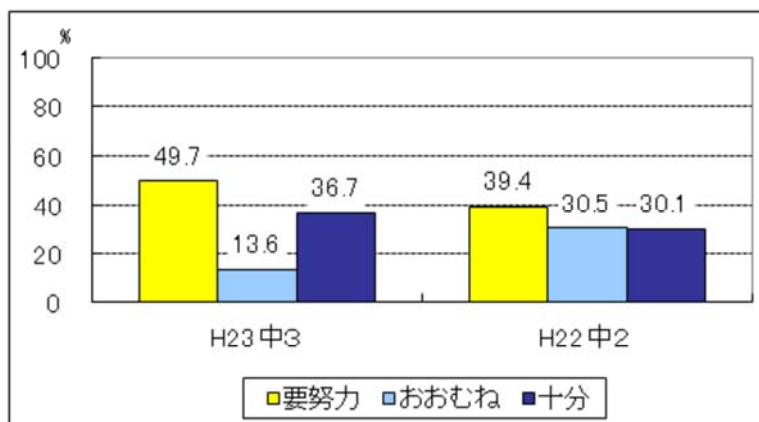


図13 H22年度、H23年度(中学3年生社会)「思考・判断」の到達度分布の経年比較
到達度分布を比較してみると、「十分達成」の生徒の割合は6.6ポイント増加し、「要努力」の生徒の割合も10.3ポイント増加した。また「おおむね達成」の生徒の割合が16.9ポイント減少している。

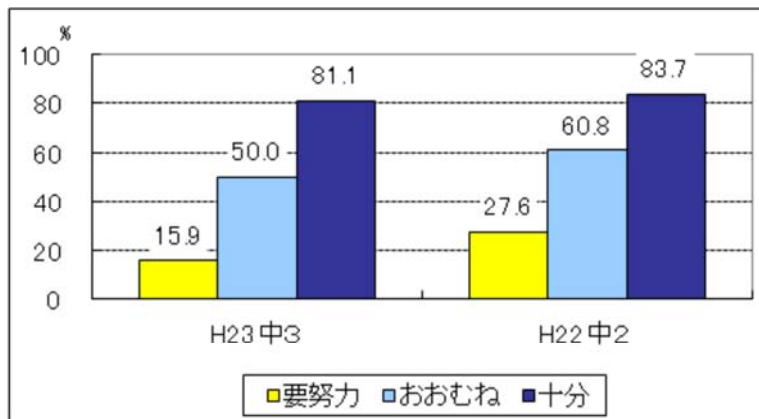


図14 H22年度(中学2年生社会)、H23年度(中学3年生社会)「思考・判断」の到達度別平均正答率の経年比較

「おおむね達成」の生徒の正答率が10.8ポイント、「要努力」の生徒の正答率が11.7ポイント低下している。図13と併せて考えると、生徒の解答の状況に「十分達成」と「要努力」の二極化が進んでいると考えられる。

③児童生徒意識調査

※平成22年度では回答の選択肢が「楽しい」「どちらかといえば楽しい」「どちらかといえば楽しくない」「楽しくない」となっているが、設問の趣旨が同じなので、以下の形で経年比較を行っている。

H23:(26) 社会の授業で自分が考えたことや調べたことを、新聞のような形でノートや応用紙にまとめることは楽しい。

H22:(18) 社会の時間に、自分が考えたことや調べたことをまとめて発表することは楽しいですか。

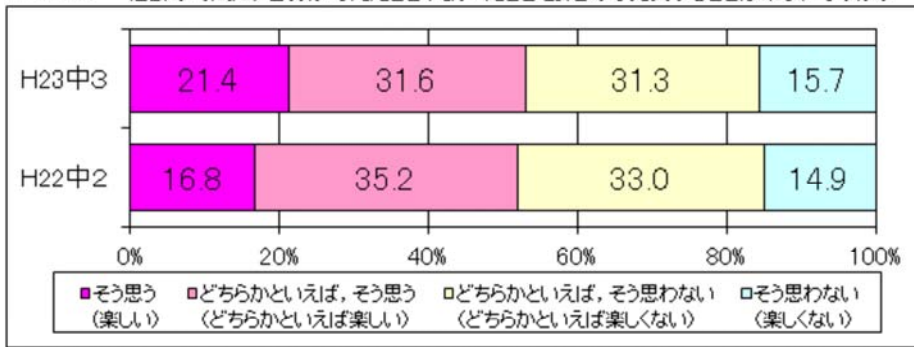


図15 H22年度、H23年度(中学3年生社会)意識調査の経年比較(1)

「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した生徒の割合と、「どちらかといえば、そう思わない」「そう思わない」と回答した生徒の割合はほとんど変わらないが、「そう思う」と回答している生徒は4.6ポイント増えている。

H23:(27) 社会の授業で調べたことをもとに考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しい。

H22:(18) 社会の時間に、調べたことを基に考え、話し合いをすること(討論すること)は楽しいですか。

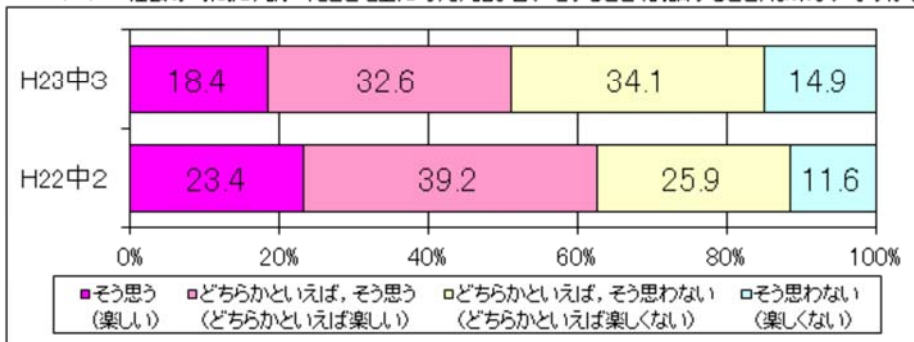


図16 H22年度、H23年度(中学3年生社会)意識調査の経年比較(2)

「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答した生徒の割合が11.6ポイント減少し、「どちらかといえば、そう思わない」「そう思わない」と回答した生徒の割合が8.2ポイント増加している。

平成22年度の中学2年生で課題であった「思考・判断」について、授業の中で新聞のような形で表現させるなどして、思考したことを表現する作業的な場面が確保でき、社会的事象の特色を考えたり、関連付けたりすることについての関心や意欲が高まりつつあることが考えられる(図15)。しかし、調べたことを基に考え、話し合いをすること(討論すること)については、学年が上がるにつれて苦手意識をもつ生徒が増加していることや(図16)、図13、図14から学習内容の習得・活用の状況について二極化が進んでいることが考えられる。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

上記の「ア結果の概要」と「イ経年比較」から歴史的分野の「社会的事象についての知識・理解」と「社会的な思考・判断」に課題があることが分かった。そこで、「基礎的・基本的な社会事象についての知識や概念の理解と定着に関する問題」と、「習得した知識を基に、資料から分かる社会的事象の意味や意義を説明する問題」について分析することとする。

傾向1 **基礎的・基本的な社会的事象についての知識や概念の理解と定着に課題がある**

[中学2年生 大問3の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問3(3)	弥生時代の歴史の大きな流れを理解している (選択式)	「邪馬台国」「大王」「奴国」に関する記述を基に、示された出来事を時代の古い順番に並び替える。	17.3	0.7	65.0	45.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対して、正答率は17.3であり、27.7ポイント下回った。この問題は、「邪馬台国」「大王」「奴国」に関する記述を参考にして、示された出来事を時代の古い順番に並び替える問題である。我が国において国家が形成されていった過程を東アジアとの関わりの中で理解したことが、定着できなかったためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

歴史的分野の学習では、歴史的事象の意味・意義や特色、事象間の関連を説明させる場面を設定し、学習を進めていく。その際、

- ① 対象となる時代を大観させ、当時の時代背景を踏まえさせる。
- ② それぞれの歴史的事象の意味・意義を説明させる。
- ③ その時代の特色を自分の言葉で表現させる。

といった段階を踏むことが考えられる。このような授業に取り組む中で、習得した基礎的・基本的な知識や概念をきちんと活用して表現できるよう、その単元のキーワードとなる語句を、単元の導入時にワークシート等でまとめて提示したり、カードのような形で黒板に分かりやすく掲示したり、生徒個人のノートにまとめて書けるコーナーを設けさせたりするなどし、生徒が容易に再確認し、活用できるような工夫が必要である。

[中学3年生 大問2の(5)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2(5)	第二次世界大戦後の東西陣営の対立関係を理解している (短答式)	第二次世界大戦後の資本主義諸国と社会主義諸国の対立を「冷戦(冷たい戦争)」ということを書く。	38.6	42.3	75.0	55.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率55.0に対して、正答率は38.6であり、16.4ポイント下回った。また、無解答率が42.3と平成23年度調査(中3社会)において一番高かった。これは、第二次世界大戦後、アメリカを中心とする資本主義諸国と、ソ連を中心とする社会主義諸国が厳しく対立していた時代について短答式で解答する問題である。これは、我が国の戦後の復興と国際社会への復帰の動きを、世界の動きと関連付けて捉え、国際社会における我が国の動きが常に世界の動向と関わっていたことを踏まえて理解することができていなかったためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

学習する場面で、それぞれの事象が相互に関連して進行していたことを理解できるよう、対象となる時代に関わる年表を掲示し、学習している時代(年代)がどこなのか、生徒が視覚的に常に確認できるようにしておくことが有効であるとする。また、単元の終わりなどに政治・経済・外交・文化などのテーマ毎に時系列に沿って年表形式でまとめさせるなどの時間を確保することも必要である。

傾向2 **習得した知識を基に、資料からわかる社会的事象の意味や意義を説明することに課題がある。**

[中学2年生 大問1の(5)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問1(5)	世界地図の特徴を説明することができる (記述式)	世界地図(メルカトル図法)上では、グリーンランドが南アメリカ大陸より広く見える理由を記述する。	29.6	24.3	60.0	40.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して、正答率は29.6であり、10.4ポイント下回った。無解答率も24.3であった。この問題は、世界地図(メルカトル図法)で示された見かけ上の陸地の広さと、統計資料で示された実際の陸地の面積を比較し、グリーンランドが南アメリカ大陸より広く見える理由を記述する問題である。これは、生徒は日常的に日本を中心に描かれたメルカトル図法やミラー図法などによる世界地図に影響された世界観をもっていることが考えられ、地球儀で地球上の位置関係や陸地面積、形状などを正しく捉えたり、世界地図・地球儀・統計資料を相互に関連付けて活用したりする学習経験が少ないことが考えられる。

○ 指導法改善の手立て

「世界の地域構成」の単元で世界地図や地球儀の特色に留意した読み取りを学習することが多い。しかし、その他の単元で世界地図や地球儀の両方を活用して学習を進めることは少ない。そこで、地理的分野の学習時間だけに限らず、教室に地勢や国の位置などを表す地球儀を置いたり、世界地図を教室に常時掲示したりして、歴史的分野の学習時間でも、折に触れて活用し、生徒が日常的に地球儀や世界地図に親し見ながら学習を進めるなど、既習事項と関連付けるような配慮が必要であると考えられる。

[中学3年生 大問4の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問4(2)	資料を基に、ヨーロッパの河川の特徴と工業地帯の分布との関連を説明することができる (短答式)	資料を参考にして、ヨーロッパの工業都市が河川に沿って広く内陸部に分布している理由を書く。	33.5	20.2	60.0	40.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して、正答率は33.5であり、6.5ポイント下回った。無解答率も20.2であった。この問題は、「ヨーロッパの主な工業地域や工業都市の分布」「ヨーロッパの河川のようす(写真)」「日本とヨーロッパの河川の比較」の資料を基に、ヨーロッパの工業都市が河川に沿って広く内陸部に分布している理由を説明する問題である。これは、資料に示されたヨーロッパの地形的な特徴と、工業地帯の立地条件を関連付けることができなかつたためと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

地理的な事象の意味や意義を学習するときに、「なぜ、○○には△△といった特徴が見られるのだろうか。」といった問いを立てさせ、地図などの資料から読み取った結果と、そこから考察したことを整理して説明できるように、資料を基に分析・考察の視点や分析・考察したことについての表現の手立てを明確に示しておくことが大切である。

エ これからの指導に向けて

本調査では、「基礎的・基本的な社会事象についての知識や概念の理解と定着に関する問題」と「習得した知識を基に、資料を基に社会的事象の意味や意義を説明する問題」に課題があることが分かった。新しい学習指導要領においては、社会的な見方や考え方を養い、そこで身に付けた知識、概念や技能などを活用し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力につないでいくことが求められている。そのためにも、思考力・判断力・表現力の基盤となる知識・技能の定着と言語活動の充実に継続して取り組んでいくことが必要と考える。

(ア) 反復(スパイラル)的に繰り返し、知識・技能の定着を図る指導

社会的な諸事象について理解させる上で必要となる基礎的・基本的な知識や概念は一度の学習によって定着させることは難しい。また、毎時間の授業や小テストなどを通して知識や技能の習得ができていても、生徒がそれらをいつでも使えるような知識として定着できていなかったり、それらを活用して問題を解決したりするまでには至っていないことが考えられる。そこで、学習過程において身に付けさせた知識・技能を繰り返し活用させることを意識して学習を仕組んでいく必要がある。具体的には、これまでに学んだ知識や技能を想起させたり、現在学習している事象と比べさせたりするなどしながら、前時までの学習と本時の学習、単元と単元とを意図的に関連付けたり、歴史的分野と地理的分野を相互に関連付けたりしていくような工夫が必要である。

(イ) 資料等の活用と作業的、体験的な指導の工夫

新学習指導要領では、教科の目標の1つとして「諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し」と「資料を適切に収集、選択、処理、活用し、それらの資料に基づいて多面的・多角的に考察し公正に判断する態度を身に付けさせることを、情報化の進展に対応する観点も踏まえて重視」してある。その際、以下のような作業的・体験的な学習の充実を図ることが必要だと考える。

- ① 地図や年表を読ませたり、作成させたりする。
- ② 新聞、紀行文などの読み物、統計その他の資料に日常的に親しませる。
- ③ 観察や調査などの過程と結果を整理させ、報告書にまとめ、発表させる。
- ④ 資料の収集、処理や発表などに当たっては、コンピュータなどのICT機器を活用させる。

教師が資料を提示する場合、資料から気付かせたいことが何なのか、その資料の読み取りを通して身に付けさせたい力は何なのかということを明確にもち、系統的に指導をしていく必要がある。これらのことを通して、様々な資料を適切に収集、選択する技能が高めていくとともに、多面的・多角的に考察し、事実を正確に捉え、公正に判断するとともに適切に表現する能力を高めていくような工夫をし、知識に偏りすぎた指導にならないようにする必要があると考える。

(ウ) 「思考力・判断力・表現力」をはぐくむ言語活動の充実とその評価

新学習指導要領では言語活動の充実について、説明、解釈、論述などの活動が具体的に挙げられている。これらの活動は社会科の目標の1つである「多面的・多角的に考察する能力と態度の育成」のためにも必要な要素であると考えられる。そこで、「思考力・判断力・表現力」を育むために次のような学習活動が考えられる。

① 解釈させる

社会的事象が「なぜ」存在しているのか、その時代の社会にとって「どのような意味」があるのか、他の時代の社会にとって「どのような意義」があるのかなどの問いを立て、考えさせる学習が考えられる。例えば、歴史的な分野では「なぜ、江戸幕府は鎖国を行ったのだろうか。」「鎖国をしたことによって幕府にどのようなメリットがあったのだろうか。」「鎖国によって日本にはどのようなデメリットがあったのだろうか。」「地理的分野では、「この地域にこのような産業が発達しているのはなぜだろうか。」「この地域は主要産業が〇〇から△△に変わっているのはなぜだろうか。」「この地域の人々の暮らしが〇〇なのはどのような理由なのだろうか。」など、幾つかの問いによって、社会的事象の意味や意義の解釈を行う学習活動が考えられる。その際、解釈を行う視点(背景、行為、目的、手段、結果など)を明確に示す必要があると考える。

② 説明させる

社会的事象の特色を説明することや事象間の関連を説明することが中心になると考えられる。例えば、地理的分野などで大陸にある世界の国々と島国である日本の地形や気候の「特色」を他者に説明することなどが考えられる。また、歴史的な分野では、平安時代と鎌倉時代の文化を「比較」し、その「共通点」や「相違点」を示しながら、時代の特色を説明することなどが考えられる。その際、事象の背後にある関係性などを見つけ、習得した基礎的・基本的な知識や概念、法則、理論などを使いながら説明できるように、支援を行う必要があると考える。

③ 論述させる

ある問題が生じたときに「自分はどう考えるのか。」「自分が考えた結論がなぜ妥当なのか。」など、習得した基礎的・基本的な知識や概念を活用し、収集した様々な資料を根拠を示しながら論理的に自分の考えを伝える

活動が考えられる。また、話し合い(討論・ディベートなど)の活動を通して、集団の考えを発展させたり、自分の考えを修正・発展させたりするなどの言語活動を重視した学習活動が考えられる。

これらの学習活動を充実させることによって、「思考力・判断力・表現力」を育むことができると考える。また、適切に指導をしていくために、何についてどの程度の内容を基準として評価していくのかを十分考えて、評価の基準を設定していくことが必要である。このことについては、評価規準の作成のための参考資料、評価方法等の工夫改善のための参考資料(※)を参考にしていきたい。

※国立教育政策研究所

「評価規準の作成のための参考資料、評価方法等の工夫改善のための参考資料」(平成23年7月)中学校編
社会 http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyoukakijun/chuu/k_all.pdf

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日：2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > Ⅲ 各教科の調査結果の分析 > 中学校数学

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

- ※ 中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。
- ※ 本報告書「Ⅱ 調査結果の概要」には、中3数学についても、参考のために、便宜上、到達基準を設定しているが、この項の中3数学においては、到達基準を基にした分析を行っていない。

中学校数学

知識・技能の習得を図り、思考力・判断力・表現力を育むために

平成23年度の中学2年生における正答率は、「おおむね達成」の基準を下回った。正答率を評価の観点別に見ると、3つの観点全てにおいて「おおむね達成」の基準を下回り、特に「数学的な見方や考え方」の正答率が低い結果であった。内容・領域別に見ると、「数と式」は「おおむね達成」の基準を上回ったが、他の内容・領域は下回った。設問別に見ると、問題解決の方法や考え方をことばや式を使って説明するような「活用」に関する問題が「おおむね達成」の基準を下回り、また、数学の用語や記号に関わる内容や、グラフ上の点を座標に表すことなど基礎的・基本的な問題についても、「おおむね達成」の基準を下回り、課題が見られた。さらに、平成22年度調査からの課題であった学習指導要領の移行に伴い新しく追加された内容についても、課題が見られる結果となった。今後の指導に当たっては、「知識・技能の定着」と「知識・技能を活用できるような数学的な思考力・判断力・表現力の育成」の、双方を意図した学習過程の見直しと授業の改善が大切である。特に、課題解決の方法などを説明し伝え合うような活動(言語活動に関わる数学的活動)を意図的に位置付けて、実践していくことが必要である。

この後、評価の観点については、以下のように記す。

- | | | |
|---------------------|---|-----------|
| ○ 数学への関心・意欲・態度 | → | 本調査では設定なし |
| ○ 数学的な見方や考え方 | → | 「見方や考え方」 |
| ○ 数量や図形などについての表現・処理 | → | 「表現・処理」 |
| ○ 数量や図形などについての知識・理解 | → | 「知識・理解」 |

ア 結果の概要

各学年ごとに教科全体の正答率について到達基準との比較を示す。

(凡例) ■: 要努力(おおむね達成の基準を下回る) ■: おおむね達成 ■: 十分達成

中3数学は、過去の全国調査の問題を利用しているため、凡例が異なる。

(凡例) ■: 実施時の全国平均

(ア) 教科全体及び設問毎正答率





教科全体正答率において、中学2年生は「おおむね達成」の基準を5.9ポイント下回り、また、出題された全29問中18問において、「おおむね達成」の基準を下回った。中学3年生は、教科全体正答率において、実施時の全国の正答率を2.1ポイント上回った。

(イ) 評価の観点別正答率

中学2年生

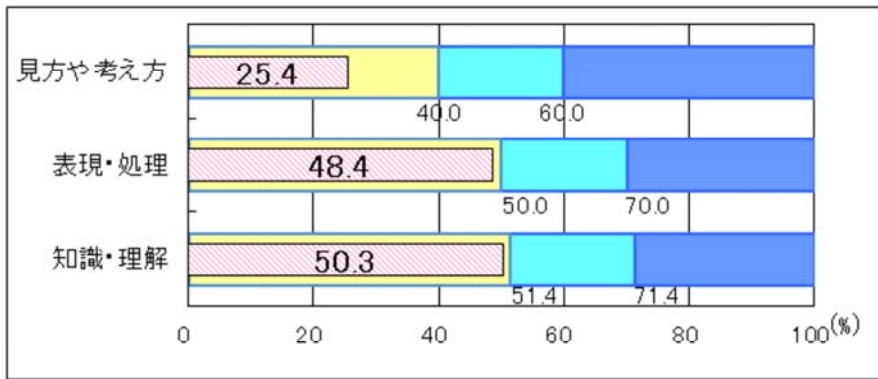


図1 H23年度(中学2年生数学)評価の観点別正答率

「知識・理解」については、絶対値に関わる内容とグラフ上の点を座標に表すことにおいて、課題が見られた。「表現・処理」については、「図形」と「資料の活用」領域の「表現・処理」に関する問題の正答率が低く、求め方や用語の意味を理解していないことなど、「知識・理解」の定着が十分でないことに要因があるものと考えられる。「見方や考え方」については、「与えられた情報を読み取り、数学的に処理すること」や「問題解決の過程や資料の傾向を説明すること」に課題が見られた。

(ウ) 内容・領域別正答率

中学2年生

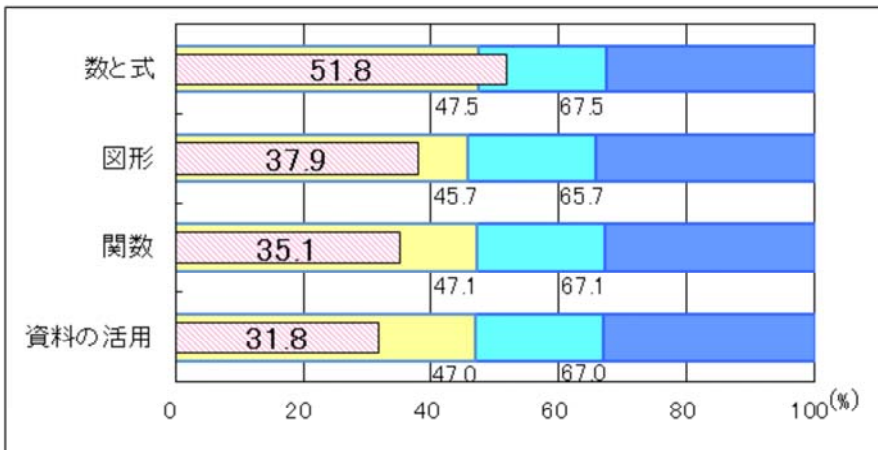


図2 H23年度(中学2年生数学)内容・領域別正答率

「数と式」については、「おおむね達成」の基準を上回ったが、指数の計算、絶対値、方程式の立式などに関わる内容において、課題が見られた。「図形」については、平行・対称・回転移動に関する内容と、扇形の弧の長さや立体の表面積及び回転体の体積の求め方に関する内容において課題が見られた。「関数」については、比例の関係をグラフを表すことは「おおむね達成」の基準を上回ったが、逆にグラフ上の点を座標に表すことや、与えられたグラフを読み取ること、更に読み取ったことを基に数学的に処理したり、問題解決の過程を説明したりすることにおいて、課題が見られた。「資料の活用」については、出題された5問中の4問において、「おおむね達成」の基準を下回る結果となった。設問ごとに見ると、「表現・処理」や「見方や考え方」の問題の正答率が低い結果となっているが、相対度数や有効数字、中央値等の用語の意味や求め方、表し方といった「知識・理解」の定着が十分でないことが、要因であると考えられる。

イ 経年比較

(凡例) ■: 要努力(おおむね達成の基準を下回る) ■: おおむね達成 ■: 十分達成

平成23年度の中学2年生と平成22年度の中学2年生で同一学年の経年比較をすることにより分析を行った。比較の視点については、まず「知識・技能の習得が図れているか」と「知識・技能を活用するための思考力・判断力・表現力が育まれているか」という2点について、基礎的・基本的問題と「活用」に関する問題の結果を基に、分析を行った。また、平成22年度の課題であった「学習指導要領の移行に伴い追加された学習内容が定着しているか」という点についても、関連する問題の結果を基に、分析を行った。

(ア) 「基礎的・基本的問題」の経年比較(同一学年)

中学2年生

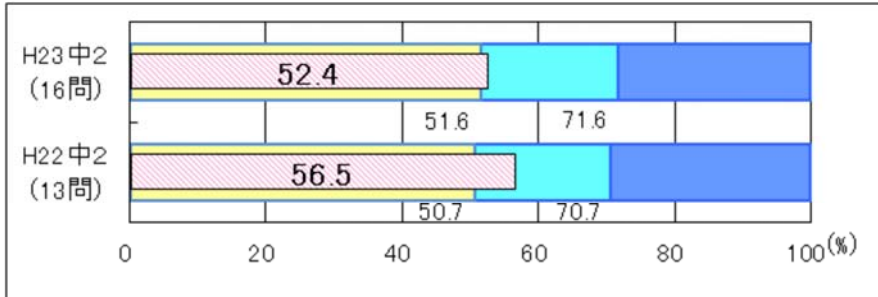


図3 H22・H23年度(中学2年生数学)「基礎的・基本的問題」の正答率の経年比較

「基礎的・基本的問題」については、平成22年度の結果と比べると、正答率は下回った(図3)。設問別に見ると、比例式を解くことや「資料の活用」領域の学習内容などの学習指導要領の移行により追加された学習内容に加え、扇形の弧の長さを求めることについて、知識・技能の定着に課題が見られた。また、絶対値や座標に関わる問題においても、正答率が低かった。要因として、知識が十分定着できていなかったことに加え、文章の意味を十分読み取ることができなかったことが考えられる。

また、表1は、「数と式」の領域の「基礎的・基本的問題」(正の数・負の数や文字の式、方程式等、主に計算の技能を必要とする問題)における各年度ごとの正答率を表したものであり、出題ねらいや「おおむね達成」の基準及び「十分達成」の基準も同じであったため、比較を行った。

表1 H22・23年度(中学2年生数学)「計算の技能を必要とする問題」の正答率の経年比較

主な出題の内容	H23正答率	H22正答率	十分達成	おおむね達成
正の数・負の数の計算	90.4	89.3	75.0	55.0
指数を含んだ数の計算	34.4	58.4	70.0	50.0
分配の法則を用いた文字の式の計算	58.0	64.3	70.0	50.0
式の値を求める問題	66.6	61.2	70.0	50.0
一元一次方程式を解く問題	78.6	69.0	70.0	50.0
平均正答率	65.6	68.4	71.0	51.0

5問の平均正答率を比べると、2.8ポイント下回る結果となった。特に、平成23年度は指数を含む計算において課題が見られた。

(イ) 「活用」に関する問題の経年比較(同一学年)

中学2年生

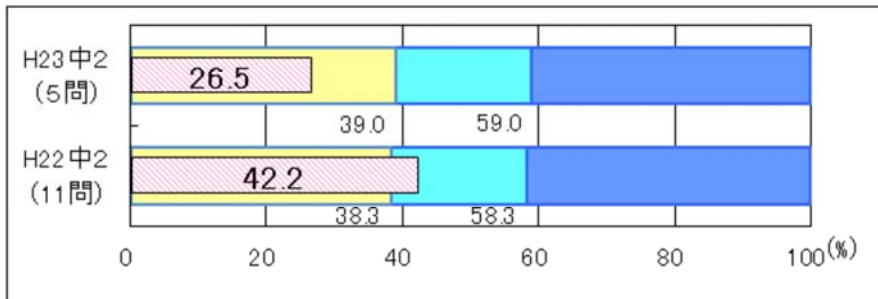


図4 H22・H23年度(中学2年生数学)「活用」に関する問題の正答率の経年比較

「活用」に関する問題については、平成22年度の結果と比べると、正答率は下回った(図4)。ただ、平成22年度と平成23年度では、出題数が違っていたため、各年度に共通して出題された問題について比較し分析を行った。表2は、与えられた条件をもとにある事柄について説明するような記述式の問題について比較したものであり、表3は数量の関係を見だし、方程式を作る問題について、比較したものである。

表2 H22・H23年度(中学2年生数学)記述式問題の正答率・無解答率の経年比較

	主な出題の内容	正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
H23	不等式を読み取り、説明する	54.7	14.0	60.0	40.0
	グラフや式を基に説明する	19.7	39.4	60.0	40.0
	中央値を用いて傾向を説明する	9.7	50.4	55.0	35.0
	平均正答率	28.0	34.6	58.3	38.3
H22	文字式を読み取り、説明する	31.9	42.2	55.0	35.0
	問題解決の方法を説明する	31.5	36.1	55.0	35.0
	平均正答率	31.7	39.2	55.0	35.0

表3 H22・H23年度(中学2年生数学)数量の関係を見だし方程式を作る問題の
正答率・無解答率の経年比較

	問題形式	正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
H23	短答式	3.7	52.0	55.0	35.0
H22	選択式・短答式	8.7	4.8	55.0	35.0

表2と表3から、与えられた条件をもとにある事柄について説明するような記述式の問題と、数量の関係を見だし、方程式を作る問題においては、平成22年度と同様に、全体の正答率が「おおむね達成」の基準を下回り、課題を残した。

(ウ) 「学習指導要領の移行に伴い追加された学習内容に関する問題」の経年比較(同一学年)

中学2年生

表4 H22・H23年度(中学2年生数学)学習指導要領の移行に伴い追加された
学習内容に関する問題の正答率の経年比較

	主な出題の内容	問題形式	正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
H23 中2 (9問)	比例式を解く	短答式	44.8	16.9	70.0	50.0
	不等式を読み取り、説明する	記述式	54.7	14.0	60.0	40.0
	平行・対称・回転移動の利用	選択式	18.9	2.3	60.0	40.0
	回転体の体積を求める(球の体積)	短答式	8.9	46.4	55.0	35.0
	度数分布表の理解	短答式	83.4	4.5	75.0	55.0
	相対度数を求める	短答式	20.1	33.4	70.0	50.0
	平均値の求め方の理解	選択式	42.1	6.5	70.0	50.0
	有効数字に表す	短答式	3.7	19.6	65.0	45.0
	中央値を用いて傾向を説明する	記述式	9.7	50.4	55.0	35.0
	平均正答率		31.8	21.6	64.4	44.4
H22 中2 (7問)	球の体積の求め方の理解	短答式	13.2	16.6	70.0	50.0
	錐体と球の体積の考察	選択式	52.8	2.6	60.0	40.0
	度数分布表を整理する	短答式	87.3	5.3	75.0	55.0
	資料の傾向を読み取る	短答式	90.4	4.6	75.0	55.0
	最頻値の意味の理解	選択式	52.6	3.1	70.0	50.0
	資料の傾向をとらえる	選択式	44.4	4.7	60.0	40.0
	有効数字についての理解	短答式	11.1	14.8	70.0	50.0
平均正答率		50.3	7.4	68.6	48.6	

※太字・網掛けの項目は、正答率が「おおむね達成」の基準を下回った問題

平成23年度は9問の出題であり、全体の平均正答率は31.8、無解答率は21.6と課題を残す結果となった。平成22年度と比べて正答率の低下や無解答率の増加が見られるのは、記述式及び短答式の問題の割合が増えたこともあるが、全体的に学習指導要領の移行に伴い追加された学習内容においては、基礎的・基本的知識・技能が十分定着できていないことに課題があると考えられる。また、「球の体積の求め方」、「相対度数の求め方」、「有効数字の表し方」については、特に課題があると考えられる。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

中学2年生に関しては、上記の「ア結果の概要」と「イ経年比較」から、学習指導要領の移行に伴い追加された学習内容など、特定の「知識・技能」に関する学習内容と、「活用」に関する学習内容において、課題が多いことが確認できた。この2点を踏まえて、正答率が「おおむね達成」の基準を下回った問題を取り上げ、設問ごとに分析を行うことで、より詳細に課題を把握し、具体的な改善点や方策を提示することとした。また、中学校3年生に関しては、過去の全国学力学習状況調査の問題を取り扱ってあるという点を考え、当時の全国平均と比べて正答率の低かった問題を取り上げて分析を行なった。出題された27問中の8問が当時の全国平均を下回り、その内5問が「図形」領域に関わる内容であった。分析の結果から、図形の証明に関わる推論についての理解や論理的な思考力に課題があると考えられる。

傾向1 **学習指導要領の移行に伴い追加された学習内容等、特定の学習内容における「知識・技能」の定着に課題がある。**

[中学2年生 大問1の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問1(2)	指数を含んだ数の計算をすることができる。 (短答式)	$(-2)^3 - (-3^2 + 7)$ を計算する。	34.4	2.4	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は34.4であり、15.6ポイント下回った。指数の意味や、負の数における指数を含んだ計算方法の理解に課題があると思われる。

○ 指導法改善の手立て

生徒がつまづきやすい問題である。指数の意味や $(-2)^2$ と -2^2 等の違いについて理解できるよう丁寧に指導し、類似問題に数多く取り組ませるなど、知識・技能の定着を図る取組が大切である。

[中学2年生 大問2の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2(1)	絶対値について理解している。 (短答式)	絶対値が $\frac{10}{3}$ より小さい整数の個数を答える。	28.3	11.1	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は28.3であり、21.7ポイント下回った。分数を絡めた問題であったため、正答率も低下したと考えられる。絶対値や整数の意味や分数についての数値としての大きさの理解に、課題があると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

絶対値や整数及び自然数等の用語の意味について知識の定着を図る必要がある。また、場合によっては、小学校で学習する小数や分数についての復習が必要である。数の大小を考える場合は、数直線上に表して考えることが多いが、数直線上の目盛りを細かく取るなどの工夫により、該当する数がどの位置にあるのかを理解させて、数値としての大きさを捉えさせていくことが大切である。

[中学2年生 大問2の(4)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問2(4)	比例式を解くことができる。 (短答式)	$8:x = 6:5$ を解く。	44.8	16.9	70.0	50.0

○ 解答状況

学習指導要領の移行に伴い追加された学習内容である。「おおむね達成」の期待正答率50.0に対し、正答率は44.8であり、5.2ポイント下回った。比例式の性質(外項の積=内項の積)を使った解き方が十分定着できていないものと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

解が整数であるような場合には暗算でも解は導きやすいが、本問題のように解が分数になるものや、複雑な文字式が絡むような問題においては、比例式の性質(外項の積=内項の積)を使った解き方が有効である。そのため、比例式の性質を使った解き方についても、十分定着を図ることが大切である。指導に当たっては、 $2:3 = 6:9$ の場合は、 $2 \times 9 = 3 \times 6$ が成り立つことなど、具体的に分かりやすい例を取り上げながらまずは知識・理解の定着を図り、その上で、一般的な比例式の問題の解き方へと技能の定着を図っていくことなどが考えられる。

[中学2年生 大問6の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問6(2)	平行移動、対称移動及び回転移動移動について理解し、二つの図形の位置関係を調べることができる。 (選択式)	2つの図形の位置関係について、あてはまる移動の組み合わせを選ぶ。	18.9	2.3	60.0	40.0

○ 解答状況

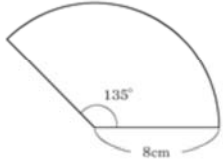
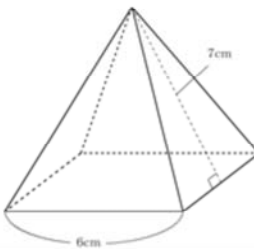
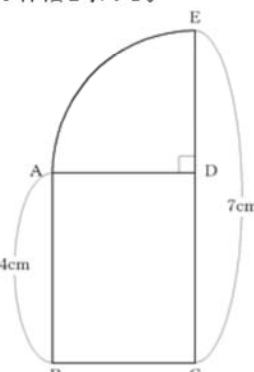
学習指導要領の移行に伴い追加された学習内容である。「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して、正答率は18.9であり、21.1ポイント下回った。平行移動、対称移動及び回転移動の理解に課題があると思われる。また、与えられた情報や文章の意味を読み取る力や数学的な思考力を必要としたために、正答率も低下したものと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

定規やコンパス、分度器等を使いながら、三角形などの具体的な図形を、それぞれの移動を使って移すような操作活動に取り組み、知識・技能の定着を図っていくことが、まずは大切であるとする。また、線対称と点対称について学習を終えていることを配慮し、対称移動については線対称としての概念をもたせることや、点対称移動は 180° の回転移動であることを理解させることも大切である。更に、本問題のように、ある図形といくつかの移動を使って動かした図形を比べて考えさせる場合においては、厚紙等で作った図形を用いて実際に移動させるなどの操作活動を取り入れることにより、数学的な思考力も培われるとともに知識・技能の定着につながるものとする。

[中学2年生 大問7の(1)(2)(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね 達成
問7(1)	扇形の弧の長さを求めることができる。 (短答式)	半径が8cmで中心角の大きさが 135° である扇形の弧の長さを求める。 	31.7	26.6	70.0	50.0
問7(2)	錐体の表面積を求めることができる。 (短答式)	下の図の正四角錐の表面積を求める。 	41.3	13.9	65.0	45.0
問7(3)	球の体積及び円柱の体積の求め方を利用して、回転体の体積を求めることができる。 (短答式)	下の図形をECを軸として、1回転させてできる回転体の体積を求める。 	8.9	46.4	55.0	35.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率は、問7(1)が50.0、問7(2)が45.0、問7(3)が35.0であったが、正答率は問7(1)が31.7、問7(2)が41.3、問7(3)が8.9と、全てにおいて下回った。与えられた図形や立体の条件に応じて、長さを求めたり、面積を求めたり、体積を求めたりするための知識・技能の定着及び回転体についての理解に課題があると考えられる。また、問7(3)については、球の体積と円柱の体積及び回転体に関する内容が関連した複合問題となっていたため、正答率の低下につながったと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

図形や立体における長さや面積、体積を求めること等の学習については、十分な時間の確保が大切である。それぞれを学習する過程において、実際に図形や立体の具体物を用いて、長さを測ったり面積を求めたり、体積を調べたりするような操作活動を取り入れていくことで、理解も深まっていくものとする。そういった学習過程を経た上で、公式を使った求め方を定着させて、技能の習熟を図っていくことが必要である。また、回転体の学習においては、実際に厚紙で作った図形を回転させるなどの操作活動や、パソコンによるグラフィックソフト等を活用した取組を行うことにより、理解が深められるものとする。

[中学2年生 大問8の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問8(2)	比例のグラフの線上にある点を、座標に表すことができる。 (短答式)	$y = -2x$ 上にあり、 x 座標が負の整数となる点の座標を1つ書く。	28.7	21.8	75.0	55.0

○ 解答状況

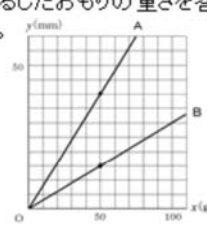
「おおむね達成」の期待正答率55.0に対して、正答率は28.7であり、26.3ポイント下回った。無解答率も21.8であり、座標の意味や表し方についての理解が十分でなかったこと、また、文章の意味を十分読み取ることができなかったことが要因として考えられる。

○ 指導法改善の手立て

座標ということばについて理解していても、実際のグラフ上の点や表で表されている x と y の数値と結びついていないことが考えられる。座標、 x 座標、 y 座標などのことばの意味を理解させるとともに、 $y = -2x$ などのグラフの学習において、 x に具体的な数を代入しながら表を作る際に、表に表した x と y の値が、それぞれの点の座標や x 座標、 y 座標を表しているということを、実感させるような取組が大切である。また、本問題は複数の解答が考えられたために、戸惑いを感じた生徒も多かったことが予想される。知識・技能に関する内容の学習においても、解答の条件を広く設定した問題に触れさせることは、多様な見方や考え方を育むことにつながっていくものとする。

[中学2年生 大問9の(1)(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問9(1)	グラフから2つの数量の関係を見だし、式に表すことができる。 (短答式)	(1)ばねAについて、 x と y の関係を表す式を書く。 (2)ばねAとばねBののびた長さの差が60mmであるときのつるしたおもりの重さを答える。	21.4	27.4	65.0	45.0
問9(2)	与えられたグラフから、その変化や対応の特徴をとらえ、問題を解決することができる。 (短答式)		14.2	34.0	60.0	40.0

○ 解答状況

問9(1)は「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し正答率は21.4で、無解答率は27.4、問9(2)は「おおむね達成」の期待正答率40.0に対し正答率は14.2で、無解答率は34.0であった。与えられたグラフから x と y の関係を読み取って式に表すことや、与えられたグラフの変化や対応の特徴を捉えること、文章の意味を読み取ることなどに課題があると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

比例の学習内容に関わる発展・応用問題である。問9(1)については、 x 軸と y 軸における1目盛り数値が違っていても正答率の低下につながったと考えられるが、このような問題を通して、グラフから x と y の関係を読み取り式に表すことできるような技能の習熟を図っていくことが大切である。問9(2)については、Aの式が $y = 4/5x$ 、Bの式が $y = 3/10x$ となることから $4/5x - 3/10x = 60$ という方程式を利用する求め方の他に、50gのおもりをつるしたときのばねののびた長さが $40 - 15 = 25$ (mm)になることから、 $x : 50 = 25 : 60$ など比例式を利用した求め方等も考えられる。このように多様な考え方ができるような課題を設定し取り組ませることで、数学的な思考力の向上につながるものとする。また、これまで学習したことを活用させることで、知識・技能の定着にもつながるものとする。

[中学2年生 大問10の(2)(3)、大問11の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成			
問10(2)	相対度数について理解し、求めることができる。 (短答式)	度数分布表をもとに、階級150～155cmの相対度数を求める。	20.1	33.4	70.0	50.0			
問10(3)	度数分布表を利用した平均値の求め方について理解している。 (選択式)	度数分布表を利用した平均値の求め方についてまとめた文章において、空欄にあてはまることばを選ぶ。	42.1	6.5	70.0	50.0			
問11(1)	有効数字の意味を理解し、有効数字に表すことができる。 (短答式)	804960(kg)を有効数字3けたで表すとき、AとBにあてはまる数を書く。 <table style="margin: 0 auto; border-collapse: collapse;"><tr><td style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px;">A</td><td style="padding: 0 5px;">× 10</td><td style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px;">B</td></tr></table>	A	× 10	B	3.7	19.6	65.0	45.0
A	× 10	B							

○ 解答状況

学習指導要領の移行に伴い追加された学習内容であり、「おおむね達成」の期待正答率は問10(2)は50.0、問10(3)は50.0、問11(1)45.0であったが、正答率は問10(2)は20.1、問10(3)は42.1、問11(1)は3.7と、全て下回った。相対度数の意味と求め方、度数分布表を利用した平均値の求め方、有効数字の意味と表し方など、知識の定着が十分でないことに要因があると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

それぞれにおいて、知識の定着を図るための取組が優先事項であると考ええる。できれば、日常生活の中にある数値で表された情報などを題材とすることで、生徒の関心・意欲を引き出しながら、理解が深められるように授業を進めたい。

傾向2 **多様な見方を用いて考えたり、問題解決の方法や資料の傾向などを説明したりする力に課題がある。**

[中学2年生 大問4の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問4(2)	与えられた情報から数量の関係を見だし、方程式をつくることができる。 (短答式)	お父さんが進んだ道のりをxmとして、方程式をつくる。	3.7	52.0	55.0	35.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率35.0に対して、正答率は3.7であり、31.3ポイント下回った。与えられた情報から、条件に合わせて数量の関係を見だし、方程式に表すという数学的な思考力に課題がある。

○ 指導法改善の手立て

本問題は、2つの未知数が問われており、未知数xの捉え方によって2通りの方程式が考えられるものであった。太郎さんの考え(お父さんがひろしさんに追いつくまでの時間をxとおいて、2人が進んだ道のりに目を付ける)が一般的であるが、花子さんの考え(お父さんが進んだ道のりをxとおいて、2人が進んだ時間に目を付ける)も理解できるような柔軟な思考力を身に付けさせたいものである。授業においても、本問題のように複数の考え方ができるような問題等を題材として取り扱うことにより、数学的な思考力を培うこともできると考える。

[中学2年生 大問9の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問9(3)	事象の変化を読み取り、グラフや式をもとに、数学的に処理することができる。 (記述式)	「何個目のおもりをつるしたときに、ばねBののびた長さが20mmより長くなるのか」について、グラフまたは式をもとに、ことばや式を使って説明する。	19.7	39.4	60.0	40.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して、正答率は19.7であり、20.3ポイント下回った。さらに、無解答率も39.4であった。思考の過程や判断の根拠などを数学的に説明することに課題があると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

本問題においては、ばねBのグラフなどの情報をもとに、ばねBののびた長さが20mmより長くなるおもりの重さ(70g)を捉えて、その根拠について数学的に説明する力が求められている。グラフや式、表に表すという知識・技能の定着を図ることはもちろん大切であるが、それらを「活用」させるような課題の設定や取組も大切である。また、各教科において言語能力の育成が重視されているが、今後の数学の授業においては、解答を求めるだけでなく、思考の過程や判断の根拠などを

数学的に説明するような表現力を育むための取組が重要であるとする。

[中学2年生 大問11の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問11(2)	ヒストグラムや中央値を用いて資料の傾向を説明することができる。 (記述式)	「ごみの量が1080g以上であれば、多い方である」という考えの理由について、ヒストグラムをもとに、「中央値」を使って説明する。	9.7	50.4	55.0	35.0

○ 解答状況

学習指導要領の移行に伴い追加された学習内容であり、「おおむね達成」の期待正答率35.0に対して、正答率は9.7で25.3ポイント下回り、無解答率は50.4であった。中央値という用語の意味についての知識・理解と資料の傾向を捉えて説明する力に大きな課題があると思われる。

○ 指導法改善の手立て

中央値、最頻値などの用語について、知識の定着を図ることがまずは大切である。その上で、与えられたヒストグラムなどの資料について、傾向を捉えて説明するような取組を行っていくことが必要である。できれば、日常生活の中にある生徒の興味をひくような題材を設定することで、生徒の関心・意欲を引き出しながら、理解が深められるように授業を進めたい。

傾向3 **推論についての理解や論理的な思考力に課題がある。**

[中学3年生 大問6]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	全国の正答率	佐賀県の正答率
問6	証明の意義について理解している。 (選択式)	三角形の内角の和が 180° であることの証明について正しいものを選ぶ。	26.1	1.3	28.9	26.2

○ 解答状況

実施時の全国の正答率28.9に対して、正答率は26.1であり、2.8ポイント下回った。証明の意義についての理解に課題があると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

帰納的な方法は、図形の性質や関係性を見いだす方法としては有効であるが、その一般性を保証するものではない。このように帰納的な方法の意義と限界を理解させ、演繹的な推論による証明により、命題が例外なしに成り立つことを明らかにできることについて理解を深めさせることが大切である。本問題を授業で扱う場合には、いくつかの三角形について内角の和が 180° であることを調べるという帰納的な方法により、その事柄の信頼性を高めることはできるが、全ての三角形についてその事柄が正しいかどうかを調べるできないことを確認する必要がある。その上で、全ての三角形に対応できる文字を用いて演繹的に説明する証明が必要であることを理解できるようにすることが大切である。

[中学3年生 大問12]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	全国の正答率	佐賀県の正答率
問12(1)	証明の方針を立てる際に根拠となる事柄を筋道立てて考えることができる。 (選択式)	辺の長さが等しいことを証明する際に、その辺を含む三角形の合同を示せばよい理由を選ぶ。	59.2	2.7	63.3	58.7
問12(2)	方針にもとづいて証明することができる。 (記述式)	2つの線分の長さが等しいことを、三角形の合同を利用して証明する。	51.9	26.1	43.3	42.0
問12(3)	証明を振り返って考えることができる。 (選択式)	証明で用いた三角形の合同を根拠として、証明したこと以外に新しく分かることを選ぶ。	65.0	3.3	66.3	64.0

○ 解答状況

問12(2)は記述問題であったため、問12(1)、問12(3)と比べると正答率も低く、無解答率は高い状況にある。しかしながら、問12(1)と問12(3)については、実施時の全国の正答率と比べて、正答率がそれぞれ4.1ポイント、1.3ポイントと下回っ

たが、問12(2)については、実施時の全国の正答率を8.6ポイントと上回った。このことから、証明の進め方等の技能については習熟が図られているが、証明の方針を立てるときの根拠や、証明した事柄から新たに分かることの理解において、課題があると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

方針を立て証明を書くことができるようにすることは大切であるが、加えて、証明の中で使われている根拠を正確に表現したり、証明された事柄から新たな性質等を見いだしたりできるようにすることが大切である。指導に当たっては、本問題のような証明問題を取り扱う場合に、「合同だから」と使っている根拠を、「合同な図形の対応する辺の長さは等しいから」と正確に表現させることによって、証明が分かりやすくなることを実感する機会を作ることが考えられる。また、ある事柄についての証明ができた段階において、証明された事柄以外で成り立つことを問うことにより、新たな性質や関係を見いだすように促すことが考えられる。

エ これからの指導に向けて

今回の調査によって明らかになった指導改善のための重点項目は、次の通りである。

(ア) 基礎的・基本的な知識・技能の定着を図ること。特に、学習指導要領の移行により追加された学習内容等、課題が見られる学習内容における知識・技能の定着を図ること。

(イ) 身に付けた知識・技能を基に、それらを活用したり、数学的な表現を用いて問題解決したりすることができるような数学的な思考力・判断力・表現力を育むこと。

以上の2つの重点項目を踏まえて、学習指導の改善を図っていく必要がある。数学的活動についても、2つの重点項目を踏まえて、実施していくことが大切である。具体的に言うと、数学的活動を日々の授業の中にどのように位置付け、また、どのような活動に取り組みさせた方が効果的であるかということを常に考えながら、授業の改善を図っていくことが大切である。

※数学的活動は、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けるとともに、数学的に考える力を高めたり、数学を学ぶことの楽しさや意義を実感させたりするために、重要な役割を果たすものである。

(ア) 基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着に向けて

「球の体積の求め方」や「相対度数の求め方」、「有効数字の表し方」などの学習指導要領の移行により追加された学習内容に加え、「扇形の弧の長さ求めること」や「グラフから式を読み取ること」等、特定の学習内容における知識・技能の定着に課題があることが分かった。数学的な思考力や表現力の向上を目的とした数学的活動を取り入れた授業実践を重視することはもちろん大切であるが、こればかりを重視し過ぎれば、逆に思考力や表現力を育むための基盤となる基礎的・基本的な知識・技能が定着が図れないといった悪影響も考えられる。数学的活動の役割にもあるように、3つの点（「知識・技能を確実に身に付ける」、「思考力・判断力・表現力を高める」、「数学を学ぶことの楽しさや意義を実感させる」）のバランスと連動性を考えながら、授業改善を図ることが大切である。また、1学年の「資料の活用」領域の学習内容については、他の領域の学習内容との関連性が薄いため、その分他の領域に比べて知識・技能が定着できていないことが現実的に考えられる。知識・技能の定着に向けての取組として、単元指導計画の見直しをしたり、定期的に小テストを行ったり、補充的な学習を行ったりすることが必要である。

(イ) 数学的な思考力・判断力・表現力の向上を目指して

数学的な思考力・判断力・表現力を育むためには、それらを意図した数学的活動を取り入れた授業実践を積み重ねていくことが必要である。ただ、(ア)にも述べたように、授業実践をする上において、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る視点も忘れてはならない。その上で、「概念・法則などを解釈し、説明したり活用したりする活動」、「与えられた情報を分析・評価したり論述したりする活動」、「互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる活動」など、言語活動を重視した数学的活動の充実を図っていくことが大切である。また、通常の授業で取り扱う題材や課題は、その領域だけの内容を中心としたものが多いため、生徒の学習意欲を引き出すことができなったり、生徒が各領域の学習内容を関連性のないものと捉えたりすることが考えられる。そこで、身近な実生活に結びつきのあるものや多様な考え方ができるものなど、題材や課題についての設定の工夫を行っていくことが大切である。さらに、機会を捉えて、各領域の学習を相互に関連付けたストーリー性のある授業を意図的に設定したり、関連する学習プリントに取り組みさせたりすることで、生徒の多様な考え方や柔軟な発想を引き出すことにつながり、数学的な思考力・判断力・表現力が育まれていくものと考えられる。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日：2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > [Ⅲ 各教科の調査結果の分析](#) > 中学校理科

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

※中学1年生の調査については、小学6年生の学習内容としているため、小学校の項で分析している。

中学校理科

科学的な思考力・表現力の育成と科学的な体験や自然体験の充実を図る授業づくり

教科全体正答率は、中学2年生と中学3年生ともに、「おおむね達成」の基準を上回った。評価の観点別正答率では、中学2年生は全ての評価の観点において「おおむね達成」の基準を上回ったが、中学3年生は「科学的な思考」の評価の観点のみ「おおむね達成」の基準を下回った。また、「活用」に関する問題の正答率では、平成22年度の中学2年生は「おおむね達成」の基準を上回ったが、平成23年度の中学2年生は「おおむね達成」の基準を下回った。そこで、中学校理科においては、科学的な思考力・表現力の育成と科学的な体験や自然体験の充実を図る指導法の工夫が必要である。

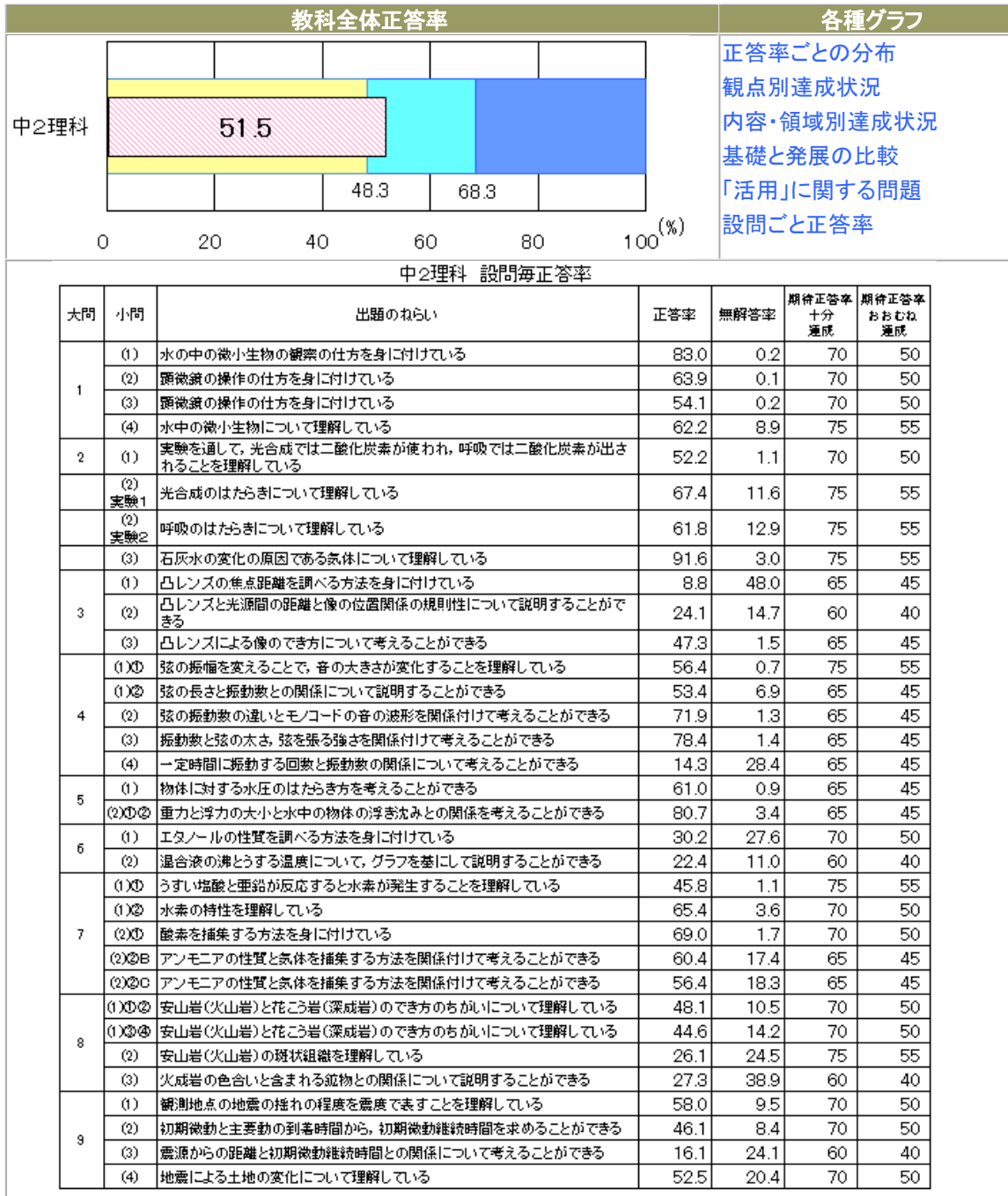
この後、評価の観点については、以下のように記す。

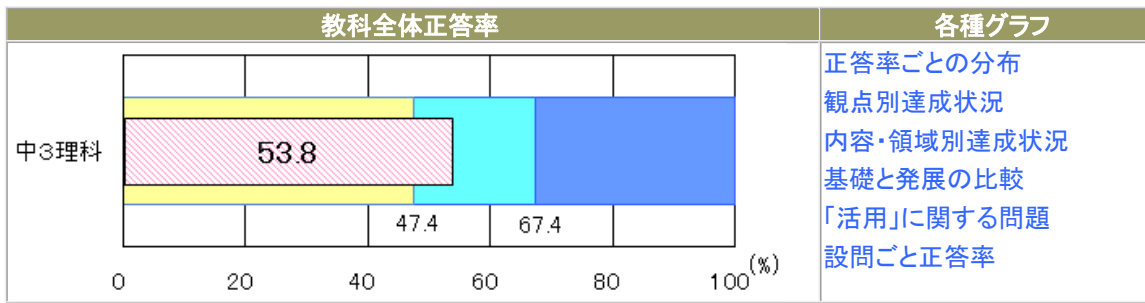
- | | | |
|-----------------|---|----------------------|
| ○自然事象への関心・意欲・態度 | → | 本調査では設定なし |
| ○科学的な思考 | → | 「思考」ただし本文中では「科学的な思考」 |
| ○観察・実験の技能・表現 | → | 「技能・表現」 |
| ○自然事象についての知識・理解 | → | 「知識・理解」 |

ア 結果の概要

(凡例) ■: 要努力(おおむね達成の基準を下回る) ■: おおむね達成 ■: 十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率





中3理科 設問毎正答率						
大問	小問	出題のねらい	正答率	無解答率	期待正答率 十分達成	期待正答率 おおむね達成
1	(1)	電流の向きや磁界の向きを使って、電流が受ける力の向きを変える方法を身に付けている	80.4	6.6	70	50
	(2)	電流の大きさによって、銅線のまわりの磁界の強さが変化し、電流が受ける力の大きさも変わることを理解している	68.5	9.9	70	50
	(3)	電流が磁界から力を受けることとモーターの原理が同じことを理解している	55.8	0.9	70	50
2	(1)	並列回路になっている家庭の配線を流れる電流の規則性を考えることができる	83.0	0.6	60	40
	(2)	電力の違いによって発生する熱の量に違いがあることを説明することができる	67.3	15.5	65	45
	(3)	電力と時間の関係から電力量を考えることができる	19.5	11.9	60	40
3	(1)	回路の各点を流れる電流と各部に加わる電圧についての規則性を考えることができる	33.5	2.5	65	45
	(2)	抵抗の大きさの求め方を理解している	27.9	14.7	70	50
	(3) 直列	二つの抵抗を直列につないだときの回路全体の抵抗とそれぞれの抵抗の大きさとの関係を説明することができる	18.6	29.3	65	45
	(3) 並列	二つの抵抗を並列につないだときの回路全体の抵抗とそれぞれの抵抗の大きさとの関係を説明することができる	14.0	30.7	65	45
4	(1)	背骨がある動物をセキツイ動物ということを理解している	91.1	2.8	75	55
	(2)	セキツイ動物の卵生と胎生のちがいについて理解している	77.2	7.2	75	55
	(3)	卵にからがある理由を内部の乾燥防止との関係で説明することができる	18.3	18.4	60	40
5	(1)	血液の循環経路や酸素と二酸化炭素が交換されるしくみを理解している	61.1	1.2	70	50
	(2)	血液の成分とはたらきを理解している	59.4	3.4	70	50
	(3)	肝臓のはたらきを理解している	50.7	16.5	70	50
6	(1)	酸化銀の熱分解における変化の様子を理解している	54.4	1.2	70	50
	(2)	酸素を確認する方法を身に付けている	50.4	10.2	70	50
	(3)	酸化銀の熱分解によって生成する銀を、金属の特性に照らし合わせて確認する方法を身に付けている	39.3	9.8	60	40
	(4)	酸化銀を加熱すると銀と酸素が生成するような化学変化を熱分解ということを理解している	66.9	10.0	75	55
7	(1)	炭酸水素ナトリウムと塩酸が反応して発生する二酸化炭素を化学式で表すことができる	77.0	5.7	70	50
	(2)	化学変化の前後における物質の質量は変化しないことを理解している	67.3	1.3	70	50
	(3)	発生した二酸化炭素が容器の外に出たため質量が小さくなったことを理解している	75.7	1.3	70	50
8		鉄のさびは酸素と化合したものであることを理解し、さびを防ぐ方法を日常生活の中から説明することができる	46.9	18.6	55	35
9	(1)	雲量と天気について理解している	43.7	1.6	70	50
	(2)	観測器具を使って得られた結果と風向の日変化の表とを関連付けて、観測した時間を調べる方法を身に付けている	36.8	2.9	70	50
	(3)	気象要素である気温と湿度との関係を説明することができる	67.0	13.9	60	40
10	(1)	日本の冬の典型的な型である「西高東低」の気圧配置を理解している	35.3	25.8	70	50
	(2)	風の強さと等圧線の間隔との関係を理解している	89.8	4.2	70	50
	(3)	冬の季節風とシベリア気団との関係について理解している	62.5	10.3	70	50
	(4)	日本海側と太平洋側の天気の特徴を、日本海から供給される水蒸気と降雪とを関連付けて説明することができる	26.9	25.7	60	40

教科全体正答率について、全ての学年において、「おおむね達成」の基準を上回った。しかし、「十分達成」の基準を上回った学年は見られなかった。

(イ) 評価の観点別正答率

①中学2年生

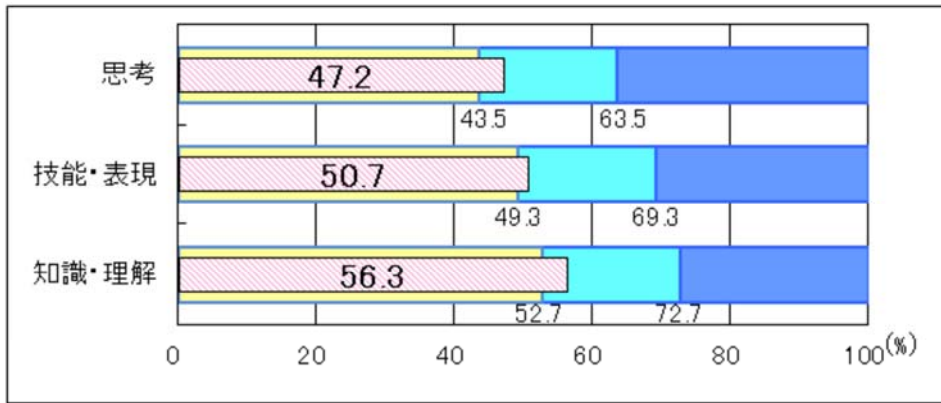


図1 H23年度(中学2年生理科)評価の観点別正答率

中学2年生は、全ての観点において、「おおむね達成」の基準を上回ったが、「十分達成」の基準には届かなかった。しかし、「技能・表現」は、「おおむね達成」を1.4ポイントしか上回っていない。凸レンズの焦点距離を調べる方法やエタノールを同定する方法等、第1分野の正答率が「おおむね達成」の基準を36.2ポイント下回っていたためであると考えられる。

②中学3年生

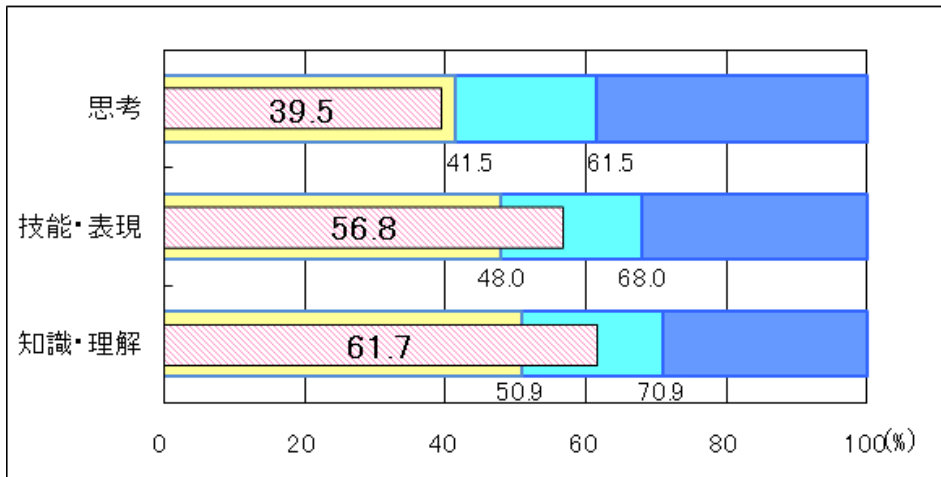


図2 H23年度(中学3年生理科)評価の観点別正答率

中学3年生は、「技能・表現」と「知識・理解」は、「おおむね達成」の基準を上回ったが、「十分達成」の基準には届かなかった。「科学的な思考」は、「おおむね達成」の基準を下回った。観察や実験の結果をグラフや表で表したり、それらを分析・解釈して自分の言葉で表したりする力が十分に育成されていないためと考えられる。

(ウ) 内容・領域別正答率

①中学2年生

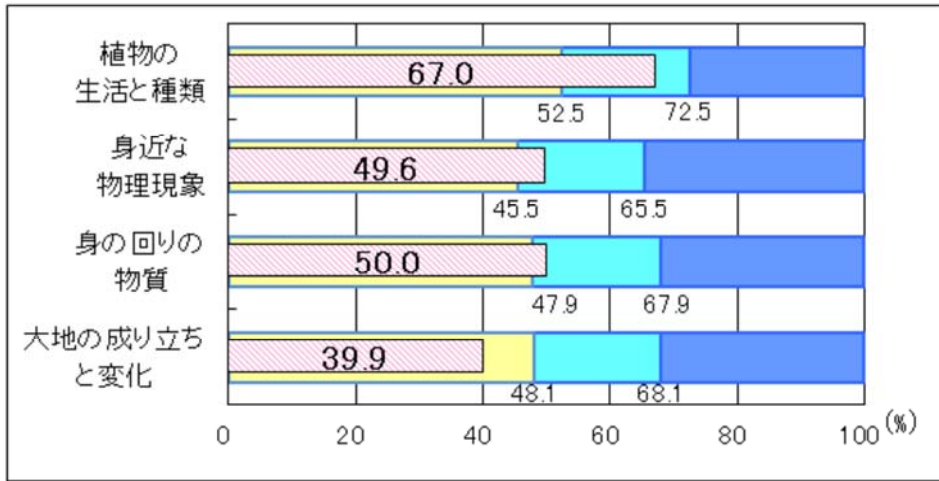


図3 H23年度(中学2年生理科)内容・領域別正答率

中学2年生は、「植物の生活と種類」「身近な物理現象」「身の回りの物質」において、「おおむね達成」の基準を上回ったが、「十分達成」の基準には届かなかった。「大地の成り立ちと変化」は、平成22年度調査と同じく、「おおむね達成」の基準を下回った。「大地の成り立ちと変化」は、学年末に学習することが多く、定期テストや確認テスト等で学習内容が生徒一人一人に定着しているかの評価と、それに対する指導が十分に行われていないことも原因の1つと考えられる。

②中学3年生

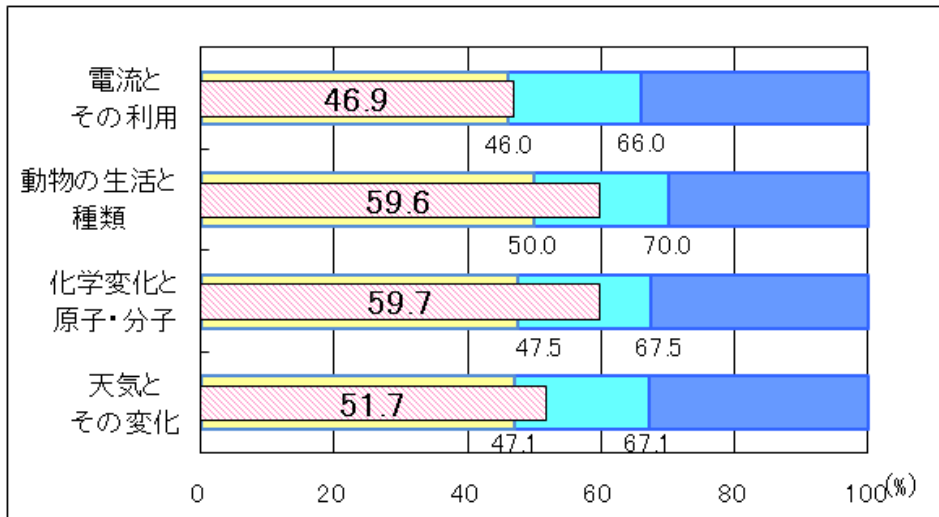


図4 H23年度(中学3年生理科)内容・領域別正答率

中学3年生は、全ての内容・領域において「おおむね達成」の基準を上回ったが、「十分達成」の基準には届かなかった。しかし、「電流とその利用」は、「おおむね達成」の基準を0.9ポイントしか上回っていない。「電流とその利用」は、回路と電流・電圧・抵抗の関係について、自分の考えを文章で記述したり、具体的な数値で示したりする問題が多く、正答率が「おおむね達成」の基準を下回っている問題が多かったためと考えられる。

イ 経年比較

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

中学校理科では、各学年で学習する内容・領域が決まっており、指導法改善の取り組みも内容・領域によってちがいが見られる。そこで、平成23年度と平成22年度の同一学年の生徒を対象に経年比較することとした。

(ア) 「知識・理解」の経年比較

①H23中学2年生とH22中学2年生

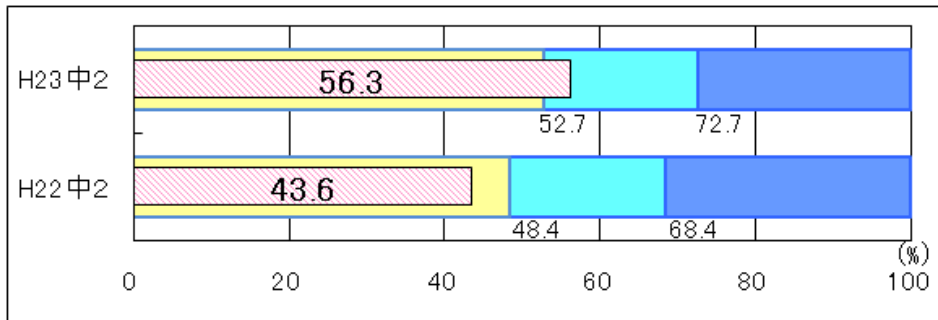


図7 H23年度(中学2年生理科)、H22年度(中学2年生理科)「知識・理解」の正答率の経年比較

平成22年度は「おおむね達成」の基準を下回っていた。しかし、平成23年度は、「十分達成」の基準には届かなかったものの、「おおむね達成」の基準は上回った。生徒がつまづきやすい内容の確実な習得を図るため、増加した理科の授業時間を使って繰り返し学習を行った成果の1つが、この「知識・理解」の経年比較の結果に現れたと考えられる。

②H23中学3年生とH22中学3年生

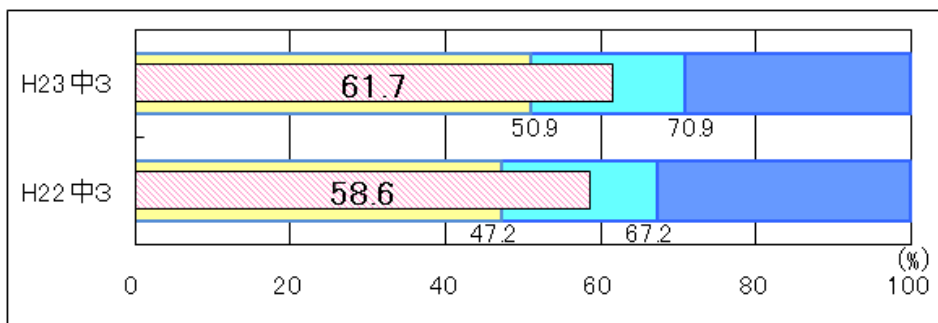


図8 H23年度(中学3年生理科)、H22年度(中学3年生理科)「知識・理解」の正答率の経年比較

平成23年度は、平成22年度と同様に、「おおむね達成」の基準を上回ったが、「十分達成」の基準には届かなかった。今後とも、習得させるべき学習内容が生徒に確実に定着しているかを確かめる評価と指導の充実に、より一層取り組んでいかなければならないと考える。

(イ) 「活用」に関する問題の経年比較

①H23中学2年生とH22中学2年生

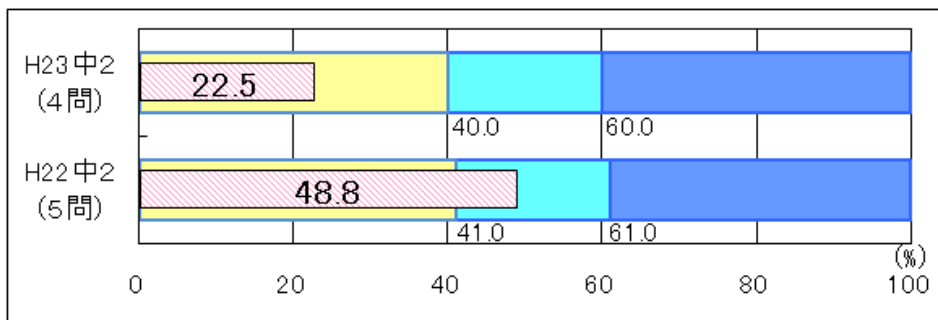


図5 H23年度(中学2年生理科)、H22年度(中学2年生理科)「活用」に関する問題の正答率の経年比較

平成22年度は「おおむね達成」の基準を上回っていたが、「十分達成」の基準には届かなかった。しかし、平成23年度は、「おおむね達成」の基準を下回った。その原因として、平成23年度は、平成22年度と比べて、図や表、グラフを分析・解釈する問題が多く出されていたことから、資料から適切に情報を取り出し根拠を踏まえて

解釈を述べる力が、生徒に身に付いていないためであると考えられる。

②H23中学3年生とH22中学3年生

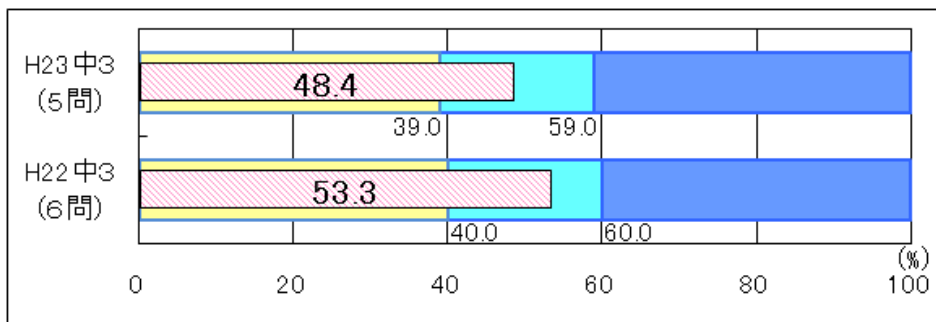


図6 H23年度(中学3年生理科)、H22年度(中学3年生理科)「活用」に関する問題の正答率の経年比較

平成23年度も、平成22年度と同様に、「おおむね達成」の基準を上回ったが、「十分達成」の基準には届かなかった。今後とも、知識や技能を活用して課題を解決する学習活動の充実に、より一層取り組んでいかなければならないと考える。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

平成23年度の調査で、正答率が「おおむね達成」の基準を上回った「知識・理解」と、正答率が「おおむね達成」の基準を下回った「活用」に関する問題と「科学的な思考」について、分析を行った。

傾向1 「知識・理解」に関する問題の正答率は「おおむね達成」の基準を上回る。特に、中学2年生の正答率は、前年度と比べて上昇。

[中学2年生 大問9の(4)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問9(4)	地震による土地の変化について理解している。 (短答式)	地震による地面の水平のくいちがいを断層と答える。	52.5	20.4	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は52.5であり、2.5ポイント上回った。平成22年度の同じ問題では、「おおむね達成」の期待正答率55.0に対して、正答率は45.7であった。また、平成23年度調査(中2理科)では、「知識・理解」の問題の13問中10問が「おおむね達成」の期待正答率を上回った。平成23年度は、昨年度の結果を踏まえ、生徒がつまづきやすい内容の確実な習得を図るための繰り返し学習を、増加した理科の授業時間を使って効果的に行ったためであると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

地震による土地の変化については、実験で再現することが困難なものが多い。そこで、実際に発生した地震の時の写真やビデオ等の資料、コンピュータや模型等を使ったシミュレーションを活用することが、生徒の知識・理解の定着に有効であると考えられる。また、新聞やインターネット等で地震に関する記事を調べさせることにより、地震の学習に対する生徒の興味・関心をより一層高め、知識・理解の確実な定着を図ることができると考える。

[中学3年生 大問7の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問7(3)	発生した二酸化炭素が容器の外に出たために質量が小さくなったことを理解している。 (記述式)	容器のふたを暖めると二酸化炭素が空気中に逃げて質量が小さくなることを選択肢から選ぶ。	75.7	1.3	70.0	50.0

○ 解答状況

「十分達成」の期待正答率70.0に対して、正答率は75.7で、5.7ポイント上回った。無解答率は1.3であった。密閉容器としてペットボトルを使った実験が授業中によく行われているため、質量保存の法則についての知識・理解の定着が図られていると考える。また、二酸化炭素は小学校の学習でも扱われている身近な気体であり、その性質が生徒によく知られているためであるとも考えられる。

○ 指導法改善の手立て

観察・実験におけるTTや少人数指導などのきめ細かな指導が、生徒一人一人の観察・実験の技能の向上そして基礎的・基本的な内容の確実な定着に効果を上げていると考えられる。今回の学習指導要領の改訂により増加した授業時間を使って、生徒による観察・実験のより一層の充実を図っていくことにより、知識・理解のさらなる定着を図ることができると考える。

傾向2 「活用」に関する問題に課題が見られる。資料から適切に情報を取り出し根拠を踏まえて解釈を述べる力が不足。

[中学3年生 大問10の(4)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問10(4)	日本海側と太平洋側の天気の特徴を、日本海から供給される水蒸気と降雪とを関連付けて説明することができる。 (記述式)	冬の太平洋側で乾燥した晴れの天気が多くなる理由を記述する。	26.9	25.7	60.0	40.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して、正答率は26.9であり、13.1ポイント下回った。無解答率は25.7であった。冬の季節風が日本海を渡るときに吸収する水蒸気と日本海側で降る大雪との関係について、問題文から読み取り、自分の言葉で説明することができなかつたためであると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

各地の気温・湿度や降水量の気象データ、天気図などの資料を使って、実際の天気を説明させたり予想させたりする学習は、資料から必要な情報を取り出し根拠を踏まえて解釈を述べる力を育成するために有効であるとする。

[中学2年生 大問6の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問6(2)	混合液の沸騰する温度について、グラフを基にして説明することができる。 (選択式・記述式)	水とエタノールの混合液の温度変化を表すグラフを選択肢から選びその理由を記述する。	22.4	11.0	60.0	40.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して、正答率は22.4であり、17.6ポイント下回った。水は100℃、エタノールは78℃で沸とうし、沸とう中の温度つまり沸点は一定になることは理解している。しかし、それらの混合液は沸とう中も温度が上昇するため、沸点は一定にならないことを説明することができなかつたためであると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

身近にある赤ワインやみりんなどの混合物からエタノールを分離する実験を通して、純粋な物質と混合物の沸点の違いについて説明させる学習を行うことは、資料から必要な情報を取り出し根拠を踏まえて解釈を述べる力を育成するために有効であるとする。また、沸点の違いを利用して石油から様々な物質を取り出していることを例に取り上げ、日常生活や社会との関連について触れることは、「活用」に関する問題の正答率の向上に効果があるとする。

傾向3 **「科学的な思考」に関する問題に課題が見られる。観察や実験の結果を原理や法則等を使って説明する力が不足。**

[中学3年生 大問3の(3)直列、並列]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問3(3)直列	2つの抵抗を直列につないだときの回路全体の抵抗と、それぞれの抵抗の大きさとの関係を説明することができる。 (記述式)	2つの抵抗を直列につないだときの回路全体の抵抗は、それぞれの抵抗の和となることを記述する。	18.6	29.3	65.0	45.0
問3(3)並列	2つの抵抗を並列につないだときの回路全体の抵抗と、それぞれの抵抗の大きさとの関係を説明することができる。 (記述式)	2つの抵抗を並列につないだときの回路全体の抵抗は、それぞれの抵抗より小さくなることを記述する。	14.0	30.7	65.0	45.0

○ 解答状況

問3(3)直列は、「おおむね達成」の期待正答率45.0に対して、正答率は18.6であり、26.4ポイント下回った。無解答率は、29.3であった。また、問3(3)並列は、「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し、正答率は14.0であり、31.0ポイント下回った。無解答率は30.7であった。< style="margin-top: 0; margin-bottom: 0;">2つの抵

抗を直列や並列につないだときの回路全体の抵抗については、直列つなぎや並列つなぎにおける回路全体の電流と電圧を使って考えることができなかつたためであると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

2つの抵抗を直列と並列につないだときの合成抵抗の違いを説明するためには、生徒自身が観察や実験で得られた結果を分析し解釈し、電流や電圧、抵抗についての規則性を見出すことが必要であると考えられる。そこで、生徒自身にどのような結果になるかを予想させてから観察や実験を行わせるような授業を繰り返し行うことが重要であるとする。

[中学2年生 大問3の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
問3(2)	凸レンズと光源間の距離と像の位置関係の規則性について説明することができる。 (選択式・記述式)	光源と実像の大きさが同じになるとき、凸レンズと光源の距離を選択肢より選び、その理由を説明する。	24.1	14.7	60.0	40.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して、正答率は24.1であり、15.9ポイント下回った。光源と実像の大きさが同じになるとき、凸レンズと光源の距離が焦点距離の2倍になることを実験で確認し、その理由を作図等を使って説明することができなかつたためであると考えられる。

○ 指導法改善の手立て

まず、生徒実験を通して、光源と凸レンズの距離を変え、実像や虚像ができる条件を調べさせ、像の位置や大きさ、像の向きについての規則性を定性的に見いださせる。次に、その結果を、光の直進や屈折を考えさせながら、光の道筋を作図させる。最後に、その図を使って生徒に自分の言葉で説明させる。このように、きめ細かなステップを取り入れた学習を展開することが重要であるとする。

エ これからの指導に向けて

今回の調査では、自然事象についての「知識・理解」や観察・実験の「技能・表現」など、基礎的・基本的な内容については良好であった。しかし、「科学的な思考」に関する問題や「活用」に関する問題について課題が見られた。この課題を解決するためには、科学的な思考力・表現力の育成を図る授業を展開することが重要である。また、児童生徒意識調査において、理科学習の有用性に課題が見られたことから、科学的な体験や自然体験の充実を図るための取り組みを行うことも重要なことである。

そこで、次の3つの点を大切に、これからの指導に取り組む必要がある。

(ア) 探究的な学習の充実

科学的な思考力や表現力を育成するためには、生徒自らが課題を解決する探究的な学習の充実を図ることが重要である。

探究的な学習には、①「問題を見だし観察や実験を計画する学習活動」、②「観察や実験の結果を分析し解釈する学習活動」、③「科学的な概念を使用して考えたり説明したりする学習活動」等が考えられる。①の学習活動の充実を図ることは、生徒が自然の事物・現象に進んで関わるために大切である。そのためには、観察や実験を計画する場面で、考えを発表する機会を与えたり、検証方法を議論したりしながら考えを深め合う等の学習活動が考えられる。②の学習活動の充実を図ることは、思考力や表現力を育成するためにも重要である。そのためには、データを図、表、グラフなどで表したり、結果を考察したりする時間を十分に確保することが大切である。③の学習活動の充実を図ることも、思考力や表現力の育成を図る観点から大切である。そのためには、例えばレポートの作成、発表、討論等、知識や技能を活用する学習活動を工夫し充実を図る必要がある。

(イ) 個に応じたきめ細かな指導と評価の充実

科学的な思考力や表現力を育成するためには、個に応じたきめ細かな指導と評価を充実させることが重要である。

まず、基礎的・基本的な内容が確実に定着しているかを確認する評価を行う。次に、達成できていない内容について補充的な指導を行い、確実な習得を図る。最後に、習得した基礎的・基本的な内容を活用し、科学的に探究する学習活動に取り組みさせる。つまり、「指導と評価の一体化」を、今一度、徹底することが大切である。その際、授業中の観察やノートの点検、小テストの実施などの「短いフィードバック・サイクル」によるものと、単元末の確認テストや定期テスト・実力テストのやり直しなどの「長いフィードバック・サイクル」によるものを組み合わせて行うことが重要であると考え。個に応じたきめ細かな指導を全学年で継続的に取り組んでいくことが大切である。

(ウ) 科学的な体験や自然体験の充実を図るためのものづくりの推進

児童生徒意識で、「理科の勉強で学習したことは将来、社会に出たときに役立つか。」という質問に対して、「当てはまる」と回答した生徒の割合は、中学1年生37.9%、中学2年生23.5%、中学3年生19.5%であった。このことは、学年が上がるにつれて、理科学習の有用性を実感している生徒の割合が減少していることを示していると考えられる。

そこで、理科学習の有用性を生徒に実感させるためには、科学的な体験や自然体験の充実を図るためのものづくりを授業に取り入れることは有効であると考え。特に、ものづくりは、学習内容と日常生活との関連を図る上でも有効な学習活動の一つであると考え。

そこで、ものづくりを授業に取り入れるに当たっては、単元の導入、展開、まとめのどの部分に取り入れるのが最も効果的か、単元の学習内容の特質に応じて計画的に判断し行うことが重要であると考え。あくまでも原理・法則の理解を深めることが目的である。高度なものや複雑なものではなく、生徒が創意・工夫する余地のあるもの、安価で全ての生徒に材料が行き渡るものが、ものづくりの教材として望ましいと考える。なお、安全には十分配慮して行わなければならない。

オ 授業実践に参考となるリンク



平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

[Web報告書もくじ](#) > [Ⅲ 各教科の調査結果の分析](#) > 中学校英語

Ⅲ 各教科の調査結果の分析

中学校英語

1～2文程度の英語を書く活動の充実

全ての評価の観点、内容・領域において、「おおむね達成」の基準を上回る成果が見られた。特に、中学2年生は「聞くこと」及び「読むこと」の領域で、中学3年生は「聞くこと」の領域で「十分達成」の基準を上回った。「書くこと」の領域では、学年が上がっても「要努力」の生徒の割合は増えなかったが、依然として英作文の得意な生徒と苦手な生徒の二極化傾向が見られ、語順などに注意して正しく書くことに課題がある。今後の指導に当たっては、自分の考えや気持ちを1～2文程度の英語で書くなど、引き続き書く活動を日常的に取り入れた授業づくりが必要である。

この後、評価の観点については、以下のように記す。

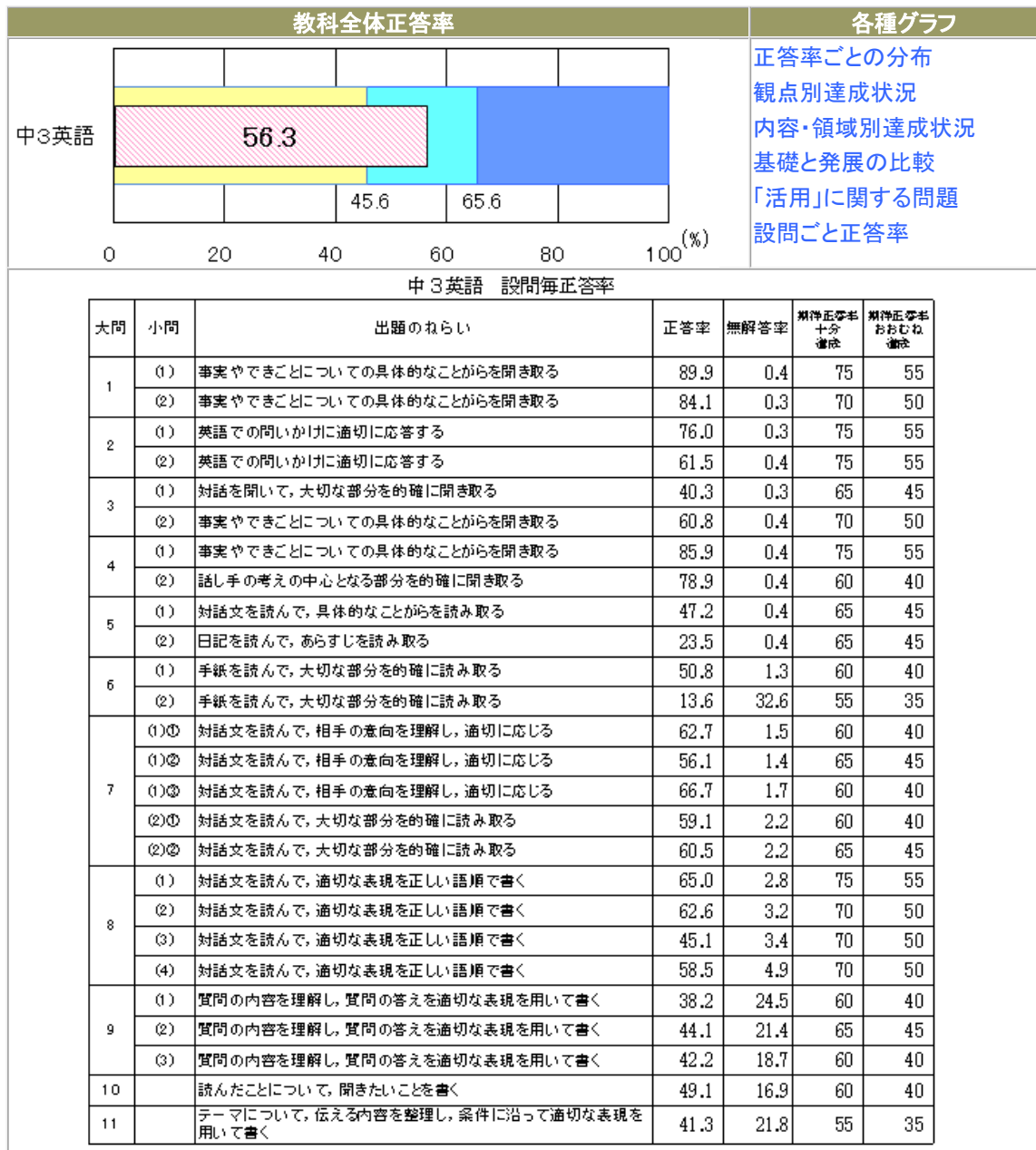
- | | | |
|----------------------|---|-----------|
| ○コミュニケーションへの関心・意欲・態度 | → | 本調査では設定なし |
| ○表現の能力 | → | 「表現」 |
| ○理解の能力 | → | 「理解」 |
| ○言語や文化についての知識・理解 | → | 「言語・文化」 |

ア 結果の概要

(凡例) : 要努力(おおむね達成の基準を下回る) : おおむね達成 : 十分達成

(ア) 教科全体及び設問毎正答率





教科全体正答率では、中学2年生が「十分達成」の基準を上回っており、中学3年生が「おおむね達成」の基準を上回った。このことを設問毎で見ると、中学2年生の大問11のような、まとまった英文を書く設問の正答率が平成22年度調査と比べて向上しており、書くことに対する指導が成果として表れている。

(イ) 評価の観点別正答率

① 中学2年生

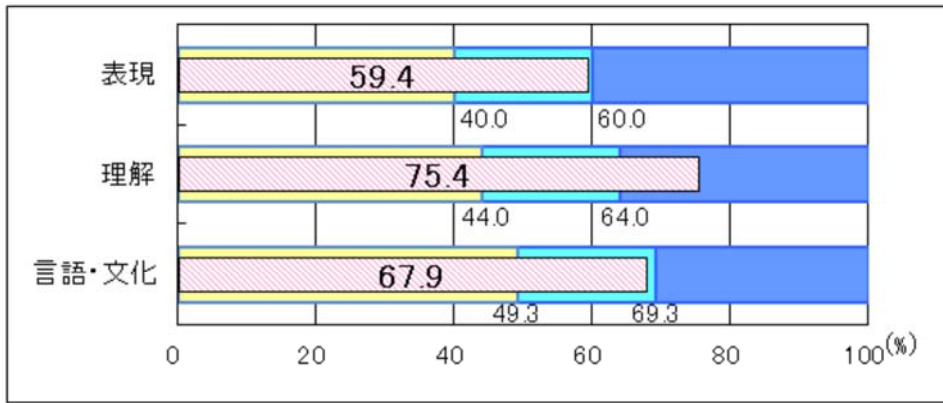


図1 H23年度(中学2年生英語)評価の観点別正答率

全ての観点で「おおむね達成」の基準を上回った。特に、「理解」の観点が「十分達成」の基準を上回った。英語で話された内容から、時間、場所、用件などの具体的な情報を正しく聞き取る能力が身に付いている。しかし、英文を正しい語順に並べる問題については定着が十分ではないと考えられる。

② 中学3年生

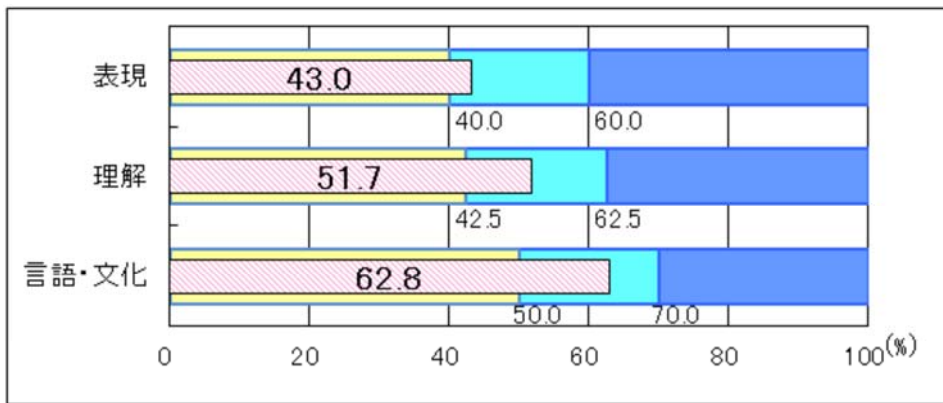


図2 H23年度(中学3年生英語)評価の観点別正答率

全ての観点で「おおむね達成」の基準を上回った。特に、「言語・文化」の観点では、単語を正しく聞き取ったり、文法に従って正しい語順にする力が定着している。しかし、「表現」の観点では、それらの知識を場面や条件に合うように書く力を付けることには課題が見られた。

(ウ) 内容・領域別正答率

中学2年生及び中学3年生のどちらも、「聞くこと」の領域で「十分達成」の基準を上回った。

① 中学2年生

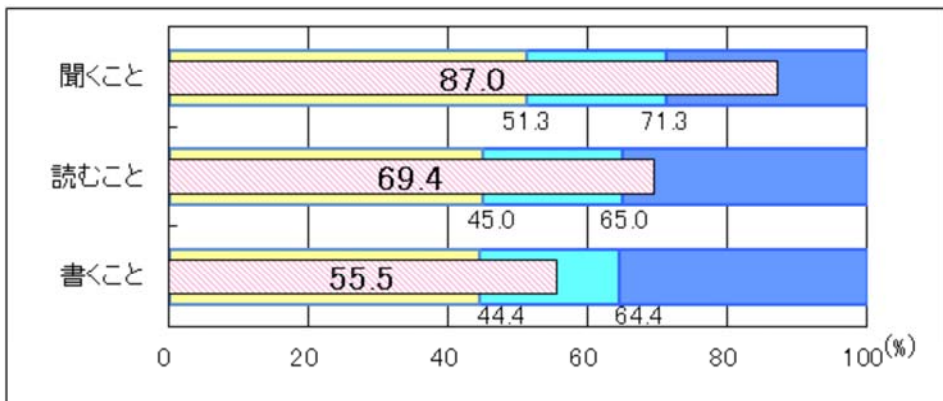


図3 H23年度(中学2年生英語)内容・領域別正答率

「聞くこと」及び「読むこと」については「十分達成」の基準を上回った。「書くこと」については、与えられたテーマなどについて自分の考えを書く力は付いているが、文法のきまりに従って正しい語順で書く力が付いていないことが考えられる。既習文法を繰り返し指導して定着を図る指導が必要である。

②中学3年生

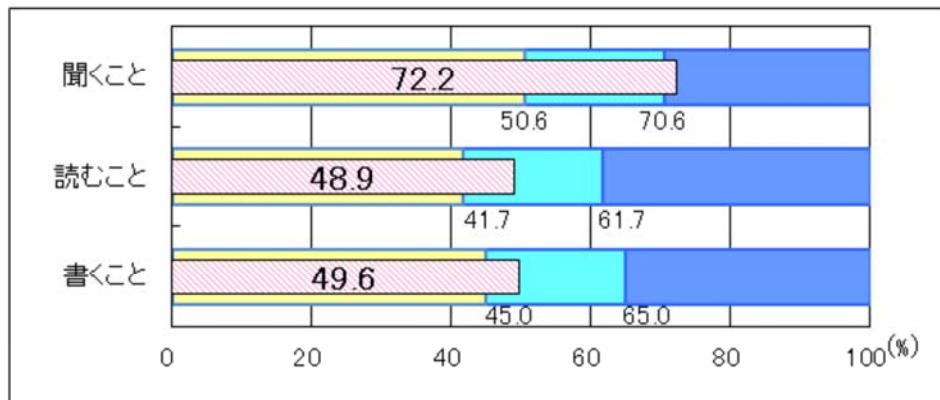


図4 H23年度(中学3年生英語)内容・領域別正答率

「聞くこと」については「十分達成」の基準を上回り、良好だった。しかし、「読むこと」については、1文1文の読み取りはできても、前後の文脈を捉えて、対話の流れや概要を理解する問題に課題がある。「書くこと」については、疑問詞を含んだ英語での質問に対して、自分の考えや気持ちを簡単な英語で答える問題は、誤答率や無解答率が高く、日常の授業での書く活動の取り組みが必要である。

イ 経年比較

(凡例) ■: 要努力(おおむね達成の基準を下回る) ■: おおむね達成 ■: 十分達成

定着に差が出やすい「書くこと」の領域について、同一学年の経年比較(平成22年度中学2年生と平成23年度中学2年生)及び同一生徒の経年比較(平成22年度2年生と平成23年度中学3年生)を行い、「要努力」の割合の変容を分析した。さらに、具体的な問題で変容を分析するために、まとまった英文を書く力を見る問題と英語の質問に簡単な英語で答える問題で経年比較を行った。

(ア) 「書くこと」の領域での経年比較

①同一学年経年比較

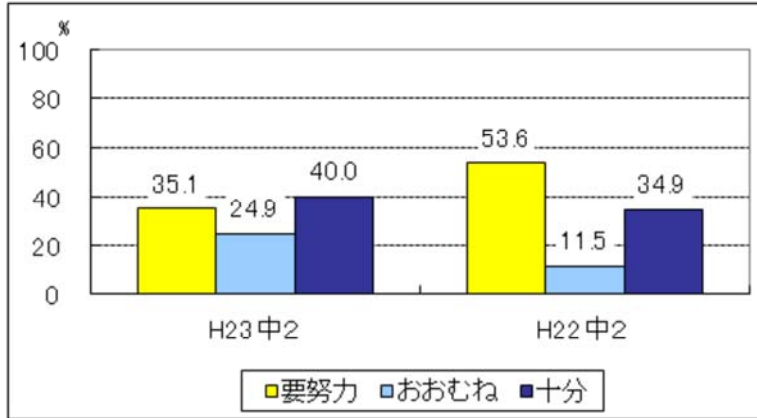


図5 H23年度(中学2年生)、H22年度(中学3年生)の「書くこと」の内容・領域別の到達度分布の経年比較

「要努力」の割合に注目すると、平成23年度は前年よりも18.5ポイント減少した。

②同一生徒経年比較

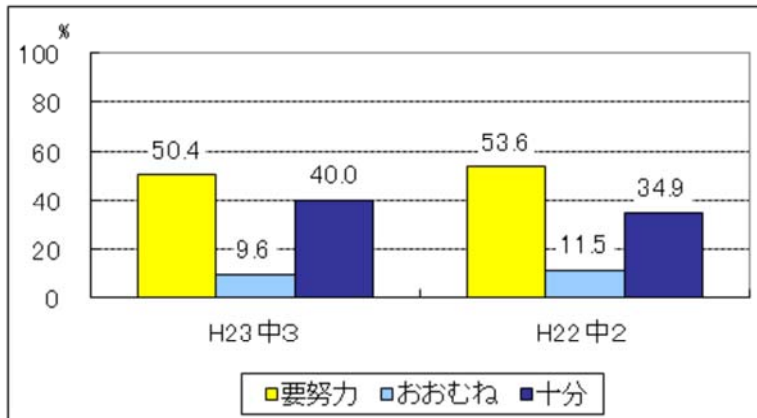


図6 H23年度(中学3年生)、H22年度(中学2年生)の「書くこと」の内容・領域別の到達度分布の経年比較

「要努力」の割合に注目すると、平成23年度の「要努力」の割合は前年よりも3.2ポイント減少している。このことから、「書くこと」を苦手としている中学3年生の割合が、やや減少していると言える。

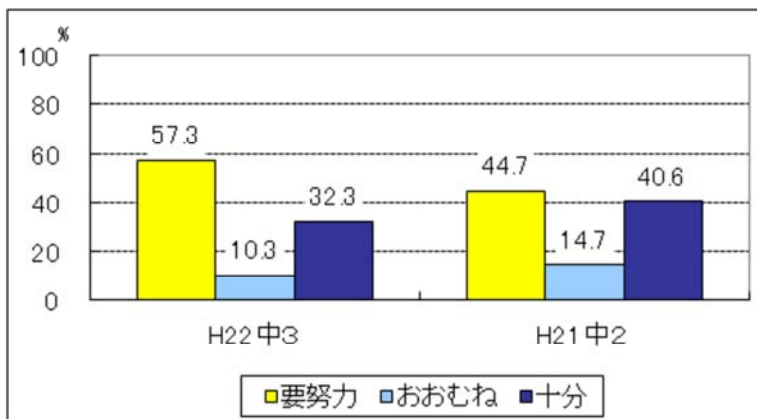


図7 H22年度(中学3年生)、H21年度(中学2年生)「書くこと」の内容・領域別の到達度分布の経年比較

平成22年度の「要努力」の中学3年生は57.3%だった。中学2年生の「要努力」が44.7%だったことから、学年が上がるにつれて、「書くこと」を苦手にする生徒が増えていくことが分かる。平成21年度以前についても同傾向が見られた。図6と図7の比較を通して、「『書くこと』を苦手とする生徒は学年が上がるにつれて増える」という傾向が、今年度の中学3年生には見られないことが分かる。

中学2年生の同一学年経年比較と中学3年生の同一生徒経年比較を通して、「書くこと」を苦手になっている生徒の割合が減少している。

(イ) 設問ごとの経年比較

①まとまった英文を書く力を見る問題

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
H23 問11	テーマについて、伝える内容を整理し、条件に沿って適切な表現を用いて書くこと。 (記述式)	「私の将来の夢」というテーマで4文以上の紹介文を書く。	41.3	21.8	55.0	35.0
H22 問10		「私の住んでいる町」というテーマで4文以上の紹介文を書く。	27.5	13.4		

図8 H23年度(中学3年生の問11)、H22年度(中学3年生の問10)正答率の経年比較

中学3年生が英語で自分の考えや気持ちを書く問題である。平成23年度は「おおむね達成」の基準を上回った。テーマが異なるために単純に比較はできないが、平成22年度と比較しても県正答率が上昇している。なお、無解答率が上昇しているのは、テーマについての書きやすさによるところが大きく、定着に差がついてきたとは言えない。

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
H23 問11	テーマについて、伝える内容を整理し、条件に沿って適切な表現を用いて書くこと。 (記述式)	「私の好きなこと人物」というテーマで3文以上の紹介文を書く。	61.5	11.1	55.0	35.0
H22 問10		「私の好きなこと人物」というテーマで4文以上の紹介文を書く。	38.2	17.3		

図9 H23年度(中学2年生の問11)、H22年度(中学2年生の問10)正答率の経年比較

中学2年生が英語で自分の考えや気持ちを書く問題である。平成23年度は「十分達成」の基準を上回った。文の数の条件が異なるために単純に比較はできないが、平成22年度と比較しても県正答率が上昇している。なお、無解答率が下がったのは、文の条件が異なるためであって、定着の差がつかなくなったとは言えない。図8と図9から、まとまった英文を書く力は、中学2年生と中学3年生ともに少しずつ身に付いてきていると言える。

②英語の質問に簡単な英語で答える問題

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
H23 問9(2)	質問の内容を理解し、質問の答えを適切な表現を用いて書くこと。 (記述式)	“What do you do in your free time?”という質問に、3語以上の英文を書く。	44.1	21.4	65.0	45.0
H22 問8(2)			40.1	22.3		

図10 H23年度(中学3年生問9(2))、H22年度(中学2年生問8(2))正答率の経年比較

中学3年生が英語の質問に簡単な英語で答える問題である。平成22・23年度共に「おおむね達成」の基準を上回っている。しかし、平成22年度と比較して、県正答率が上昇している。

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	県正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
H23 問9(1)	自分の伝えたいことを適切な表現を用いて書くこと。 (記述式)	canを使って自分ができていることを表現する英文を書く。	74.4	6.7	65.0	45.0
H22 問8(1)			71.5	7.0		

図11 H23年度(中学2年生問9(1))、H22年度(中学2年生問8(1))正答率の経年比較

中学2年生がcanを使って自分ができていることを英語で答える問題である。平成22・23年度共に「十分達成」の基準を上回っている。また、正答率が2.9ポイント上昇している。

図10と図11から、英語の質問に簡単な英語で答える力も少しずつ身に付いてきていると言える。
以上のことから、「書くこと」については「要努力」の生徒が少なくなり、まとまった英文や簡単な英文などを書く力が少しずつ身に付いてきたと考えられる。

ウ 設問ごとに見た傾向と指導法改善の手立て

今年度の調査で、正答率が低かった問題について、「正しい語順」、「簡単な自己表現」及び「概要の読み取り」について分析を行った。

傾向1 **正しい語順で書くことに課題がある。**

[中学2年生 大問10の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	原正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
大問10 (1)	適切な表現を正しい語順で書く。 (記述式)	"What [you/do/like/sport]?"を正しく並べ替える。	22.5	1.7	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は22.5であり、27.5ポイント下回った。前年度調査の同趣旨の問題(Which bag is yours?の並べ替え)も「おおむね達成」の期待正答率50.0を下回っており(正答率44.1)、改善が必要である。中学1年生では全ての疑問詞を一通り学習するが、知識として疑問詞の意味は知っているが、普段の授業で実際に使う場面が不足しているために、定着していないと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

定着を図るために、何度も口頭練習を繰り返して定着を図る方法が一つあるが、“What color do you like?”と“What do you do after school?”を使い分ける力を身に付けるには、普段の授業で実際に使う場面を設定する必要がある。例えば“What am I?”ゲームなど、質問が出しやすい言語活動が効果的である。ただし、聞いたり話したりする言語活動だけでは、正しい語順を意識させることは難しい。そこで、質問することをノートやワークシートに書く活動を一つ取り入れると、定着しやすいと思われる。

[中学3年生 大問8の(3)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	原正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
大問8 (3)	適切な表現を正しい語順で書く。 (記述式)	"I'll [a/her/bag/give]." "を正しく並べ替える。	45.1	3.4	70.0	50.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率50.0に対して、正答率は45.1であり、4.9ポイント下回った。教科書では“Show (Give) me your ~.”など命令文で取り扱われることが多いため、「主語＋動詞＋間接目的語＋名詞」という文構造は定着に時間が掛かる。

○ 指導法改善の手立て

この文構造を新出文法事項として導入するときは、命令文で取り扱うことが有効である。しかし、“I'll show you my picture.”や“I'll tell you an interesting story.”などIから始まることも多いため、既習文法として復習することができるように、スピーチ原稿などで使うように仕組むことが大切である。

傾向2 **自分の気持ちや考えを条件に即して簡単な英語で書くことには課題がある。**

[中学2年生 大問9の(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	原正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
大問9 (2)	自分の伝えたいことを適切な表現を用いて書く。 (記述式)	週末にしたことをIから始まる英文で書く。	41.6	16.5	60.0	40.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して、正答率は41.6であり、1.6ポイント上回った。前年度調査の同趣旨の問題(昨日したことをIから始まる英文で書く)も「おおむね達成」の期待正答率45.0を下回っており(正答率41.3)、改善が必要である。過去形は中学1年生の3学期に学習することが多く、現在進行形を学習する時期と重なるため、定着に時間が掛かることが原因の1つと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

動詞の形については、定着に時間が掛かるため、関連のある文法事項はまとまりをもって整理する必要がある。

る。例えば、過去形の指導の後に、現在形と関連付けて時制として整理する方法がある。具体的な活動としては、「一日の生活」というテーマで“I get to school at eight.”など現在形で書かせた後に、その英文を使って「昨日一日の生活」というテーマで書かせる指導を行う。このときに、教師から説明をするのではなく、生徒同士のペア活動を行い、生徒に気付かせる活動にすることが大切である。

[中学3年生 大問9の(1)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	不正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
大問9 (1)	質問の内容を理解し、答えを適切な表現を用いて書く。 (記述式)	“What are you going to do during summer vacation?”に3語以上の英文で答える。	38.2	24.5	60.0	40.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率40.0に対して、正答率は38.2であり、1.8ポイント下回った。中学2年生の1学期に学習することが多く、その後の言語活動で実際に使用する場面がないために定着に時間が掛かると思われる。

○ 指導法改善の手立て

未来形は中学2年生の1学期に学習することが多い。実際の授業では、夏休みの予定について英語でスピーチする言語活動がよく行われている。大切なことは、この後でも、未来形を含む英文を実際に使う場面を設定することである。例えば、「将来の夢」、「私の住む町」、「私の好きなもの」など自分のことを英語でスピーチしたり書いたりする言語活動を行うときに、“I’m going to talk about …”から始めるようにするだけでも定着しやすくなる。また、ALTが授業に参加するときには、授業冒頭のフリートークで“What are you going to do during winter vacation?”などの質問を取り入れるなどして、使用場を増やすことが必要である。

傾向3 **前後の文脈を捉えて、対話の流れや概要を理解する問題に課題がある。**

[中学3年生 大問5の(1)(2)]

○ 問題の概要

	出題のねらい (出題方法)	設問の内容	不正答率	無解答率	十分達成	おおむね達成
大問5 (1)	対話文を読んで、具体的なことがらを読み取る。 (選択式)	先生が指示した次の集合時間と場所を読み取る。	47.2	0.4	65.0	45.0
大問5 (2)	手紙を読んで、あらすじを読み取る。 (選択式)	日記に書いてある順番に絵を並べ替える。	23.5	0.4	65.0	45.0

○ 解答状況

「おおむね達成」の期待正答率45.0に対し正答率は、大問5(1)が47.2で2.2ポイント上回り、大問5(2)が23.5で21.5ポイント下回った。大問5(1)は場所を示す英文“We’ll meet here.”のhereがどこかを正しく理解していないことと、時間を示す英文“It’s one o’clock now.”と“you have free time for three hours.”を統合して集合時刻が4時だという理解ができないことが原因である。また、大問5(2)は“I went to the park with my dog after lunch.”という英文で、前後の文脈を捉えて、昼食と公園に行くのはどちらが先か理解できていないことが原因の1つと考えられる。

○ 指導法改善の手立て

一文一文を丁寧に読み取っていく指導が必要な場面はあるが、不要な情報も含めたたくさんの情報の中から、自分に必要な情報だけをつなげて統合し、判断する場面もある。教科書の本文を指導するときには、全ての英文を一文一文訳するのではなく、概要を読み取る程度に留めた指導も必要である。

エ これからの指導に向けて

来年度から英語の授業が週3時間から4時間に増加する。指導すべき文法事項等は従来のものであることから、コミュニケーション能力の育成を目指した言語活動の充実が今まで以上に求められる。指導に当たっては、増えた1時間を全て文法のまとめに使うのではなく、ドリル的な口頭練習で終わっていた新出表現をスピーチ活動などの発展学習に使うようにしたい。そこで、次の3点に留意してこれからの指導を行う必要がある。

(ア) Iで始まる英文を書く指導

中学生の段階では、自分のことをどれだけ表現できるかが大切である。したがって、新しい表現を学習したときには、それを使ったIで始まる英作文を書かせる指導が必要である。また、英文の量は、初めの時間は1文でよいが、次の時間には接続詞but, becauseなどを使って2文にするとよい。例えば、“I got up at seven in the morning, but I usually get up at six thirty.”のように、過去形の英文を1文加える指導を行えば、現在形と過去形の動詞の形に着目させることができる。また、佐賀県教育センターの「[中学校英語科プロジェクト研究](#)」では、生徒に書かせる英文のテーマについて紹介されており、参考になる。

(イ) 使いながら文法の定着を図る指導

三単現のSという文法事項は英語教師でも不正確なときがある。実際の会話では、“John usually come here, uh, he usually comes here...”と使いながら自己修正することが多い。生徒たちも同じで、家族や好きなものをクラスの友達に紹介するときに、実際に使いながら自己修正をして三単現のSを学習することが望ましい。指導に当たっては、文法用語の解説や用法の区別などには最小限に留め、言語活動を通して定着を図ることが重要である。

(ウ) 概要を読み取る指導

ある程度まとまった長さの英文を読んで、大切な部分などを正確に読み取る力が求められている。指導に当たっては、一語一語の意味や一文一文の解釈などに多くの時間を掛けるのではなく、書き手の伝えようすることを正確に読み取ることに焦点を絞る必要がある。例えば、対話文であれば、登場人物を確認したり、時間の流れで区切って読んだりするなど、正確な読み取りのための配慮が必要である。

(エ) 「聞くこと」から「読むこと」「書くこと」への連結

聞く力を付ける指導に関しては、中学2年生及び中学3年生のどちらも「十分達成」の基準を上回っている。しかし、実生活では聞くことだけで完結する場面は少なく、聞いたことを基に自分の考えや思いを相手に伝える、いわゆるコミュニケーションを求められる場面が多い。このことを踏まえ、聞いた情報をメモなどに取り、それを自分の言葉に書き直して他の人に伝えるような言語活動を行い、「聞くこと」を基に「読むこと」や「書くこと」の力を高める必要がある。

オ 授業実践に参考となるリンク



最終更新日：2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

IV 意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

児童生徒意識調査の分析に当たっては、第 I 章の調査内容の中で述べたように「学校生活」「学習動機」「学習活動(教科全般)」「家庭学習」「生活習慣等」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られるおおまかな傾向
- ② 小学5年から中学3年までの5学年を通じた比較
- ③ 同一学年での定点比較(昨年度の小学6年と今年度の小学6年というような比較)
- ④ 回答状況と正答率との関連

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、「回答状況と正答率との関連」を見る関係上、各学年において全教科(小学5年、小学6年は4教科、中学1年は4教科、中学2年、中学3年は5教科)のペーパーテストを受検した児童生徒のデータを、有効回答としている。各学年の有効回答者数と有効回答者率は、下記のとおりである。

	有効回答者数	全回答者数	有効回答者率
小学5年	8,090人	8,410人	96.2%
小学6年	8,121人	8,506人	95.5%
中学1年	7,990人	8,197人	97.5%
中学2年	7,891人	8,213人	96.1%
中学3年	7,751人	8,144人	95.2%

- (2) 本章で記述する「正答率」については、有効回答者の全教科(小学5年、小学6年は4教科、中学1年は4教科、中学2年、3年は5教科)の平均正答率を用いた。
- (3) 「回答状況と正答率との関連」について記述については、それぞれの回答選択肢を選択した児童生徒全員の正答率の平均を求めて比較した。選択肢の回答状況によりそれぞれの回答選択肢を選択した児童生徒数は異なるため、児童生徒数が極めて少ない回答選択肢については、その正答率を比較することが適切でない場合も考えられる。このような場合については、その旨を文中に記した。

3 意識調査質問項目の構成

ア 質問項目の構成

- (ア) 学校生活
- (イ) 学習動機
- (ウ) 学習活動(教科全般)
- (エ) 学習活動(各教科)
- (オ) 家庭学習
- (カ) 生活習慣等

質問項目とそれぞれの設問との関係は以下の表のとおりである。

質問項目		小学校 [全45問]	中学校 [全48問]
(ア) 学校生活		1・2・3・4	1・2・3・4
(イ) 学習動機		5・18(ア・イ・ウ・エ)・ 20(ア・イ・ウ・エ)・35・ 36	5・18(ア・イ・ウ・エ・ オ)・20(ア・イ・ウ・エ・ オ)・38・39 ※18(オ)・20(オ)は中2・3のみ
(ウ) 学習活動 (教科全般)		15・16・17	15・16・17
(エ) 学習活動 (各教科)	国語	19ア・22・23・24・25	19ア・22・23・24・25
	社会	19イ・26・27・28	19イ・26・27・28
	算数 数学	19ウ・29・30・31	19ウ・29・30・31
	理科	19エ・32・33・34	19エ・32・33・34
	英語		19オ・35・36・37 ※中2・3のみ
(カ) 家庭学習		6・7・8・9・10・11・ 12・13・14	6・7・8・9・10・11・ 12・13・14
(ク) 生活習慣等		21・37・38・39・40・41・ 42・43・44・45	21・40・41・42・43・44・ 45・46・47・48

イ 質問の意図

(ア) 学校生活

学校生活の楽しさ、好きな授業の有無などについて問うことにより、児童生徒の学校生活の実態を把握する。

(イ) 学習動機

勉強に対する興味や有用性、将来の夢や目標の有無について問うことにより、学習動機の高さについての実態を把握する。

(ウ) 学習活動(教科全般)

自分の考えを発表する機会や児童生徒の間で話し合う活動の頻度、自分の考えの表現に対する抵抗感について問うことにより、児童生徒の学習活動全般の実態について把握する。

(エ) 学習活動(各教科)

各教科の内容の理解度についての自己評価、各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての児童生徒の興味・関心・意欲・態度について問うことにより、それぞれの教科についての学習活動の実態について把握する。

(カ) 家庭学習

授業以外の勉強時間や勉強の内容、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学習方法全般について問うことにより、児童生徒の家庭学習の実態について把握する。

(ク) 生活習慣等

読書時間、テレビやゲームなどの時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、地域における行事などへの参加の頻度などについて問うことにより、児童生徒の家庭における生活習慣の実態について把握する。

教師意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

教師意識調査の分析に当たっては、第Ⅰ章の調査内容の中で述べたように「教科全般における指導法の工夫」「学習環境の活用」「家庭学習への関与状況」「教師の指導観」「学校組織マネジメントに対する意識」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られる全体的な傾向
- ② 学校スコアによるグループ比較

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、昨年度、小学校第4学年、小学校第5学年、小学校第6学年、中学校第1学年、中学校2学年を担当した教師の3月調査での回答を用いている。回答者数は、下記のとおりである。

回答者数

小学校	1234人
中学校	967人

- (2) 教師意識調査の回答選択肢を指導の頻度や内容に応じて点数化し、各学校の有効回答者の平均を求めたものを学校スコアとしている。詳細は第Ⅰ章の注を参照していただきたい。
- (3) 指導状況の違いを明らかにするために、各設問ごとに小、中学校の学校スコア上位四分の一の学校群をAグループ、下位四分の一の学校群をBグループとして、グループにおける平均正答率の状況を比較した。基本的にAグループがその指導が多く行われている(又は、意識が高い)学校群、Bグループがその指導があまり行われていない(又は、意識があまり高くない)学校群となっている。

3 意識調査質問項目の構成

ア 質問項目の構成

カテゴリ	小学校	中学校
(ア) 家庭学習への関与状況	設問2～6	設問2～6
(イ) 学習環境の活用	設問7～10	設問7～10
(ウ) 教科等全般における指導法の工夫	設問11～19	設問11～19
(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫	設問20～29	設問20～31
(オ) 教師の指導観	設問30～33	設問32～35
(カ) 学校組織マネジメントに対する意識	設問34～36	設問36～38

イ 質問の意図

(ア) 家庭学習への関与状況

宿題を出している頻度ならびに出している宿題の質(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を把握する。

(イ) 学習環境の活用

授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度とその活用内容を把握する。

(ウ) 教科等全般における指導法の工夫

発展的な課題を取り入れた授業の実施状況、理解が十分でない児童生徒に対する授業外での対応状況、書いて表現する活動や話し合い活動を取り入れた授業の実施(教科の授業・総合的な学習の時間)、身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導、学習方法についての指導状況、学習形態の工夫、目標や評価規準を明確にした授業の実施について問うことにより、発展的学習・補充的指導・表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習方法の指導、学習形態の工夫、目標を明確にした指導などの状況を把握する。

(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫

国語における言語活動、読書指導、社会における調査学習を生かした発表・討論、算数・数学における算数

(数学)的活動、問題解決的な学習、理科における見通しをもった観察や実験とそのまとめ、英語におけるコミュニケーション能力を高める指導や書く活動などについて問うことにより、各教科の特性に応じた指導法の工夫の状況を把握する。

(オ) 教師の指導観

教師の指導行動を主に、課題達成の意識、集団維持の意識の2点から問うことにより、教師の指導観と正答率に及ぼす影響を分析する。

(カ) 学校組織マネジメントに対する意識

教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気について問うことにより、学校組織マネジメントが児童生徒の正答率や児童生徒の学習に対する意識に及ぼす影響を把握する。

最終更新日: 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

IV 意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

児童生徒意識調査の分析に当たっては、第I章の調査内容の中で述べたように「学校生活」「学習動機」「学習活動(教科全般)」「家庭学習」「生活習慣等」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られるおおまかな傾向
- ② 小学5年から中学3年までの5学年を通じた比較
- ③ 同一学年での定点比較(昨年度の小学6年と今年度の小学6年というような比較)
- ④ 回答状況と正答率との関連

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、「回答状況と正答率との関連」を見る関係上、各学年において全教科(小学5年、小学6年は4教科、中学1年は4教科、中学2年、中学3年は5教科)のペーパーテストを受検した児童生徒のデータを、有効回答としている。各学年の有効回答者数と有効回答者率は、下記のとおりである。

	有効回答者数	全回答者数	有効回答者率
小学5年	8,090人	8,410人	96.2%
小学6年	8,121人	8,506人	95.5%
中学1年	7,990人	8,197人	97.5%
中学2年	7,891人	8,213人	96.1%
中学3年	7,751人	8,144人	95.2%

- (2) 本章で記述する「正答率」については、有効回答者の全教科(小学5年、小学6年は4教科、中学1年は4教科、中学2年、3年は5教科)の平均正答率を用いた。
- (3) 「回答状況と正答率との関連」について記述については、それぞれの回答選択肢を選択した児童生徒全員の正答率の平均を求めて比較した。選択肢の回答状況によりそれぞれの回答選択肢を選択した児童生徒数は異なるため、児童生徒数が極めて少ない回答選択肢については、その正答率を比較することが適切でない場合も考えられる。このような場合については、その旨を文中に記した。

3 意識調査質問項目の構成

ア 質問項目の構成

- (ア) 学校生活
- (イ) 学習動機
- (ウ) 学習活動(教科全般)
- (エ) 学習活動(各教科)
- (オ) 家庭学習
- (カ) 生活習慣等

質問項目とそれぞれの設問との関係は以下の表のとおりである。

質問項目		小学校 [全45問]	中学校 [全48問]
(ア) 学校生活		1・2・3・4	1・2・3・4
(イ) 学習動機		5・18(ア・イ・ウ・エ)・ 20(ア・イ・ウ・エ)・35・ 36	5・18(ア・イ・ウ・エ・ オ)・20(ア・イ・ウ・エ・ オ)・38・39 ※18(オ)・20(オ)は中2・3のみ
(ウ) 学習活動 (教科全般)		15・16・17	15・16・17
(エ) 学習活動 (各教科)	国語	19ア・22・23・24・25	19ア・22・23・24・25
	社会	19イ・26・27・28	19イ・26・27・28
	算数 数学	19ウ・29・30・31	19ウ・29・30・31
	理科	19エ・32・33・34	19エ・32・33・34
	英語		19オ・35・36・37 ※中2・3のみ
(カ) 家庭学習		6・7・8・9・10・11・ 12・13・14	6・7・8・9・10・11・ 12・13・14
(ク) 生活習慣等		21・37・38・39・40・41・ 42・43・44・45	21・40・41・42・43・44・ 45・46・47・48

イ 質問の意図

(ア) 学校生活

学校生活の楽しさ、好きな授業の有無などについて問うことにより、児童生徒の学校生活の実態を把握する。

(イ) 学習動機

勉強に対する興味や有用性、将来の夢や目標の有無について問うことにより、学習動機の高さについての実態を把握する。

(ウ) 学習活動(教科全般)

自分の考えを発表する機会や児童生徒の間で話し合う活動の頻度、自分の考えの表現に対する抵抗感について問うことにより、児童生徒の学習活動全般の実態について把握する。

(エ) 学習活動(各教科)

各教科の内容の理解度についての自己評価、各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての児童生徒の興味・関心・意欲・態度について問うことにより、それぞれの教科についての学習活動の実態について把握する。

(カ) 家庭学習

授業以外の勉強時間や勉強の内容、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学習方法全般について問うことにより、児童生徒の家庭学習の実態について把握する。

(ク) 生活習慣等

読書時間、テレビやゲームなどの時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、地域における行事などへの参加の頻度などについて問うことにより、児童生徒の家庭における生活習慣の実態について把握する。

教師意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

教師意識調査の分析に当たっては、第Ⅰ章の調査内容の中で述べたように「教科全般における指導法の工夫」「学習環境の活用」「家庭学習への関与状況」「教師の指導観」「学校組織マネジメントに対する意識」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られる全体的な傾向
- ② 学校スコアによるグループ比較

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、昨年度、小学校第4学年、小学校第5学年、小学校第6学年、中学校第1学年、中学校2学年を担当した教師の3月調査での回答を用いている。回答者数は、下記のとおりである。

回答者数

小学校	1234人
中学校	967人

- (2) 教師意識調査の回答選択肢を指導の頻度や内容に応じて点数化し、各学校の有効回答者の平均を求めたものを学校スコアとしている。詳細は第Ⅰ章の注を参照していただきたい。
- (3) 指導状況の違いを明らかにするために、各設問ごとに小、中学校の学校スコア上位四分の一の学校群をAグループ、下位四分の一の学校群をBグループとして、グループにおける平均正答率の状況を比較した。基本的にAグループがその指導が多く行われている(又は、意識が高い)学校群、Bグループがその指導があまり行われていない(又は、意識があまり高くない)学校群となっている。

3 意識調査質問項目の構成

ア 質問項目の構成

カテゴリ	小学校	中学校
(ア) 家庭学習への関与状況	設問2～6	設問2～6
(イ) 学習環境の活用	設問7～10	設問7～10
(ウ) 教科等全般における指導法の工夫	設問11～19	設問11～19
(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫	設問20～29	設問20～31
(オ) 教師の指導観	設問30～33	設問32～35
(カ) 学校組織マネジメントに対する意識	設問34～36	設問36～38

イ 質問の意図

(ア) 家庭学習への関与状況

宿題を出している頻度ならびに出している宿題の質(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を把握する。

(イ) 学習環境の活用

授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度とその活用内容を把握する。

(ウ) 教科等全般における指導法の工夫

発展的な課題を取り入れた授業の実施状況、理解が十分でない児童生徒に対する授業外での対応状況、書いて表現する活動や話し合い活動を取り入れた授業の実施(教科の授業・総合的な学習の時間)、身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導、学習方法についての指導状況、学習形態の工夫、目標や評価規準を明確にした授業の実施について問うことにより、発展的学習・補充的指導・表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習方法の指導、学習形態の工夫、目標を明確にした指導などの状況を把握する。

(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫

国語における言語活動、読書指導、社会における調査学習を生かした発表・討論、算数・数学における算数

(数学)的活動、問題解決的な学習、理科における見通しをもった観察や実験とそのまとめ、英語におけるコミュニケーション能力を高める指導や書く活動などについて問うことにより、各教科の特性に応じた指導法の工夫の状況を把握する。

(オ) 教師の指導観

教師の指導行動を主に、課題達成の意識、集団維持の意識の2点から問うことにより、教師の指導観と正答率に及ぼす影響を分析する。

(カ) 学校組織マネジメントに対する意識

教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気について問うことにより、学校組織マネジメントが児童生徒の正答率や児童生徒の学習に対する意識に及ぼす影響を把握する。

最終更新日：2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

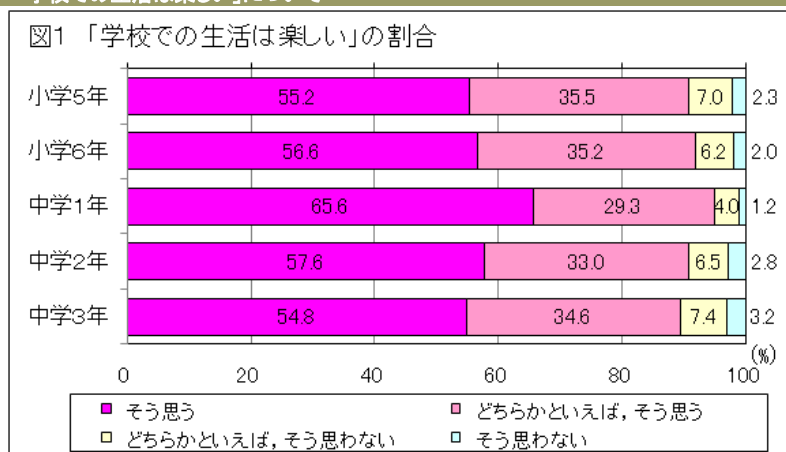
児童生徒意識調査の全てのグラフ

1 学校生活

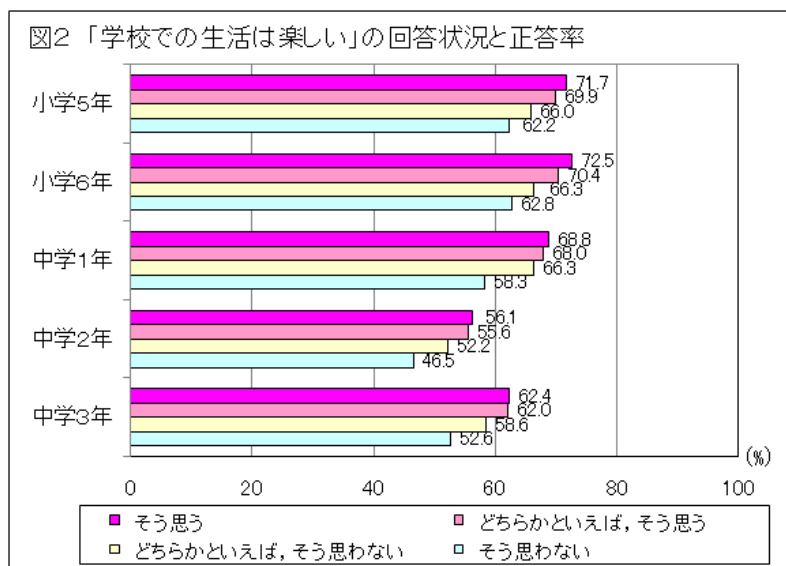
- 「学校での生活は楽しい」及び「学校で落ち着いて勉強することができる」と感じている児童生徒の割合は、小学校、中学校ともに全体の約9割である。[図1]
- 全ての学年において、「学校は楽しい」、「落ち着いて勉強することができる」、「好きな授業がある」と回答している児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図2][図4][図6]
- 学年が上がるごとに、「好きな授業がある」と回答した児童生徒の割合が低くなることについては、その要因を探り、改善を図っていくことが大切である。[図5]

ここでは、児童生徒の学校生活についての調査結果を述べる。具体的には、学校生活の楽しさや学習状況の設問について分析した。

ア 「学校での生活は楽しい」について

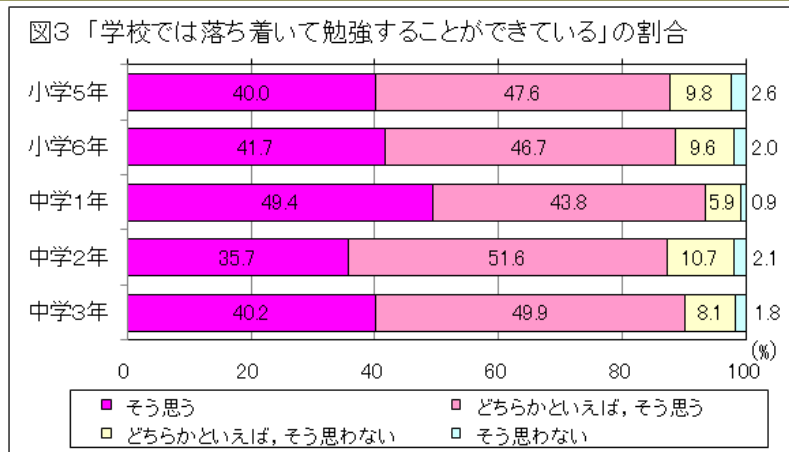


「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年55.2%、小学6年56.6%、中学1年65.6%、中学2年57.6%、中学3年54.8%となっている。「どちらかといえばそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学生、中学生ともに、どの学年も約9割となっている。特に、中学1年では94.9%と最も高い割合である。[図1]

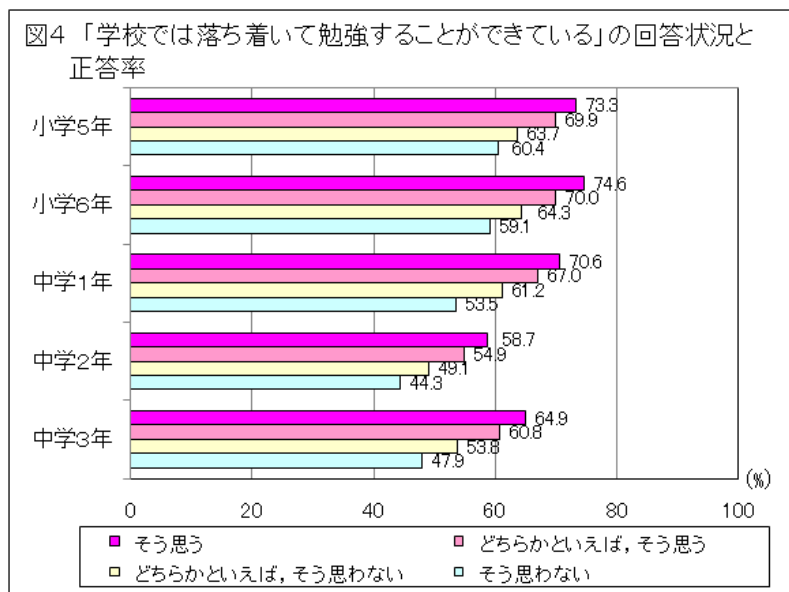


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。学校生活に対して楽しさを感じている児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図2]

イ 「学校では落ち着いて勉強することができる」について

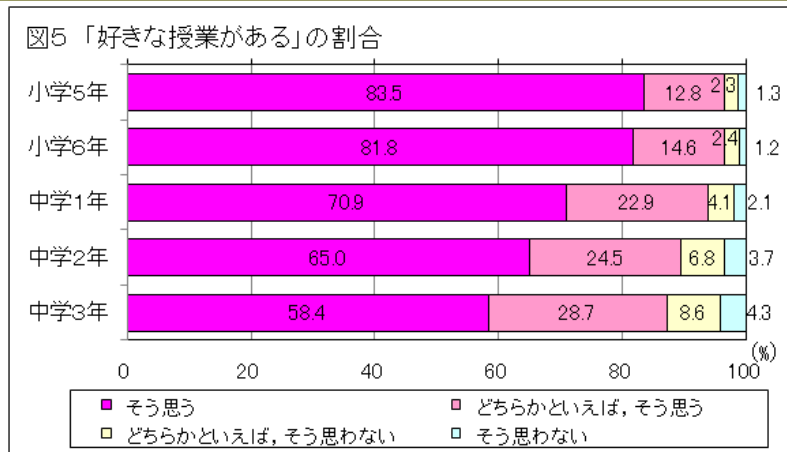


「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年40.0%、小学6年41.7%、中学1年49.4%、中学2年35.7%、中学3年40.2%となっている。「どちらかといえばそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学生、中学生ともにどの学年も、約9割となっている。特に、中学1年では93.2%と最も高い割合である。[図3]

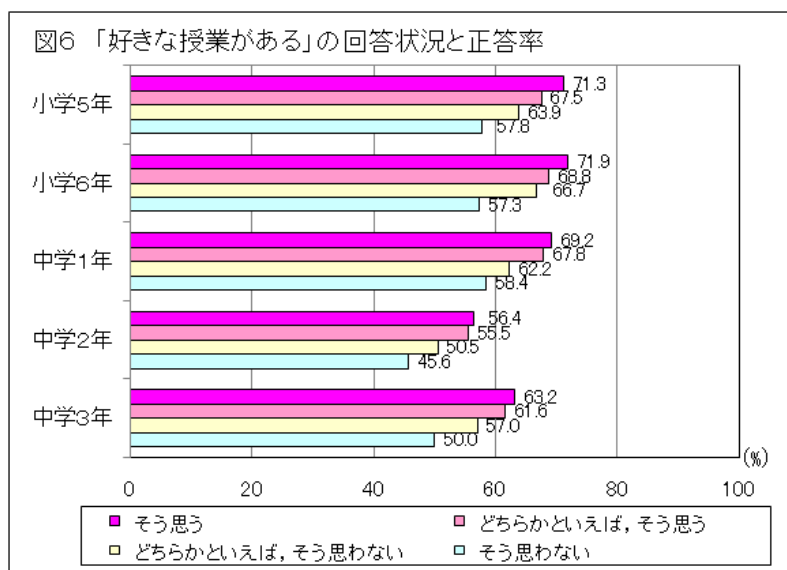


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。落ち着いて勉強することができると感じている児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図4]

ウ 「好きな授業がある」について



「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年83.5%、小学6年81.8%、中学1年70.9%、中学2年65.0%、中学3年58.4%となっている。「どちらかといえばそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校では9割、中学校では8割を上回っているが、学年が上がるにしたがって、その割合が低くなっている。【図5】



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。好きな授業があると感じている児童生徒ほど、平均正答率が高くなる傾向が見られる。【図6】

○ これからの指導に向けて

この3つの調査から、「学校生活の楽しさ」や「落ち着いた学習への取り組み」、「好きな授業があること」と、学力の定着については関係があると考えられる。「学校生活の楽しさ」や「落ち着いた学習への取り組み」において、中学1年で「そう思う」の割合が最も高い数値を示していることについては、入学して間もない生徒の中学校生活への期待感の表れではないかと考えることができる。また、学年が上がるにしたがい、「好きな授業がある」と回答した児童生徒の割合が低くなっていることについては、児童生徒の発達段階や学習内容の違いなど様々な要因が考えられる。しかし、各学年や各教科ごとに課題として受け止め、その要因を探りながら、改善を図っていくことが大切である。小学校と中学校の接続についても、学校区単位での児童生徒に関わる情報交換や授業交流などの小中連携の取り組みを、なお一層進めていくことが重要である。また、落ち着いて学習に取り組むことができる環境を整えることや、そのための指導体制づくりに学校全体で取り組むことが、学力向上に向けての足掛かりとなると考える。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

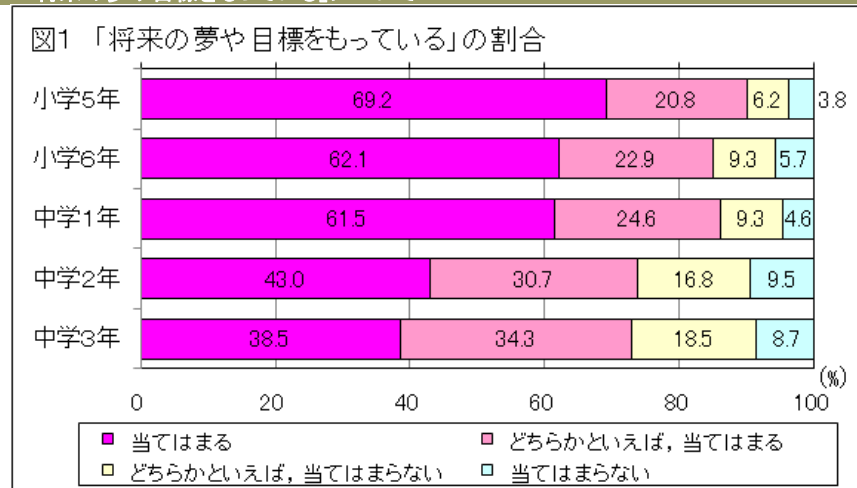
児童生徒意識調査の全てのグラフ

2 学習動機

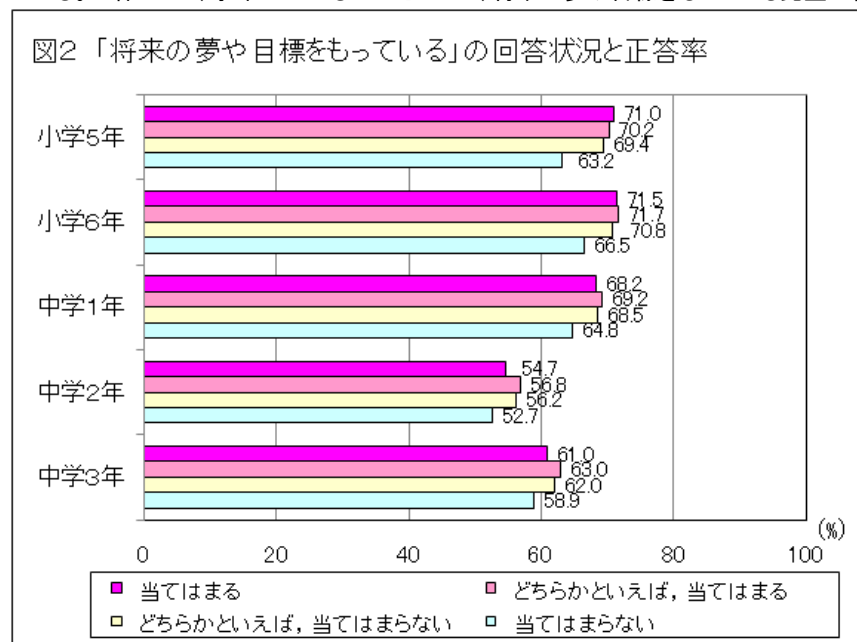
- 「将来の夢や目標をもっている」と回答した児童生徒は、小学校で8割、中学校で7割を超えている。しかし、学年が上がるとその割合が減少していることについては、課題と捉え、その要因を探り、改善に向けて取り組んでいく必要がある。[図1]。

ここでは、「将来の夢や目標をもっているか」という設問を通して、児童生徒の将来に対する意識と全教科平均正答率との関連についての調査結果を述べる。

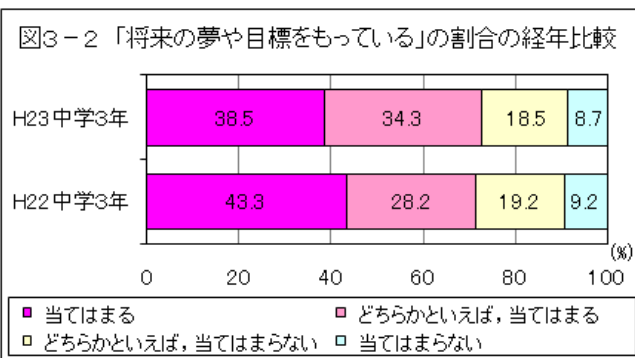
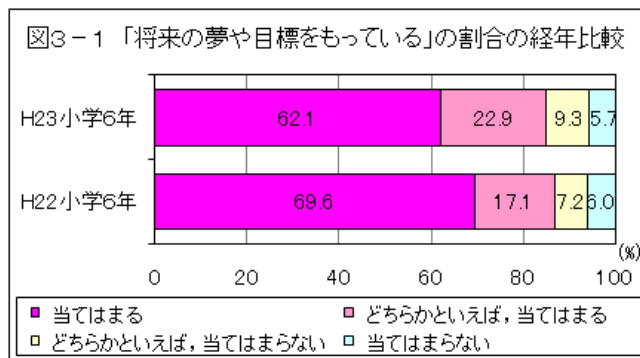
ア 「将来の夢や目標をもっている」について



「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が小学5年69.2%、小学6年62.1%、中学1年61.5%、中学2年43.0%、中学3年38.5%となっている。「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校では8割を、中学校では7割を上回っている。全体として、学年が上がるにしたがって、将来の夢や目標をもっている児童生徒の割合が低くなっている。[図1]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校、中学校において、「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率が最も低くなっている。[図2]



小学6年と中学3年における「当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、平成22年度と比べると、わずかながら減少が見られるが、「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合を合わせて比べると、大きな変化は見られない。[図3-1][図3-2]

○ これからの指導に向けて

「将来の夢をもつ」ということは、自分の将来への見通しをもつことにつながり、児童生徒の学習意欲の向上にも効果が期待できると考えられる。このことから、将来の夢を児童生徒にもたせることは大切である。

従来の特別活動における進路指導に加え、キャリア教育の視点に立った継続的・系統的な指導が必要である。憧れの職業や人物像、目標を達成するための手段など、児童生徒が将来についてより具体的に考えられるようにするとともに、将来について希望がもてるように支援していくことが大切である。また、将来の夢や目標をもつことができても、そのことが、学校で学習していることと直接結び付けづらいために、学習意欲や学力の向上につながらないことも考えられる。児童生徒にとって、学習することが自分の将来に役に立ったり、自分の将来の可能性を広げたりするものであることが実感できるように、支援していくことが大切である。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の全てのグラフ

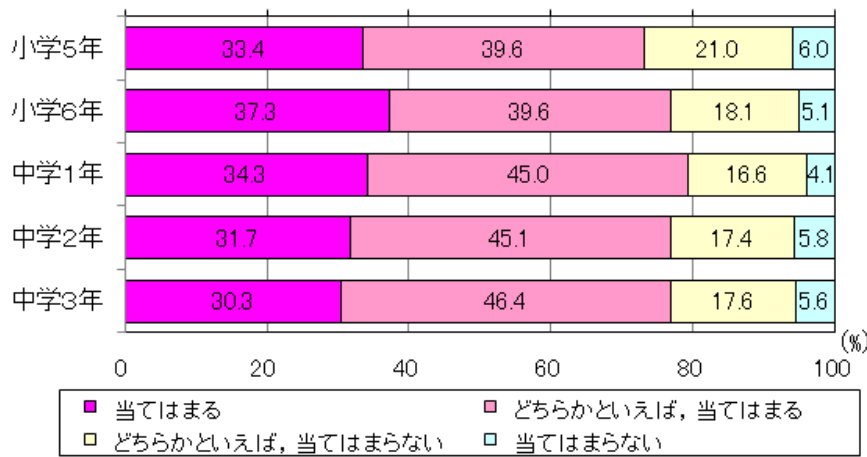
3 学習活動(教科全般)

- 授業で自分の考えを発表する機会が与えられていたり、話し合う活動をよく行っていたりする児童生徒ほど、全教科平均正答率が高くなる傾向が見られる。[図1][図2][図3][図4]
- 「自分の考えを表現することを難しいと思う」児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて、大きくなっている。各授業において自分の考えや意見を表現する場の設定を積極的に行うことや、誰もが意見を言えるような雰囲気づくりをしていくことが大切であるとする。[図5]

ここでは、授業中における「発表の機会があるか」「話し合う活動を行っているか」「他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいか」という設問を通して、児童生徒の授業中における言語活動に関する意識の状況と、教科平均正答率との関連について調査結果を述べる。

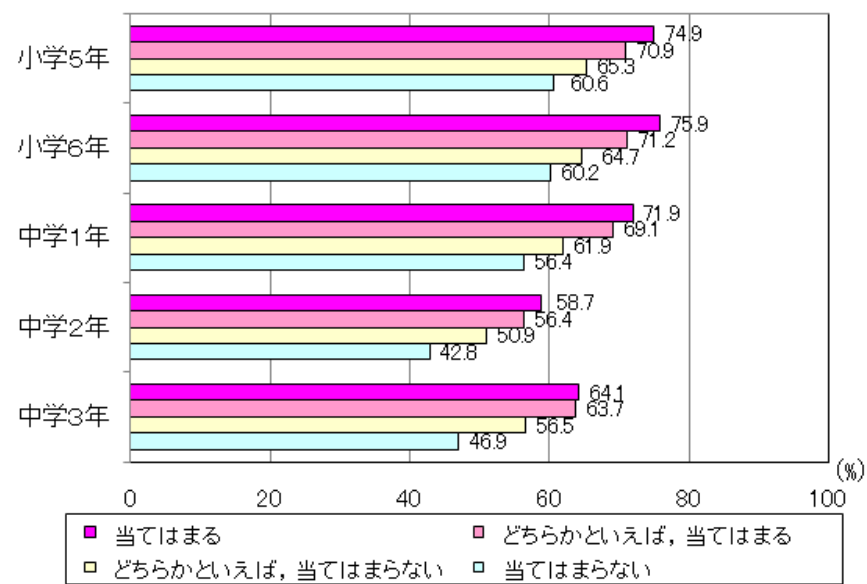
ア 「普段の授業では、自分の考えを発表する機会があたえられていると思う」について

図1 「授業では、自分の考えを発表する機会があると思う」の割合



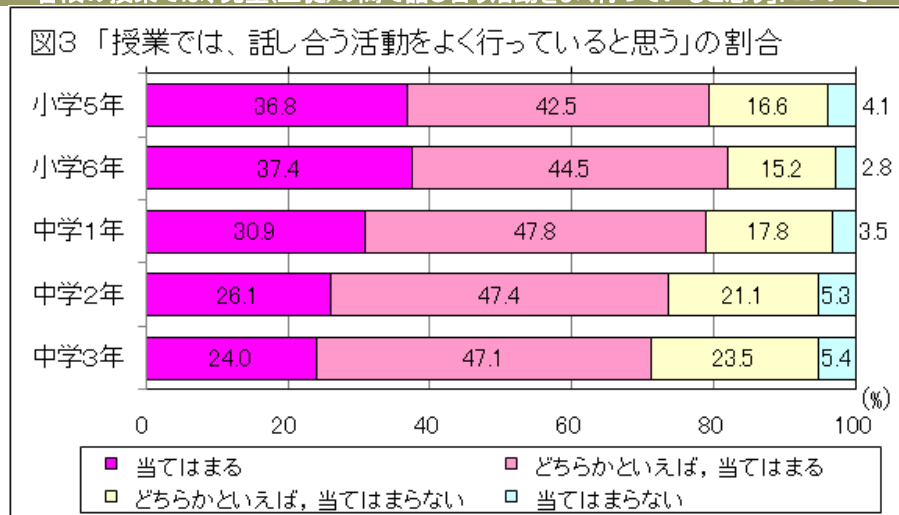
「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が小学5年33.4%、小学6年37.3%、中学1年34.3%、中学2年31.7%、中学3年30.3%になっている。「どちらかという当てはまる」と回答した児童生徒を合わせると、どの学年も7割を上回っている。特に、中学1年では、79.3%と最も高い割合を示している。[図1]

図2 「授業では、自分の考えを発表する機会があると思う」の回答状況と正答率

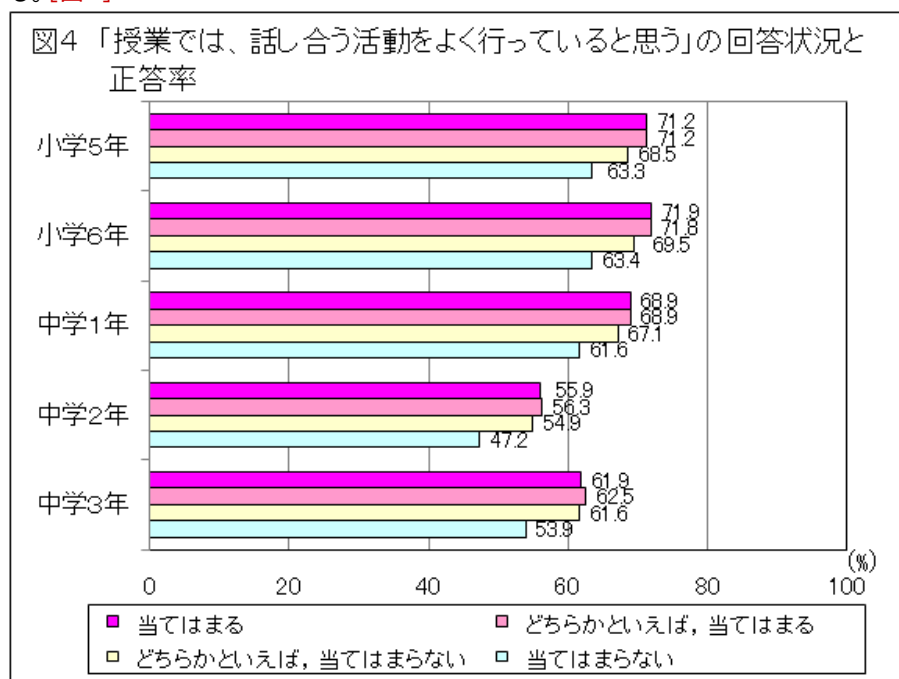


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっており、授業中に発表する機会があたえられていると思っている児童生徒ほど平均正答率が高くなっている。[図2]

イ 「普段の授業では、児童(生徒)の間で話し合う活動をよく行っていると思う」について

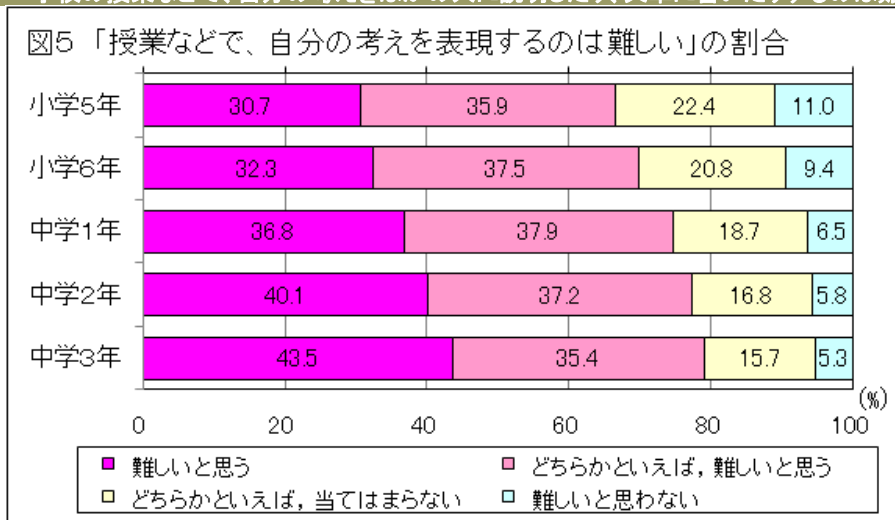


「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が小学5年36.8%、小学6年37.4%、中学1年30.9%、中学2年26.1%、中学3年24.0%となっている。「どちらかという当てはまる」と回答した児童生徒を合わせると、どの学年も7割を上回っており、特に、小学6年では、81.9%と最も高い割合を示している。中学校では学年が上がるにしたがって、その割合が低くなっている。[図3]

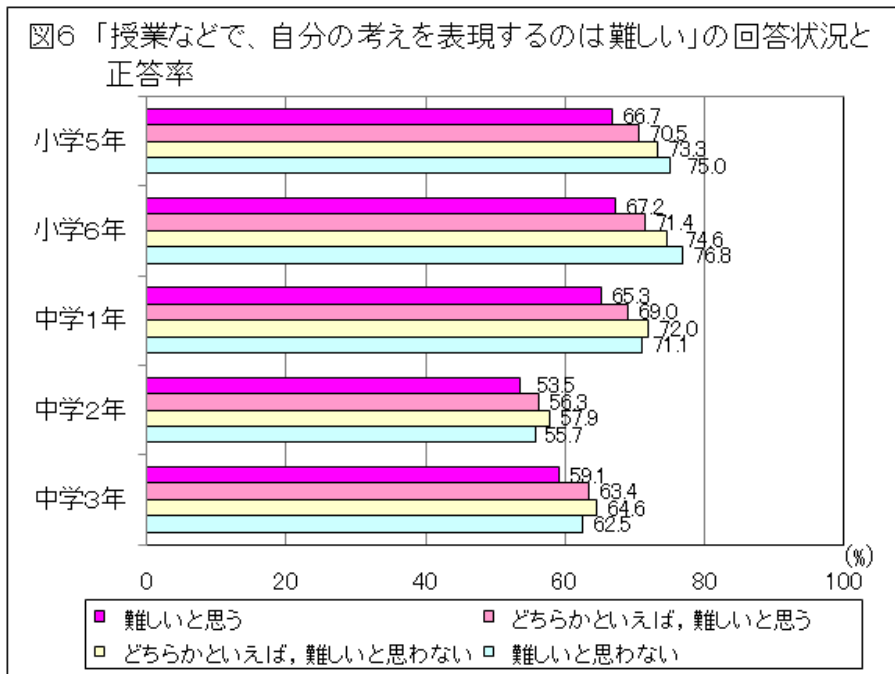


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全体的に全ての学年において、授業でよく話し合う活動を行っていると思っている児童生徒ほど平均正答率が高くなる傾向が見られる。特に、全ての学年に共通して、授業でよく話し合う活動を行っていると思うことに対し、「当てはまらない」と回答している児童生徒の平均正答率は、他の回答をした児童生徒に比べると低くなっている。[図4]

ウ 「学校の授業などで、自分の考えをほかの人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい」について



「難しいと思う」と回答した児童生徒の割合が小学5年30.7%、小学6年32.3%、中学1年36.8%、中学2年40.1%、中学3年43.5%となっている。学年が上がるにしたがって、その割合も増えていく傾向にあり、中学3年においては「どちらかといえば難しい」と回答した生徒を合わせると78.9%と最も高い割合を示している。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「難しいと思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も低く、全体的に自分の考えを表現することを難しいと感じている生徒ほど、平均正答率が低くなる傾向が見られる。[図6]

○ これからの指導に向けて

授業において、児童生徒に発表する機会を設けたり、話し合う活動を取り入れたりすることで、自分の考えや意見を明確にさせることが期待できる。また、自分の考えや意見を話し合う活動によって交流させることは、児童生徒のものの見方や考え方を深めさせたり広げさせたりすることが期待できる。それだけでなく、児童生徒の言語能力や表現力を培う上で、大切なことでもある。授業の中で、教師が機会を捉え、意図的に生徒の意欲を引き出せるような課題を設定したり、獲得した知識・技能が生かせるような表現活動を仕組んだりしていくことが大切である。しかしながら、授業時間数も限られているため、全ての時間にそれらの活動を設定していくことは難しい。そのため、年間指導計画や単元計画を見直していくことも必要である。また、学年が上がるごとに自分の考えを表現することが難しいと思う児童生徒が増えている傾向が見られた。

[図5] その要因としては、学習の内容が難しくなること、小学校から中学校へと学習環境も大きく変わること、思春期の特徴ともいえる周囲を気にして、自分の意見を自信をもって伝えることができなくなることなどが考えられる。そこで、誰もが意見を伝えることができ、間違っても認めてあげられるような支持的な風土づくりやルールづくりをしていくことが、最も重要なことであると考えられる。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

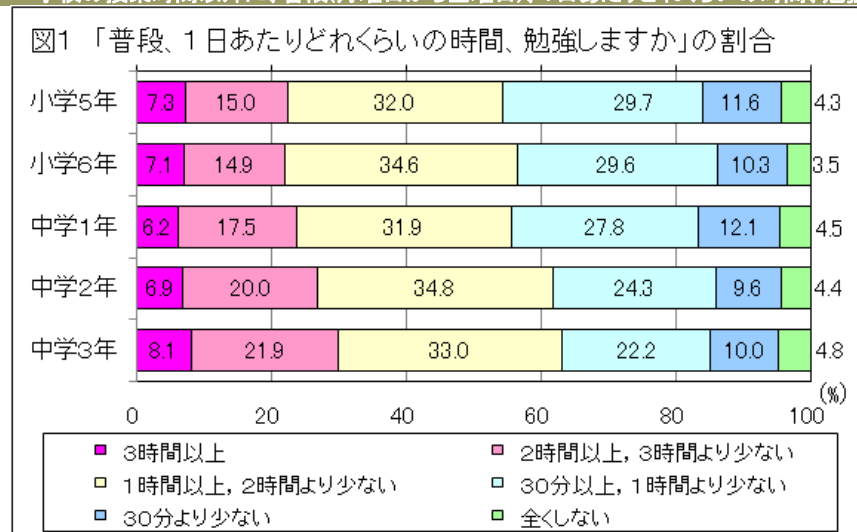
児童生徒意識調査の全てのグラフ

4 家庭学習

- 普段の日(月曜日から金曜日)の1日の学習時間は、学年が上がるごとに増える傾向であるが、「学習時間が1時間より少ない」と回答している児童生徒の割合は、全体的に約4割を占めている。家庭学習の時間が十分でない児童生徒に対し、その改善を図るための取り組みが必要である。[図1]
- 自分で計画を立てて勉強している児童生徒の割合は、小学校に比べて中学校が低くなっている。[図3]
- 学校の授業の復習をしたり、苦手な教科の勉強をしたりしている児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図6][図9]

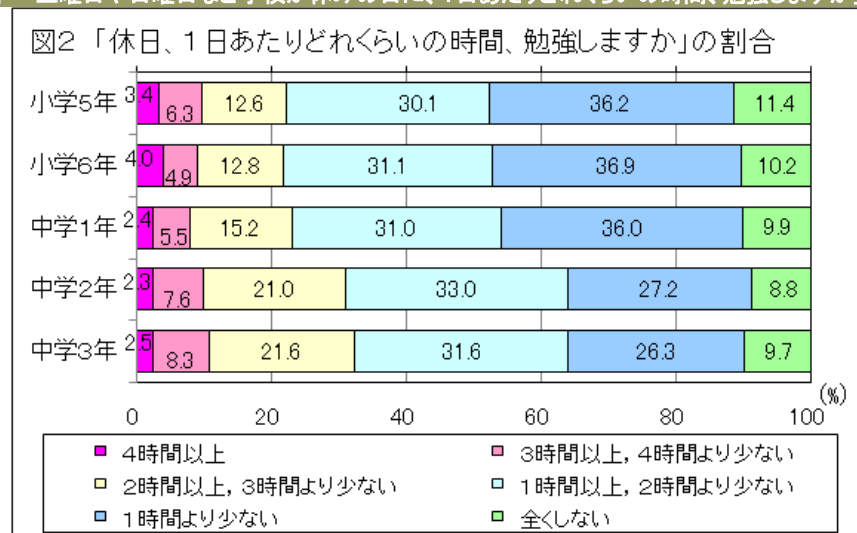
この節では、児童生徒の家庭学習についての調査結果を述べる。具体的には、家庭学習の時間と学習の内容や仕方及び全教科平均正答率との関連について述べる。

ア 「学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」について



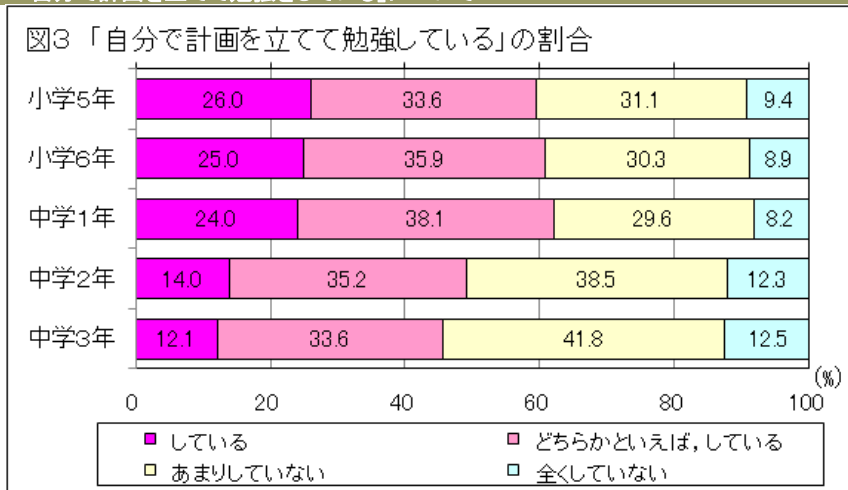
学年が上がるごとに、学習時間は少しずつ増える傾向が見られる。しかし、勉強の時間が1時間より少ないと回答した児童生徒の割合を各学年ごとに見ると、小学5年45.6%、小学6年43.4%、中学1年44.4%、中学2年38.3%、中学3年37.0%であり、全体として家庭での学習が十分であるとは言えない状況である。また、「全く勉強をしない」または「30分より少ない」と回答した児童生徒の割合は、各学年において大きな変化は見られず、約15%という結果になっている。[図1]

イ 「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」について

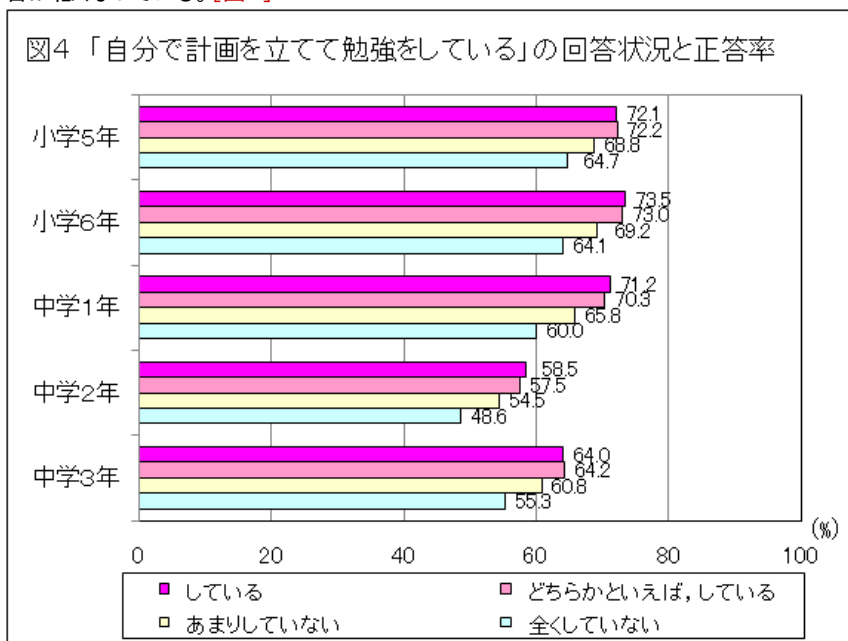


普段の日と同様に、学年が上がるにしたがって、学習時間は少しずつ増える傾向が見られる。また、全ての学年に共通して、「全く勉強をしない」と回答した児童生徒の割合は、約10%という結果になっている。[図2]

ウ 「自分で計画を立てて勉強をしている」について

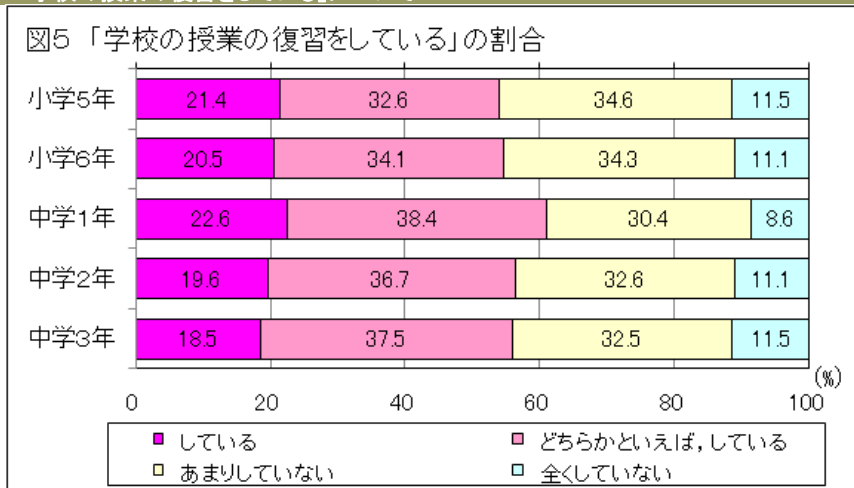


「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、小学5年59.6%、小学6年60.9%、中学1年62.1%、中学2年49.2%、中学3年45.7%である。中学2年と中学3年については、他の学年に比べて、自分で計画を立てて勉強している生徒の割合が低くなっている。[図3]

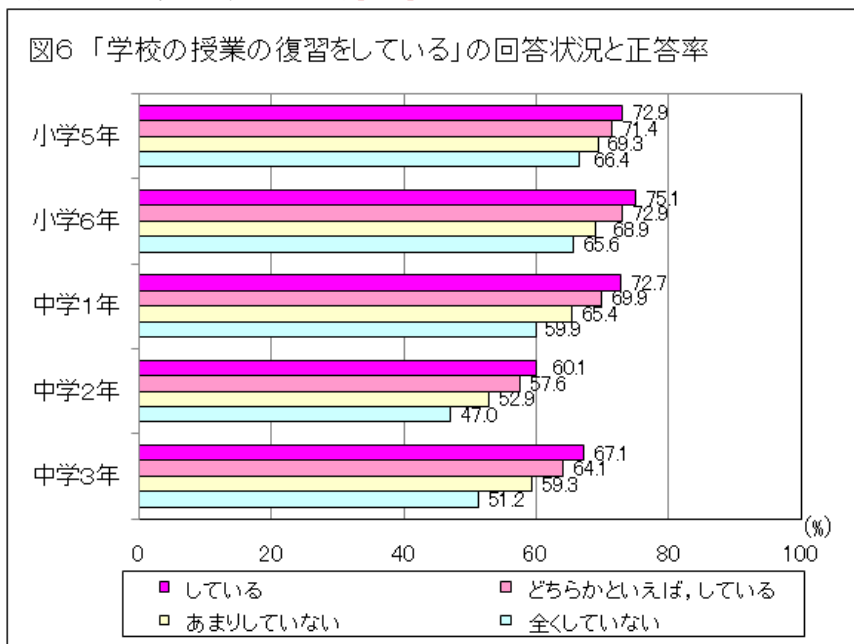


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全体的に自分で計画を立てて勉強している児童生徒ほど、平均正答率が高くなる傾向が見られる。[図4]

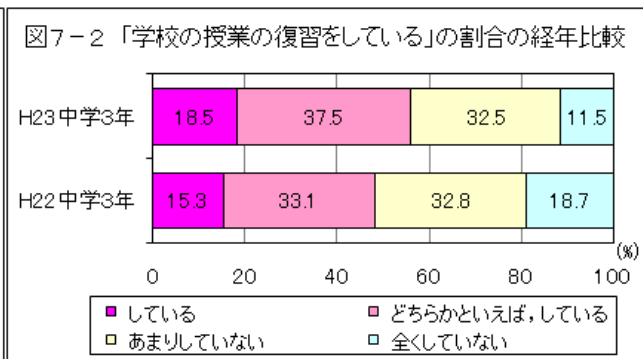
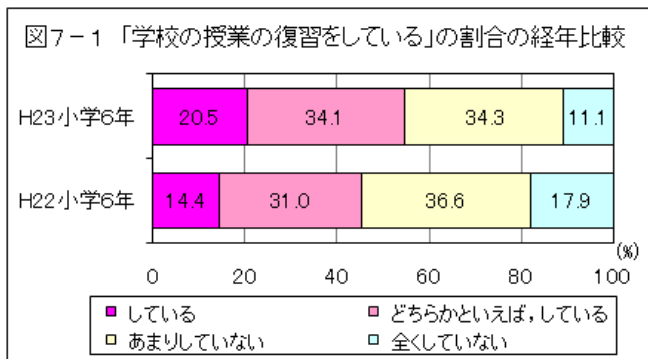
エ 「学校の授業の復習をしている」について



「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、中学1年がわずかに高くなっているが、全体的に各学年を比較して大きな変化は見られない。[図5]

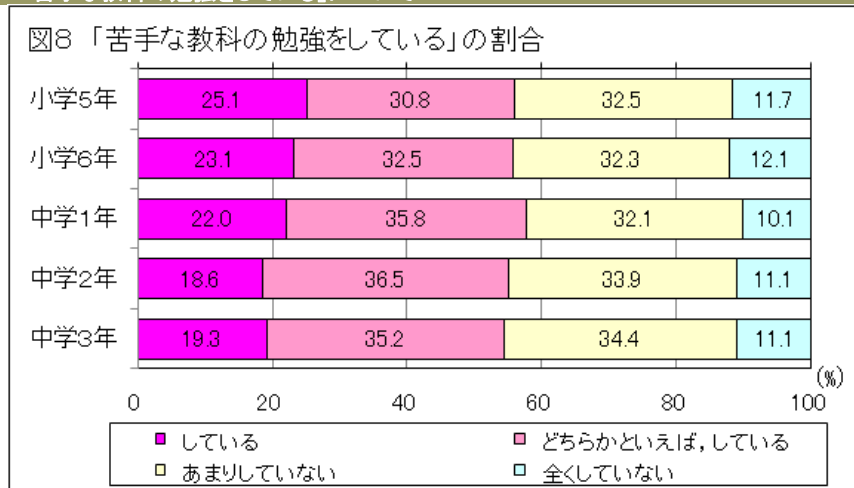


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、学校の授業の復習をしている児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図6]

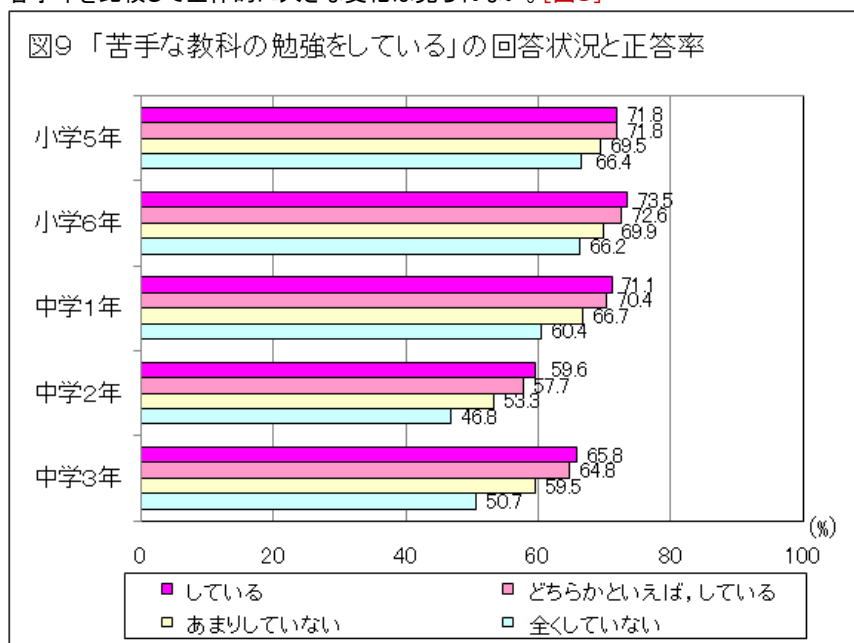


小学6年と中学3年における「学校の授業の復習をしている」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、平成22年度と比べると、ともに高くなっている。[図7-1][図7-2]

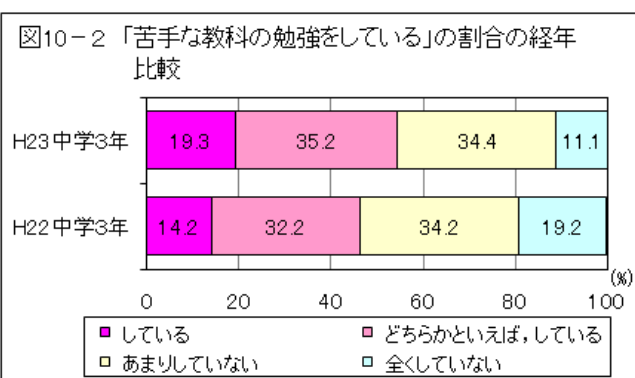
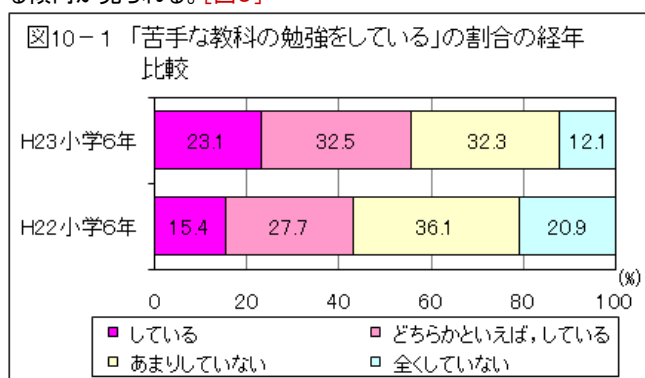
オ 「苦手な教科の勉強をしている」について



各学年を比較して全体的に大きな変化は見られない。【図8】



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、苦手な勉強をしている児童生徒ほど、平均正答率が高くなる傾向が見られる。【図9】



小学6年と中学3年における「苦手な教科の勉強をしている」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、平成22年度と比べると、ともに高くなっている。【図10-1】【図10-2】

○ これからの指導に向けて

児童生徒の普段の日(月曜日から金曜日)の勉強時間については、1時間よりも少ないと回答している児童生徒の割合が、小学5年から中学1年までで4割を越え、中学2年と中学3年とで4割に迫る結果となっている。この事実は、小学校・中学校ともに課題として捉えるべきである。児童生徒への家庭学習に対する意識のもたせ方、宿題の出し方、保護者との連携協力の在り方など、家庭学習に関して日頃取り組まれている活動を見直し、改善を図っていく必要がある。また、中学2年生と中学3年生において、自分で計画を立てて勉強している生徒の割合が低下しているが、これも課題と捉え改善を図る必要があると思われる。中学校では部活動もあるため、小学校に比べると、全体的に家庭で過ごす時間は少ないことが考えられる。そのため、日々の家庭学習について、生徒が自分で計画を立てて勉強できるようにすることは、家庭での時間を有効に使う上でも、大切なことであると考えられる。

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

IV 児童生徒意識調査の結果の分析

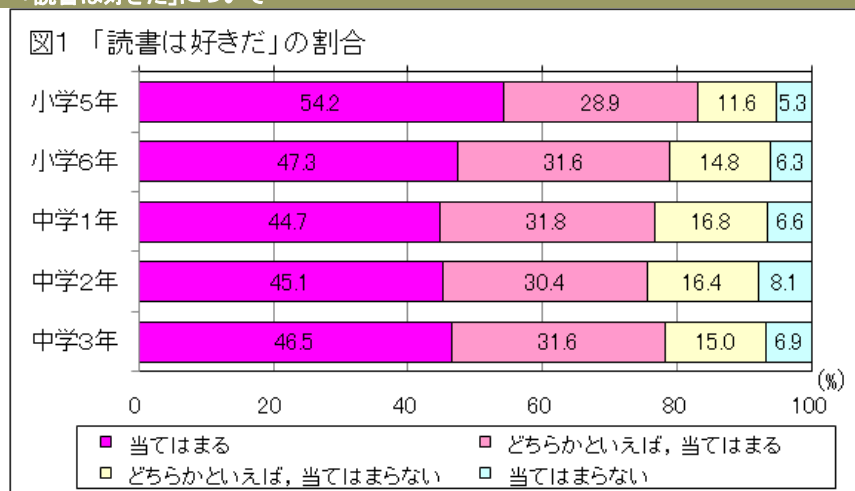
児童生徒意識調査の全てのグラフ

5 生活習慣等

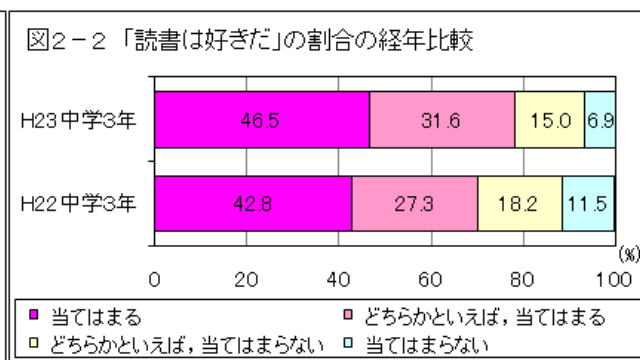
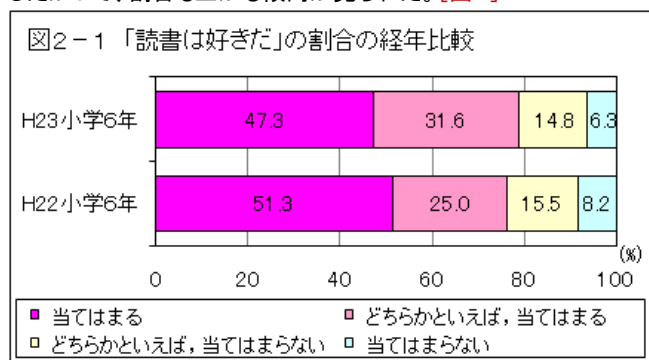
- 読書が好きな児童生徒は、どの学年も75%を上回っている。[図1]しかし、読書の時間について、「まったくしない」、「10分より少ない」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて増加している。[図4]
- 朝食を毎日食べていると回答した児童生徒の割合は、各学年とも8割を上回っている。[図7]また、朝食をきちんととっている児童生徒ほど平均正答率が高くなっている。[図8]
- テレビを視聴したりテレビゲームをしたりする時間が長くなるほど、平均正答率も低下していく傾向が見られる。[図13、図16]
- 家庭学習や読書の時間を含めた家庭で過ごす時間の使い方について、児童生徒に考えさせ、改善を図る取組が必要である。

この節では、読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間、就寝時刻、朝食など、生活習慣全般についての設問から、児童生徒の生活習慣についての調査結果を述べる。

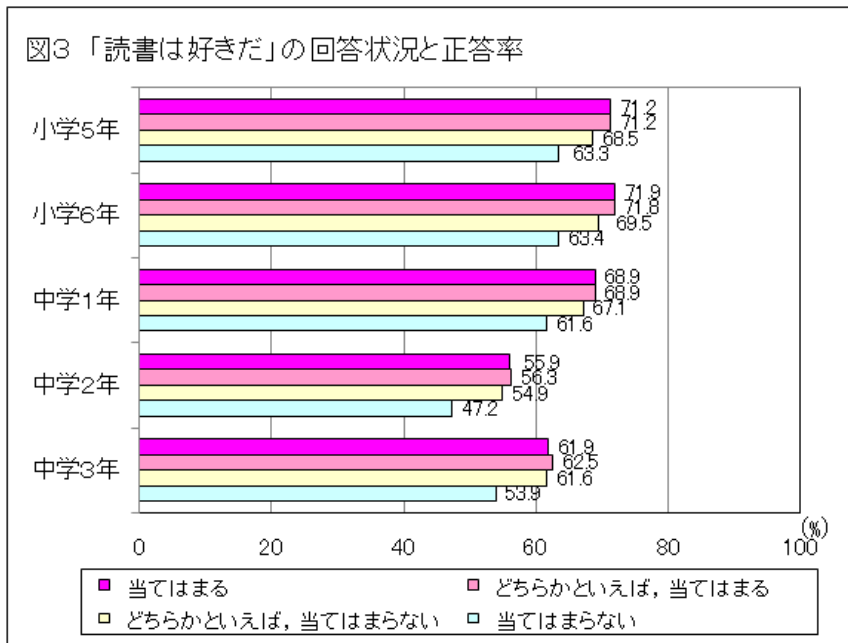
ア 「読書は好きだ」について



「当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年生54.2%、小学6年生47.3%、中学1年44.7%、中学2年45.1%、中学3年46.5%となっている。「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合を合わせると、全ての学年が7割を上回っている。特に、小学5年生では、83.1%と最も高い割合であった。しかし、「当てはまらない」と回答している児童生徒を見てみると、学年が上がるにしたがって、割合も上がる傾向が見られた。[図1]

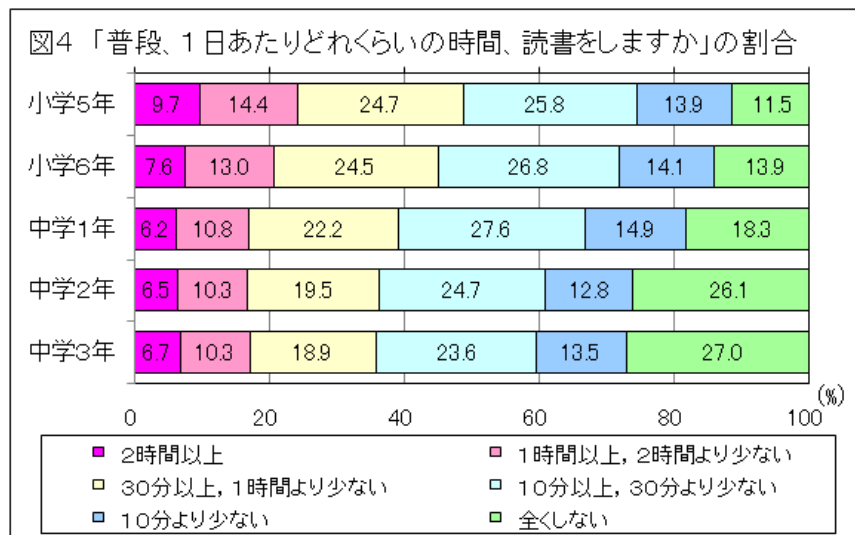


この設問について、小学6年と中学3年を平成22年度と比べると、小学6年において、「当てはまる」の割合が下がったものの、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、どちらの学年においても、上回った。特に、中学3年生では、8.0ポイント上回った。[図2-1、図2-2]

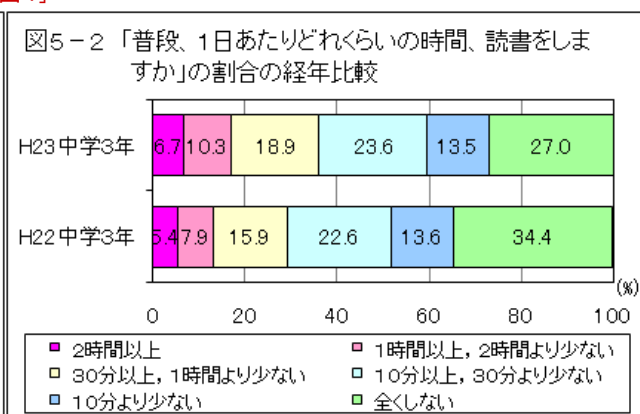
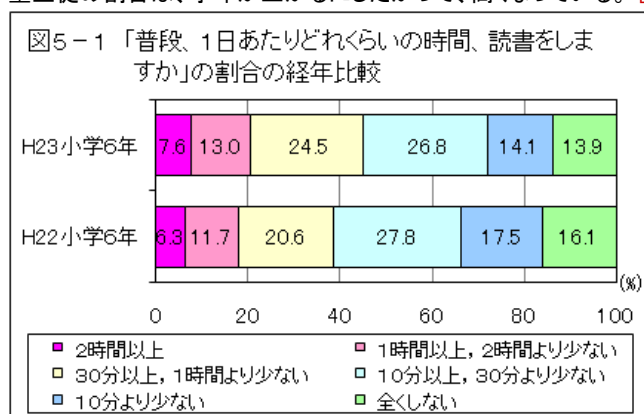


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。読書が好きだと感じている児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図3]

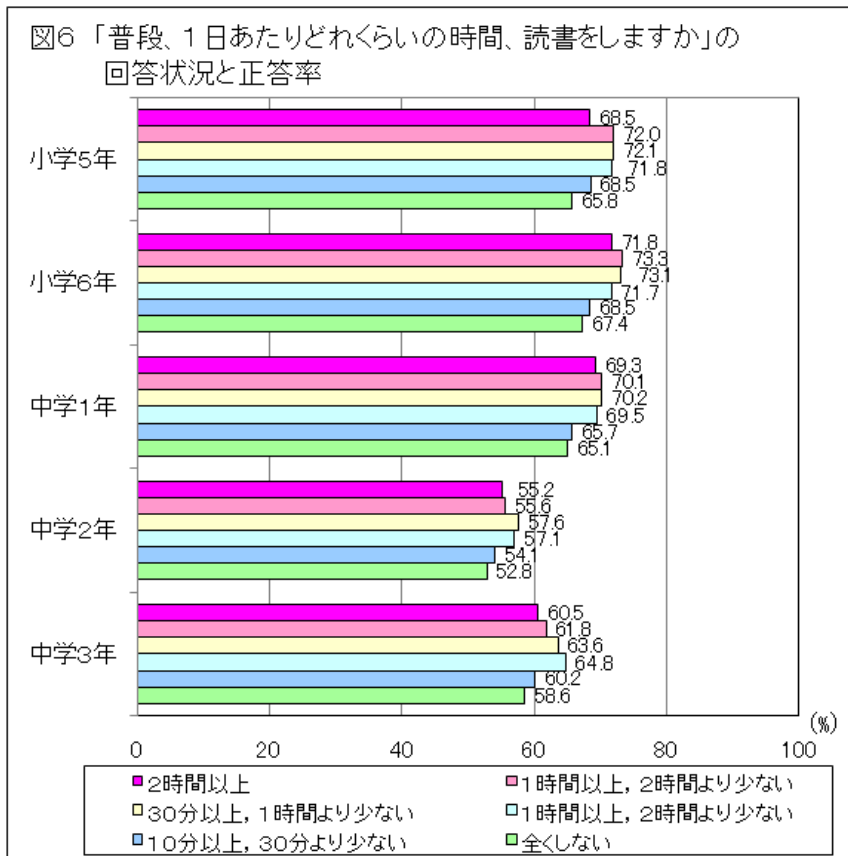
イ「家や図書館で、ふだん(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、読書をしますか(教科書や参考書、漫画や雑誌は除きます。)」について



「10分以上30分より少ない」と回答した児童生徒の割合が小学校5年生から中学校1年生において最も高く、小学5年25.8%、小学6年26.8%、中学1年27.6%となっている。しかし、中学2年と中学3年では、「全くしない」と回答した生徒の割合が最も高く、中学2年26.1%、中学3年27.0%になっている。「2時間以上」「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童生徒の割合の合計は、小学5年24.1%、小学6年20.6%、中学1年17.0%、中学2年16.8%、中学3年17.0%になっている。また、「まったく読まない」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにしたがって、高くなっている。[図4]

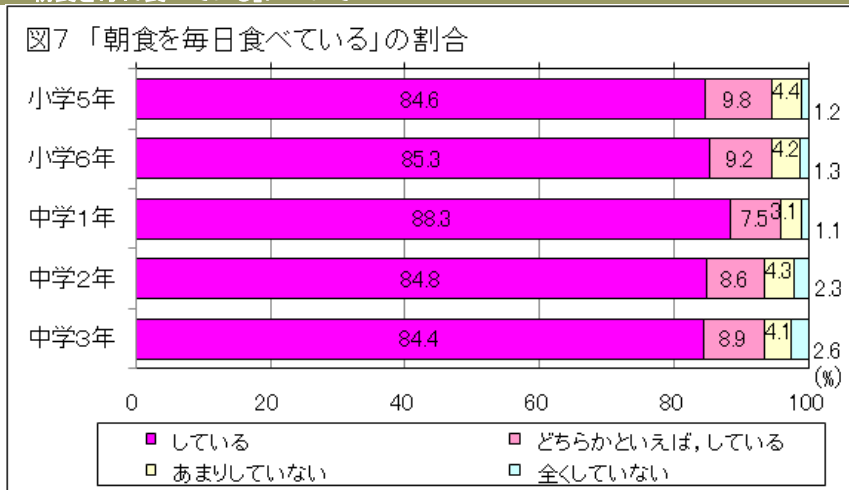


この設問について、小学6年と中学3年を平成22年度と比べると、どちらの学年においても読書をする時間は増えてきていることが伺える。小学校では、30分以上読書する児童の割合が高くなっている。また、中学校では、10分以上読書する生徒の割合が高くなっている。[図5-1、図5-2]

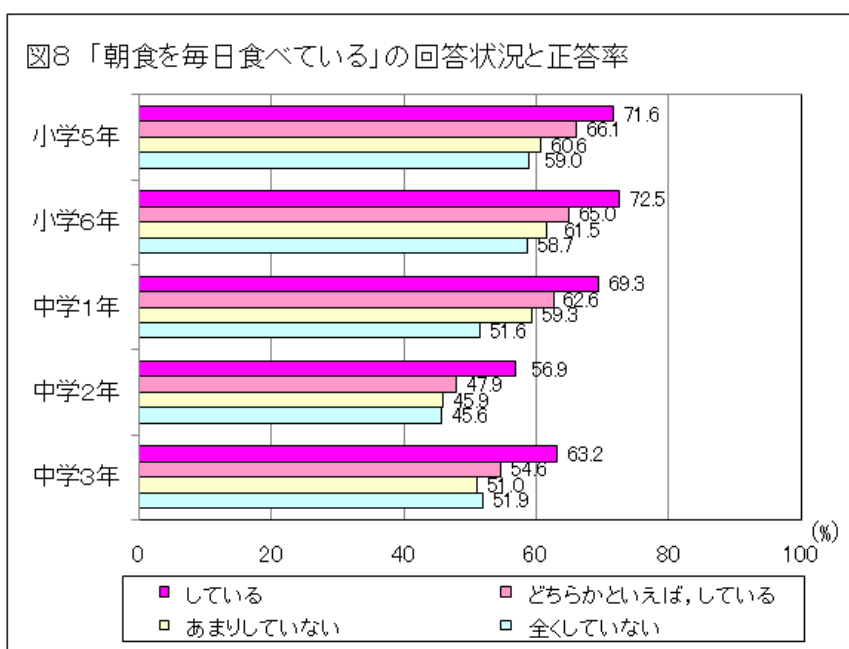


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「まったく読まない」と回答した児童生徒の平均正答率が最も低い結果となった。また、「2時間以上」と回答した児童生徒を除いては、小学5年から中学1年までは読書する時間が長くなるにしたがって、平均正答率も高くなる傾向が見られた。中学2年と中学3年では、「10分以上、30分より少ない」「30分以上、1時間より少ない」と回答した児童生徒の平均正答率が高くなってはいるが、全体的には同様の傾向が見られる。[図6]

ウ 「朝食を毎日食べている」について



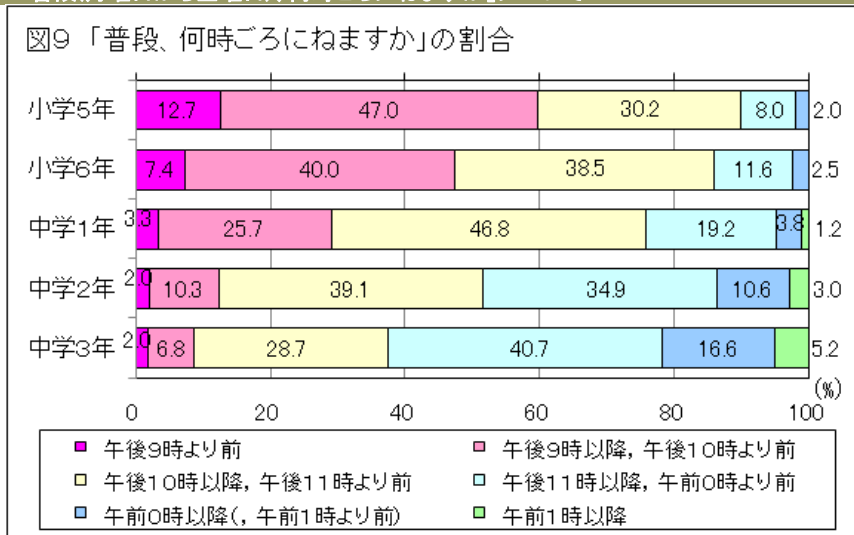
「している」と回答した児童生徒の割合は、小学5年84.6%、小学6年85.3%、中学1年88.3%、中学2年84.8%、中学3年84.4%となっている。「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも9割を上回っている。[図7]



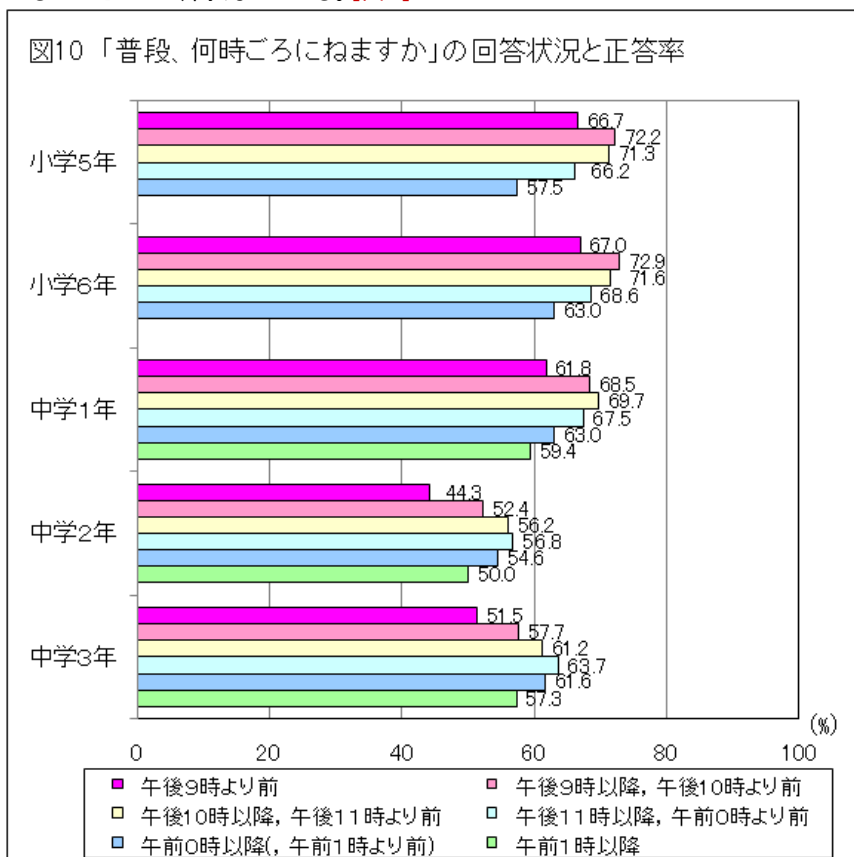
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「している」と回答した児童の平均正答率が最も高く、朝食を食べている日数が減るにしたがって、平均正答率も低くなっている。

ただし、図7で「全くしていない」又は「あまりしていない」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても5%未満と小さいため、比較する際は注意が必要である。[図8]

エ 「普段(月曜日から金曜日)、何時ごろにねますか」について

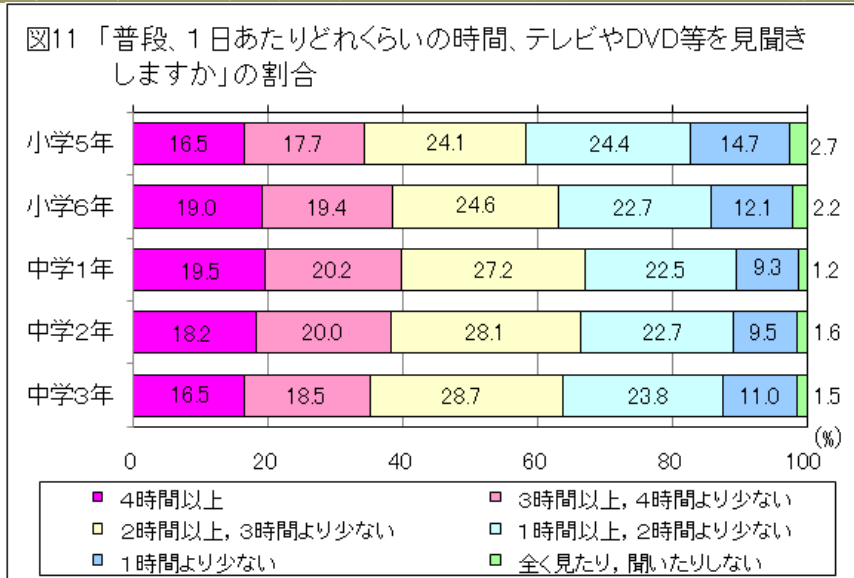


小学校では、「午後9時以降、午後10時より前」と回答した児童の割合が、小学5年47.0%、小学6年40.0%と最も高かった。中学校では、中学1年生では、「午後10時以降、午後11時より前」が最も高く、46.8%、中学2年と中学3年では、「午後11時以降、午前0時より前」が最も高く、2年生で34.9%、3年で40.7%となっている。また、午後11時以降と回答している児童生徒の割合は、学年が上がるにしたがって、高くなっている。[図9]

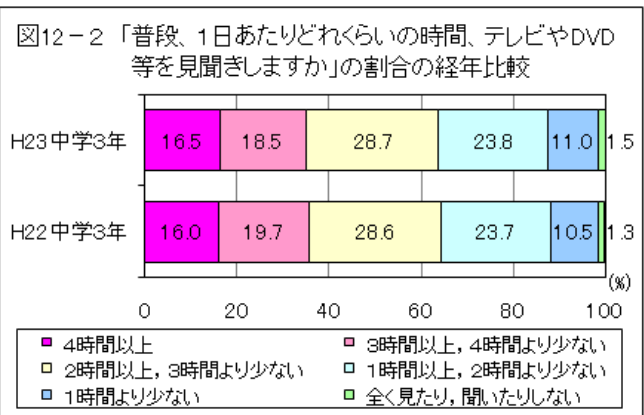
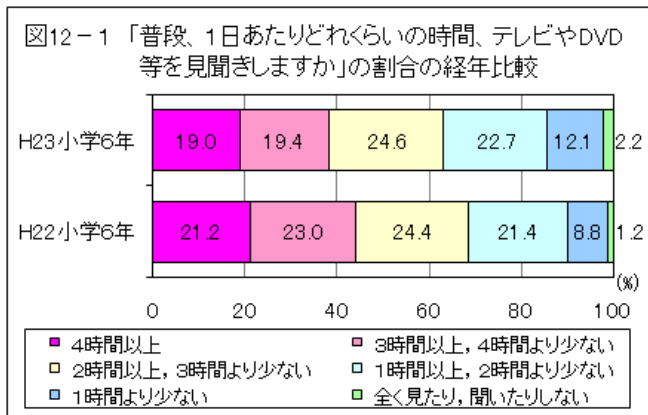


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学年では「午後9時以降、10時より前」、中学1年生では「午後10時から11時までの間」、中学2年生と中学3年生では「午後11時から0時までの間」と回答した生徒の平均正答率が最も高くなっている。また、中学校において「午後9時より前」又は「午前1時より後」と回答した児童生徒の平均正答率は低くなっている。[図10]

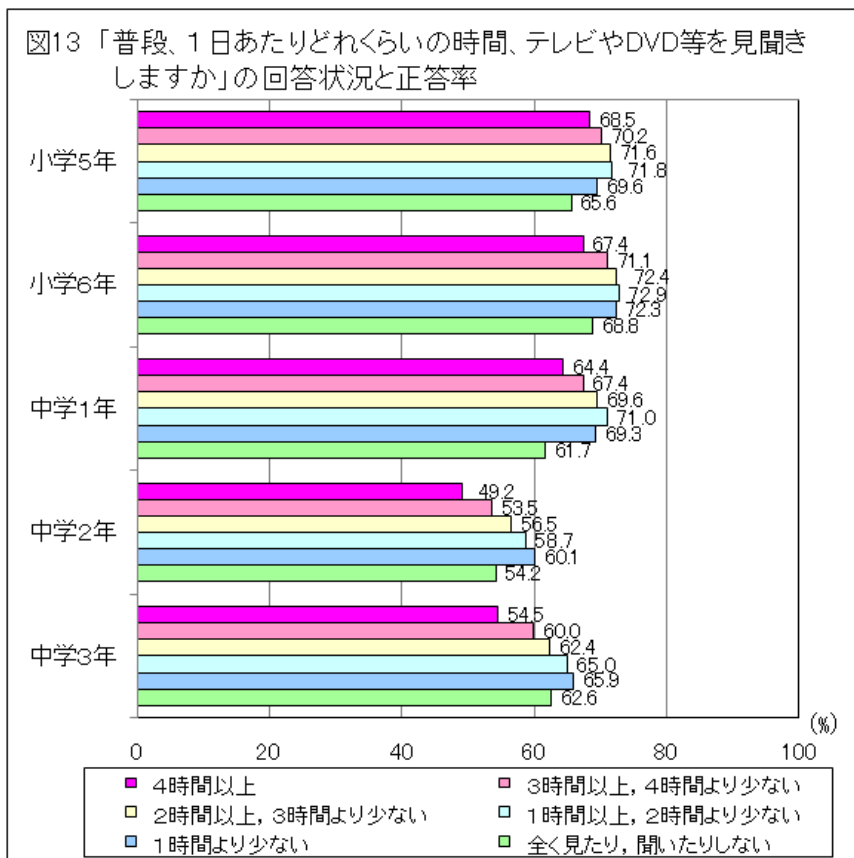
オ 「普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりしますか」について



小学5年生で「1時間以上、2時間より少ない」が24.4%と最も高く、小学6年生から中学3年生では「2時間以上、3時間より少ない」が最も高く、小学6年24.6%、中学1年27.2%、中学2年28.1%、中学3年28.7%となっている。また、小学校では、学年が上がると視聴する時間が長くなる傾向があるが、中学校では、逆に短くなる傾向が見られる。[図11]

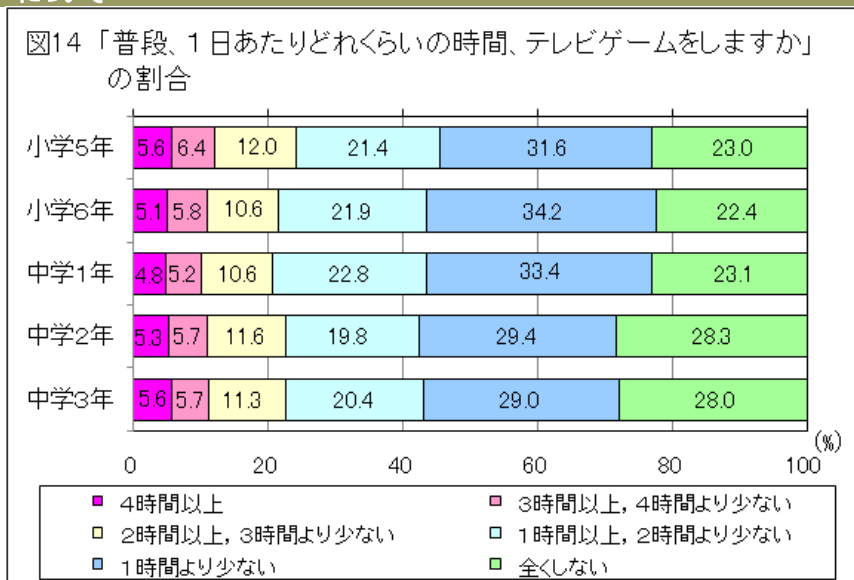


この設問について、小学6年と中学3年を平成22年度と比べると、小学6年生では、テレビやDVD等を視聴する時間は、減少の傾向がうかがえる。中学3年生でも、4時間以上の割合は高くなったものの、全体的な傾向としては、わずかではあるが減少傾向にある。[図12-1、図12-2]

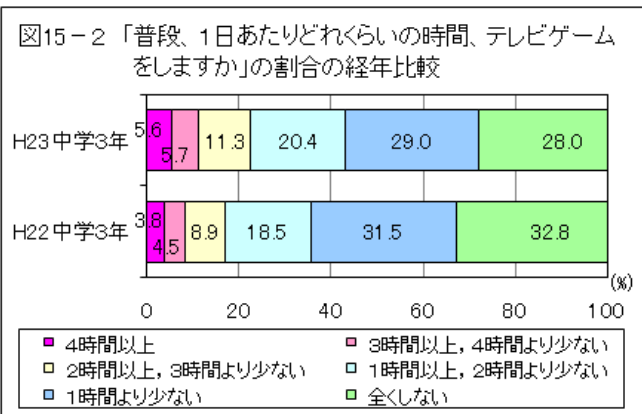
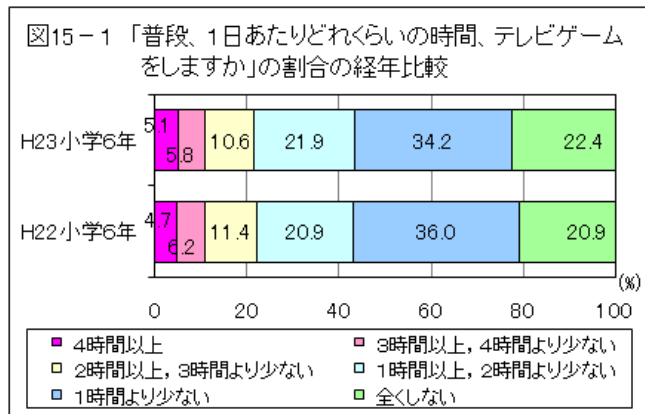


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校では、「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童の平均正答率が高くなる傾向が見られる。中学校では、「1時間より少ない」または「1時間以上、2時間より少ない」と回答した生徒の平均正答率が高くなる傾向が見られる。また、全ての学年において、「4時間以上」「全く見たり、聞いたりしていない」と回答した児童生徒の平均正答率が低くなる傾向が見られた。【図13】

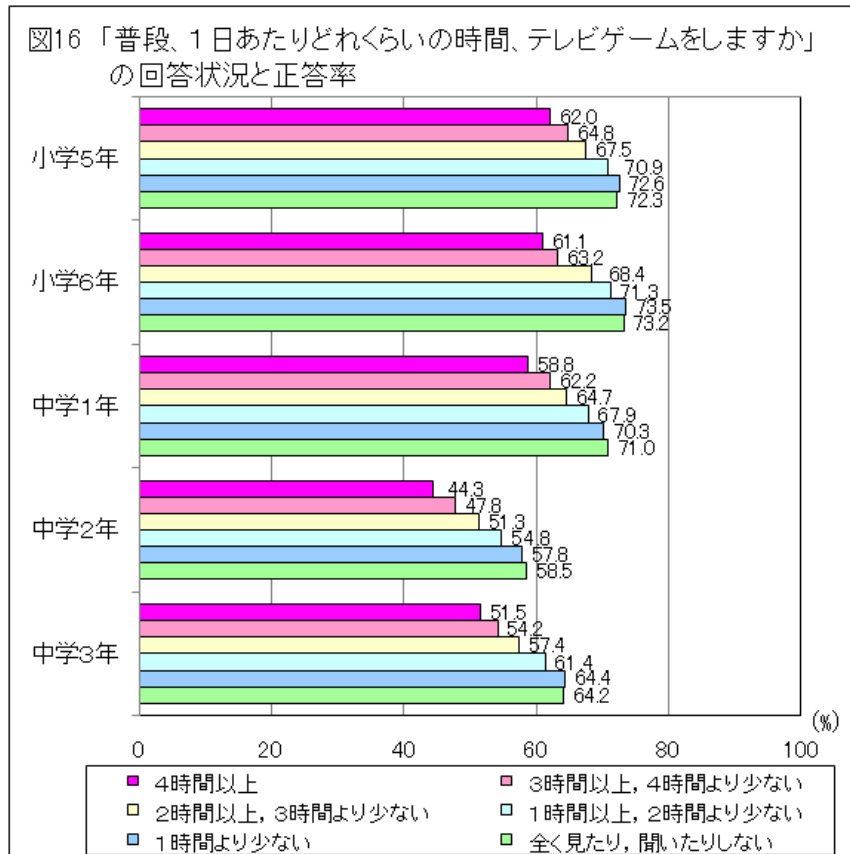
カ 「普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、テレビゲーム(コンピュータゲーム、携帯式のゲームをふくみます。)をしますか」について



どの学年においても「1時間より少ない」と回答している児童生徒の割合が最も高く、小学5年31.6%、小学6年34.2%、中学1年33.4%、中学2年29.4%、中学3年29.0%となっている。また、小学校では、学年が上がるとテレビゲームをする時間が減少する傾向が見られるが、中学校では、逆に学年が上がるとテレビゲームをする時間が増加する傾向が見られる。【図14】



この設問について、小学6年生と中学3年生徒で前年度調査と比較すると、小学6年生では、大きな変化が見られなかった。しかし、中学3年生においては、テレビゲームをする時間が増えている。[図15-1、図15-2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「全くしない」または「1時間より少ない」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高く、ゲームをする時間が増えるにしたがって、平均正答率も低くなっている。[図16]

○ 今後の指導に向けて

読書については、読書が好きだと感じている児童生徒が増加していることや、少しずつ読書をする時間が増加していることから、読書習慣が少しずつ定着していることがうかがえる。読書をする時間と全教科平均正答率との関連を見てみると、どの学年も、30分より少ない児童生徒の平均正答率が低くなっている。このことから、読書をすることは学力の向上にもよい影響を与えていることが考えられる。今後もより一層の読書の定着を図る上において、朝の10分間読書や読書週間の設定、家庭との連携による家庭での読書習慣の確立、学校図書館等の環境整備など、取組の工夫改善が望まれる。

朝食については、朝食を毎日食べることが学習面と関係があることが全教科平均正答率との関連グラフからうかがえる。朝食を毎日食べることは、生活のリズムを整えることにもつながり、そのことが学習面にもよい影響を与えていると考えられる。各学校においては、食育と関連付けながら指導してだけでなく、家庭にも毎日朝食を食べることの大切さについての啓発を行いながら、家庭と連携し指導に当たっていくことが望まれる。

就寝時間については、家庭学習の時間や読書時間のことを考えると、早ければよいというわけではない。しかし、極めて遅い就寝時刻は、学習面において悪影響を及ぼしている可能性があると考えられる。各学年の状況に応じて、帰宅してから就寝までの時間の有効な使い方について、家庭との連携を図りながら指導していくことが望まれる。

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の全てのグラフ

1 教科全般における指導法の工夫

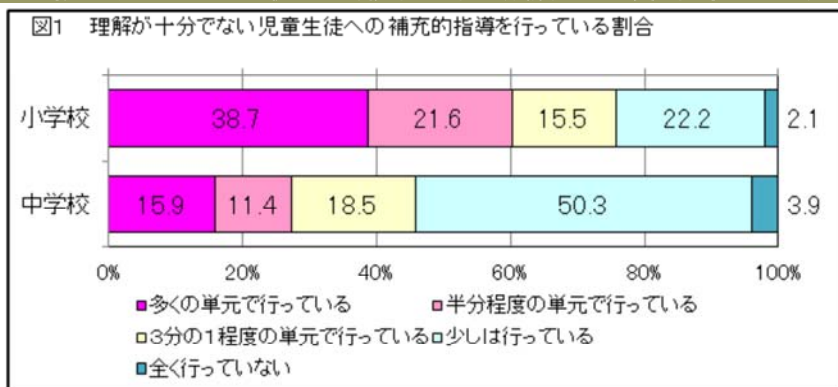
- 発展的な課題については、児童生徒の実態や学習の内容に応じて適宜取り入れていくことで効果が上がると考えられる。
- 表現する活動については、「書いて表現する活動」と「発表や話し合いなどの表現活動」との調和を図り、両者の関連を図った指導を工夫することで効果が上がると考えられる。
- 単元の学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や指導計画に取り入れて指導を行っている教師の割合は高い。

この節では、

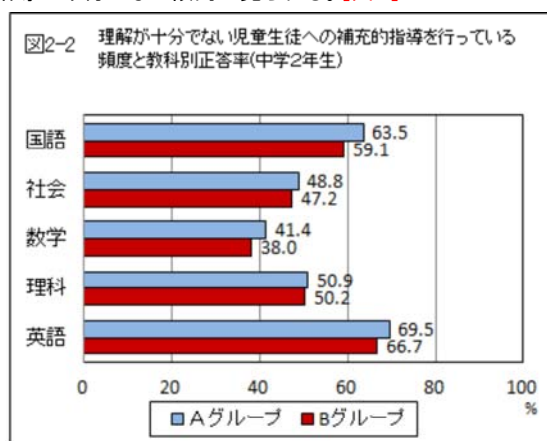
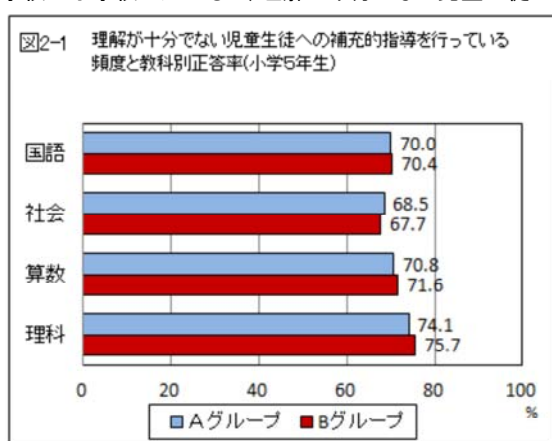
- ・理解が十分でない児童生徒への補充状況
- ・表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業
- ・身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導
- ・学習形態を工夫したメリハリのある授業
- ・PDCAサイクルを踏まえた実践

の設問から、補充的指導、表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習形態の工夫などの状況について分析する。

ア「理解が十分でない児童生徒に対し、授業の合間や放課後などに更に指導していますか」について

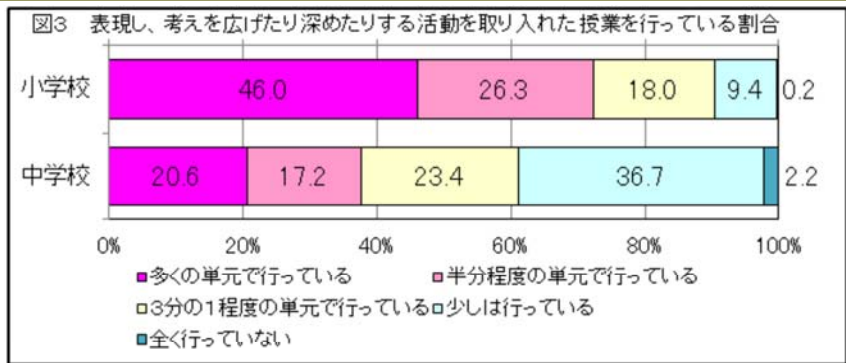


「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は60.3%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は27.3%であり、逆に「少しは行っている」「全く行っていない」と回答をした割合は54.2%と過半数を超えている。中学校は小学校に比べると、理解が十分でない児童生徒に対しての指導が十分でない傾向が見られる。[図1]

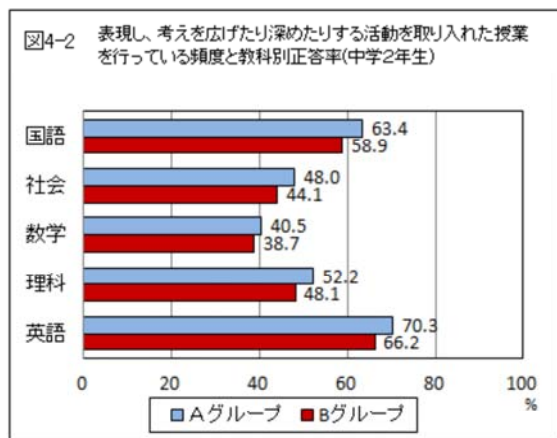
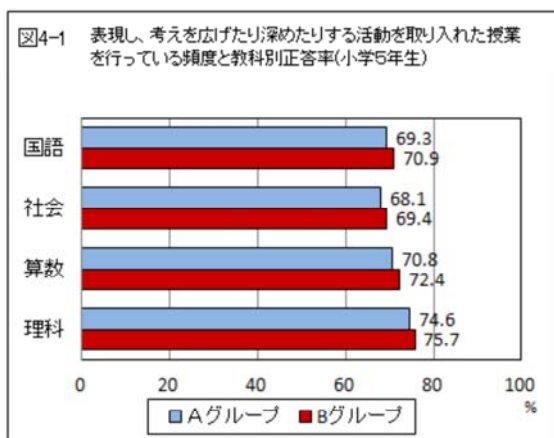


この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では全ての教科において明らかな特徴は見られないが、中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。これは、理解が十分でない児童生徒に対して、細やかな指導を行ってきたことの効果の表れと考えることができる。[図2-1][図2-2]

イ「発表や話し合い活動などを表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか」について

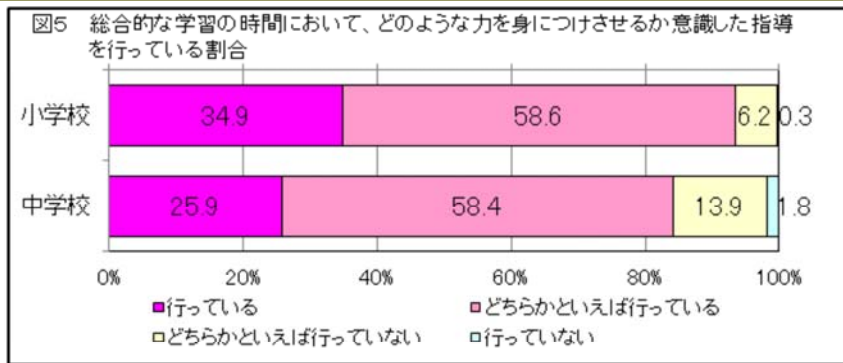


「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は72.3%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は37.8%であり、逆に「少しは行っている」「全く行っていない」と回答をした割合は38.9%となっている。中学校は小学校に比べると、発表や話し合い活動など、表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業への意識が低い傾向が見られる。[図3]

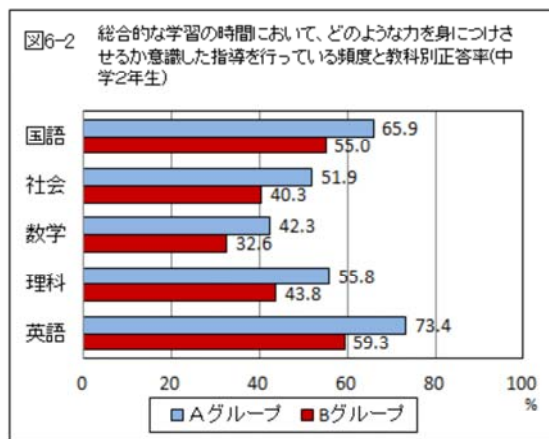
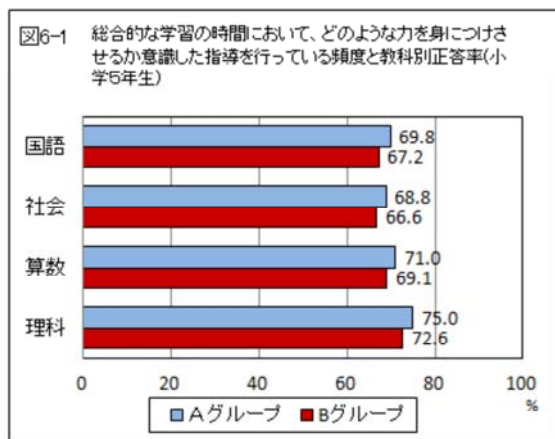


この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、全ての教科において明らかな特徴は見られないが、中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。これは、自分の考えを表現させることで、考えたことを整理させたり共有化を図らせたりしてきた効果の表れと考えることができる。[図4-1][図4-2]

ウ 「総合的な学習の時間においては、児童生徒にどのような力を身に付けさせるのかを意識した指導を行っていますか」について

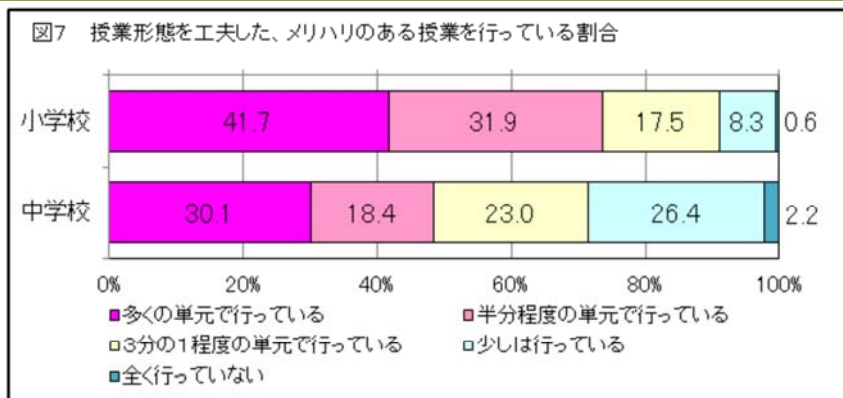


「行っている」「どちらかといえば行っている」と回答をした小学校教師の割合は93.5%である。同じ回答をした中学校教師の割合は84.3%である。小学校と中学校ともにほとんどの教師が、総合的な学習の時間においては、児童生徒にどのような力を身に付けさせるのかを意識して指導を行っていることが分かる。【図5】

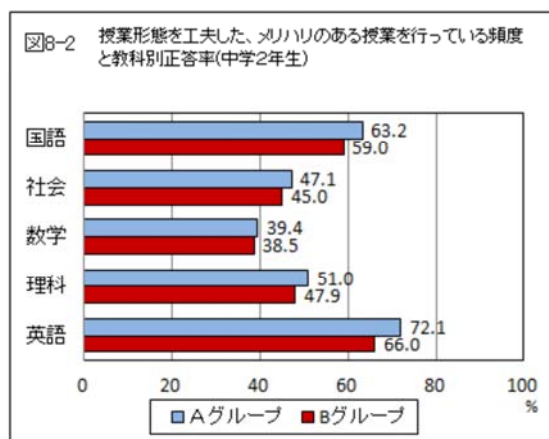
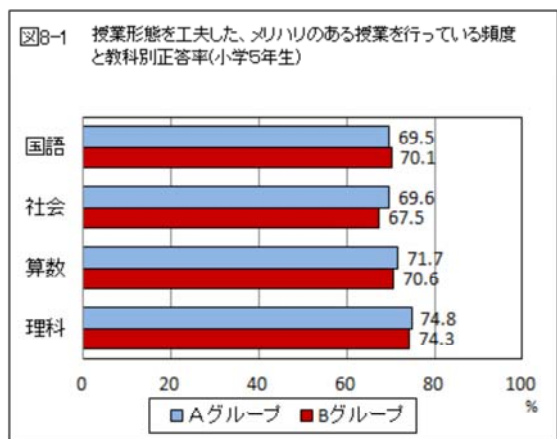


この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。中学校でも全ての教科においてAグループの平均正答率が高く、どの教科も10ポイントほど上回っている。【図6-1】【図6-2】

エ 「教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面とグループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業を行っていますか」について

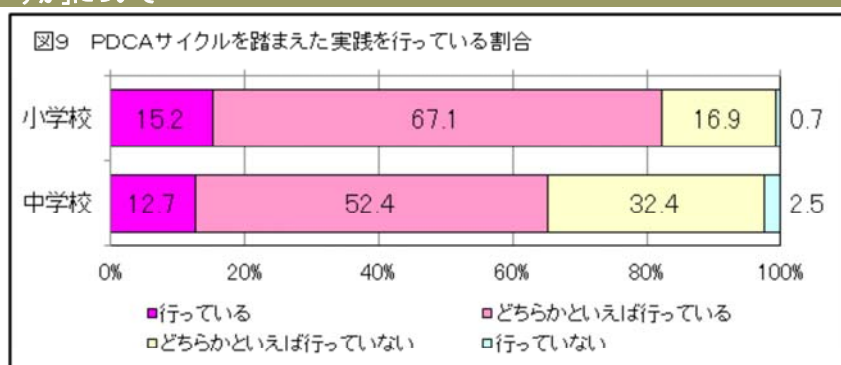


「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は73.6%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は48.5%であり、逆に「少しは行っている」「全く行っていない」と回答をした割合は28.6%となっている。中学校は小学校に比べると、教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面と、グループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業への意識が低い傾向が見られる。【図7】

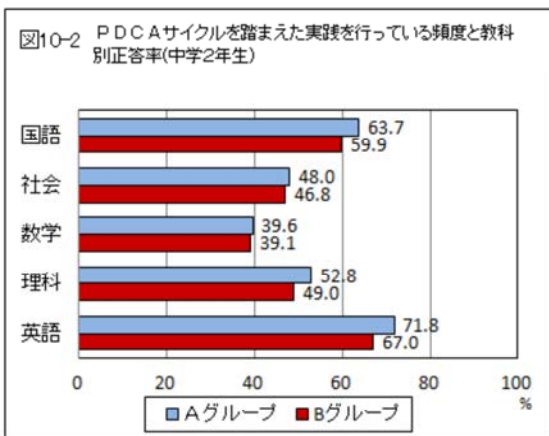
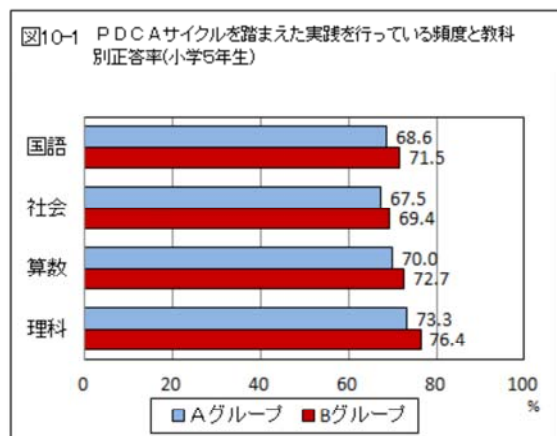


この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では全ての教科において同程度、または、Aグループの平均正答率が高くなっている。中学校でも全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。特に、英語において顕著に表れている。[図8-1][図8-2]

オ「日常の授業や単元等の指導、学校における教育活動において、PDCAサイクル(計画→実施→評価→改善)を踏まえた実践を行っていますか」について



「行っている」「どちらかといえば行っている」と回答をした小学校教師の割合は82.3%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は65.1%である。中学校は小学校に比べると、PDCAサイクルを踏まえた実践への意識が低い傾向が見られる。[図9]



この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では全ての教科において明らかな特徴は見られないが、中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。これは、計画的な実践と、取り組んだ結果からの改善を図ってきた効果の表れであると考えられる。[図10-1][図10-2]

○ これからの指導に向けて**学習活動の形態を工夫した授業**

授業の中において、ペアでの活動やグループでの活動を設定し、児童生徒に自分の考えを伝える機会を与えることは、児童生徒一人一人に発言機会を保證することになるだけでなく、他者に伝えるために自分の考えを整理したり、他者と比べることで、考え方が広がりたりする効果が期待でき、また、児童生徒の言語能力や表現力を高めていくことにもつながっていく。ただ、一方でその基盤となる基礎的・基本的な知識・技能の定着が低下するといった悪影響も考えられる。そのため、知識や技能を習得させる際に教師主導による学習活動の形態をとったり、知識や技能を活用させる際にお互いの考えを伝え合う学習活動の形態をとったりするなど、授業の目的や学習内容に応じて、より効果を上げるための教師側の授業の進め方の工夫が求められる。

身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間における指導

今回の調査結果から、総合的な学習の時間において、身に付けさせたい力を意識した指導を行うことによって、児童生徒の教科における学力の向上にも、よい影響を与えていることを確認することができた。学習指導要領において、総合的な学習の時間については、各教科等を横断する課題について問題解決や探究的な活動を行うことにより、児童生徒の思考力・判断力・表現力を育むとともに、各教科における基礎的・基本的な知識・技能の習得にも資するなど教科と一体となった指導が求められている。今後も、総合的な学習の時間については、これらのことを各学校や各教師が意図しつつ、指導計画や学習内容を考えながら取組の充実を図っていくことが大切である。中央教育審議会の答申(平成20年1月17日)[※1]においても、総合的な学習の時間の学校間、学校段階間の取組の実態に差があることを課題としており、学校としてのカリキュラムマネジメント能力の向上が求められている。学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習の時間の縮減はあるもののその重要性については、更に強調されることとなる。各学校におけるカリキュラムマネジメント能力の向上が大いに期待されるところである。

※1 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改善について」(答申)
平成20年1月17日 ⑩総合的な学習の時間(130ページ～132ページ)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf

最終更新日：2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の全てのグラフ

2 学習環境の活用

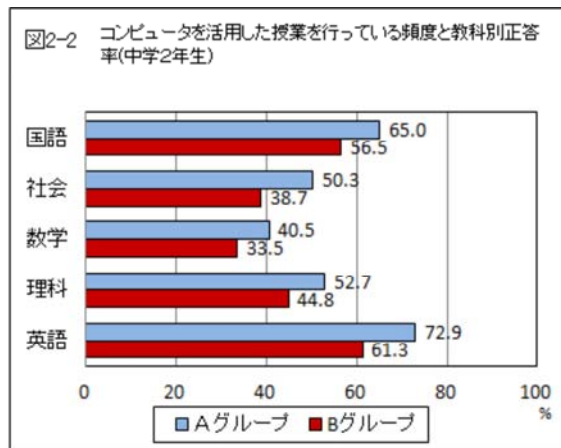
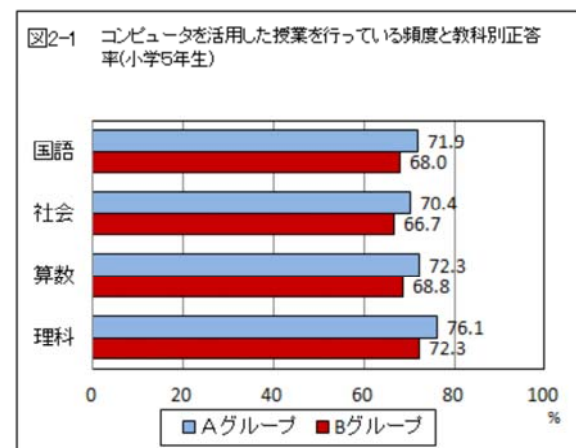
- 授業におけるコンピュータと学校図書館の活用頻度や活用内容には、小中学校の違いが見られる。[図1][図3]
- 小学校と中学校ともに、コンピュータを活用した授業を行っている学校ほど、正答率が高くなる傾向が見られる。今後も各授業におけるコンピュータの有効な活用方法について探り、積極的に取り組んでいくことが望まれる。[図2-1][図2-2]

この節では、授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度と教科別正答率との関連及びそれぞれの活用内容について分析する。

ア 「コンピュータを活用した授業を行っていますか」について

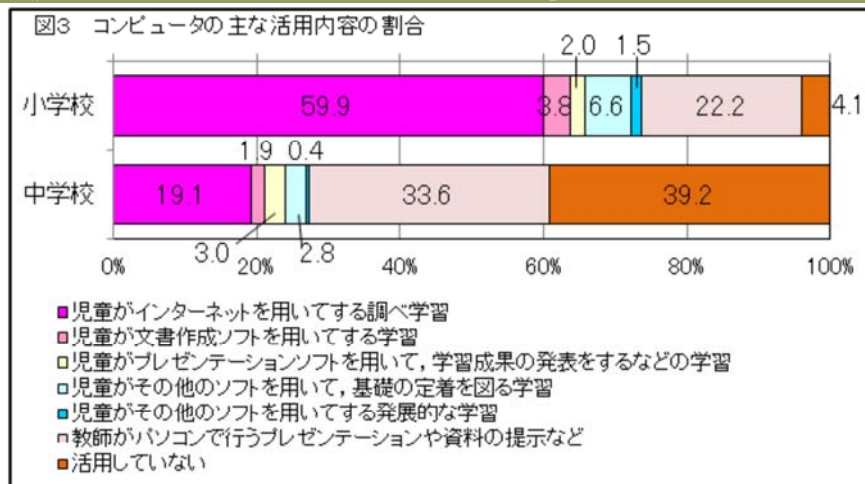


「年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている」「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)行っている」と回答をした小学校教師の割合は58.0%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は10.7%であり、逆に「年に1～2回程度行っている」「全く行っていない」と回答をした割合は70.6%と高くなっている。中学校は小学校に比べると、コンピュータを活用した授業があまり行われていない傾向が見られる。[図1]



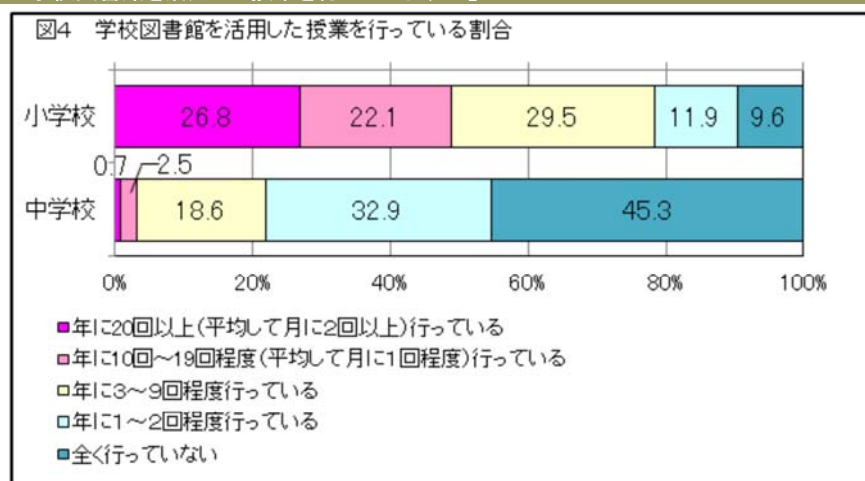
この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校と中学校ともに全ての教科において、Aグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校の全ての教科で顕著に表れており、社会と英語においては10ポイント以上、上回っている。[図2-1][図2-2]

イ 「授業では、コンピュータをどのように活用していますか」について

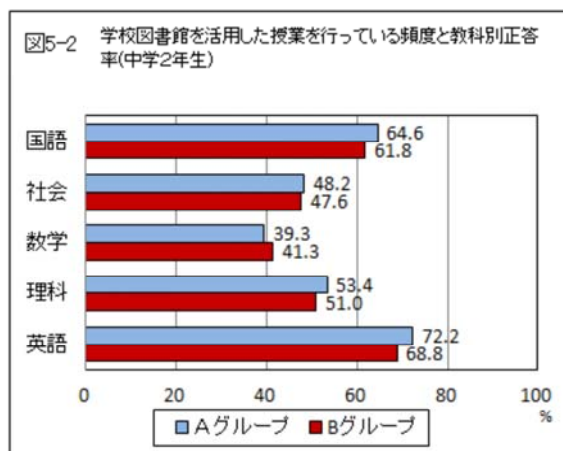
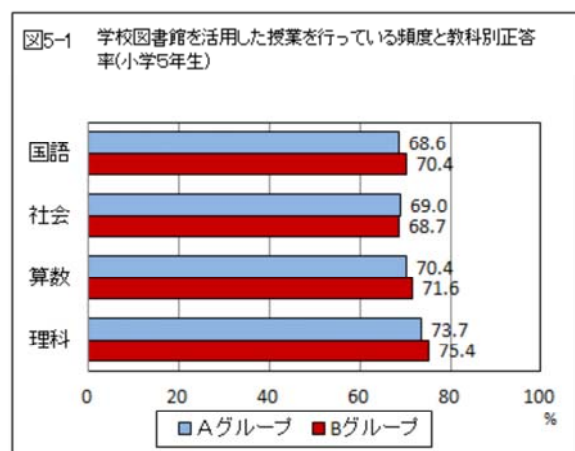


小学校ではコンピュータを活用していると回答をした教師の中において、「児童がインターネットを用いてする調べ学習」と回答をした教師の割合が59.9%と、最も高くなっている。これに対し、中学校では「教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など」と回答をした教師の割合が33.6%と最も高く、次いで「生徒がインターネットを用いてする調べ学習」と回答をした教師の割合が19.1%となっている。[図3]

ウ 「学校図書館を活用した授業を行っていますか」について

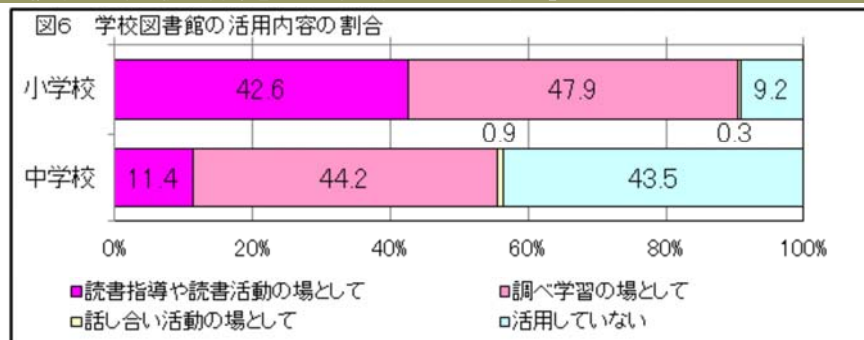


「年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている」「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)行っている」と回答した小学校教師の割合は48.9%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は3.2%であり、逆に「年に1~2回程度行っている」「全く行っていない」と回答をした割合が78.2%と高くなっている。中学校は小学校に比べると、図書館を活用した授業があまり行われていない傾向が見られる。[図4]



この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、特におおきな傾向は見られないが、中学校では、全体的にAグループの平均正答率が高くなる傾向が見られる。[図5-1][図5-2]

エ 「授業では、学校図書館をどのように活用していますか」について



図書館を活用していると回答をした教師の中において、小学校と中学校ともに「調べ学習の場として」と回答をした教師の割合がそれぞれ47.9%、44.2%と最も高くなっている。次いで、小学校と中学校ともに「読書指導や読書活動の場として」と回答をした教師の割合がそれぞれ42.6%、11.4%となっている。[図6]

○ これからの指導に向けて

コンピュータを活用した授業

平成23年度佐賀県教育の基本方針において、ICT利活用教育の推進が掲げられている。今日の社会の情報化が急速に進展していることを考えれば、児童生徒だけでなく教師の情報活用能力を向上させることは、今後の教育課題の1つであると考えられる。また、今回の調査結果から、ICTを授業へ活用することは、学力の向上に効果が期待できると考えられる。ICTを授業に活用することは、教師の指示を明確にしたり、見せながら話すことで説明が分かりやすくなったり、課題や図を簡単な操作で分かりやすく表せたりすることなど、様々なよさがあると考えられる。佐賀県内の各学校においても、少しずつ電子黒板やコンピュータなどの環境の充実が図られ、公開授業や研究会などが行われている。今後も、教師のICT活用におけるスキルアップ研修や児童生徒への情報モラルに関わる教育なども計画的に行いながら、積極的な活用を推進していくことが必要である。また、学校図書館についても、児童生徒の実態や学習の内容に応じて、学力向上における効果的な方法を探りながら活用していくことが大切である。

最終更新日:2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

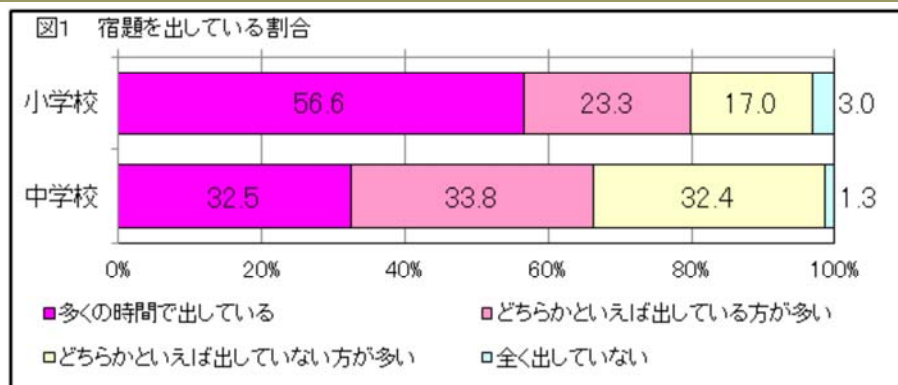
[教師意識調査の全てのグラフ](#)

3 家庭学習への関与状況

- 宿題については、小学校と中学校とも主に復習的な内容が出されている割合が高いが、予習的な内容を出すことについても、学力向上に効果があると考えられる[図3][図4][図5-1][図5-2]。児童生徒へ与える宿題の内容や出し方についても、学力向上に向けより有効となるように検討していく必要がある。

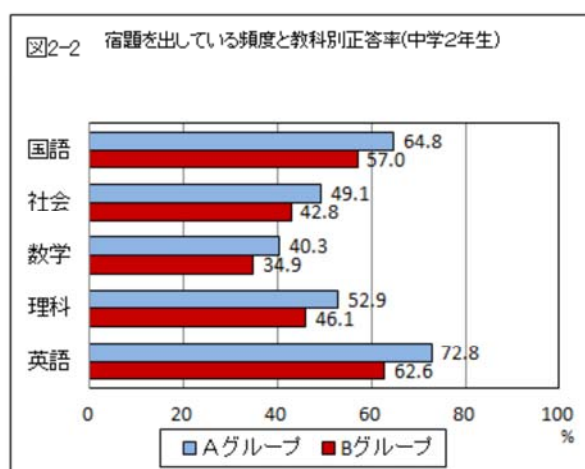
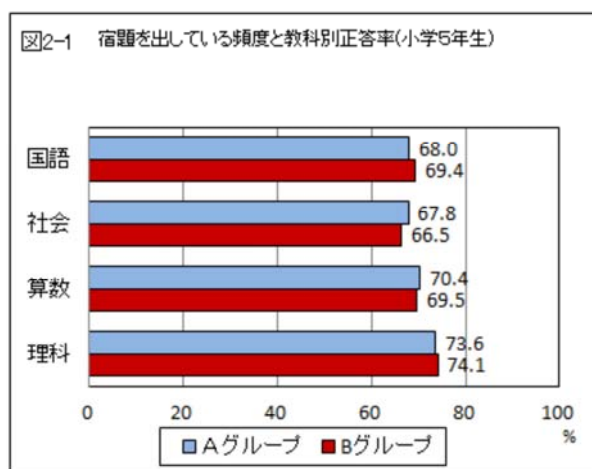
この節では、宿題を出している頻度及び出している宿題の内容(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を分析する。

ア 「宿題を出していますか」について



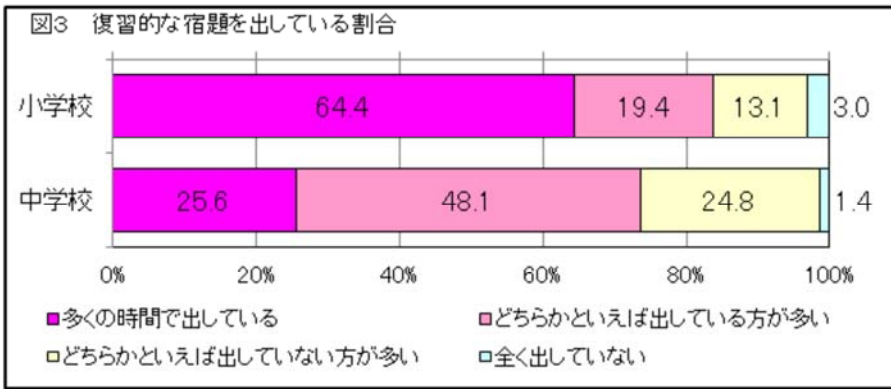
「多くの時間を出している」「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合は79.9%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は66.3%である。小学校教師の方が中学校教師よりも宿題を出している傾向が見られる。

[図1]



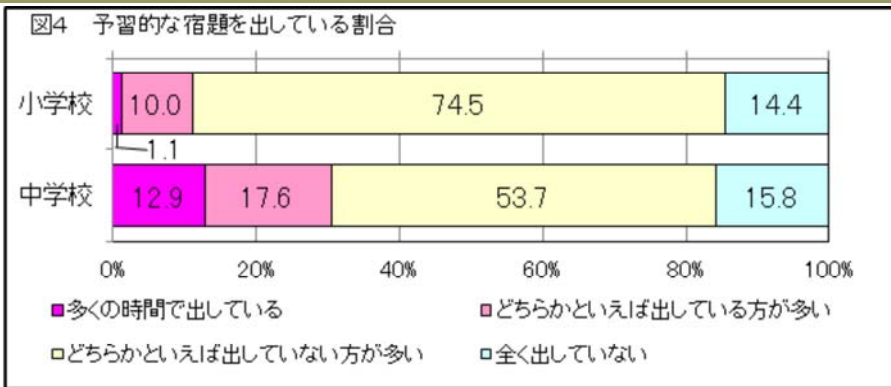
この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの、中学校では全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっており、顕著に表れている。特に英語においては、10.2ポイント上回っている。[図2-1][図2-2]

イ 「復習的な宿題を出していますか」について

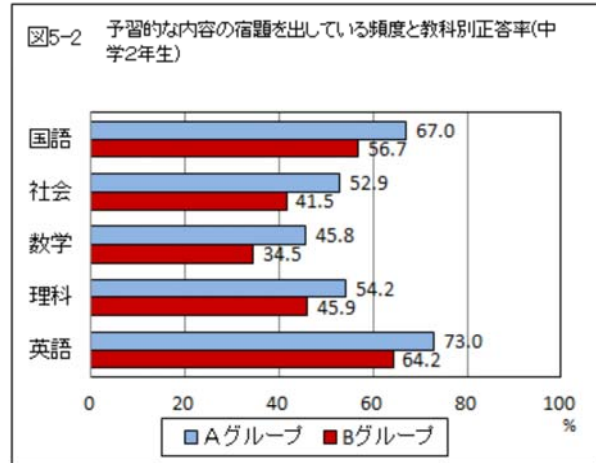
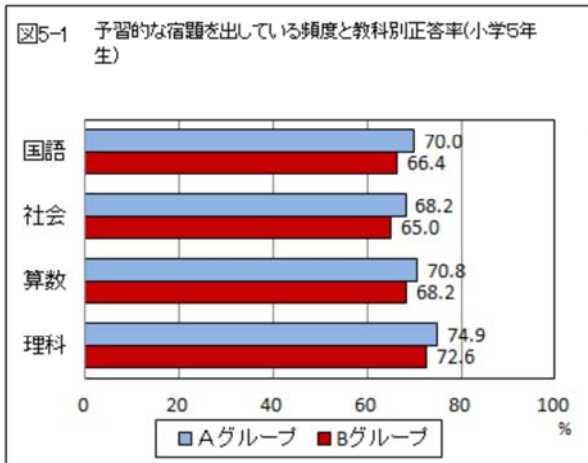


「多くの時間で出している」「どちらかといえば出している方が多い」と回答をした小学校教師の割合は83.8%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は小学校に比べるとやや低いが、73.7%である。図4のグラフとの比較より、小学校と中学校ともに復習的な宿題を出している教師の割合が高い傾向が見られる。[図3]

ウ 「予習的な宿題を出していますか」について



「多くの時間で出している」「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合は11.1%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は30.5%であり、小学校よりも高い結果となっている。[図4]



この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校と中学校とも全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校では全ての教科において顕著に表れており、10ポイント程度上回っている。[図5-1][図5-2]

○ これからの指導に向けて

復習的な宿題と予習的な宿題

小学校、中学校共に、多くの教師が宿題を出しており、その多くは復習的な内容の宿題である。宿題の主な目的については、家庭学習の習慣化や授業における学習事項の定着とされている。そのため小学校教師は、その目的に対する意識は強い傾向がある。その一方で、中学校教師は、小学校教師に比べると予習的な内容の宿題についても出している傾向が見られる。予習的な宿題に取り組ませることは、事前に学習内容に対する自分なりの考えをもたせることになり、授業における児童生徒の主体的な学習活動を促し、自己学習力の育成へとつながっていくものとする。さらに、意図的に予習的な宿題を出すことと授業における児童生徒の主体的な学習活動とを結び付けることが、児童生徒の興味・関心を高めることにもつながり、学習意欲を喚起するための手立ての一つとして有効であるとする。また、復習的な宿題においては、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図ることを目的とする内容だけでなく、授業で身に付けた知識・技能を活用して課題を解決させるような視点での内容についても検討していくことが望まれる。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

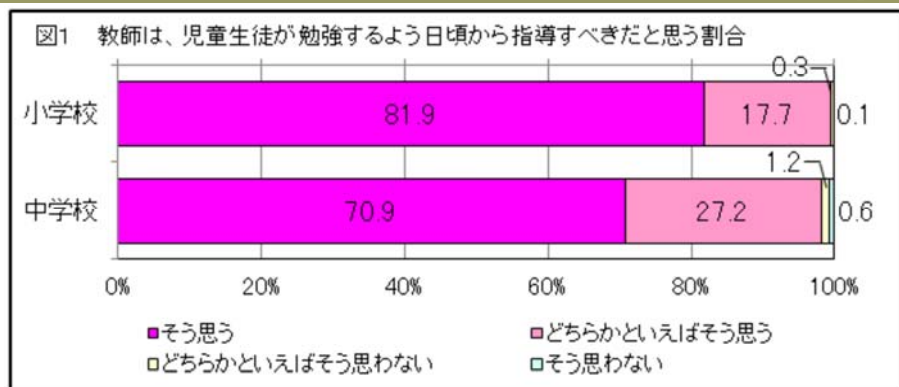
[教師意識調査の全てのグラフ](#)

4 教師の指導観

- 小学校と中学校のほとんどの教師が、児童生徒ができるだけ勉強するように、日頃から指導すべきだと思っている。[図1]
- 小学校と中学校のほとんどの教師が、勉強のことで児童生徒がいつでも気軽に話し掛けられるようにすべきだと思っている。[図2]
- 小学校と中学校のほとんどの教師が、児童生徒が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思っている。また、日頃から細かく指導していくことは、学力の向上につながるものと考えられる。[図3][図4-1][図4-2]

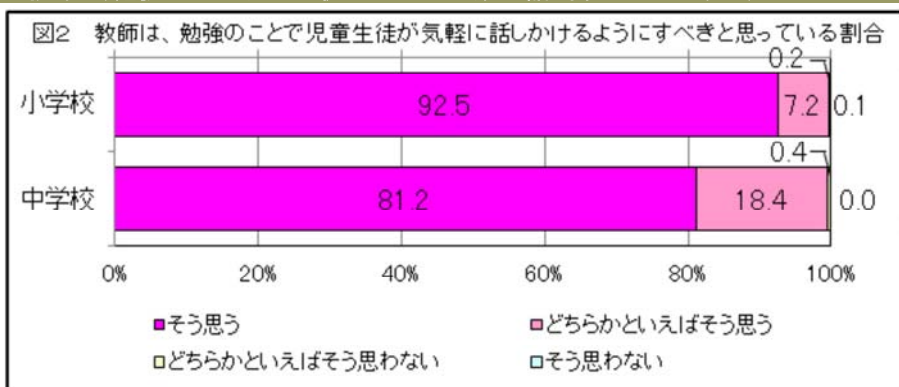
この節では、教師の児童生徒に対する学習指導や生活指導に関わる意識についての質問から、教師の指導観及び学力向上との関連について分析する。

ア 「教師は、児童生徒ができるだけ勉強するよう、日頃から指導すべきだと思いますか」について



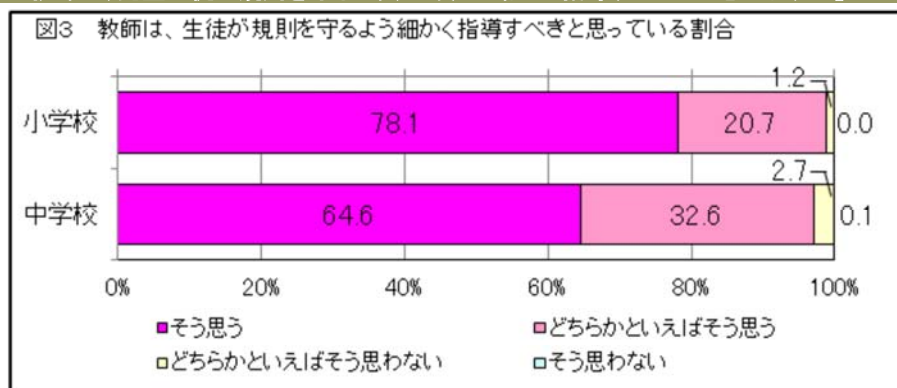
「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答をした小学校教師の割合は99.6%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は98.1%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、児童生徒ができるだけ勉強するよう、日頃から指導すべきであると思っていることが分かる。[図1]

イ 「教師は、勉強のことで児童生徒がいつでも気軽に話し掛けられるようにすべきだと思いますか」について

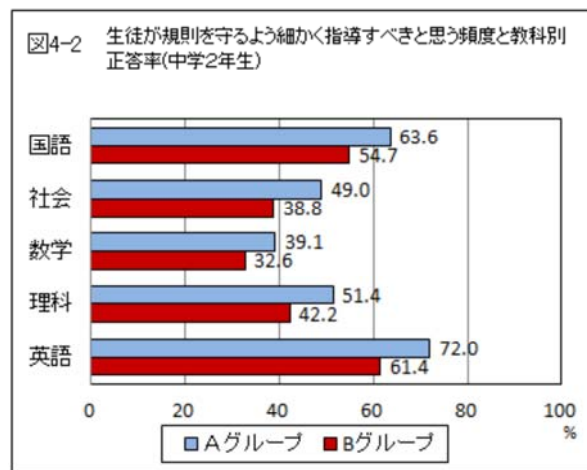
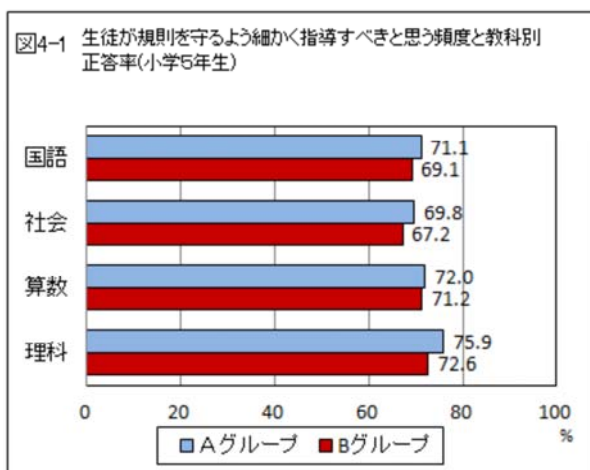


「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答をした小学校教師の割合は99.7%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は99.6%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、勉強のことで児童生徒がいつでも気軽に話し掛けられるようにすべきだと思っていることが分かる。[図2]

ウ 「教師は、児童生徒が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思いますか」について



「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答をした小学校教師の割合は98.8%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は97.2%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、児童生徒が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思っていることが分かる。【図3】



この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校と中学校ともに全ての教科において、Aグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校の全ての教科で顕著に表れており、社会と英語において10ポイント以上、上回っている。【図4-1】【図4-2】

○ これからの指導に向けて

学習指導や生活指導に対する意識のもち方について

児童生徒の学力の向上を図る上においては、教師側も目標や向上心をもって、日頃から児童生徒の指導や支援に当たることが、必要不可欠である。日頃の指導や支援の在り方については、児童生徒の状況により常に同様にはいかない場面も多々あると思われる。しかしながら、常に教師側が高い意識をもち、児童生徒の将来を見据えながら学習面や生活面における向上を目指し、指導や支援に当たっていくことが大切である。今回の調査結果からは、ほとんどの教師が日頃から学習指導や生活指導に対し、共通した高い意識をもちながら、指導に当たられていることが分かる。また、【図4】の調査結果から、児童生徒の学校生活に対し、日頃から細かく指導していくことが、学力の向上により影響を与えていることが分かる。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

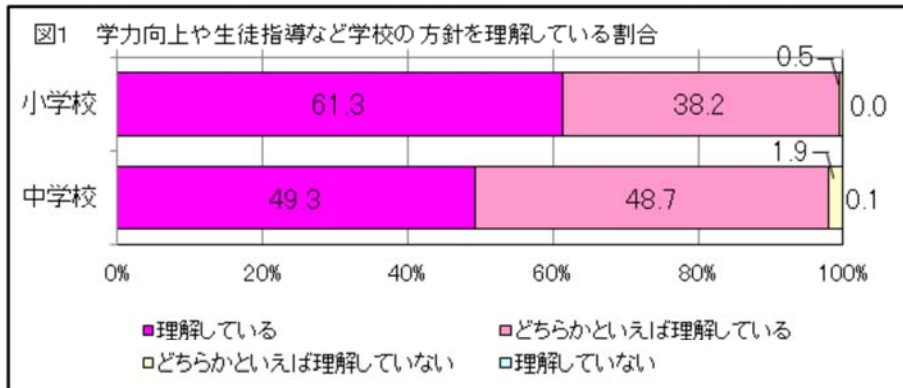
[教師意識調査の全てのグラフ](#)

5 学校組織のマネジメントに対する意識

- 教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していると回答した教師は9割を大きく上回っている。[図1]
- 教育活動の具体的な内容についての共通理解が図られていると回答した教師は9割を大きく上回っている。[図2]

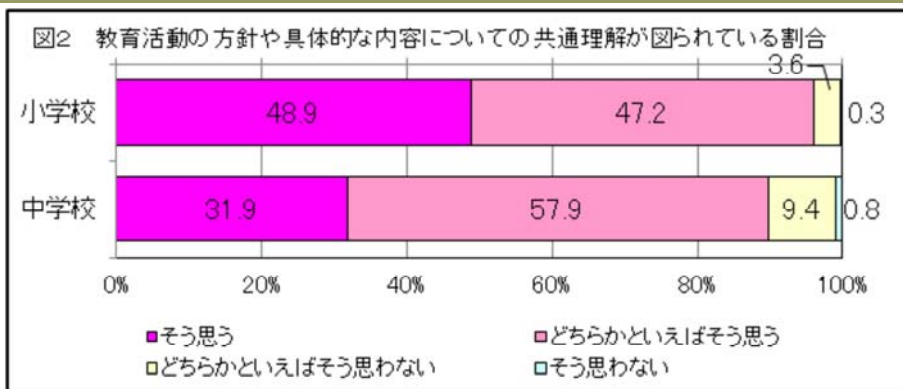
この節では、教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解について問うことにより、教師の学校組織のマネジメントに対する意識を把握する。

ア 「あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか」について



「理解している」「どちらかといえば理解している」と回答をした小学校教師の割合は99.5%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は98.0%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していることが分かる。[図1]

イ 「あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか」について



「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答をした小学校教師の割合は96.1%である。同じ回答をした中学校教師の割合は小学校に比べるとやや低いが、89.8%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思っていることが分かる。[図2]

○ これからの指導に向けて

学校組織マネジメントに対する意識との関連

指導法の改善、充実を図るためには、学校全体で取り組むという各教師の意識を高めていくことが大切であり、学校組織マネジメントの充実は不可欠である。今回の調査結果を、県全体として学校組織マネジメントの視点から見た場合、おおむね良好であるといえる。これは、教師集団が目的を共有化しており、教師間の連携・協働体制が有効に働き、学校全体で教育に取り組む風土が醸成されていることの表れであると考えられる。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ > V 自校データの分析と活用

V 自校データの分析と活用

1 学校における組織的な取組を

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会より、平成22年3月24日に公開された「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」には、学習評価に係る学校における組織的な取組について、次のように記されている。

(学校における組織的な取組と教師の役割)

○ 学校や教師は、国や教育委員会等が示す評価の観点とその趣旨、評価規準、具体的な事例等を踏まえつつ、具体的な学習指導の目標や内容、使用する教材に合わせて評価規準等を設定するとともに、児童生徒の学習評価やそれを踏まえた学習指導の改善等を実践する役割を担っている。このため、学校や教師は、評価の実施者として、個々の児童生徒の学習評価に関する妥当性、信頼性等を高め説明責任を果たすとともに、児童生徒や保護者との間で必要な情報の共有を進め、教育の効果の増進を図ることが重要である。

○ 各学校においては、各年度の学校全体の指導目標などを校長が中心となって作成するなど、学習指導における組織的な取組がなされている。学習評価についても同様に、例えば、小学校にあっては各学年において、中学校や高等学校にあっては各教科において、評価規準や評価方法を明確にすること、評価結果について教師同士で検討すること、実践事例を着実に継承していくこと、授業研究等を通じ教師一人一人の力量の向上を図ること等に、校長のリーダーシップの下で、学校として組織的・計画的に取り組むことが必要である。このような組織的な取組が定着していくことにより、学習評価の妥当性、信頼性等の向上や、教師の負担感の軽減につながるものと考えられる。

○ 今回の学習評価の改善の基本的な方向性の一つは学校や設置者の創意工夫を一層生かしていくことである。そのためにも、学校や設置者は学習評価に係る以上のような取組を進めていくことが求められる。(※)

学習評価についても、学習指導と同様に学校として組織的・計画的に取り組むことが必要だということが示されている。

2 学校支援におけるワークショップを通じた取組について

平成20年度から始まった学校の状況に応じた指導方法の工夫改善へ向けた支援については、のべ200回を超えた。支援の目的は、以下の通りである。

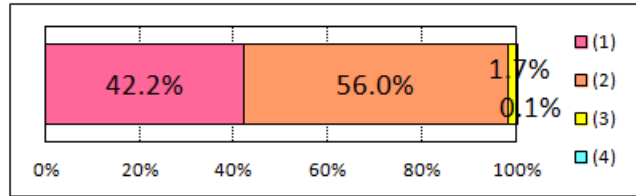
《目的》

- ① 分析ツールを使った学習状況調査の結果の分析方法についての周知と理解を図る。
- ② 結果データなど各学校の児童生徒の実態に基づく指導方法の工夫改善の進め方についてワークショップを通して理解を図る。
- ③ 学習状況調査の結果をはじめとする客観的な数値による評価資料の有用性について教師の認識を高めるとともに、教師のPDCAサイクルへの意識化・具体化を図る。

上記の《目的》に関しては、平成22年度よりアンケートを実施し、各学校の職員の反応を集約するようにしている。以下のグラフは、9月30日現在(平成23年度実施分 小中を合わせた回答数956名)の集計結果である。

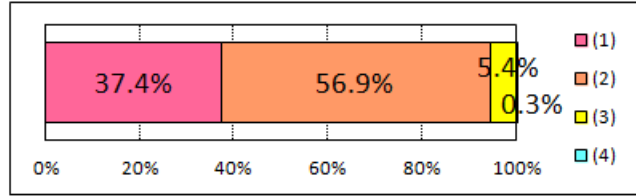
1 分析ツールから出力されるグラフの見方について分かりましたか。

(1) 分かった	42.2%
(2) だいたい分かった	56.0%
(3) あまり分からなかった	1.7%
(4) 分からなかった	0.1%



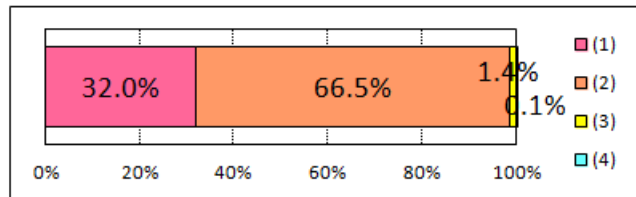
2 分析ツールを使って、児童生徒の様子についてさらに詳しく分析したいと思いますか。

(1) 詳しく分析したいと思う	37.4%
(2) 少し分析したいと思う	56.9%
(3) あまり分析したいと思わない	5.4%
(4) 分析したいと思わない	0.3%



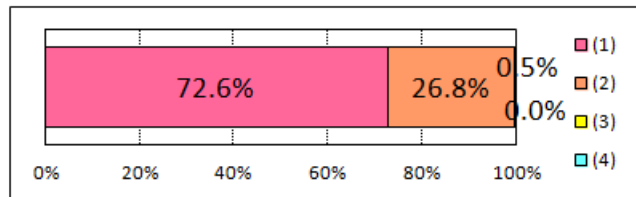
3 これからの実践にかかわるPDCAサイクルについてどう思いましたか。

(1) 実践したいと思う	32.0%
(2) できる分で実践したいと思う	66.5%
(3) あまり実践したいと思わない	1.4%
(4) 実践したいと思わない	0.1%



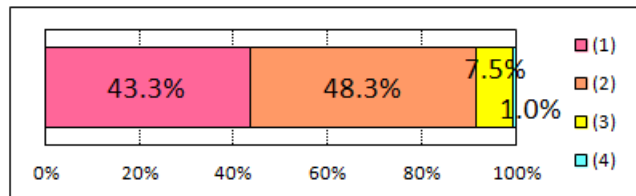
4 児童生徒のよさや課題について校内での共通理解を図るための今回のような演習についてどう思いましたか。

(1) 有効な方法だと思う	72.6%
(2) やや有効な方法だと思う	26.8%
(3) あまり有効な方法だと思わない	0.5%
(4) 有効な方法だと思わない	0.0%



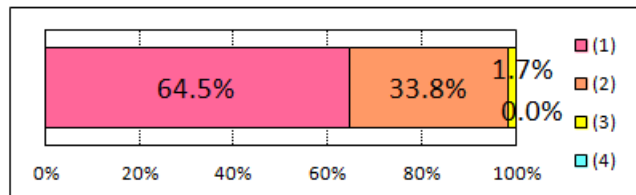
5 10月に公開予定の平成23年度県学習状況調査報告書(Web報告書)を読みたいと思いますか。

(1) 読みたいと思う	43.3%
(2) 少し読みたいと思う	48.3%
(3) あまり読みたいと思わない	7.5%
(4) 読みたいと思わない	1.0%



6 今回の研修は、あなたの学校の学力向上に役に立つと思いますか。

(1) 思う	64.5%
(2) やや思う	33.8%
(3) あまり思わない	1.7%
(4) 思わない	0.0%



学校における組織的な取組に関連のある《目的》②については、質問4「児童生徒のよさや課題について、校内での共通理解を図るための今回のような演習についてどう思いましたか。」、それから、自由記述の欄への記入によって回答を得ている。質問4については、他の質問と比較して肯定的な回答が多いことが分かる。また、自由記述の欄にも以下のような回答が寄せられた。

- ワークショップ型の研修は校内研でもやっていましたが、改めていい方法なんだということが分かりました。
- ワークショップ型の研修で話し合うというのはいいなあと思いました。先生方みなさんで検討して行って、同じ方向を見るということが大切です。
- ワークショップ型の研修でみんなの考えを出し、まとめていく方法で共通理解を図り、やる気を共有したいです。

- 校内研究の中でワークショップ型の研修を取り入れたら全員が参加でき、よいと思った。
- ワークショップ型の研修は参加者全員の考えが分かり、それをまとめていくことで参加している満足感を得ることが感じられ、今後役に立ちそうです。

以上のような回答状況から考えると、ワークショップにおいて教師同士で共通理解を図ったり協議をしたりすることについては、高い有用感があることが分かる。

3 組織的・計画的な取組に向けて

学校における組織的な取組の1つであるワークショップを通じた取組については、アンケートの結果からは高い有用感が得られていることが分かったが、以下のような回答も得られた。

- ワークショップ型の研修のよさは分かるが、教育課程実施優先のためゆとりがない。実施したときは業務時間を過ぎている。
- ワークショップ型の研修などを取り入れていきたいと思うが、なかなか時間がとれない。

このことは、組織的な取組については、時間の設定が大きな課題であることを示している。

以上のことから考えて、学習評価における組織的・計画的な取組に向けた視点として、以下の3点を挙げたい。

(1) 組織をどのような単位(学校全体・学年・教科等)で組むのか。

組織の単位を小さくすればするほど、動きやすい反面、各組織間の情報共有の時間の確保を設定する必要がある。一方で、単位を大きくすればするほど動きづらくなる。上記の学校支援におけるワークショップを通じた取組においては、小学校では学年グループ(低学年・中学年・高学年)、中学校では学年で行うことが多かった。小・中学校で児童生徒に一番身近な組織だからであろう。校種や学校の規模にもよるが、まずは、動きやすいという視点で組織の単位を決める必要があると考える。

(2) 組織的な取組を計画的に取り入れる際、スパン(年度・学期・月・週等)をどう設定するのか。

計画的な取組を考えた場合、どのタイミングで行うのかについては、あらかじめ考えておく必要がある。学校ホームページに公開されている学校評価の具体的な取り組みの欄に、学習状況調査の結果分析を行うことを明記している学校がある。「ゆとりがない」「なかなか時間がとれない」といった現実に対応するには、早めに計画を立てて、組織的な取組を行えるような時間を確保する必要があるのは言うまでもない。

(3) 学校独自での取組

現在は、多くの学校に学校支援という形で教育センター等から出向き、学習状況調査の結果分析に関わる研修会を行っている。学校からの依頼内容は主に2つである。

(ア) 分析ツールを使った各学校の学習状況調査実施対象学年の結果分析

(イ) 学習状況調査等から見える学習評価の結果の活用

今後は、これらのことについて学校独自で取り組めるようにする必要がある。

(ア)については、まずは、分析ツールの出力される数値やグラフから児童生徒の状況を読み取る力を教師自身が身に付ける必要がある。また、分析ツールについては、「数値の読み方が分からない」「グラフが見づらい」といった声に応えるために、改良を加え、今まで以上に分かりやすく使いやすくする必要がある。

(イ)については、評価結果について検討を行うこと、改善の方針をとりまとめること、方針に従って実践すること自体がすでに活用と言っても過言ではない。上記のアンケート結果からは、教師同士で共通理解を図ったり協議をしたりすることに高い有用感があることが分かっているため、まずは各学校において、上記(1)(2)を明確にして、組織的に取り組めるような状況を作っておくことが必要である。

教育センターでは、学力向上支援のために「授業に役立つ実践研究」に取り組み、小学校国語科・中学校国語科・小学校算数科・中学校数学科の4つの研究委員会より「すぐに役立つ授業プラン」「学習プリント」を随時発信している。「すぐに役立つ授業プラン」「学習プリント」は、日々の授業や家庭学習、振り返り学習等、用途に応じてダウンロードできるようにしている。学習評価における組織的・計画的な取組において、改善の方針に従って実践する際のヒントや資料として是非活用していただきたい。

《引用文献》

※ 文部科学省 『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』 2010年3月24日

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/attach/1292216.htm